明治三十三年十二月廿
第三種郵便物認可
明治四十年十月十五日發行
（毎月一回五日發行）

處世百話

女学世界定期増刊
第七巻第十四號



女學世界定期増刊 處世百話 第七巻第十四號 目次

一森式座椅子

—（特許第九〇一〇號）—

本品は日本風の家屋內又は北淸及韓國の室內にて用ゐるものにして一個にして座椅子となり寢臺となり疊込めば縮少して携帶に便なり本品の特色は强靭の織物にて身體を支へ尙ほ後頭部の觸るゝ處には蒲團の下に螺旋狀の枕を裝置しあるにより心地誠に宜しくして老人姙婦、各種病人幷に病後衰弱せる人に慰安を與ふるにあり

價格

エナメル塗更紗蒲蒲附	金六圓五拾錢以上各種
エナメル塗メリンス蒲團附	金七圓五拾錢以上各種
エナメル塗唐草蒔繪縮緬及羽二重蒲團附	金貳拾圓以上各種

（但）荷造發送運賃共實費申受候也

製造發賣元　東京芝區下高輪町廿一番地　樂民堂（電話新橋二〇六五番）

關西一手販賣　大阪西區土佐堀裏町六十八番屋敷　常盤商會（電話長一八二三番）

特約店　東京　大阪　三越呉服店



女（甲の一）

大勉強一割引

當店今般業務を擴張し博文館發行の新刊圖書雜誌を初め市内各書林に於て發行する書籍類は凡て定價の一割引（外に送料を要す）を以て迅速御取次仕るべく候間多少に拘はらず御注文の程願上候但し郵券代用は定價通り申受く

東京神田三崎町三丁目

日清堂書店

秘訣

リウマチス全治

妾儀多年リウマチス病に罹り百方手を盡すも更に効なく困難の處不思議の神藥の奇効に依り忽ち根治全快し喜悦に堪へず依つて人助のため同病者に事實を告げ救濟せんとす御希望の方は郵券二錢封入申込次第詳細に御通知申上可く候間御遠慮なく申込あれ

東京府下大森停車場東大畑

河奈とめ女

●圖書目錄

御入用の御方は往復葉書にて御申越次第直に進呈可致候

東京日本橋區本町

博文館

●風邪は萬病の基

陳腐賣藥に甘じ其療治を躊躇する時は、種々の恐ろしき病を起す事少なからず、故に人常に此の風邪早治しの最新良藥なる（太陽散）を家庭に備へ置き、殊に旅行の折は必ず携へ、機に臨み服用し、以て後難を遁れ給へよ

引風一切
太陽散
速治新藥

藥價（桐箱四十包入金五十錢。十五包入廿錢。七包入十錢。送料各二錢、各地有名藥店に有り若最寄藥店に無き時は直接注文を乞ふ即送す）

本舗 東京日本橋區本石町三丁目藥種問屋 **博愛堂**

弘賣店

神田區鍛冶町 大木合名會社
神田區松枝町 福井甚藏
日本橋區通二 中田支店
大阪心齋橋八幡筋 丹平商會
横濱松ヶ枝町 加藤回陽堂
仙臺大町二 櫻井藥舖
宇都宮市千手町 小松利三郎
長野市大門町 小林傳兵衞

越後長岡裏一之町 星伊商店
函館地藏町 金田一健次郎
甲府市八日町 古谷惠助
高崎市田町 相澤吉平
駿河國沼津町 高橋愛太郎
能登輪島鳳至町 久保喜平
岩代郡山町 根本祐太郎
伊豆下田町 菊地錦路

女（甲の二）


ゼム
THE GEM
ゼム一粒の馥郁たる香氣と愛すべき美味とは一度用て終生忘るゝ能はざらしむ故にゼムは廣く萬人に愛用せらる
ゼム二粒は煙草の味を美にし心神を爽快にし疲勞を減じ息切れを防ぎ渇を濟す故にゼムは外遊學生に愛用せらる
ゼム三粒は音聲を美くす音聲は美の一要素也故にゼムは紳士佳人に愛用せらる
ゼム五粒を食前食後に用ふれば食慾を增進し消化を助く故にゼムは衛生を重んずる士の常用劑として愛用せらる
ゼム十粒は異境に於ける風土病疾病食當り水傷りを治して神効あり舟車の醉を防ぐ故にゼムは進取的遠征家及び旅行家の必携劑として愛用せらる
ゼム定價
七十五粒入十錢 百六十粒入廿錢
四百卅粒入五十錢 九百粒入一圓
容器入ゼム 二十錢
日本一手發賣 東京馬喰町二丁目 愛國堂 山崎榮三郎
支舖 大阪高麗橋二丁目 山崎兄弟商會
其他賣捌は全國各地賣藥化粧品店にあり
衛生家必携
懐中良藥


落葉
小野鵞堂書
日高島助畫

☞ 萬人快讀の新刊珍書 ☜

吉田博先生著　▲日本葉書會發行▼

（最新刊）

アフリカ ヨーロッパ アメリカ

寫生旅行

洋裝全一册

特製一圓五十錢
並製一圓三十錢　郵税各拾二錢

先に一度歐米に學べる吾が洋畫界の飛將吉田博氏は今回更らに令妹ふじ子女子と相携へて世界週遊の壯圖を遂げ畫囊を滿たして歸朝せられたり到る處世界は詩なり繪畫なり彼の雲迷ふ北米の野に永劫の白雪かゝる歐洲の山に、さては眞夏の光沙を射て、金字塔高く千古の歷史を談るエジプトの荒野に年若き兄妹畫家は如何に多恨なる情懷を騷がせたりしぞ此書は從來の歐米旅行談の如き通り一片のお土産とは種類を異にし兄妹畫家が親しく趣味の眼を以て觀察せる世界の活畫なれば、獨り都市の歷訪録たるに止まらず、深山幽谷より津々浦々の佳境悉く一卷に描き出され加ふるに著者の筆になれる寫生畫卅有餘種を艶麗なる三色寫眞版として挿入したれば文と畫と相助けて讀者は俊秀なる兄妹畫家と共に親しく各國各地を巡り、自ら珍談奇聞に接するの思ひあらん。斯かる近來の出色絶好書は何人も速に一讀を要す

發賣元　東京日本橋本町三丁目　博文館

女（乙の二）

小兒新藥童丸生る

小兒科專門醫學博士
瀨川昌耆先生方劑



◉童丸は健童強兒の源泉なり
◉童丸は二十世紀の育兒法に適す
◉童丸は幼兒の生命也第二の慈母也

効能

◉小兒失氣◉吐乳病◉五疳驚風
◉腸加答兒◉小兒食欲不進又は飲過
◉小兒吐氣◉腸痛中毒
◉小兒虫氣一切又は熱さましによし

定價

拾粒入	金五錢
廿二粒入	金拾錢
五拾粒入	金二拾錢
八拾粒入	金參拾錢
百四十粒入	金五拾錢
三百粒入	金壹圓

◉童丸は有名藥店にあり若無くば發賣元へ御注文あれ

發賣元

東京市日本橋區通四丁目七
振替貯金口座第一六八〇番
津村順天堂

大坂市堺筋大寶寺町南入
振替貯金口座第三一六二番
津村順天堂

（乙の四）


時世粧
榊原蕉園筆

第五回內國勸業博覽會賞牌及褒狀受領

登録商標

壽美禮おしろい

五二會品評會功勞銅牌

THE BEST MADNE
SUMIRE
VIOLET PASTE

ヴワイオレツト煉製
錫蓋附乳白硝子器入
壽美禮おしろい



◉壽美禮おしろい◉

ねり製定價（大壜二十錢 小壜十二錢）

ヴワイオレツト水製 定價（大壜二十五錢 中壜十五錢 小壜十錢）

錫栓附乳白硝子壜入



すみれ白粉は歐米諸國に專ら流行する香料及弊店特製の化學的炭水素新成績液體等を以て配劑しあるを以て肌を艶麗ならしめ芳香馥郁として長時間保續するの性あり『壽美禮白粉』は常に用て御顏肌へを清清しく天然の色白きに至るべし菫『おしろい』は芳香馥郁と長く保つが故宴會、祝席、雜踏の場所に臨て衛生上有益無比の逸品なり『壽美禮白粉』は高等優美にして意匠も美妙なれば御進物に最も適當す方今東京横濱に於て上流社會に益々好評を博しつゝ流行せり

綠、藍、紅彩蝶番ひ 大袋入二錢
鑵詰八錢 袋入壹錢 別製鑵入五拾錢

◉西洋洗滌劑 壽美禮あらひ粉の特性

◉弊舖製造の壽美禮洗粉の義は方今歐米諸國に專ら賞贊する香料及弊舖新製の原料を用ひて製せしものなれば朝夕此洗粉を御用ひ給へば能くあかを落し御肌を美くしくなす

◉常に髮洗ひに用ひ給へば髮のねばりを取り油あか等を生ぜす又半ゑりハンカチーフ絹綿等に用ひて能く汚垢を落す總て物を漂白する性あり

◉使用法は普通あらひ粉の半分にて能し水又は溫湯に溶し又はぬかに混ぜ入浴の際用ふるを良とす

登録商標

西洋色白くなるあらひ粉

SUMIRE
Washing Powder

壽美禮あらひ粉



製造本舖 東京東兩國 元町兩國橋際 壽美禮堂謹製

販賣所ハ全國到ル處小間物店化粧品店賣藥店其他各勸工場各劇場運動場ニ有リ

女（丙の一）

勇壮活潑なる讀物

押川春浪君新著　☛目下印刷中（近日發賣）

◎新刊◎

英雄小說　東洋武俠團

全壹册・洋裝・袖珍・模皮クロース金字入・美製本
價四拾五錢　郵稅六錢

諸君!!! お待兼なりし大好評新日本島の續編は愈々出たり蠻勇俠客獅子奮迅の猛勇を揮ひ青面怪塔に老雄を救ひ俠美人危地に入つて奇功を立れば怪傑黑海に破天荒の活劇を演じ空中海底戰艦の出沒は閃電の如く彗星の如く遂に朝日島に二大英雄團結相合し東洋武俠團團成るの大團圓を見る實に春浪君得意の大傑作なり眞に愛國男兒必讀の快絶著書!!!

押川春浪君著書

● 海島冒險奇談 **海底軍艦** 廿二版　正價參拾錢　郵稅六錢
● 英雄小說 **武俠の日本** 十七版　正價四拾錢　郵稅六錢
● 海國冒險奇譚 **新造軍艦** 十六版　正價參拾錢　郵稅六錢
● 戰時英雄小說 **武俠艦隊** 十五版　正價參拾錢　郵稅六錢

● 英雄小說 **新日本島** 十二版　正價卅五錢　郵稅六錢
● 海島探險奇談 **塔中の怪** 十六版　正價廿五錢　郵稅四錢
● 傳奇小說 **銀山王** 八版　正價參拾錢　郵稅四錢

櫻井鷗村君譯述

● 勇少年冒險譚 **初航海** 十九版　製本出來　正價貳拾五錢　郵稅四錢

● **世界冒險譚** 全部十二册　今册讀切　一册參拾錢　郵稅四錢

（一編）金堀少年
（二編）遠征奇談
（三編）二勇少年
（四編）續遠征奇談
（五編）決志少年
（六編）漂流少年
（七編）殖民少年
（八編）航海少年
（九編）不撓少年
（十編）朽木之舟
（十一編）俠勇少年
（十二編）絶島奇談

發兌元　東京本町　博文館　東京神田　東京堂

女（丙の二）

數年難治の慢性胃病を根治し消化機能を強壯健全になす靈藥

胃病根治劑

從來世に胃病藥頗る多しと雖ども皆一時の苦痛を凌ぐ制酸劑（即ち重曹、マグチシヤ、苦味劑の如き一時おさへムチスカシ的舊式賣藥のみにして未だ嘗て根治的に其病の基因を斷つ良藥あるを見ず、本劑は獨乙國高名大醫ノーテル氏處方に基き本邦胃病患者に適切なる嶄新有効藥を配合し百方實驗其奏効顯著なるを確認發見せし最も進歩せる完全なる新藥にして數年難治の頑固なる**慢性胃病**にても根本より**誓って根治**し胃腸を健全にし消化機能を強壯ならしめ食慾を催進し便通を快くし氣力を壯にし精神を爽快活潑にする空前の完全最新藥なれば從來種々雜多の胃病藥を用ひて効なく多年病苦に呻吟せる患者は一日も早く本劑を服し病根を斷絕し無病强健の大幸を得られよ輕症は壹劑重症は貳劑慢性症は參劑にて根治確證す

（藥價）壹劑四拾貳錢　貳劑八拾錢　參劑壹圓拾錢　郵券代用貳割增し

新輸入美容料 肉體色白新劑

本劑は近時佛國パリス貴紳淑女間に最新流行の發明劑にして如何程色黑き男女にても特別製貳劑を用ゆれば忽ち肉體**純白色に變化**し艶美の容貌となるを確證す世上種々雜多の色白藥を用ひて奏効なき人は速に本劑を試み見よ眼前に峻烈なる特効を覺ゆ眞に奇効顯著の確證新劑價は並製金壹圓貳拾錢特別製金壹圓八拾錢

以上貳藥 **專賣元** 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房**

血塊流下 通經劑

本劑は胃腸痛せめず子宮を害をず如何程長き月經閉止も必ず忽ち**快通流下**する特効あり本劑參劑分を用ゆれば二三ヶ月間滯りたる月經にてもキレーに流下す又特別製分を用ゆれば半年以上の月經閉止及び**血塊**にても必ず立處ろに流經す且つ月經不通月經不順より起る子宮病血の道を全治し多年滯りの古血及**惡血毒血**を一掃することを確證す但し本劑は其奏効極めて**確實顯著**なるも毫も衛生無害なり婦人諸君安心して試藥あれ價は壹劑分七拾錢貳劑分壹圓廿錢參劑分壹圓七拾錢特別製分貳圓參拾錢

（注意）本劑の**大盛**なを羨み近時續々怪しき無効なる**類似僞藥**顯はる用藥者は深く注意ありて「出賣元日新館藥房」の名義に注目し購求あらんことを乞ふ



わきが 腋臭 根治確證新發見藥

醫療賣藥百方手を盡せし如何程頑固劇烈の慢性わきがにても**誓て根治**し決して再發或は他病に變ずる憂なき廿世紀的改良根治新藥なり速に用ひ苦惱を脫せよ價は輕症根治分六拾錢重症根治分壹圓廿錢頑固劇烈の慢性症根治分貳圓卅錢著金即刻送藥す郵券代用必ず二割增のこと

以上貳藥 **專賣元** 東京市神田五軒町十九番地 **日新館藥房**（電話下谷五四六番）

女（丙の三）

和洋樂器大販賣所

電話新橋 一二五九　振替口座 七一五八

十字屋樂器店

舶來 バイオリン



東京博覧會ニ於テ宮中御買上ノ光榮ヲ賜ハル

舶來 鈴木製 松本製 各種

附屬品一式

◎大聲發音器各種

◎樂隊用吹奏樂器類

◎瓜生繁編 進行曲 正價四十錢 郵税六錢

◎文部省檢定濟 山田唱歌集 正價三十錢 郵税四錢

◎歐米各國 舞踏大觀 正價六十錢 郵税八錢

◎舞踏必携 ダイアモンド 正價三十錢 郵税二錢

◎新編 中學唱歌集 全三 正價九十錢 郵税十八錢

◎長原春田著 明笛和樂獨習の栞 正價廿五錢 郵税四錢

山田源一郎先生校閲 水野呂童先生 福島琢郎君編 (バイオリン樂譜)

箏曲 松風 正價廿五錢 郵税二錢

同 椿盡し 正價三十錢 郵税二錢

同 江の島曲 正價三十錢 郵税二錢

同 うすの聲 正價三十錢 郵税二錢

其外バイオリン日本樂譜種々相蒐有之候

東京博覧會一等賞牌 日本製造元祖 西川風琴



音律正確

保險附

第一號金拾八圓以上 第廿號金二百七十圓迄

詳細目錄御入用ノ方ハ郵劵貳錢御添へ御申込被下度候

東京銀座三丁目

女(丙の四)

野菊



河崎蘭香筆

山月高



加藤南山筆

於東京勸業博覽會

一等賞牌受領

各女學校御用
美術造花材料
附屬品並ニ
造花器械類一式

東京市日本橋區横山町壹丁目拾六番地
天野卯兵衛
電話(長)浪花一六四三番
振替貯金口座四九七〇番

(切取線)

◉營業目錄御入用なれば此切取線を添へ御申越被下度候(女學世界第十四號)◉

縣　郡　町村

女(丁の一)

女(丁の三)

秋色



久保田金僊筆

●最新發明 **顔の美しくなる器械**

美男美女たらんとする者は來れ英國大博士某の發明に係る最新式美顔器は使用簡便にして誰れでもすぐ應用し得て如何ほど黑き醜き男女も忽ち艶美白色となる驚く可き奇効ある器械也乞ふ一器を得て美くなり賜へ

美顔術器械 美顔コップ 壹組 美顔ロール 壹圓參拾錢
秘傳書附屬化粧 美顔クリーム 美顔ボーター、ホワイ 六拾錢
送料拾貳錢代金引換廿八錢

●**子宮サック**

月經の際經水の漏洩を防ぎ立居を便ならしむるのみならず如何なる場合にも取り外づす必要なくして汚物附着せず且梅毒痳疾及子宮をきづする憂なく又懐姙せず
▲價金上製壹圓 ▲並製七拾五錢 ▲秘密送料拾錢

世界一保險附 **毛生劑**

價半劑五拾錢 壹劑壹圓 特別貳圓
本品は毛の有べき處に毛のなき人に用ひて可驚持効ある事を確證す(秘密送料八錢)

●男女和合奇薬 **いもりの黑燒**

本品は男女なれそめ薬と云ひふしぎの奇効あり用ひて其特効を知り賜へ
價 別製一双壹圓 並製一双五拾錢 秘密送料八錢

●**はな衣**

本品はルーデサックを再三精製したる珍品にしてこれを使用すれば避姙及梅毒淋病等の感染を防ぐ又女子月經中必要
價拾貳個五拾錢 廿五個壹圓 五拾五個貳圓 送料各參錢
切手代用必一割增 ●專賣 大阪東區十二軒町 珍集堂

美術造花通信教授

二ケ月卒業▲遠國の自宅に居て男女誰にても造花、和洋花かんざし等美麗に出來る▲卒業後は月收十五圓以上になる●製品見本と案内書は郵券十二錢送れば直に送呈す
●東京四谷區須賀町八 美術造花傳習所

肺病患者の福音

醫科大學藥學專攻 藥學得業士金澤巖著

著者肺病全快の經驗と最近の學說に基き親切叮嚀に根治の法を詳述せし物也●郵券二錢封入申込者に無代施本
東京市下谷區上根岸町 衛生書院

●**繪葉書交換の栞** 價十錢 税二錢

今回滿三周年祝意のため右購求者には貳拾錢贈呈券、入會金免券、會則無代送呈す申込大至急(政府其他官公私發行各種紀念葉書大廉賣委細照會の事)
岡山縣赤磐郡潟瀬 吉備交換會

肺病全快

私儀多年肺病にて九死の際偶々一奇法發明の爲め全治する故世の同病者を救ひたき志願に付望の方は郵券二錢封入にて御照會あれ
東京府下大森入新井 川名助次郎

女(戌の三)

素顔は常に何を以て美しくするか？

日本第一のクラブ洗粉は舶來石鹸よりも秀でたる文明の化粧品にして美身術に妙ある爲高評頗る盛なり



クラブの如き洗粉を以て其美を増す

クラブは三越呉服店を始め各化粧品店にあり

女戌の四

西太后の今昔



妙齢時代の故の東太后



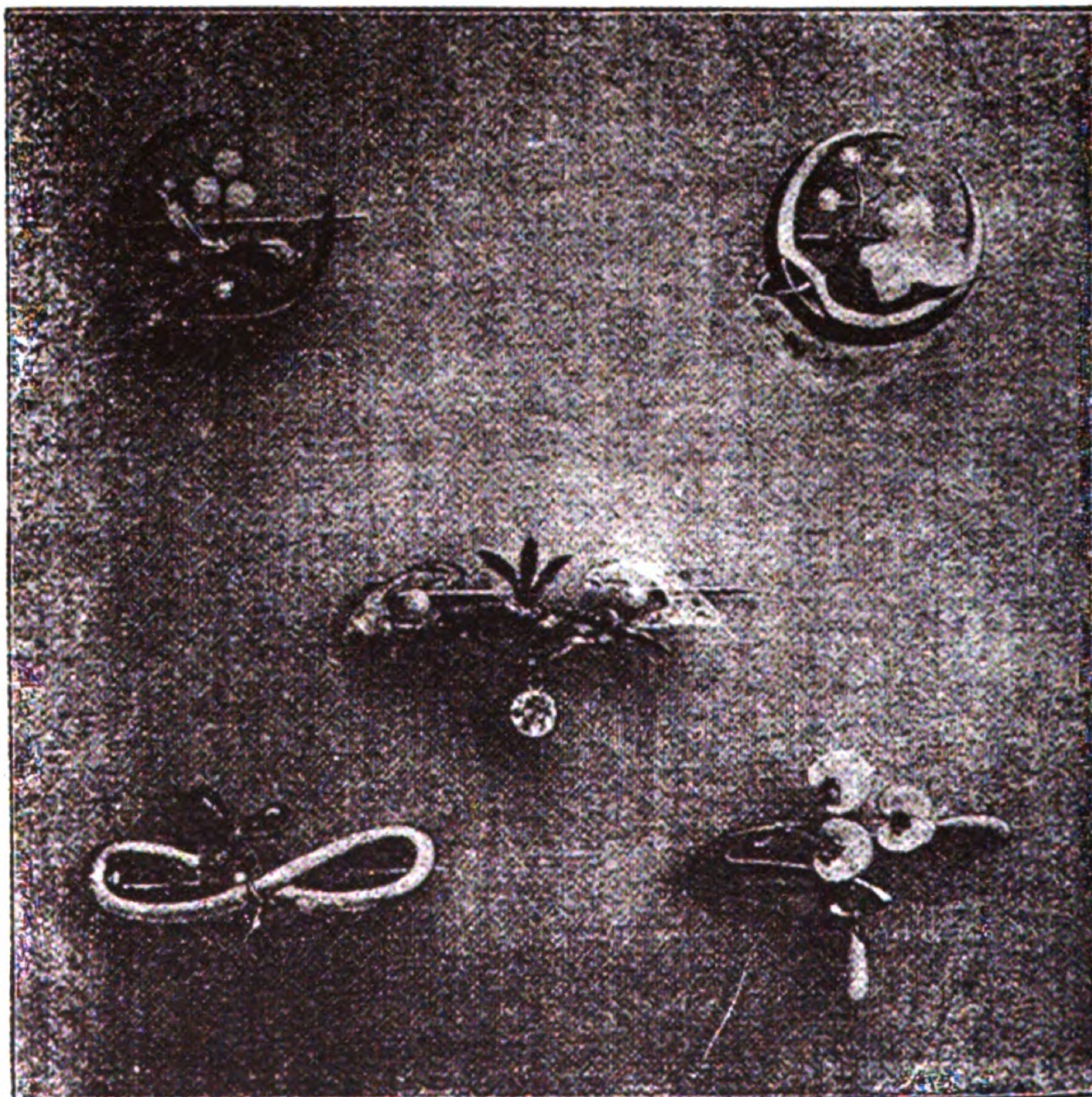
晩年の西太后



妙齢時代の西太后（五十五年前初めて玉輿に召されし時の面影）

秋の風物





新輸入ブローチ發賣

今回發賣のブローチは玆に本店より貴婦人令孃方の御好に適する新圖案を選定して注文の品漸々入荷仕候特に本店は實用を專一に製作を巧妙に金量を輕減し意匠圖案は凡て本邦美術的趣味を應用し各寶石の點嵌色彩鍍金の配色に意を用ひ製作せしめし實用と裝飾を兼備したる佳麗なる品に有之候尚圖外珍形數十種御座候に付何卒ブローチ御用ひの季節柄澤山御用命之程奉願候

價格 十圓 十二圓 十五圓 二十圓ゟ
圖外珍形數十種に十圓ゟ各種有之候

東京市京橋區尾張町
白牡丹本店
特電話新橋五五一番

女(巳の二)

（三の二）

文藝倶樂部 第十三卷第十四號 定期増刊



十月十五日發行

全一册洋裝菊判　正價廿五錢　郵税貳錢五厘

女（巳の三）

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館



於內外博覽會名譽大賞及金銀牌受領

元和二年創業

ヒゲタ印醬油

ヒゲタ印醬油

HICETA SHOYU

THE CELEBRATED JAPANESE SAUCE

TRADE MARK

Patronised by the Imperial Household. Awarded First Class and Gold Medals and Grand Prize at the various International Exhibitions held at home and abroad

The Oldest Establishment of its kind in Japan. Founded in 1616 by the ancestors of the present proprietor

G. TANAKA

Choshi, Chiba-ken, JAPAN

宮內省御用達

千葉縣 田中玄蕃釀造 銚子港

女(巳の四)

山階宮妃殿下の筑波登山



山階宮妃殿下は今夏同家にて設けられたる測候所御覧のため筑波山へ登山あらせられしが、これは山の中腹みなの川邊りの茶亭に御休憩あらせられし時の光景なり

（橋詰巽二氏寄贈）

サンマース嬢の結婚紀念



博文館發行明治

明治四十一年 當用日記

博文館出版の當用懷中日記の正確にして實用的なること世人の既に認容する所今敢て喋々を要せず唯遺憾なりしは從來年末に切迫しての需要者には初刷雜誌準備多忙の爲め再版を企て難く充分なる供給を爲し能はざりしにあり是を以て本年は特に紙質を精選し印刷を鮮明にし部數を増加し一點遺憾なき計畫を立てたり然れども日記の需要者は年と共に増加する傾向あるは從來の實驗に徴して明なるを以て弊館の發賣豫定數が果して年末迄持續し得るや否や保し難き所なり乞ふ賣切れとならざる内速に購求あらんことを



◉卷頭 皇室皇族の御繁榮歷代の天皇大祭祝日日曜表等を色刷とし掲ぐ

大形（菊判）**上製**（舶來洋紙總クロース金字入）▲正價金五拾錢 郵税拾四錢

中形（四六判）**特製**（舶來洋紙脊皮美製金文字入）▲正價金五拾錢 郵税拾貳錢

中形（四六判）**上製**（舶來洋紙總クロース金字入）▲正價金三拾八錢 郵税拾錢

小形（菊判半截）**上製**（舶來洋紙總クロース金字入）▲正價金三拾錢 郵税八錢

紙數各約五百四十頁

〔附錄〕金錢出納錄●知己人名簿●雜錄●諸統計表●米價換算早見表●諸税則摘要●郵便電信諸規則●新式萬年曆●徵兵規則

▶▶賣捌所は全國各地の書籍雜誌店

▶▶取次希望の方は御申込次第

女(庚の二)

女（庚の三）



高貴御料品
無鉛
大學
白粉
大學の專門大家が最新の學理を
應用し發明せられたる大學白粉は美容
と衞生を兼備せる絶好の化粧料として
畏多くも高貴の御料となり
無上の光榮を得たる高尚名譽の白粉にして
品質の純良なる容器の優美なる芳香の優
雅なる眞に善美を盡せり今や滿都交際界
の貴婦人淑女は擧て本品を愛用せられ
て高評嘖々たり
本品は全國到る所の有名なる化
粧品店にあり
大學白粉製煉所

女（庚の四）

髪の結振り



東京音樂院講習會紀念



女生徒の演武



松本高等女學校生徒

東京女子音樂傳習所夏季講習紀念



少女世界 第二卷第十四號 定期增刊



拾月拾五日發行
定價金拾錢
郵稅金壹錢

秋高くして燈火親しむべき今日この頃、少女諸子と女學生諸孃とのために、絕好の讀みもの『わが學校』があらはれました。淸き趣味と多大の利益とは、一卷を繙く時に、おのづから湧き出づるでありませう。內容の一端を下に漏らします。

▲アメリカの女學生　日本女子大學々監　麻生正藏

▲イギリスの少女風俗　女子高等師範教授　宮川壽美子

◉少女芝居　新入生　巖谷小波作

▲むかしの女學生　高等女子實修學校長　山脇房子

▲將來のわが女學生　女子商業學校學監　嘉悅孝子

▲少女遊學の栞　記者

この外、全國の女學校だより、少女唱歌、寄宿舍生活、バザー、運動會、少女談話會、文藝會、音樂會、學校圖書館、學校園、少女幻燈會、創立紀念會、同窓會等、趣味津々たる記事が滿載してあります。學校生活にあると否とを問はず、全國の少女諸子は、速かに一讀せねばなりません。

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

(辛の三)

●真の美人たらんと欲する人及び真の幸福を得んと欲する人は必一讀を要す

健康の泉

糸左近先生著

……健康は成功の母なり……

▲衛生小説

◎七不思議 ◎御臺所 ◎舌皷 ◎理想生活 ◎めでたし ◎秘密の交換 ◎夏化粧 ◎素人薬局 ◎鳥羽玉の黒髪 ◎三人娘 ◎長命の秘訣！！

▲論説

◎心と病 ◎銷夏十法 ◎生理上女子墮落十法豫防法 ◎學問してはならぬ青年 ◎生理上より見たる青年男女交際論！

▲お伽噺

◎不思議な洞穴 ◎人佛

總クロース美製口繪付全一冊
定價金六十五錢 郵税一冊六錢

▲附錄（健康百問）

◎肺病に就て ◎乳汁を出法 ◎男子を随意に生得べきか ◎鳥目の療法 ◎にきび療法 ◎月經過多 ◎食欲不進 ◎手の荒れたる療法 ◎癬毛矯正法 ◎肩のこり ◎齒痛 ◎精神鬱憂 ◎通經薬處方 ◎妊娠中攝生 ◎處女閉塞 ◎失戀治療法 ◎鼻耳の療法 ◎皮膚を美しくする法等 ◎有益問答

……健康は幸福の父なり……

●本書一冊を買ふは醫藥數日分を服するよりも廉なり●

☞見よ婦人專門週刊新聞

▲東宮妃殿下の御覽を賜

婦女新聞

▲婦女新聞は新聞雜誌界の米飯なり▲社交界貴婦人より一般家庭の主婦、看護婦學生官省會社、女子雇員に對し欠く可からざる實益と無量の趣味とを與ふ▲本紙は東宮殿下御慶事の紀念として生れ爾來七年期日を誤りたる事なし

婦女新聞

定價 一ヶ年前金一圓三十五錢 半ヶ年七十二錢 三ヶ月三十七錢 全國無遞送料 三ヶ月以下謝絶

取次販賣店 東京堂 東海堂 北隆館 良明堂 地球堂 至誠堂 其他

振替貯金二八〇七 發行所 婦女新聞社 電話番町一三〇六

（東京牛込東五軒町）

女（辛の四）

西洋婦人の理髪風



(1)紐育の女優アンナヘルドの分け髪



(2)巴里の聲妓ゲレロの分け髪



(3)世界一の美髪者白耳義のメロド孃



(4)倫敦の女優キヤメルの分け髪



(5)巴里の女優ヒエラーの平廂

西尾刀自と其塾生



釀造元 千葉縣野田町 茂木佐平治

天下一品
最上醤油

萬

賣捌所は各地とも有名なる酒醤油店に有之候

美術造花

造花原材料裝飾一式共

◀營業科目▶

●内外草木美術造花●室内及室外裝飾造花●花籠●花輪●ポンチツト用造花●寒冷紗●ブラシ●羽二重●蒲草●紙類●蕋●蕚●針金●管類●光澤色素其他藥品類●染色器械●打拔●押形●鋏●其他器具類

東京市神田區鍋町拾番地

日本造花株式會社

電話本局一二六五
振替貯金口座八一三三

◉製品は材料を精選し染色法を改め最新式スターペタルを應用し不變色色素を使用す故に在來製品とは全く其趣を異にせり

◉材料は獨逸マヤー、グース會社と全國一手販賣の特約を結び直輸入を爲す故に品質優等價格低廉なり

◉器具類は弊社鐵工場に於て製作を試驗の上販賣を爲す故に正確廉價請合なり

◎營業目錄は御申越次第進呈可仕候

女(壬の一)

女(壬の二)

博文館女學世界　編輯部新案

明治四十一年

家庭日記

總クロース金字入美本紙數五百餘頁　正價參拾八錢　郵稅十錢

家庭日記は最も進歩したる。且つ最も文明的なる日記にして新家庭の要求に應じたるもの也、苟も我家の規摸を知り我家の地位と品格と勢力とを知らんとする人の机上に缺くべからざる重寶日記なり其の目次左の如し。

家庭日常の寶典

○貨幣度量衡比較表
○內國郵便大要
〜
○郵便爲替貯金大要
○郵便電信大要

▲收入明細表
▲支出日計表
▲家計分類出納表
▲年中行事豫記
▲家庭重要記錄
▲我家の家族
▲家庭紀念事項
▲戶籍表
▲崇廟祭祀日錄
▲通學要錄
▲兒童生育要錄
▲健康要錄
▲衣類日錄
▲財產日錄
▲貸借關係錄
▲音物贈答日誌
▲通信日誌
▲親族名簿
▲傭人名簿
▲知人名簿
▲備忘錄

附錄

●世帶の要訣
●器物取扱法
●衣服保存法
●勝手元の竈法
●日常心得草
●一年中の仕事配り
●臺所百事便
●衛生心得草
●看護の心得
●育兒の大意
●新年料理
●總菜の栞
●日々の獻立表
●小食の心得
●產兒一週間の心得
●魚類と野菜の季節分
●挿花水揚法
●音物贈答の心得
●訪問の心得
●日用品買物の心得

▲本書內容の一斑▼

本書は始めに一年三百六十五日の日々欄を置き、七曜を順記し、天氣、寒暖の各座を設け、以て日々の事項を記入するに適せしめ更に月の始には其月の行事、季節、家事、食品、遊樂の心得を抄記して月令の栞となし、次に此の日記の特色ともいふべきは他の日記類に類例なき「記錄表」なるもの約二百頁とを設けこれには前表、家庭の要事を始め、交際、通信、音問、祭祀以下日常諸般の事項を分類し別れて財產、衣類等の品目を掲記して以て複雜なる家事を整理して一目瞭然たらしむ。猶前掲附錄十數次は家事當局者の心得にして朝夕必要なる家政智識を網羅せり。

家事政理の墨繩

○滿年求月表
○年數早見表
〜
○印紙稅法大要
○名所舊蹟案內

家庭日記は日常の家事を整理する金針にして又家運振興の指南車なり、其內容は從來有觸れたる日記簿とは全然面目を異にし統一あり、秩序あり、教訓あり、趣味ある日記にして眞に一家の重寶たる實質を具備せり。

(壬の三)

發兌元　東京日本橋區本町　博文館



女學世界定期増刊

處世百話

第七巻第拾四號

(十月十五日)

處世は人間一生の目的なり。よく務め、よく學び、而してよく大成す、蓋し人生の本分に一個處世の眞義を完ふするものに外ならず、されば これを先哲に聞き、これを時代に鑑み資けて以て自己の天分を開き、資けて以て處世の眞義を盡さんことを期するにあり、時に玉碎となり、時に瓦全となるも必竟するに是れ個々人々の命運の然らしむるところなれば我が本分たる人事を盡すの上に於て更に毫末の遺憾あることなし。



良人に對する 妻の用意

主婦の日常訓

1 服從する事
2 言ふ事に注意する事
3 負けて勝つ事
4 良人の長所を敬ふ事
5 善き話を夫の耳に入れる事
6 相談相手となる事
7 氣取るまじき事
8 適度の粉粧は必要なる事
9 無精にすまじき事
10 婦人の力の大なる事

妻君が其愛敬する良人に對しての態度、仕向如何は夫婦生活を營む上に於て殊に大事な問題で、その上手下手は直ちに家庭の幸福に關しますから、最も心せねばなりません。良人を操縱すると申しては、些と言葉が過ぎますが、夫の機嫌を善くするも、惡くするも、家の中を面白くするも、不愉快にするも、所詮は妻女の舵の取りやう一つでありますから、おもかぢ、とりかぢの呼吸を能く覺えて、その塲合々々に處せねばなりません。左に妻の心用ひの一つ二つを申上て見ませう。

一　服從すること

男子は最愛の妻の餘りに温順し過ぎて、一も二もハイハイと唯命是從ふといふのを許喜ぶものではありません。時には些と張合つて來るやうな甲斐性のあるのを望むものですけれども、多くの場合、夫は吾が妻の己の命令に從はんことを欲し、己が見識に服し、己が意見に同ずるを喜ぶものです。故に夫に斯かる色ある時は、妻たる者假し胸に言ひたいことはあるとも、數歩を讓つて、夫に隨つて置けば、何時か他の場合に夫の同意を得て、此方の願ひ事も容易に聞入れられるものと御承知あるべし、素より自分を愛して與れる良人ですもの、さう〱無理な命令ばかり提出すものではありません。我儘は男子の癖と思つて勘辨して居れば何の事もない話、夫の眼から見れば妻の方にも隨分我儘なことが御座いませうから、つまりは五分、五分、御互樣、何方も勘辨し合ふので保つたものです。良人の我儘と妻の我儘と衝突した日には、其こそ家庭は大騷動、目も當てられぬ仕誼ですから、まあ妻君の方から下手に出て、服從して居るのが、一番安全で御座いませう。

二　言ふ事に注意すること

男子は忘却易いもので、自分が言つた事を直ぐに忘れて了ひますけれど、妻が己に向つて言つた言葉は、不思議に何時までも記憶するもので、此間、お前は斯う斯う言ふたぢやないかなどゝ、飛んでもない時分になつて小言を並べられますから、平生氣を付けて口を利かぬと不可ません。つい心易立にうつかりした事を申しますと、飛んだ目に遭ふことがあります、元より所夫と崇めた人であつて見れば、敬虔の態度を忘れず、日常の言葉にも疎匆の無いやうに、注意するのが本統かと思ひます。

三　負けて勝つこと

男子は妻に對しては剛情我慢なものですから、往々世間をも憚らぬやうな大きな聲を出して、妻君に無理な小言を言ひ、幾ら辯解しようが、謝まらうが、聞入れやうとも爲ないで、益々威丈高に成つて言募りまするけれど、内心では窃かに自分の無理なこと、間違つ

て居ることを自覺して居る事があります。故にかういふ場合には、妻は辯疏を止めて、暫らく辛抱して默つて居れば宜いので、左うすれば夫も張合拔がして、終には鎭まつて了ひます。而して御自分の惡かつた事を、其時言葉には表白しませんけれど、いつか實行にあらはすことが、往々御座います。性質にもよりますけれど、酒飲の夫には得て此の癖がありますから、若し妻に對し管を捲くやうな場合には、言ふ丈言はして置いて、此方は其に逆はず、負けて居れば何の紛紜もなくして、直に元の平和に復します。所謂負けて勝つとは茲の事で、柔よく剛を制するの道理を辨へることが、妻としては最も必要な事で御座います。

四　良人の長所を敬ふこと

世間には夫のアラを捜して快しとなし、何彼につけ吾が夫を嘲けるやうな口吻を洩す女房がありますけれど、甚だ善くない事で、何の道夫の欠點を數へ立てたり、又は其弱身に付入つたりするのは、卑劣の女のすることです。善き女房は夫の短所を見ないで、長所を見、口にこそ追從は言はねど、常に其長所に敬意を拂つて居りますからして、夫をして吾に敬服する者は吾が妻なることを感せしめ、爲めに妻を愛するの念は一層深くなり、麗しき夫婦仲は彌が上にもうるはしくなるのです。カーライルも「敬虔なる者の前に在ては、何人も不敬虔なる能はず」と申しました。況して自己と偕老を契れる婦人の敬虔なるを見るに於ては、男子の愉快は何れ程だか知れません。世の細君方、構へて良人を馬鹿に遊ばすなよ。

五　善き話を夫の耳に入れること

夫を慰むるは妻の役目でありますから、世の鬪より疲れて歸り來れる夫を出迎へたら、やがて夕顔棚の下涼みに、扨は爐邊の團欒に於て、妻君手づから茶菓を薦めながら、何呉と面白き談話を試むるやう勉めねばなりません。談話も惡い側の話は措いて、善い事を耳に入れるやうにする、例へば人格の高い人の逸話、清廉潔白な人の美談とか、幸福にして互に相愛する夫婦間の話とか、質素な生活をして高尚の理想を有する

人の話とか、心掛の善い、信仰の厚い人の事など、此等の話を夫の耳に入れるは、管らぬ世間話など〻違ひ何れ程善い感化を與へるか知れません。今日の樣に生存競爭の激烈な社會に立つて、人と人との鬪ひを見、人間の惡しき側のみを聞く夫も、妻の此清き話によりて、新たに元氣を回復し、明日の活動に向つて勇氣を振起することがあります。たま〳〵汗を流して歸り來れる夫に向つて、隣家の妻君の棚卸や、惡口をなし、自分に不平や苦情ばかりを訴へるやうなのは、無教育の下司女なら兎も角、教育ある妻女としては大いに恥づべきことであります。

六　相談相手となること

男子といふものは、妻の自己以上に賢からんことを望むものです。御自分は宗教に冷淡であつても、妻君には高尚の信仰を有たせたいと思ひ、自分は外で失敗しながら、妻には家政に失敗させたくないと希ひ或は又自己の分別に行かぬ問題のある時など、妻君に相談して解決を求むるやうな事もあり、兎に角妻君の能力に信賴せんとを欲するものであるから、妻たる者は能く夫の意志を酌んで、良人の片腕となるの覺悟がなくてはなりません。女童の知ることならず、退り居らうと一言の下に排斥けたは武門の昔語り。夫婦の協力を理想とする今の男子に在つては、妻の力量の少しでも多からんことを欲し、之に信賴せんことを思ふものですから、今後の婦人は大いに確乎りせぬと困ります。良人に相談を持掛けられて、一言半句の答辯を出來ず、何の意見も言へぬやうでは、良人をして百年不作の嘆を發せしむる許りです。唯だ〳〵夫の機嫌を取るばかりが、妻の能では無いといふことを、よくよく心得て居て戴きたい。

七　氣取るまじきこと

女は己を愛する人の爲に容るとは申せど、化粧も適度が宜いので、餘り氣取つては却つて夫に不快の感を與へます。表面を氣取るよりも、精神の堅實であるのを男子は喜びます。外の女は奇麗が宜いが、家の妻は確りしたが宜いとは、百人の男子が九十九人までに

通有する觀念のやうに思はれます。嫁入の當座は別問題として、何時までも化粧三昧に浮身を窶すやうでは餘り頼母しくないなど〻不平を言ふ男子もありますから能い加減に遊ばせ。

八 適度の粉粧は必要なる事

化粧三昧に耽るは宜しくありませんけれど、さりとて全然化粧に注意せぬでも不可ません。男子と申すものは何によらず變化新奇を喜ぶもので、妻に對しても矢張り其通りであります。男子が其妻の新衣裳を見ては喜び、新奇の化粧法を見ては嬉しがるのは、啻に結婚の當座ばかりかといふに、決して然うではありません、結婚後久しく經つても同樣の觀念を有つて居ります。毎日毎夜繪に描いた地藏の樣に同じ衣裳を着、毎年毎歳同じ樣の髮を結つて居ては、無論信實の夫であつて見れば、必しも之を嫌ふといふではありますまいけれど、かくては良人の妻に對する注意も自然薄らぐ譯です。佛國の婦人は結婚後故らに扮装に念を入れると申します。兎に角適度の扮装は爲て惡いことはありませんから、假令飾らぬまでも、身のまはりを小ざつぱりとして、萬に付けて取亂さぬ樣に致し時々衣裳髮容を改めて、夫の目を新にするたしなみ丈は是非必要で御座います。

九 無精にすまじきこと

米國の俚諺「平常馳走せらる〻男子は、容易に細君の言に從ふ」と申します。是は飲食に注意する事が一番夫の機嫌に協ふことを謂ふたもので、人情を穿つた言葉であります。如何にも此言の如く、妻が心盡しの馳走の數々を味ふて、嬉しく思はぬ夫はありますまいから、此邊の用意も亦た肝要で御座います。なれども、飲食の美味ばかりが男子の希望ではありません、世には隨分飲道樂食道樂の男もありますけれど、多くは先づ清麗なるホームを愛し、見て快き細君を愛するものですから、男子の美を愛する性情をも亦た考へねばなりません。子供があるからと言つて無精にして居たり、家の内を取散らかして置いたりしては、到底男子の氣には入りません。

十　婦人の力の大なること

顚馬車を破り、悪婦家を破るとかや、男子を善くするも、家を破るも女の力であります。會堂の説教よりも婦人か無言の感化の方が遙かに強く男子を動かすのでありますから、此間の呼吸を解するに於ては、良人に對する用意の如き、そんなに六ヶ敷い問題ではなからうと思ひます。

女子のたしなみ

天保の頃、伊勢の水野澤齋といふ人の書ける「養生辨」の内に、婦人心得草といふ箇條あり。女子の嗜に就ての教訓にして、當世の婦人方にも好き教え草なりと思はるゝまゝ、左に之を抜萃しつ。

女第一の嗜は毎朝早く起き、髪を撫で付けて湯を浴び、薄く假粧をして、成だけ柔和に作りおき、その顏を忘る可からす。同じく鏡もそのまゝ其所に立て置くべし。

誰にても髪を結附たり、假粧を仕たりするを女の嗜と口にはいへど、何ゆゑ嗜やら其の譯を知る者なし或家の臺所へ亭主の工夫にて、大なる鏡を釣下げ置きしが、後には内儀の氣質が直りしとなり。その譯は晝夜とも、何となく恐しく劇しく腹立つとき、その儘自分の顏を彼の鏡に寫して見る、亭主に口答するにも、亭主の方へは向かず、彼の鏡に向ふて口答へし、小兒を叱るにも下婢を戒むるにも、みな鏡に向ひて言ふて見しが、我身ながらも愛憎がつきて、後々には自然と心が穏になりしとなり。

諺に身を知る者は世を知るとやら、男にても身をかまはす、常に三尺帶にて髪をみだして居る者は、心定らす發達おそし。若し發達の時節來らば、三年前より此姿を止るものなり。この姿を止ざる内は、幾年にても發達せすと知るべし。尤も職人や働人はその業によりて細帶を用ゆといへども、休日や仕事しまひの後は、大き帶を締めてよし。女とても常に細帶にてをる者は、心忙しく腹立つこと多し。故に家の内靜ならす。男女とも體の締は帶なり。たとへば、入口の貫の木の如し。故に何程美服を着たりとも帶をせざれば、善き着物に締なきと同じ。廣き帶をすることを嫌ひ、常に細帶にてをる者は、心とり締りなく、世帶持あしゝ。「せよたい」とは世の帶とかく、世渡りを取締るを云ふ意なり。締れば餘り、緩むれば足らす、世渡の大晦日と帶の結び目。或はいふ、太帶は婦女貞操の城廓なりと。

花嫁の資格

△容貌は美ならずとも、愛嬌ありて陰険の相なき者ならば娶るべし、世間に縁談といへば、必らずまづ容貌の美を専一に望む、女子の美貌は萬人の好むところなれど美は永久物にあらず、美人なりとて心操正しからず、又最愛ならんには子孫の爲め、家の爲にもならざる事勿論なり

△美醜にも幾通りの階段あり、又各自の好むところも相同じからず、他は美人といふも自己は好まぬ貌あり、世にいふお多福も、美人の陰相なるよりも愛嬌あるものなり、故にまづ十人並ならばよしとして己れの好みに近きを撰ぶべし

△體格のよき者、壯健なるものを撰ぶべし、矮少なる女子は其兒亦必らず矮し、母の體、ゆたかならざれば大丈夫を生み難し、背の高過るは苦しからず

△肉締りてむつちりと肥へたるはよし、脂肪太りは病身なり

△臀部の膨大なるは見苦しとて厭ふべきにあらず、子を産むに必らず安産なり、柳腰の美人は却つて難産するものあり

△顔色は白きに少しく赤味を帯びて、生々と艶あるものは無病壯健なり、白くとも艶なくして底蒼く、或は黄味を帯びたるは必らず痼疾あるものなり

△色すぐれて黒く、艶なきは胎毒深き者なりとむかし人はいへり、果して然りや否やは疑問なれど經驗の言は猥りに打消し難し、されど黒くとも土のごとくならず、艶ありて活氣に充ちたるは健全の相なりといへり

△容貌醜なりとも徳望あり賢才あらば美人にして愚昧なるに勝るべし

△あまりに醜なるは娶るべからず、極醜の人を娶らば他の侮蔑を招くに至るものなり

△お轉婆なりとも毒氣なく、正直にして無邪氣ならば無學愚昧なるには勝れり

△學問なくとも愛嬌世才ありて交際上手なれば學術優等にして高慢なるには勝れり、商家交際家などは殊に是を採るべきなり

△遊藝は措いて問はず、裁縫、割烹一通り出來、算數に暗からず家事の大體に通じたる女ならば娶るべし

△低き地位の人ならば諸藝はどうでもよし働き手を娶るべし、世帯に暗きものは家の爲めにならぬものなり

△父親の甘く育てたる女兒は二十歳になりても間に合はず、幼きより母の手助けに慣れたるものを撰ぶべし



女性に對する注文

法學博士　新渡戸稻造君

▲心を大きく持て

元來私は孰れかと云へば、蠻勇的生活が多くて、現に自分が司配して居る、學校（第一高等學校）等も、隨分荒つぽい學生計り、居るものであるから、隨つて自分の氣象も荒くなつて、婦人方に向つて、御話するやうな、優美の談話や、言葉は、生憎持つて居らぬ、併し自分の天性を枉げてまでも、優美にすると云ふことは、出來ぬから、其の點は豫め御承知を願ひたい、で女子の處世の上について、私が今日の女子に向つて、第一に注文したいことゝ云ふのは、社會の各階級を通じて、我か凡ての女性、殊に妙齡の婦人方が、今少し心を大きく持てと云ふことである、斯ふ云ふと、何だか修身の講話のやうに聞えるが、そんな鹿爪らしいことではなく、自分の感慨を其儘に述べるのである。

一躰女子と云ふ者は、氣が小さくて、其上非常に弱い、故に優しくて、萬事が心細く、哀つぽいので、可愛らしいと思はれる、小説を讀んでも、演劇を見ても、凡て此弱々しい、哀つぽい所が、主眼となり、又た善い點としてあるやうだ、處が吾輩は夫れと反對に、女性に對して、心を飽くまで大きく持てと、忠告するのである、但じ是れは、圖太くなれ、圖々しくなれとの意味でないから、どうか誤解のないやうに願いたい。

▲ヘソをかく勿れ

以上述べた、心を大きく持てと云ふことは、之を要するに、少しの事に心を痛めてはならぬと云ふ點に存するのである、人世は女性諸子の想像するより、廣くして、且つ大きいものであるから、些々たる事に、心配する必要はない、彼の人が斯う云ふたからとて、夫

れを直ちに氣にする、或る者が斯う思ひはせぬかと云つて、心を痛める、所謂薄氷を履むが如く、深淵に臨むが如き態度が多い、誠に憐れむべきことである、自分の心に確とした、誠の心、自信の力があるならば、言いたいことを云ひ、仕たいことをして、差支ない筈である、併し此の仕度と云ふのも、前に述べた、誠の心よりすべき、條件付のことである、私が曾て富山の高等女學校で、一場の演説を希望されたから、生徒諸子から、問題を請求して與れと注文すると、「貴人の面前にて體面を取らぬ方法」と云ふことであつたから、私は今申したやうなことを、敷衍して申すには成る程我輩男性とても、尊貴の御方に拜謁する時には、自然に萎然として、鞠躬如として、敬意を表する、又た華族あたりに逢ふとしても、まさかに威嚴に打たれると云ふやうなことはなくても、マア君と申すやうなことは言い得ぬ、是れは誰しも同じことであらうと思はれる、併し此場合のものは、決して氣が弱い、心細いと申すものではなく、即ち禮である、禮儀を守つて云ふべきことを云ひ、行ふべきことを行ふ、何の憚る所があらうか、から遊ばせ、あゝ遊ばせで、言葉は丁寧でも差支ないが、恐れると云ふ必要は少しもない、何でも淡泊がよろしい、處世と云ふことは、餘りベソをかいて居るに及ばぬことである、即ち心を大きく持たねばならぬ。

▲感情の自然的發露

心細い悲しいと云ふことは、強ち惡いことではありませぬ、私の申すのは、餘りに感情を抑へつけて、世の中の事に取り越し苦勞をして、クヨ〳〵せぬことである、即ち心に於て誠さへあれば、泣くも笑ふも宜しい、是れこそ、純潔なる感情の、自然的發露であつて、少しも惡いことでは、ないと申すのである、私は先日旅行して居ります時に、東京の宅に置きまする、少女學生から、一通の書面を受取つた、是れは親のない少女であつて、氣の毒な身の上であるので、私が引取つて、世話をして學校へ通はせて置くのである、其の書面の要領は、「叔父さん「私のことを常に叔父さんと申して

居る」私は今日學校へ行きましたら、四五人仲好しの生徒が、私の處へ參りまして、多分雜誌か新聞にあつたとでありませうが、私に向ひ貴方の叔父さんは、大層小兒好きで居つしやるそうですが、ホントに好いのね……と非常に羨みますので、あとから此四五人の身の上を聞きますに、四人共兩親がなくなつて什舞つたさうですし、一人は父だけはありますが、石ぞうの樣なものだと云ふとでありました」と書いて其末に『昨晩は私獨りで二階に勉强して居りましたら、風が吹いて何だか寂しくて〳〵堪え切れませんでしたが、不圖氣がついて見ますと、今日は亡父の命日でありました』と書いてある、私は是れを讀んで實に同情に堪えませんでしたが、何と感情の自然的發露ではありませんか。



▲神聖なる感情の發露

感情の自然的發露は、上述の如く少しも惡いことでないと同じく、亦た神聖なる悲哀は決して惡いとではない、是れは心の洗濯である、私は此年になつても、一年に一遍宛は亡くなつた母の手紙を取り出して、悉く讀みますが、在世の時の敎訓が歷々と繰り返されるのであります、また私は一年に一回宛は必ず田舍の鄕里へ參ります、併し私は耶蘇ですから、位牌を持ちませぬが、何等の形もない、床の間へ花を飾つて、亡き父母の追念

を致して居ると、環睹蕭然として、孤身水の如く、宛ら暮れ行く秋のやうな心地がして、心の底が澄み通るやうになります、所謂神聖なる閑寂は、心の洗濯を致すものとは、是等のことでありませう、想ふに、婦人諸子も、さう云ふ場合があらう、時には亡き兩親方、或は姉妹方のことを思ふとか、乃至は自然の感情の爲めに泣きたいことなどがあらう、此時は人の居らないやうな室で充分お泣きなさるがよい、必ずしもコッソリ便所等へ行つて、メソ／＼遣るには及ばぬ、充分に大聲を揚げて、泣くが宜しい、また反對に、笑ふも嬉しいとかあつたら、此場合にも又同樣大口を開けて笑ふがよろしい、袂の中へ頭をつゝこむやうな、卑怯のことをせぬがよい、即ち悲喜哀樂、神聖なる感情を發露するは、固有の天賦の力を充分に、發展するに必要なるものである、日本の學校に於ては、只だ獨りで部屋を占めると云ふことが、出來ぬけれど、是れは追々其設備をして一日の中只だ一人で、神聖なる感情を發露すべき機會を與へて貰ひたい、悲しい時に泣き、喜ばしい時に笑ふと云ふことは、心理學上自然の結果に外ならぬのである、只だクヨ／＼して何時でも、不愉快に不活潑にするには及ばぬ。

▲心を廣く持て

次に女性方に注文したいのは、心を廣く持てと云ふことであります、即ち御互に詰らぬことの爲めに、惡く云ひ合つたり、怨み合つたり、拗ねたり、こぢれたりせず、薩張りとして厭味のない樣にせねばならぬ、元來女性と申す者は、兎角に嫉妬深い者で、態々他人の欠點や、短所を見立てゝ、彼是れ餘計な惡口するものである、他の婦人の心術や容貌に就て、扨てはあの指環がどうのリボンが、斯うのと、つまらぬ服裝や、髮飾りのことまで、論らう、殊に婦人の特徴として、化粧のことに就て、短所を見立てる癖がある、何も厭なことを態態自分の耳目に訴へて、不愉快な思ひをするには及ばぬ、是れ皆な心の大きくない、狹い／＼了簡から起つて來ることであるから、これには相當の團體のやうなも

の、假令ば惡口をせぬ會とか云ふやうなものを、組織して貰ひたいのである、私は十六歳の時、人の惡いことを見聞すると、不愉快至極なので、爾後廿幾つの齢まで、成るべく善いことばかり、見聞するやうにした、また私は非常に短氣で困つたので氣に喰ぬ時は、早速に瞑目いで了ふ習慣をつけた是れが爲め廿二歳の時、米國へ行つて隨分笑はれたこともあつて、是れは近眼の爲めだと言譯したことさへある、併し此習慣の爲めに、大概の人の醜い容貌や、不具の人等を見ても、其長所の方を以て、短所を償ふやうに同情すると云ふ風になつた、是れは私が聖人振るでも何でもないが、實際經驗的の



事實である、苟も此同情の心あらば、所謂人間到處有青山で何等の恐るゝ處もない筈である

今を去る二百年前、英國に於て、アジソンと云ふ、人格の極めて高い、有名の文豪があつた、其人が曾つて或る雑誌へ書いた一節に、「二六時中婦人が化粧の爲に費す時間は十時間ある」と云つた、私は平生の實驗上、婦人が如何なる仕事に、如何程の時間を消費するかについて調べて見たことがあるが、人の噂をすることが最も多く、即ち一時間に於て、正味の話は五分位、あとは皆人の噂や乃至は之に關係したことで、持ち切ッてゐる、そして其噂も人格を賞揚するとか、德操を欣慕するとかな

ら、賛成すべきであるが、前述の如く、只だ詰らぬとばかり、多いと云ふのは、誠に嘆しいヿである。

▲心を強く持て

其次の注文は、心を強く持てと云ふことである、是は一寸聞くと、優しいと云ふのと、反對に聞えるやうであるが、決して女だてらに、ウン／＼して威張れと云ふのではなく、即ち意志の堅實ならぬ爲め、彼の女學生等が誘惑に陥り、身を過るやうになるのが多いのである、結局、左様の場合には、充分誘惑に反抗して打ち克つの意志を持たねばならぬと云ふヿである、現今彼の女學生問題の如き、初よりして女學生其者の墮落するのではなく、或る機會に於て誘惑が起り、惡いと知りつゝ、其誘惑に反抗する堅實なる意志に乏しく、不知不識の間に、誘惑の深き淵に沈んで、遂には如何に後悔しても、所謂駟馬も及ばぬ場合となるのである、醜業婦の如きものは、イザ知らず、苟も行末賢母良妻たるべき女學生が詰らぬ誘惑の爲に、一生の清操を傷くるとは痛嘆すべきヿである。

▲人形じやないもの

私は先日北越地方を旅行して、長岡の、某旅館に投宿したヿがある、見ると同家の娘のおミツといふ、七ツ計りの恰で人形のやうな愛くるしい、小兒が下女を相手に、遊んで居る、私は性來の子煩惱であるから、下女に賴んで連れて來て貰つた、そしてミーちやんは恰で人形のやうだと、譽めて、彼方を向てお見せ、此方へ來てお吳れと云ふ調子で遊ばせやうとすると、ミーちやんは、背向きになつて、却々承知しない、で下女が何故さう怒つて居なさるかと聞くと、『人形樣じやないもの』と云つて頭を振る、私は此一語を聞ひて、ひどく感じた、成る程さうだ、此ミーちやんは、人間である、人格を備へて居る人間である、決して人形ではない、從つて私が私の精神は兎も角、之を人形扱ひにして、弄ばうと云ふのは、甚だ申譯ない次第であると、ホト／＼感心致しました、世には十五になつて

も、二十になつても、乃至は定まれる良人があつても、他の誘惑に出逢つて、玩弄されるものが多い中に、此七つになるミーちやんの一言は、非常に强味を帶びて、聞かれるので、頼もしい心地がした、呉々も願いたいのは、婦人諸子が、意志の堅實にして、誘惑に反抗する、大なる强味を持つて貰ひ度ひ事である。

▲美しき同情

最後に諸子の爲めに、私が米國で實見した、美しい同情についての、お話しを申上げませう。

私の米國留學中、或る時友人の下宿屋へ訪ねて行つた所が、折惡しく留守であつたので、歸らうとすると、下宿屋の主婦が、少し話してお待ちなさいと云ふ、玆に一寸御斷りしたいのは、米國の下宿屋の事である、日本では普通一般の營業者が多いが、米國では靑年書生を養成監督しやうと云ふ、理想を持つた、中流以上の人が多いやうである、從つて却々教育にも富んで居る、そこで私も然らば少々御邪魔になりませうと云つて、主婦と種々の話しをして居ると、此家の愛孃で、ルイザと呼ぶ七つ許りなのが、チヨコ〳〵と來て、切りに卓の周圍を飛廻つて居たが、軈て私の顏をジツト見て小首を傾けて居ましたが、遂に母の傍へ寄つて、何か小聲で頻に尋ねる樣である、すると母親は私にさも極り惡るさうに、ノウ〳〵と制止する、そこで私は性來の子供好きだから、イヤ奥さんお孃さんは、何か仰つしやる樣子ですが、私に聞かせて下さいと云ふと、主婦は實は貴方を見て、切りに、印度から來た、御方かと問ひ糺しますので、妾が印度の方ではない、之は日本の方だと說明せたといひつゝ是れには、理由があるとの話である、夫れは私の訪問した十日許り前の事、此ルイザは、母親に連れられて、さる日曜學校へ行つた、其時に耶蘇の宣敎師で、永らく印度で傳道をして、歸つて來た人が、話しをした、印度のマドラスの町の片田舍に、七つになる憐れむべき孤兒があつて、病氣に罹つて非常に苦しむで居るので、此宣敎師が見舞に行き、色々と慰めると、孤兒は苦しい息の下から、少

しも苦しくはありませぬ、早く父母の居る天國へ行きたいから、モット病氣が重くなりたい、と返事をしたと云ふ話しを聞くと、ルイザは小兒心にも、印度の孤兒が氣の毒で／＼堪らず、宅へ歸つてから、地圖を開いて、母に印度の方角やら、何やら色々のことを問ひ、其日よりして、病少女の病氣の一日も早く、平癒するやうにと、朝夕毎日二回宛、神に祈りを捧げて居たそうです、ところへ私が參つたので、私の顏色が黒かつたから定めし印度から來たものと合點して、憐れむべき病少女は、モウ病氣が癒つたか、どうかと母に問ふて呉れと謂つたのであるとのことである、私は此同情深き天來の福音を聞いて、一種のインスピレイションに打たれて、衷心から尊敬の心を以て、ルイザに云ふには、御安心なさい、御孃樣、若し天に於て、誠の神樣がゐるならば、お前樣の祈禱を必ず聞召して、必ず願を聽かれるでゐらう、印度の孤兒は、今頃はスッカリ平癒て居るに相違ありませぬと云ふと、ルイザは非常の滿足で、感謝を其愛くるしい笑顏に見せたのである、其後私は此家の前を通る度毎に、必ず此小天使の住居に向つて、脫帽して敬意を表し、其の健康を祝しました、此温かき優しき同情、四海皆兄弟なりと云ふ、寛大なる同情を有すればこそ、大陸の人は如何なる殖民地でも、恐るゝ氣色もなく行つて、新殖民地を建設するとが、出來るのであると感心致した次第である、是等は我敬愛する女性の方に、大に同情し、且つ翫味して戴きたい話しであるとおもひます。(胡劍生筆記)

秋の夜

神無月四日、良江樣參る初子と筆止めて丈に餘る長文をくる／＼と卷き納めようとすると、紫壇のお机に頰づえついて、優しい同情の溢る御眼に玉の露を宿して此の文を卷き返す友の姿が目に見ゆるやうだ、吁私は恁麼拙な言葉のみならつれて君の淚をさそはうより一層ひと思ひに裂いて仕舞はうかしら。(初女)

如何なるを理想の男子となすべきか

何事にも眞、善、美は理想の標準である、女子が男子を擇むにもこの標準を理想として定むるのであるが、併し理想は理想として實際には決してその標準に叶ふたものは無い故に理想の男子を得るには容易ではない。如何なる女子も十七八歳に至れば、自己の一生を托すべき未來の夫を心の裡で想像するであらう、否これを想像して我が心の裡に理想的男子を描かねば人選の標準は分らぬ次第である。併しその理想の男子に就ては千差萬別で一定の模型を確定する事は出來ぬが、大概のところまづこんなものであらうか。

(1) 體格雄大にして容貌逞ましく又は剛邁敢爲にして、一見して英雄の相ある健兒

(2) 意志強く、力量ありて而かも快活なる男子、或は風采堂々たる偉丈夫

(3) 雄偉の體格はなくも徳望あり、品位あり寛仁にして大度ある人

(4) 容貌はなくとも智識あり、品位は二の次なるも勢力ある人

(5) 地位、勢力はなきも學問あり、技倆ある人

(6) 眞誠の勇氣ある人

(7) 高位高官の人、若しくは財産の裕かなる人

(8) 武邊一徹にして、稍や頑固、偏狹の嫌はあるも剛毅にして物に驚かざる人

(9) 信仰固き人、獨立の觀念強き人、節操ある人

(10) 活潑無邪氣にして社交術に長じたる人

(11) 親切にして優さしく温和にして人情を解する人

(12) 熱誠の人、感動の人

お孃樣時代より若奧樣時代まで

(二十世紀の女子修養訓)

吉川曾水

△如何に修學すべきか

月影清くオルガンの音すゞ風に動く良夜、寄宿舎の窓に倚りて、理想十空想を盛んに排列する乙女子に向ひ、貝原益軒の教訓を以て、其の生活動作を束縛するは殘酷の至りなり。女子教育なるものが、既に新時代の賜なりとすれば、其の學生々活も亦新らしき風潮に觸れざるべからず。或人は和魂洋才といふことを女子教育にまで及ぼし、細君手製の西洋料理に舌皷をうちながら、妻は如何なる苦痛をも忍びて、夫の奴隷となると我國古來の習慣なりと强ゆるとあるも、斯る夫に出會いたる女子こそ氣の毒なれ。而かも此くの如き場合に臨み、所謂三從七去の舊式家庭に生長したる箱入娘にあらざる以上、苟くも女學の一端を受けたる女は、夫の不法壓制を苦諫し、萬已むを得ずんば民法第八百十三條により、裁判上の離婚を請求するならん。而して是れお轉婆にあらず、生意氣にあらずして、時代女子の取るべき穩當の手段なり。されば女學生時代に於ては、讀書若くは教師の感化に依り、第一に女子の本分を知り、男子との關係、社會に於ける位地を領解し或る程度まで獨立の精神を養はざるべからず。女は藤蔓の如く男の幹に纒い附きて生活すといふものあれども、そは鐵漿をつけたる時代のことにして、東京の入口に女子判任官の嚴めしく控へ居る時代のことにあらず。米國邊りにて普通の女學校を卒業したる二十歳前後の女子は、セールガールと呼びて商店の賣子となるもの

多きが、彼等の勉强することと貯蓄することは、一寸の暇さへあれば遊び散らす我女學生の、とても及ぶべき所にあらざるなり。由來女子の通有性なる依頼心は、生活上の必要より來りたるものなるが、此の卑屈根性は勤勉と貯蓄とに依りて大に減少せらるべし。次に我等は學校時代に於て十分眞正の愛を研究することを女學生諸君に向つて勸告す、蓋し純潔なる愛は靑春の時期に於て容易に燃へ得るも、三十を過ぐれば花の如き情火を喚び起すと頗る困難なればなり。露國の皇后カザリナ陛下、嘗て某女學校に行幸あらせられ、數多の女學生に向ひ、突然、

「戀愛とは何ぞや」

といふ質問をかけられたるに、星の如く列びゐたる學生達は、恰も胸の裡の秘密でも探られたる心地になり、互に顏見合せて應ふるものなかりしかば、學監レオンチーフ夫人は恐る〳〵御前に出で、

「陛下よ斯る御質問を許させ給へ、當校に於ては危險なる話題を一切禁止し、從つて學生は戀愛の何たるを解せず」

と奏上したるに、陛下は眉を顰め給ひ、

「危險とは何事ぞ、戀愛は婦女子に取り其の生命の泉にあらずや、第一兩親を愛し、次に夫を愛し、次に子供を愛し、而して絶へず神を愛するは女子の本分なり」

と宣せられたりとのことなるが、若し婦人の生命より愛の一字を取り去れば、跡は見るに足るべきものなからん。要するに乙女子は婦人の社會に於ける位地と、其の本分とを學校に於て充分學ばざるべからず。

△如何に男子を樂ましむべきか

紫、海老茶の袴を穿く學生と、裾長の衣服を引摺りつゝ琴の師匠に通ふ娘とを問はず、十八九歳になれば女子の職分を知り、己れ一生の標的を定むると必要なり、或は敎育に身を委ねんと言ひ、或は藝術のために盡くすべしといふものあるも、之は各自の職業にして人生の目的にあらず。然らば婦人の目的とは何ぞ。

男子を樂しましむると、もう少しく廣くいへば社會を樂しましむると、是れ婦人の目的なり、此世に存在する原因なり。されば如何にして男子否社會を樂しましむべきか。英國の高僧テーロル曰はく、『婦人の優さしき文雅なる動作は、男子の眼に左も美しく映ずべし』と。即ち女子は優美なる動作によりて、男子を樂しましむることを得るが、斯る動作は必ずしも美貌、白粉、衣裳より生ずるものにあらず。クレオパトラの如き天賦の美しき容姿を持つ女は、放蕩息子ハヽヽラクラ書生を樂しましむるも、立派なる紳士、崇敬すべき男子を樂しましむる能はざるなり。又俳優の如く賓客の前に於て、事々しく言語態度を作り、故さらに上品を裝ふは偽善の極にして、男子の愛好を得る道にあらず。梅子孃は曰はく『今年の夏は實に嫌だよ、鼻は焦げる樣で何處へ行くにも扇子が離せないことよ』。桃子孃は曰はく『私夏は好きよ、奇麗な花を取つたり、香氣のする乾草の上を歩くは、善い心持がして。』女子の本分を解するものは、梅子孃なるか、桃子孃なるか。

女子をして最美の動作を生せしむるものは、善良の性質、忍耐及同情なり。此等の要素さへ有すれば、縱令容貌醜く、粗服を纒い、脂粉を塗らざるも、よく男子を樂しましめ交際社會の女王となることを得べし。米國の詩人ホウキッターの句に曰く、

彼女が義務の道を歩む所に
美しき花は咲けり
我等の殺風景なる生命の線も
彼女と共に住めば
滑かなる美しき曲線となる

此の詩中の『彼女』たらんと欲するものは、顔をみがくよりも、其の品性を研かざるべからず。

△如何にして獨身生活を送るべきか

日本の女子は伊弉冉伊弉册二尊の先例を奉じ、一人も殘らず結婚するを望ましき次第なれども、男子にも無妻主義（我國男子の無妻主義は其實多妻主義多けれ

ども）を取るものあるが如く、女子にも已むに已まれぬ事情ありて、一生嫁ぐことを欲せざるものあるやも知れ難し、總じてミス生活即ち獨身主義は、非常に意思力の強き婦人にあらざれば押通すこと難く、從つて女學生時代の口頭のみの獨身主義は、我等の贊成せざる所なれども、何か非常に感ずる所あり決する所ありて、孤獨の生活を送らんと欲するものは、決心したる後も、絶へず精神を修養し、天然を樂しむ業務に就かざれば、肉情邪慾は時々刻々襲い來り、二十年間押通したる決心を、四十の姥櫻に垂んとする頃に至り、水泡に歸せしむることあり。歐米に於ては風俗習慣等種々の原因よりミス生活を送る婦人多く、又其の生活法も比較的に容易なるが、ソレにしても銀髪のお孃さん達は、大抵學校教育とか宗教の宣傳とか、精神上の業務に從事するもの要するに斯る事業の快樂を以て、結婚より生ずる快樂に代ゆるためなり。されば高等教育を受け兼ねて文筆の天才に富む女子は、著述を業とし、ソレを樂しむこと宜しからんも、之は一般の婦人に望むべからず、此に於てか我等は、如何なる女子にても出來得るミス生活の模範を左に掲げん。



ロンドン市中にて最大の病院セント、トーマス病院の構内に、『レデー、オフ、ゼ、ランプ』と通

稱する看護婦の石像あり。是れ即ち有名なるフロレンス、ナイチンゲール孃の紀念の爲に建てられたるものなるが、孃は千八百二十年英國に生れ、二十歳の時巴里の女學校に於て教育を受け業成るや病者慰問のために一身を獻げんと決意し、自ら進んで看護婦となり、千八百五十四年クリミヤ戰爭の起るや、廿四人の看護婦と共に、人知れず土耳古に航し、戰場より送り來る數多の負傷者病者を介抱慰撫したり。紐育イーブニングポスト新聞の通信記者、孃の戰地に於て働らく模樣を記して曰はく「余は兵營の前を通過する際、一人の貴女が兵卒の食事に忙がしき有樣を見たり、顏は小形なれども美しく、眼は敏慧の光を以て輝けり、而して其の臺所の業に、一生懸命働らき居りしとは、余をして驚へす崇敬の念を生せしめたり」と。孃常に曰はく「看護は一種の技術なり、畵工彫刻師の仕事の如く、準備と獻身的精神を要す、而かも畵工や彫刻師は死したるカンバスや冷かなる大理石を取扱ふに比し、看護婦は神の御靈の宿らせ給ふ人體を取扱ふを以て、一層大なる準備決心を要するなり、余はいふべし、看護は美術中の尤も美しき藝術なり」と。而して孃は尤も淸潔にして、尤も高尙なるミス生活を送れり。

夫婦の交情は宇宙間尤も勢力あるものなれば、之を棄てんには、少なくも夫より愛せられ、男子より接吻せらるゝを樂しむだけのことを、他に求めざるべからず。ナイチンゲール孃は若き男子より握手せらるゝに代へて病者の手を握ることを快樂としたりき。故に孃の如き精神と決心とを欠く獨身生活論は、女學校に於ける放課時間の雄辯に止まり、三四年を過ぎるか過ぎぬかに、當年のナイチンゲールは、赤ン坊の母となる失態を招くもの多からん。然れども我等は決して婦人の獨身生活を主張するものにあらず、婦人の獨立は、マツチを火藥の傍に置くよりも危險なり。君子は危きに近づかずとの訓戒を守りて、凡べての少女は結婚すべし。

△如何なる男子と結婚すべきか

歐米の女學生は、文學科學を研究する傍ら、其の心中にベストマン(最良の男子)を有し、テニソン、ウヲーヅオールスの詩を讀む間に、充分ベストマンの性行を注視するを以て學校を卒業すれば、直にプロポース(求婚)をなし若し男子にしてエースと云へば、ソレにて新郎新婦を見る次第なるが、我國の女學生は此くの如きベストマンを有すれば、スグ懷罪を犯したる如く新聞紙上に歌はれ、却つて嫁入の妨害となるを以て、在學中の婿ゑらみは遠慮するとするも、兎に角青春の少女は誰人かと結婚せざるべからず。今は故人となりつれど能勢榮氏と呼ぶ教育家は、其教ゆる女學校の學生に向ひ、卒業後は官立大學卒業の學士に嫁し、他に嫁するなかれと教示したる由なるが、現時の女學生中にも此の想を抱くもの恐らく少なからざらん。然れども我等は斯る求婚説に同意する能はず。學士は高尚の學を修め、比較的に立身榮達の早きと明らかなるものたゞ學藝及ソレより生ずる榮華のみを目的として、人格の如何を問はざるは、不都合なり。詐僞取財をなすも破廉恥の行爲をなすも、學士の肩書さへ有すれば、我が戀人なり良人なりとするは餘りに女子の威嚴を損じ、品位を墜すものにあらずや。

結婚せんとする女子は、第一身體の健康なる男子を選まざるべからず、健康は財産よりも天才よりも大切なり、殊に夫婦の結合たるや、半ば肉體の關係より生ずるものなれば、健全なる夫を持つとの幸福なるはいふまでもなし。如何に高大なる思想を有し、該博の知識を貯ふる男子に嫁するも、其の夫にして病衰脆弱一種の不具者ならば、妻たるもの〻快樂は殆んど其の半を失ふべし。而して男子の美貌風采を愛好する結果、其の惡しき病氣を有するとを知りつ〻、之に嫁ぐ少女は社會の罪人なり、何となれば夫の惡病は我身に傳染し、次で何等の罪なき子供にまで傳染すればなり。世上婚を求むる女子が男子の材能性質財産のみに耳を傾け、健康の良否を等閑にする風習あるは、決して嘉みすべきとにあらず。

次に少女が、紳士に嫁するとを忘るべからず。或人

紳士を解して曰はく、「眞正の紳士は寛大にして私利を計らず、彼は己れの幸福平安を望むが如く、又他人の幸福繁榮を尊敬す」と。而して此くの如き紳士は何處に求むべきか、獨り舞踏室、料理店、球戯場に於て、之を發見することの容易ならざるのみならず、大學の講堂に行き、華族會館に行き、銀行集會所に行くも、求むべからざることあり。然るに之と反對なる茅屋の裡に於て、小さき商店に於て田舍の學校に於て、我等は往往眞正の紳士に遭遇することあり。紳士は學問にあらず金錢にあらず技藝にあらずして、善良なる品性、完全なる人格なり。されば紳士と結婚せよと勸むるは、人格に嫁ぐべしと勸むるに異ならず。少女に宜しく汝の情慾と虚榮心とを去り、虚心平氣、其のベストマンを求めよ。牧師フキリップ、ヘンリー、嘗て其の子女を戒めて曰はく「汝等にして結婚せんと欲すれば、第一神を喜ばしめ、次に汝等の意に適ふ配偶者を選ぶべし」と。然れども多數の少女は、此の牧師の言に服從せざるこそ悲しけれ。米國の或る女學校に於て、左の如き談話は交へられぬ。

「メリーさん、あなたの理想の男子は如何なる人物ですか」

メ「マガレットさん、私の夫とすべき男子は、金があつて美しくて、ソウして馬鹿でなければならぬ」

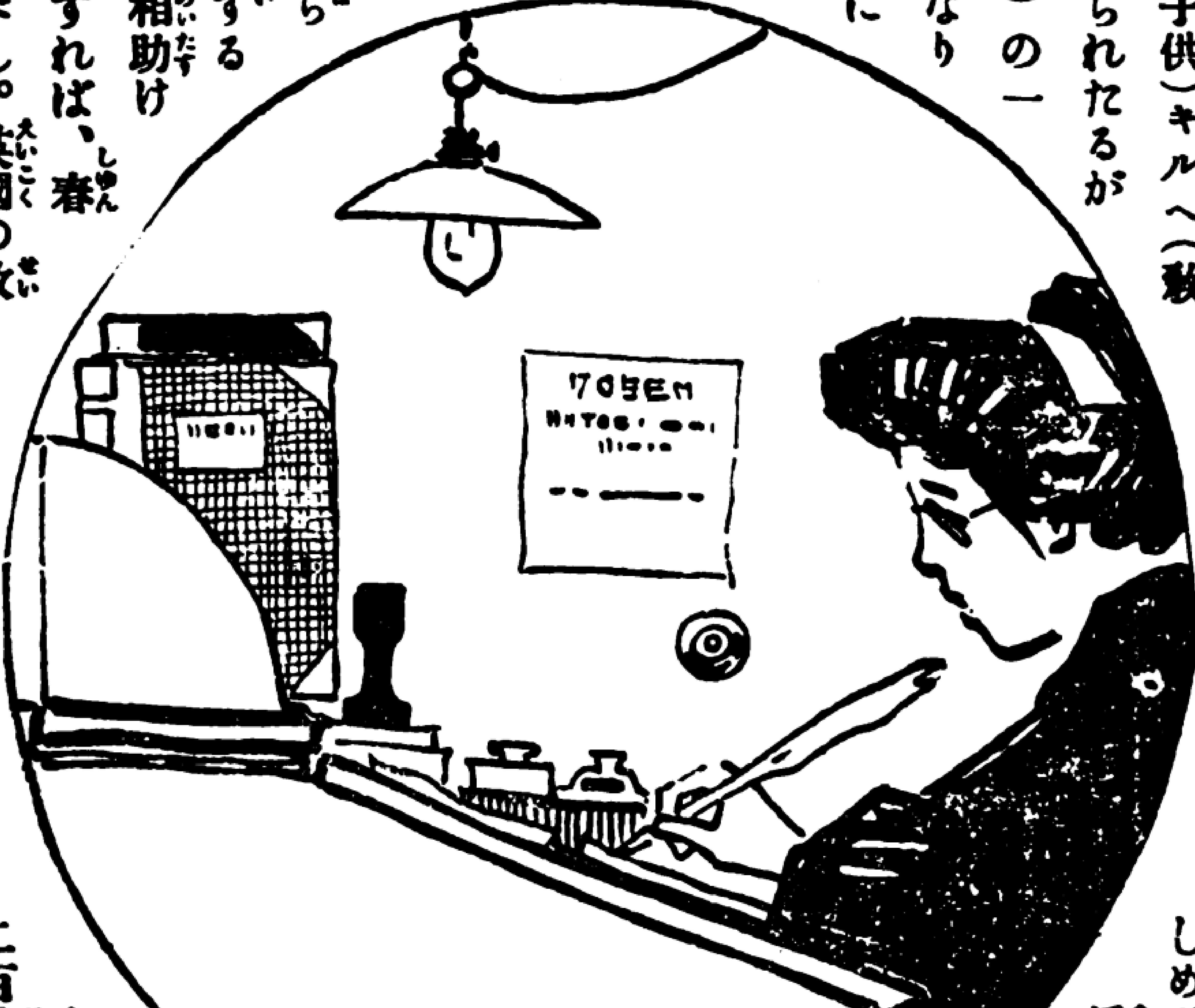
マ「美男子で財産家ならば申し分がないですよ、然し別に馬鹿でなくとも……」

メ「よく考へて御覽なさい、財産を有する好男子は到底私共を貰いませぬよ、縱令貰つて與れても、賢い夫はお互に操縱し難いではありませんか」

嗚呼、斯る女學生は、地獄の火に燒き棄てざるべからず。而かも何萬といふ全國の女學生中にて、東洋流メリーたりマガレットたるものもなしと限らざるが、苟くも女子の天職を解する徒は、財産美貌等の語を口にすることなく、紳士に嫁するを以て、其の世に處する方針となすべし。

△如何なる家庭を作るべきか

聰明なる現獨逸皇帝陛下は、一家の妻たるものに職分を解釋して、キンド（子供）キルへ（致會）クーヘ（臺所）と宣せられたるが我等は尚之にマン（良人）の一語を加へんと欲するものなり妻は家庭の總理大臣たるに相違なきも、夫は其の帝王なれば、之を度外視して、圓滿なる家庭を作る能はざるは明白なり。而して樂しき家庭を組織する第一の要件は、夫婦が英語のヨユーチユアル即ち相互といふ語を深く領解するとなり、即ち互に相信じ相助け相愛し、相憐れむ心を有すれば、春風常に堂に滿つる思あるべし。英國の政治家サー、ゼームス、マッキントス、其夫人の德を稱揚



して曰はく、「余の妻は徐ろに余を放蕩生活より遠からしめ又余の弱點を補へり、尚余の懶惰を矯正して勤勉の人たらしめたり」と。

妻の感化は此くの如く大なり、從つて妻は先づ其の身を正くし、行を清くし、家庭の天使となる心なかるべからず。

新郎新婦茲に新らしき家庭を作るや、先づ彼等の精神を支配するものは贅澤なる生活にして、夫婦共に非常に體裁を飾らんと焦るも、斯る生活法はやがて借金と後悔とを齎らすとを記憶せざるべからず。英國に於て二百磅乃至三百磅の年俸を取る會社の書記は、概して貧窮なるが、其の原因は細君が衣裳を飾

りて體裁を保るためなりと知らる、若し儉約なる細君ならば、百磅の俸給にても、能く一家の生計を支ゆるならん。或る一紳士が、其の下婢と結婚したる理由に曰はく、同等の淑女を娶れば、必ず下婢を附屬せしめざるべからず、而かも若き妻が下婢を使役するは、經濟上よりいふも婦人の修養上よりいふも宜しきことにあらずとラスキン曰はく、若し汝にして神の命に從へば、汝は眞正の淑女となることを得べし、而して汝の全力を擧げて、神の僕たる人々に仕ふれば必ず神より賞讃せらるべし」と。是れ一家の若奧様を戒しむる大教訓にあらずや。

妻は獨逸皇帝の述べられたる如く、夫に仕ふる外、子供と教會と臺所とに對して責任を有す。新婚間際のことゝて、未だ子供は生れずとするも、敬虔なる宗教心と、臺所の料理は之を忽がせにすべからず。されば夫の毎夜歸宅することの晩きを恨むなかれ、舅姑の意地悪きことを嘆くなかれ、夫の身を思ふ上、尙人間以上のものに奉仕することを忘るべからず。之を忘れざれば、婦人の特有物たる嫉妬、癇癪、不平、取越苦勞、ヒステリー症は奇麗に取り除かれ、雪の如き潔白なる生涯を送ることを得べし。

△如何にして夫婦間の愛情を増さしむべきか

新婚旅行より還りて、七八月を過ぐれば、早くも夫の缺點は妻の感ずる所となり、妻の短所は夫の眼に映ずべし。未だ三十に滿たざる夫は俄に容子を作りて曰はく、「花子、御前は僕が一家の頭であることを承知でしやうな」、花子は態とすまして曰はく、「知つてゐますよ然し貴君が頭ならば、私は首ですよ」、夫は曰はく、「宜しい、御前を首にしてあげる」、花子は得たりかしこに曰はく、「頭は首についてどちらへでも動きますよ、貴君は之を御存知ありませんか」。讀者よ、斯る權力爭が起りては、夫婦の愛情も家庭の平和も、メチャ〳〵になることは明らかなり。然れども又茲に一人の夫あり或日失望して歸宅し、其若き細君に語つて曰はく、

「僕は失敗した、明日は執達吏が來て、一家の凡ての物を差押へるであらう」

細君は暫らく沈思したりしが、徐ろに夫の顔を見上げて曰はく、

「貴君の身まで差押へるでしやうか」

夫「イヤ僕を差押へるとは出來ぬ」

妻「私の身も差押へますまいね！」

夫「無論差押へるとはない」

妻「ソレならば凡ての物ではありませぬ、縱令家財殘らず競賣に附せられても、貴君と私といふものが殘つて居ります、二人の心と手と組合せたならば再び財産を作ることが出來ます」

嗚呼讀者にして若し男子ならば、前の首となりし細君を取らんと欲するか、又後の夫を慰さめたる細君を取らんと欲する乎。

獨逸の著作家リヒテル曰はく、「愛情は近づくよりも離るゝに從つて増加す」と。戀人と油繪は餘りに近く倚りて、見れば、案外ツマラヌ者多きが如く、夫婦の關係も、絶へず一室に起臥して、朝から晩まで鴛鴦の如く密接すれば、却つて感情の衝突を來すものなり。論より證據、著述家書工等の如く外出せざる人は、時時細君の機嫌を損ずるも、官吏會社員の如き毎日外勤する人は、夕刻非常に細君より歡迎せらるゝにあらずや。故に夫婦の歡談は一日の中時刻を限り、他の時間は互に其の職業に忠實なるを可とす。

健全なる愛情には多少の尊敬を加味せざるべからず即ち夫に妻の美徳を敬する心あり、妻は夫の人格を稱賛する精神ありて、初めて高潔なる愛情を發揮するを得べし。犬を愛するが如く、其の妻を愛するも、修養ある女子は喜ばざるべし。而かも夫が己れの精神を知り、女徳を尊敬することを領解すれば、妻は之に依りて最も大なる安慰と幸福とを得べきなり。

夫婦の間に於ては互に滑稽をいふなかれ、夫の面前に於て他の男子の美質を稱揚する勿れ、之と同じく妻の前に於て、友人の細君の優美なることを語るなかれ、他人の前に於て、妻を侮辱するなかれ、シエークスピヤの時句に曰はく、

男子は馬に刺馬輪を箝めて一里を走る間に、婦人は一の軟かき接吻を以て百里を走る。

要するに男子が女子を操縱するよりも、女子が男子を操縱する方比較的に容易なり。従つて家庭を快樂ならしむるは、妻の責任である。

社交の第一要件

社交の第一要件は相手方の心を、悦ばせ、樂しませることに注意するが最も肝要である、社交は他人の氣を知りて其人の心に合ふ樣に歡待する所謂八方美人的に言動することをいふのである、併しそれは只自分にあまり親しまぬ人、若しくは目上の人などに交際する時の必要條件であるが、其他自分の親友だとか又は同輩の人々と交際するには及べく丈心を打明けて間に墻壁を設けぬ樣にし、互に信じ合ふて親しく交際せねばならぬ、即ち友誼を溫むるには四角張つたり、規帳面では出來ない。

併し交際は甚だむづかしいもので、世間一廉の人物でも交際上手と言はるゝまでには餘程苦勞を積まればならぬ一體日本人の交際は下手である、日本の人は男女共に稍もすれば人前を憚かる方で口を愼むとか、擧動を眞面目にするとか、兎角人に對する時は平素の衣服を脫ぎ捨てゝ直ちに外出の態度になる、それが第一交際を窮苦にし又拙ならしめた原因である、不斷家ではおしやべりの人でも人中へ出ては色々な言譯をして無言沈默に終る、さればこれからの婦人は奥樣でもお孃さんでも世を樂しく暮そうと思召すならまづ人に逢ふた時には如何にも快活で、嬉しそうに微笑を含み、其人を待遇する樣につとめなくてはなりませぬ、西洋の諺に愛嬌よく笑ふ女は常に人に愛せられ、譽められ、タトエ醜貌も美女たるの折紙をつけられて多くの他人に推薦されるのは、一に其の女の愛嬌の徳であると言ふて居る。



境遇の順逆に處する法

佐治實然君

▲禍三年有卦七年

潮に滿干のある如く、如何なる人にも順逆二樣の境遇があつてそれが必ず入れ代りに廻りあつて來るものである、唯だ大體に於て、順境の永く續く方と逆境の寛かで濟むのとの相違はあるが、凡ての家には所謂星の廻り合せといふやうな事がある、故に今得意の地位にある人は、早晩反對の運命が見舞つて來るものである事を豫期して、萬一に處するの準備しなければならぬと同時に又失意の境遇に立つ人は、捲土重來の勇氣を養つて、決して我身一人の秋のやうに失望するには及ばない。

私が多年の經驗から得た考を有體に話せば、世俗に所謂有卦七年とか云ふ事がある、實際はそんなに永く善い事の續くものではない、若しあればそれは誠に圖拔けた幸運な家庭と思はねばならぬ、先づ大抵、無事な月日が五年もつゝけば、上の上と思はなければならぬ。而も人の運不運には、物質的と精神的との兩面がある、物質上（衣食上）には不足はなくても、家に病人があつたり、葛藤が絶えなかつたりする者が多い、又職業に離れるとか、時ならぬ金の才覺をせねばならぬとか云ふ樣な打撃が起つて來る事もあるから平素注意して順の裏には逆が潛むものと心得、如何なる場合にも、調子に乘ることを愼んで居れば、驕る心の大體は抑へつける事が出來るものである。

▲不用意は逆境の始り

驕る平家は久しからず、人の境遇は運命にも由るけれど、大半は自分で作り成す者が多い、如何なる場合

にも凡て調子に乘るといふ事を嚴重に警戒して居れば、來年に見舞つて來る禍災も三四年の後まで猶豫して與れる事がある、即ちそれだけ順境の留まる時間を長くする譯である。人間の身體が、永い間無事に慣れると、ツイ健康の難有味を忘れて仕舞つて、いつとはなしに衞生の注意を怠るから、病氣は其虚に乘じて襲つて來るやうなもので、主婦が一家を取締るにしても、子女の養育法を怠り、經濟を亂雜にして交際を等閑にし、總て心に油斷と弛みを持つて來るといつの間にか困難な事が生じて來て大まごつきを成す事がある、故に始終注意を張つて居れば、暢氣な時がない代りには、一時に餘計な苦勞をせずとも濟むことになるのである。

然し人の一生には、兎角思ひ懸ぬ出來事が、豫想外の方面から湧いて來るものである、毎日豫定通りの仕事を規帳面にやつて心に張りを持つて居たならば、イザと云ふ場合に礑と當惑する樣な事はない、故に平生少し宛でも餘計の骨折りをして、幾分か餘裕を拵へておきさへすれば、何時敵が舞ひ込んで來ても、左程狼狽くことは無いが、其用意のない人は、一度不意の打擊に遭遇すると、忽ち支へ切れなくなり陣立を潰して了ふ。それが軈て逆境の序幕となるのである。

▲成ると爲るとの兩面

古人の所謂「禍の來る、其因や遠し」とは、畢竟人は無事な日に愼めとの訓戒に外ならぬのである。

凡て何事に由らず、「成るやうに爲る」のと、「爲るやうに爲る」のとは其處に大變な相違がある。早い話が器具を買ふにしても、夜店や緣日に列べてある出來合の安物は、職人が手當り次第に、成るやうにして拵へたのが多いから、價は廉くとも直ぐ役に立たなくなるけれども少し名のある職人に注文して、念入りに作らした物は、爲るやうにして拵へてあるから、容易に傷むことはない。此と同じ道理で、料理でも裁縫でも、唯だ腹さへ滿れば可い、袖丈けさへ合へば結構といふ樣な行り方では、所詮碌な物は出來ない。家政經濟の

とり方でも、這の成るやうと爲るやうとでは、雲泥の差が生じて來る、單に手足を動かすだけで、魂の要らぬ仕事なら器械でも間に合ふ譯であるが、爾うでない以上は、是非とも「爲す」とふ考へを以て行らなければならぬ、以上は境遇の順逆に就て家婦たるもの丶常々心掛くべき處ろであるが、更らに予は女子の日常訓として不斷の家事に對する心掛の一般を申しませう。

女子日常訓



食事の鹽梅、衣服の調度、育兒、交際、器具の整理、下婢の使用法に至るまで一切主婦の責任で、其繁雜と煩忙とは、大抵な仕事ではないが、扨實際に當つて此任務を完全に果さる丶婦人は幾人あらう。日常料理法の如きでも、心得のある細君だと、費用を多く懸けずに手際よく人の口に合ふものを調へるけれど、これが下女任せだと、萬事不經濟の上に食ふて見て、甘くない。良人が一日の勤務を了へて慰勞の盃を含む時に、よしや珍

味はなくとも、主婦の手料理とあれば、少々は鹽辛くとも快よく箸はつけられるものである、それだのに客が來たといつては仕出し屋へ驅けつける、一盞を催ふすといつては直ぐに割烹店を煩はすといふやうな事では、不經濟で恰で紙幣を嚙むと同じ事である。それぢやお客が滿足するかといへば、左程有難くはない、又家内中で團子やお萩を作るにしても、下婢の手つきが可笑いとか、妻君が餡を造るに大骨が勞たとかいふので、面白おかしく喫て興もあれ、錢で買ふたものは、旨いと不味いとは第二として、家庭に於ける尊き快樂が些もないのである。それに贈答品の如きでも、手製で旨しくはないが、お試し下さいと云へば、態とらしくなくて寔に體裁が可いけれど、購ふたのだと何だか諂ふことにもなるやうで不經濟の上に興味が薄い。そこでドンな高貴な身分柄の婦人でも、自ら襷をかけて洋食の一品も拵へて見れば、徒に深窓に垂籠めて無聊に苦んで居るよりは、どれほど趣味があるか解らない。

▲夫の恥は妻の恥

衣服は交際に大なる關係がある上に、衞生上又は着心にも影響するから、殊更に氣を利かせねばならぬ。主人の身裝を見て、妻の性行をトするに足るとは、如何さま尤な話で、良人が常に外へ出て、種々な人と交際するのに、襟垢のついた襦袢や汚れた手巾などを持つて居たならば、當人の不面目よりも、細君の不精加減を推量される、其樣な人に限つて、家事は自然不行屆である、即ち萬事に懶さく、長火鉢の傍に構へ込んで、煙草を吹き乍ら下婢に小言を並べてゐるのが多い、されば洗濯屋の手を藉りるのは不經濟なばかりでなく、一方には間に合はぬといふ不便がある。殊に白い物のみ多く用ゐる夏時なぞは、二日と置かずに洗濯しなければならぬ。それを面倒臭がつて、五日も六日も抛つておく、すると自然汗臭くもなれば着心も惡くなる、又人前へ出るには失禮である、旁々主婦の忠實であると否とは、往と歸り程の違ひを生じて來るのである。

▲遺傳と躾け

親の罪が子に報ふとは隨分殘酷な法則であるが、又兩親の德も子女に酬ふて來るものであるから、自分の善惡は自分一代の運命を支配するのみならず、遠く子孫々にまで影響を及ぼす。子供が怠けものになるのも、働き手になるのも、十中八九までは母の性質と躾方の如何に由るので、必ずしも孟母の三遷を引證するにも及ばぬ。假りに當今の名士と言はるゝほどの人々が如何なる母に養育せられたかを見たならば思ひ半ばに過ぎん。

▲言語と擧動

人間のすべての行爲を總括していへば、言語は擧動の二つに止まる、一は口の利き方で、一は身の處作であるが、わけて女はこの詞使ひを愼まねばならぬ。瞭那に美人でも下卑た言葉を使つたり、口數が多かつたりすると、忽ちお座が醒める譯だから、成べく無駄口を叩かぬ方が得策である。夫婦の間柄でも腹の立つた時、何かいふと直ぐ喧嘩になるが、默つて居ればそれで濟む。

又擧動に就ていへば、古人も「動作の靜淑なるは容貌の美しきにも優る」と云つた通り、婦人の美は顏よりも姿である。西洋人は、姿勢は精神を代表す、と申す位で、女子が起居振舞の荒々しいほど醜いものは無い。何も小笠原流の摺足眼八分といつた風な禮法をお奬めするのではないが、人と對話をするに懷手をしたり、くの字形に坐つたり、横に臥そべつたり、貧乏ゆるぎをしたりする事は、切に愼まねばならぬ。

▲姿勢と仕事

啻に人と相對する時に限らず、平生家で仕事をするに、姿勢が崩れて居つては、物事が捗取らぬ上に結果も亦た良くない。片膝立に坐つたり及腰になつたりするのは心の落着かぬ證據で、落着かなければ仕損じをする、例へば棚にある物を取らうとする場合に眞直に正面からすれば滅多に仕損はないが、手近だといつてそれを横から身を捩ち向けて探つたり、或は坐ながらにして手を伸ばしたりするから、ツと取落して壞すや

うな事になる。之はホンの一例に過ぎぬけれど、凡て何事を爲るにも、先づ整然と姿勢を正した後、取かゝる様にすれば、第一失敗がなくて、側から見ても美しい感じがする。又我邦女子の習慣として臺所でも立働いて居る時訪問客があると唐突取次に出て襷を半分外しかけて挨拶をする、それは可いとしても、其身姿が甚だ見苦しい、之は一層外すなら外す、懸けておくなら懸けて居るで差支へないから、中途半派の格好をしてお辭儀をするなどはよろしくない。

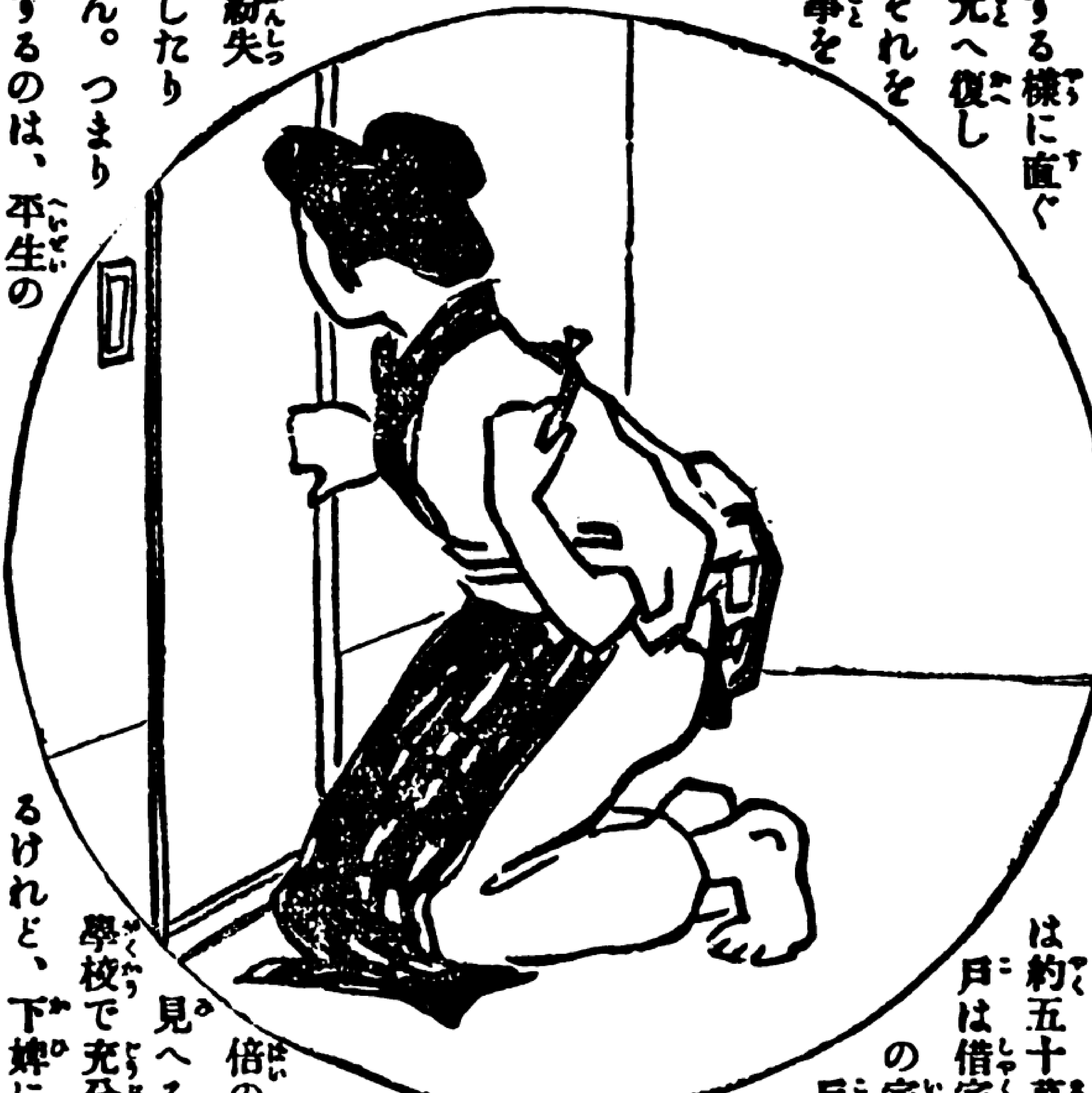
▲部屋は圓く掃け

昔から心は圓く持て、座敷は角に掃けと言つたものだが、私の考はそれと反對で、心は四角張つて居る方がよく、室内は圓く掃くべきものと定めておく。何故かと云へば、箒で壁際をガサ〳〵やつた日には、何時となく壁の裾が黒くなつて了ふから、隅々は掃かずに、其代りハタキでもつて充分清潔にしたが宜しい。又箒の使ひ方は、三尺も一掃きにしては、どうしても荒つぽすぎて、勢ひが強い爲に、塵埃が上の方へ飛廻るだけで、暫くすると復た落ちて來るから、一掃を一尺五寸乃至二尺位に止め、箒の先を成べく跳上げない工風をして、室内の埃を出來るだけ外へ運び出す様にしなければならぬ。で完全な掃除法は、唯だ疊や障子を拂ふばかりでなく、天井と下と四方の壁柱に至るまで悉く淸めるので、之を六方と稱する、其順序は最初部屋にある置物を他に移し、障子を開放して、第一に上をはたき、次に鴨居、柱、壁、障子といふ風にハタキをかけて、爾る後に疊を掃くのである。

▲眞行草の掃除法

文字の書方に、眞書と行書と草書と、恁う三通りあるが如く、器具の淨め方にも此三法を應用される。一寸した例が茶碗を洗ふにしても、内面だけ洗ふのは所謂草書で、内面と外側とを淸めるのは行書、それから内外は勿論、糸尻の底まで充分に洗滌するのが眞書としてある。で極く忙がしい時なら草書的にして止めて置くのも已むを得ないが、爾うでない限りは可成眞書的に叮寧を旨とした方が宜からうと思はれる。

次に器物の整理法であるが、之は出入とも置所を一定しておく事は無論として、一端使用済みの物は恰度圖書館で本を始末する樣に直ぐ再び出すにしても、一々元へ復しておく方が便利である。それを實行するには、一日の仕事を了つた時主婦が部屋々々を一遍ぐるりと見廻して若し置くべからざる所に一つでも豫定外の物があつたら、速に其物の置場所へ片附ける事にせねばならぬと謂ふ習慣をつけておくと、滅多に物が紛失したり、遺忘れたり破損したりするやうな事はありません。つまり物品が損たり紛失したりするのは、平生の置場が一定しないからの事である。



▲主婦は教師、女中は生徒

内務省の調査によると、目下東京市の戸數は約五十萬戸あつて、其内三十五萬戸は借家住居の人達で、自己所有の家を持つて居るのは十五萬戸内外との事である。仮りに自分家屋の家庭に、平均一人づゝの女中を使用するものと見做せば東京市だけで十五萬人の下婢が居る譯である、之を現在女學校生の數に比較すると、確に六七倍の多數を占めて居るものと見へる。恒産ある家の娘なら、學校で充分の教育を受けるとも出來るけれど、下婢になる位の者は其餘裕がないから、ツマリ雇はれた家庭が學校のやうなものであ

ると見なければならぬ。して見ると雇主は一種の教師で、彼等に善良なる感化を與へて社會へ出すのと、不規律なる習慣をつけて出すのとでは、十五萬人といふ多數の上から積ると社會にドレ程の利害關係があるか解りません。世間では女子教育云々と喧しく申すけれど、未だ此の下婢の薫陶に就て、深く注意する人は少いやうであるが苟しくも中流以上の生活をして人を使ふほどの資産ある人ならばこの雇人に對する場合には自ら厳正なる教師になつた位の心意でありたい事を希望します。されば一言一行を愼むは勿論、自分の子女を躾けると同じ程の親切氣を以てこの下女を仕立て、女一人前の者にしてやらなければ、社會は決して幸福なる進歩しないものと考へます。

▲下婢使用の十ケ條

我家では前後二十年の間に、二十三人の女中を使つて見ましたが、最初一二ケ月の間は、ドウしても家風に慣れませんから、思ふ様には行きませんでしたけれど、半歳位する中には、全然家の氣風も知れて來るから、可なり強情な女でも徐々柔順になつて參ります、と云ふのも此方の手加減一つで、諺にも「人を使用せんとする者は、先づ自ら使はるべし」とある通り、僕婢を心服させるのには、主人の方で種々の氣兼や心くばりをしなければならぬ。給金を遣つて使ふのだから命令するのは當然だ位の考では到底雇人の居附くものではありません、故に主婦は教師の格であると共に又仁者たるの慈愛心が必要で、寛大なる度量、推察、皆なこれから割出される、私の家では永年下婢を使つた實驗に照し、主婦の心得として凡そ左の條項を定めておきます。

(一)雇入れの當初、豫め家風を云聞せる事。
(二)下婢は家庭の經營上、必要なる副機關なれば決して之を輕視せぬ事。
(三)大切なる人の子を預かつた心組にて、親切を旨とする事。
(四)勞力に對する一定の休養時間を與ふる事。
(五)一人前の人間に躾けて社會へ出してやる様に心掛

ける事。

(六)當てこすりや陰口を利かず、云ふべき事あらば本人に對して明白に訓誡すべき事。

(七)給金以外の物を與ふるには、下婢の機嫌あしき時にすべからざる事。

(八)一定の責任を負はせ、且つ時間を嚴守せしむる事。

(九)何事を命ずるにも、言葉使ひに注意し日常の擧動は主婦先づ模範を示す事。

(十)一の仕事を爲し居る場合には、重ねて他の事を命せぬやうにする事。

凡そこの十ヶ條で盡してあると思はれるが、尚ほ人々の性質にも因る事だから、其邊は臨機應變の處置を取り、其人の肉體のみを使ふものと思はずに、先づ心を使ふ工風が肝腎であります。

不足を忍ぶの心掛

家内の道具は始終要る物は成可く事缺かぬ樣に用意して入用の度數の割合に少いものは其家の都合によりて追々と用意する方がよろしいと思ひます、二年に一度とか一年に一度とか、或は年に二三度位より要らないものは、普通一般の家庭では用意するに及ばぬと考へます、そんな物を入用として一々調べた分には使はぬ品物ばかり殖へて買ふ時の不經濟ばかりでなく場所ふさげであります、小遣といふ無責任の名の下に、金錢を支出する事はまた大いなる不經濟である、私は家内を貰ふて既に二十年にもなりますが未だ一度も小遣にといふて少しの金をも渡した事はありません、この家の財產は私とお前のものであるから、何なりと入用なものは心に任せて買ふがよい、併し其入用か入用でないかといふ事は充分に責任を以て考へて買ひたい、眞に入用なものならば何程でも決して惜むに足らぬが、無用の物を買ふ爲めに聊かなりとも支拂ふべき金錢は持たないからだと申して居ります、疊みかけて物を買ふのは矢張不經濟です、例令ば菓子のやうな物でも明日はもう高くなるからといふて今日早速買つて置くのと上等菓子の切れ間に二三日最中でも用ゐて置いて其後に更に上等菓子を買ふとは、菓子の澤山に要る家などては一ヶ月の中にでも餘程の差違があります、疊みかけて物を買ふのと例へ少しでも間を置いて買ふのとは長い間には大分の差があるのです、故に收入がいくらあつても支出の方法に注意しないと決して貯蓄は出來るものではありませぬ。(佐治氏家政談片)

容儀と處世

人は外面より親づいて內部に及ぼすものなれば容貌の正不正によつて處世上に至大の損得ありと知るべし、元より容貌といへば只顏ばかりにあらず。頭上から足趾までを意味するなり、西洋の諺にも自己を尊敬せざる人は他人にも又尊敬せられざるべしとあり、されば己れの容貌を醜くからざる樣にするはまづ自己の品位を尊ぶ所以なり、容貌は精神の代表とも言ふべきものにしてこれに注意せざる人は全く禮義を知らぬ不精者にして、只に他人に對して禮を失するのみならず、大に不快の感を與ふるものなり、現今の如く社交の頻繁なる時代に於て優美の特性を賦與されたる女子が其容貌體を構はぬ者は自然と人に擯斥されて果ては其人と交際するを恥とする如き感を他人に與ふるに至る、されば一般に各其容貌を美くしくして以て成可く人に美感を與ふる樣するを女子處世の方便となす。

▲ハイカラを眞似る勿れ
▲あまり際立ちて異樣に粧飾するなかれ
▲厚化粧を施こすなかれ
▲美容術に凝るなかれ
▲身體は常に清潔にせよ
▲入浴は一週間に二度位を適度とす
▲身體の臭氣（腋臭髮の臭みのごとき）に注意して常に清淨にせよ
▲化粧は淡化粧が最も見よし
▲香水、香油、香脂（花いかだのごとき）の類を濫用するなかれ

（注意）化粧はまづ色白の人は別に白粉の必要はなきも只少しばかりヒンク（桃色）の化粧品を極薄くして櫻色に兩頰をするがよし、併し色黑の方は少しの白粉を用ひ其上を櫻色にして決して唇に紅を施すなかれ、要するに化粧の極意は目立ざる樣にして天然の色か化粧の色かを疑はしめるほどの度合が最上なり。

日常訓

▲品性修養の機會

女子が一家を經營して行くには固より相當の教育がなければならぬが、然し學問は決してそれを振廻はす爲のものでなく、只品性を造る爲の道具にすぎない、故に尊いものは品性で學問其物に貴い價のあるものではないのである。何をするにも單に道具を集めるだけなら、雜作もないことであるが、イザ實際の仕事にかかつて見ると、却々さう巧くは行くものでない、書畫ならば、筆、紙、墨等の四五品もあれば、先づ一式の材料は揃つたといふものだが、その書をかき畫をかくには、扨て一通りや二通りの修行の苦みでは行かない。又挿花でもそう點茶でもそう、裁縫でも料理でも、何でもその通り、金さへあれば品物や道具は何時でも立派に整へられるけれど、併し庖丁や爼や、野菜や肉を寄せ集めたところで、それで直ぐに料理が出來るものではない、それと同じく針や絲や反物をかりあつめたからとて、それで裁縫が出來上るわけのものではあるまい道具は道具、藝は藝で自然別物である。

されば今日女子が學校へ這入つて語學なり、修身なり家政なり、其他一切の學科を如何によく覺えたからとても、それ等は只智識を開發するところの道具たるに過ぎないので、決して學問其物が身の箔となるのではない、這個の意味を取違へてもう學校も卒業した、女一と通りの學問があるなぞと自慢を出しては飛でもない大間違である。其れは恰も筆と紙とを整へて能書家になつたと思つたり、針や糸を備へて一廉の裁縫上手になり濟ましたと同じ譯である。一定の學資と歳月とを費して、規定の課目を修め、一つの學校を卒業するくらゐは、天稟の白痴でさいなかつた以上は何人にでも出來る業であつて、殊更矜るべき事ではないのである。要するに教育の目的は、學問といふ機械を使用して、心の奧に潛むところの立派な德の光を發揮するにあるので、女子ならば一家の主婦として、恥かしから

ぬ品位を養ひ、良人を扶け、子女を躾け不遇に處して憂いず、災厄に遭ふて恐れず、困難に處して驚かず、屈托せず、着々一家を處置して行き而かもよく人と交つて敬愛せられ女子本分の天性を發揮し其の大なる人格を作るのが、即ち其大眼目である。

▲職分の爭ひ

今更男女の權力がドウの恁うのと比較するのは、甚だ古めかしい事であるが、併し兩性の孰れが偉いかとの疑問を抱いて居られる女性も鮮なからぬさうであるから、一念の爲に敢て一言する。元來物を比べるには類と性質とが同じでなければならぬ。例へば紅梅と桃とは何方の色が濃いとか、靑と赤とを並べて何の色を好むか粟と米とはどちらがうまいとか謂ふ事は出來るけれど、爾うでなく酒と醬油とは何れが優るとか、茶と莨とはドチラが大切だとか申すやうな全然性質の違つた物は、最初から比較にはならない。男女間の權力や職分の比べ合も之と同じ理由で、各々異つた天賦の特性があるのだから、兩性を對照して、何れか偉いとも劣るとも斷言することが出來ぬわけである。

こゝに一寸むかし話のやうな比喩を申しませう、東京の場末に貧しい活計を立てゝ居る夫婦づれがあつて亭主の商賣は紙屑買であるが、似た者夫婦で、孰らも揃つた遊び好であつた。一日不圖したことから喧嘩の花が咲いて、果ては夫が妻を罵り、汝のやうな懶け者は何處へ行つたからつて喰はして吳れるものは無いけれど、俺だから我慢して連れ添つてやるのだと謂ふ鹽梅で互に欠點の棚卸しをして、一時間も爭ふて居たが、それぢや一つ明日から仕事を取交換して見やうといふので納りが着いた。

翌日妻は其不似合な肩に屑籠を擔いで出掛けて行く亭主は宅で米を研ぎ飯を炊きにかゝつたが、水加減が判らぬので生米を嚙むやうなのが出來た上に、野菜を剗む時誤つて指を切り落した。といふ不手廻はし、そうかと思ふと妻も又負けぬ氣で出て見たものゝ、樂に見へてもなか〳〵商賣には呼吸のあるもので一日汗水

流しても夫の半分も買へぬ、そこで喘々いひ乍ら歸つて來たが、身體はまるで打たれたやうに疲れてしまつた處へ、亭主が指を切つたと聞いて、膽を潰し、到頭我を折つて、謝まれば、一方も亦た太息をついて炊事の困難な由を語る、それからは互に本分を守り、强がり沙汰をせなんだとの話である。

實に餅は餅屋酒は酒屋で、モウ判然と男女の職務は、天然的に分れて居るのである。

▲家庭と植物

男女の天性が異ふと共に、其違つた特長を互に繋ぎ合せて、完全な物を造らねばならぬこれが即ち一家和合の根元である。庭前の草木を見よ、根あり、幹あり、葉あり、花ありして、何れも異つた作用をなし異つた天分を發揮するのであるが、而も各々都合よく調和して一本の生命を保つて居るのである。根は力の及ぶ限り其手を擴げて、土の中から營養分を吸收する、けれどもそれは自分獨りを霑す爲めのものではない、草木全體を養ふ爲のものである。又葉が絶えず空氣を吸ふのも、花が立派に化粧をして人の目を娛ばすのも、實が熟して種を殘すのも、凡て自己のみを利する業ではなく、相互に協力して一莖の草一本の木を完からしめるのである。

人の家庭もこれと同じ道理で、良人は根と幹との役目をする、妻は葉と花との役目、そして子女は實となつて、更に後の種を貽すといふ工合にせねばならぬ。然れば妻子を奴隷の如くコキ使ふ夫、良人を蔑にする妻、年寄の親達を厄介視する子女、此等の者が、若し一人でも交つて居つたならば、其家庭は恰も美しい草木に害虫がついた樣に、遠からず朽ちるか枯れるかの二途を免れない。

▲社交の秘訣

何人でも全く猜疑心のない者は稀であるが就中婦人は一層此心が深い、其爲に餘計な神經を勞し、始終齷齪として八方へ氣を配つて、心に寸分の餘裕のない人

がある。斯樣な人の爲めに一寸こゝに私しの考へた修養法を申上ませう曾てわたくしが旅をした時、伴になつた一人の老人がある、その老人は大の要愼家であつたと見へて汽車の中では申すに及ばず、宿屋についてからも、周圍の人に大變氣を置いて居る。それは即ち人を見れば泥棒と思へとの諺を眞正直に服膺して居るものと見へて、何でも人はすべて自分の懷中なり、所有の荷物なりを狙つて居るものだと心得て居るらしい。されば停車場で客が這入れば、それに要愼をする、又停車場へついて、客が下りればそれにも要愼をする、よい景色のところや、名所舊蹟だといつても却々落着いてそれを見物する事をしない、只もう周圍の人に氣を配るばかりであつた、そして自分のみならず、伴れの私共のまで同樣の注意を與へて呉れる、それがなかなかうるさい、そこで私は言つた、貴老の御好意は實に有難い、併し私は私相當の考を持つて居ますから敢て御注意には及ばぬ、第一貴老のやうにそう〳〵人にばかり要愼して居ては、汽車の中でも旅宿についても窮屈で、到底安んじて旅をする事は出來ない、私の主義は貴老とは少々違ひますそれは諺にもある通り、「猫を逐ふよりはまづその皿を退けよ」といふのであります、他人を疑ふよりもまづ自分で懷中物をちやんと仕舞ひ込み、荷物を取片附けて置いて、其上は他人にも氣をゆるして面白おかしく語り合ひながら行くのが最も安心な且つ賢い方法であらうと思ひます。

と、斯樣に申述べましたが、老人は容易に其說には服しないで矢張り神經を過敏にして要愼をつゞけて居りました、されば婦人が社交上に於て猥りに人を信ずるのもよろしくないが、去りとて彼の老人のやうに始終疑ひ通しであるのは、猶更苦痛である。「人を疑ふは己が心に針を植るに等し」と古人の說かれた通り、氣樂に此世を過さうとするには、須らくまづ此針を取去らねばならぬこの針を取去つて先づ他人から虐に乘せられぬやうに自己の意志を鞏固にして置いてそれから愉快に程よく交際て行くのが宜しい。徒らに人の弱點や惡意の有無を詮索した處で、結局我が氣を傷めるばかり

で、利するところは露ほども無い。

▲子女の躾け方

主婦としての任務はいろ〳〵ある中に、最も六ケ敷いのは子女の教育である。それに就て世間には往々、予盾した躾方をして居る母親が少くない。一例を擧げて見ると不斷虚言を吐いてはならぬ、有の儘に話せと子供に敎へておき乍ら、時によつては殊更虚僞を搆へよと强ゆるやうな塲合がある。

わたくしの知合の家で、今年十歳になる娘と七歳になる息子とがある、母親は平常此二人に只管人は正直でなければならぬと敎へてるのである。一日近親の婦人が手製の團子を携へて見舞に來たので、疎からぬ仲とて直に子供を呼んでそれを喫べさせた。ところが一口食ふや否や子供は顔をしがめて「此團子は鹽辛いなア」と言ひつゝ吐き出した。娘も又「私もさう思ふわ」とこれは流石に吐かないで飮みこんだが、さア母親は氣が氣でない、一方は客と娘の背に手を廻してツチリ上げる、恐ろしい眼をして子供を白眼んで、其塲を繕らうたのである。考へて見ると、此塲合子供をつめつたり睨めつけたりするのは、虚言をつけといふ事を痛切に强ゆるのと同じ譯であツて僞らざれとの毎々の敎訓を、一朝にして破壞するやうなものであるどうも世間にはこんな事で子供の躾を破壞する塲合が多いのである、これは實に母親たるものゝ最も注意を要する處で、恁那時には大慨先方の調理加減も知れて居らうから、慫じ心易だてに、態々子女を呼んで客前に喫べさせずとも可いわけである。設令折惡くこんな事に出會はしても、そこは叱る代りに何とか取繕ふ方法を考へたが宜しい。かへす〴〵も子供に虚僞を言ってはならぬといふ主義を貫かねばならぬ。

▲清潔の心掛

歐米では「臺所を一見すれば主婦の氣質が知れる」といふ程に淸潔法が重んせられてあるが、如何さま家の中が奇麗で片づいて居ると、第一心持良いばかり

でなく、側から見ても氣味がよくて、主人の精神まで美しく思はれる、之と反對に主婦の無精なのは、單り本人のみでなく、家族全體の者が汚穢くて、卑しい樣に想像される。そこで此掃除の方法に就ては、一種の秘訣があつて、唯だ目先や手近の外面ばかり綺麗にするのは、所謂臭い物に蓋をする流儀で、眞の清潔とは申されぬから、先づ最も不潔な塲所に注意するのが肝腎である。然うすれば手近な所は自然で手が運んで汚くはしておけぬ習慣がつくものである。

衣食住の中、住居の方から云へば、居間や座敷は後にして、第一に便所の掃除を怠らぬことで、一寸他家へ行つた時、厠を借りても其處が淸淨にしてあると、何となく氣持よく、此通り家の隅々まで注意が行屆いて居るものと想はれるが、それが反對に不潔だと、外面は如何に美くしくとも、隱れた塲所が恁那ではと、萬事の影日向が想ひやられる。次に食事で申さば、御馳走の品を撰んだり、器具を飾つたりするとは後廻しとしても、先づ料理の製造元たる臺所を淸潔にせねばならぬ。招かれた家の、お勝手の綺麗なところを見て、饗應に遇ふ時は、正味の如何に拘らず、美味しく安心して頂かれるが、爾うでなくて厨室の棚の隅に鼠の糞や、魚の骨や、蘿蔔の尻尾が散ばつてるのを見れば、ドンナ珍味佳肴を出されても、此中に若しやとの懸念が生じて、切角の食慾がなくなつて了ふ譯である。

又衣服は、羽織や帶よりも、襯衣、足袋、褌など、直接肌に着くる物を美しくするのが本統で、新らしい足袋やシャツを纏ふた人を見ると、それが男子なら、其細君の肅然とした風采までが想像されて來る。畢竟表面よりも隱れた處に多大の注意を拂ふのが。淸潔法の本義である。(吳　江　子)

○日本の品行と云ふ事は範圍甚だ狹し、只だ酒を飲み、色を漁り、喧嘩を云ふが如き事のみを以て不品行となす、去れど歐洲にては人の前にて頭の雲脂を掻く事さへ不品行となり居れり。

甘書苦語

母より新婚せる娘へ

紫陽花

大路は人の行き交ひ繁くて、折節の小雨に道の程も甚う泥濘み居り候ひつらんを、昨日は能うこそ〳〵

御夫婦して

の御來訪嬉しく候。折も折とて、阿父様は例の書畫會に在すとて生憎の御不在、折惡しや況して、一昨日は日曜の休日を掛けて、三田の伯父様許お遊びに參り居り候ひし壽美子の、彼の終異の一足違ひに歸宅つて來て、其れは〳〵如何ばかり殘念がり候事やらむ。何時もならば飛び立つ程に笑み翻れて嬉しがり候筈なる、お土産のリボンは薄紅梅艶に、緣は別きて巾廣美しきを瞥見と見遣り候ひしばかり。假もう〳〵お姉様には、隨分永い〳〵事お目に掛から無い様な氣がしてよと、何とかしけん常にも似ず、彼の憎くらしい程快濶のお轉婆が、只管〳〵悄氣返り居り候ひしには、私も思はずほろりとさせられ候。されば其方此方月も出で候ふて、夏は殊更雨上りの夕空風情めき候へど、例の端居に虫の音賞で給ふでもなく、不圖思ひ出した樣に吐息大きう遊ばしながら、やれ〳〵久し振りで娘の顔が見度かつたに等と、阿父様迄が同じ樣な心細い事御云ひ出でなされて、寐もせぬ夜すがら蚊帳の廣さを、終我れ知らず涙の溢れては、何とやら〳〵昨晩は泣かされ申し候。

所詮女子は定まる

一生の運命

我が腹痛めて我が手で育てし親なればこそ子なればこそ、人並勝れて可い運持ちしと、迂詐にもお上手にも讃めて貰ひ度さには、斯う遣る方も無き離別の悲しみにも忍び候ぞかし、世には引き越し女房とて足る事を知る身は、唯行末を菅の根の細う長かれとばかり、壺り蕎麥流石に景氣能うざつと祝ひ納めて、破れ屏風に

更紗蒲團のよし巾狹しともあれ、見ん事草履取りの關白とはなりし。簞笥七竿長持八竿、十荷十五荷の萠黃油單嚴しくとも、緋は褪せ易し裲襠裏に秋風や冷からん、千草八千草秋草模樣の裾裏にも霜はうらぶれて、同じ哀れさは野分の朝に殘り候ひなんものぞ。父樣ひよんな失敗に、打ち續し商業上の不首尾より思ふ半分の仕度もして遣れず、嘸かし其方とて本意無う肩身狹からんが、主婦たる資格は金指輪にもあらじ、ルビー入り帶止めにてもあるまじ、見宜うとも眉の美しきばかりが女子のほこりにもなるまじ繪畫音樂茶の湯活け花、君子は多能なるを却つて恥づとさへ云へば、偖其の塲濁しの其方が手前に料理裁縫よりも、我が身一つに縫目正して、酢きに甘きに辛きは辛う、浮世の鹽梅善うせんこそ女子は第一の責任と屹度御覺見あらまほしう候。

何も今更申すにては無けれど、別けて姑御樣には優しう眞心もて御勞り遊ばされ度く、苟且の立居にも構へて〳〵御油斷ある可からす候。兎角世間に、

嫁姑の間柄

の面白からぬが之有り候は、偏に姑の邪推執拗若しくは誤解嫉妬等よりにと樣に申し候人も候へど、大體未だ世慣れぬ嫁が遠慮の過ぎて、餘りに他人行儀に渡り候せいよりにては無きか。云はゞ姑樣とて其方から云へば、三千世界一人の所天が親御樣なり母上樣なり。一年三百六十五日、正眞血を分け合ひし親子兄弟の仲にあつてすらも、終ぞ善い事ばつかりあると云ふでも無ければ、然う〳〵目に餘る我が儘は默つても置は得させられはせじ、其方からして水臭い他人氣さらりとお捨てなされて、其の頃隨分私共へはお甘への樣に、可愛ゆき駄々の時には捏ねて御覽じるも惡くはあるまじ。人の情は鏡に映る面形姿の、笑まば笑みなん泣かば泣きなん、園に植ゑても紅は隱れなし、秘めども受けれ山彥の聲は物の響に應じて、己れに出でしは必ず己れに歸る、返す〳〵も御愼しみなさる可く候。

雪樣とて、至つて容色可しの私に一人のお友達之れ有り候ひし。

絹友禪の振袖

可愛ゆうお嫁入りなされて足掛け六年、月にも花にも姑様ならではとの其れは〳〵御從順らしさ、お病みなされてお床に就いて二十一は秋の末つ方を、桐の落葉に風立ち騷ぐ夕暮れ或る夜、知死期の觀念いと切めて御美しう、阿姑様の御膝に抱かれ給ひながら逝きなされしと聞けど、何故に〳〵私が代れ無かつたらうと死骸に取り着いての目も當てられぬ姑御の御愁傷には、日頃お嫁様のお優しさも偲ばれて、悲しい中にも自ら人の衿を正さしめしと申す御事に御座候。聞けば牛乳の大嫌ひな女なりしかど、姑様御手づから沸騰して下されしと云へば、勿體無やとばかり病む身に押し戴きて、滴も餘さず綺麗にお食りなされしとやら。舅様の半分にも若き女子の肖り給はゞ、世に嫁姑の角衝き合ひは痕斷ちなんぞと、お死亡りなされし自分の阿母様の、常々お口癖の様にしみ〴〵有仰つては居らせられ候。如何思召され候や。其の邊をさ〳〵御如才のある筈も在すまじければ、善惡の御判斷は、に其方にお任せ申す可く候。



されば文成、彼の仙女に契りしと云ふ言の葉は存じ候はねど、實に心し給ふ可きは、

夫婦の情合

に在し候。眞實や百年の夫婦はありとも終生の情人は無きものにとやら。移れば變る花の色香の、餘りに濃艶〱しくば人の見飽きんも道理、唯松の緑の色深うてこそ、四時見飽かぬ眺めは候へ。

打ち見た處ねつから別に氣の置けぬらしい、お優し相な、旦那樣は評判の淡泊した快活な人と申す御事なれば、まあ何方道甚い始末のしよい方とは存じ候へ共、根が一體に男方は氣隨氣儘の野方圖な者に候へば、些つと位今の中は物珍しさに甘うして賜はり候へばとて、譯も無く其方が善い氣になつて圖に乘つたら、必ず御後悔之れ有る可く候。其れは何も赤の他人と云ふではなし、盡きぬ過世の緣在せばこそ、所天とも呼び妻とも呼ばれ候仲ぞ。夫婦別あり、旦那樣ビール煽り給はゞ、搗き拔き團子に頰脹らし給はんもよけれど、片膝立ちの四疊半に居据りは餘りに色氣無うて拙し見辛し。親とて此の上の立ち入つた處は聊か申し難くけれど、十八と云へばもう滿更の初心でも居られじ。思ひ通りにならぬとては、隨分拗ねて泣いて私共をお困らしの樣な今迄の具合には迚も〱行き申すまじく候。

丸髷は定めて昨日がお始めてなりしならんが、思つたよりは髷の恰好も人品に出來て、心持ち

肉厚の大雀形

取り別け私の氣に入り候。お家では旦那樣始め皆樣が大の〱ハイカラ好きと云へば、廂髮とて强ち惡いと申すでは無けれど、丸髷等のすつきりと衿足淸う見せて、白水晶の中指しに手柄は疋田の緋にもあれ紅にもあれ、横髮付の雲の樣にふうわりと櫛の目粗う入れし髮結が手際も、奧樣は何處迄も奧樣らしう粹に高尙に見えて、外ながらにも何とやら離れ難なき心地のせらるゝには如くべうも候はずと覺え候。況して湯上りは練白粉の香氣淡く化粧ひ候も、嫁しては何より所天への妻が嗜みとこそ聞け。事に馴れて打ちある樣は更にも云はず、更けては夜深う凝亂れ髮の枕にも心し給へとや、品形こそ生れつきならめ、洗ひ髮の艶なるは況して心憎し、けれど女子は黑髮の目出度からんぞよき

と、誰れやら昔の物の本にも候とやら。去るを廂髪等と云ふらん樣に、思ひ切つて大前髪の更に愼まし氣も無く、風吹けば秋荒涼の後れ毛幾筋、頬にも額にも散り掛かり候等は、什麼贔屓目に見ても餘りぞつとは致し申さず候。先日も玉木の奥樣直してのお談しに、奥樣の始めて姙娠遊ばされし丁度其の六月目とか云ふに、或る日不圖錢湯に在せし事の候ひしとやら。塲所柄とて、

神田は表神保町

彼のまあお若さでと、三助に脊中流させ居りし中年増の、密そ／＼と陰言利きしを耳にせしとやらし給はねとやら。我れながら振り歸る大姿見に、存分氣取つた8峯の如何にも女學生めくを御覽じまして、思はずさつと頬紅う染め給ひし其の時から、もう／＼廂髪と云つたら親の仇敵程大嫌ひになりましたとの仰せ。夏は夕暮れ、宵闇の逍遥に日比谷は知らず上野は知らず、時には旦那樣縁日へのお買物にお供もせねばなるまじ。其の邊の御斟酌決して御無用にては有之るまじく候。



申し忘れ候。今日金澤の妹より來書あり。其方の結婚に就いて、呉れ／＼喜び呉れ候序の端に、妹の友達にて其方が高等女學校一年生頃の先生なりし遠山何子樣とか仰せらるゝ方の、此の度愈々某博士と婚約成り立たせられ候ひし由。八歳を頭に先妻の兒供の三人迄ある仲を去りとは強い御奮發と妹の噂ひ候處、私も献身的に一人の人の犧牲になる覺悟でと、氣焔萬丈當る可からざるもの候ひしとか。博士てふ金看板

と結婚し度かつたのなら正直にし度かつたでよし、何も献身の犧牲のと吝な負け惜しみ仰せられでもと、例の毒舌の妹は可笑しがつて申し越し候。何とやら私共の樣な者には一向分り申さず候へ共、斯くて唯教育ある女の可惜思ひ上り給ふが笑止に候。

此の上は口說う申し上げじ。樂しみは夕顔棚の下涼み、風常樂の夢も破らで、春光和風御一家にあまねからんを切に祈り候。

婦人の早老

多數の日本婦人は未だ早老の弊を免れざることゝ信ず、之れは今日まで婦人に公共慈善的の働きが十分發達し居らず、其唯一の義務即ち子供の教育を了れば、智力を働かす高尚善良なる仕事なき爲、自然心情の怠惰を來し、早く老衰するものならん。左れば壯年時代より心懸け、永く人生を樂み、徒らに生存するを以て足れりとせず、幾分にても世を益し、人を益せんと云ふ、高尚善良なる目的に智力を働かせ、心情の怠惰を防ぎ、早老の弊に陥らざることを勉むべし。



男子讀むべからざるの書

魔翁口述

▲愛情を濫費する勿れ

凡そ物多ければ、其の價を減ずとは、經濟學の原則で金剛石の値の高いのも、全く其の物が少いからで、是れが若し、石や瓦のやうに、其處らにゴロ／＼して居たならば、其の價は零となるであらう、其通り男女間の愛情なども、之を節制すると、濫費するとで、其價値言葉を換へて云へば、其の難有味は、非常の相違が出て來る、考へて見ても分ることだが、二六時中鯛の刺身ばかり喰べて居る者は、決して夫れを甘いと思はぬ、夫れと同じことで、自分の細君から、明けるから暮れるまで、優しい言葉や、甘たるい言葉ばかり聽かせられて居る良人は、細君の愛情に富める、言葉や

行爲を、左程有り難いとは思はぬ者である、何も無理に冷淡に、良人に仕向けろと云ふわけでは、決して無いが、愛情の濫費と云ふことは、一番愼まねばならぬことである、殊に夫婦は一生の伴侶であるから、愛情の消費を餘程、經濟的にせぬと、途中で資本無しになる憂ひがある故に我輩は、吾が敬愛する妹姉諸君に向つて、愛情を消費すること、猶ほ經濟家の金錢に於けるが如く實務家の時間に於ける如くならんことを望むのである。

△良人の心を讀むべし

愛情の消費は、最も經濟的に、且つ有功にするには常に良人の心を讀む術を研究するが好い、心を讀むと云つても、何も格別秘訣がある譯ではないが、常に良人の心理狀態に氣をつけて、其の時々によりて、良人の腹の虫の居所を、直覺するのである、さうして良人の氣色を見て、良人が喜んで自分の捧ぐる愛を受け納れることの出來ぬやうな、虫の居所の惡い場合には、愛情を捧げても、無駄であ

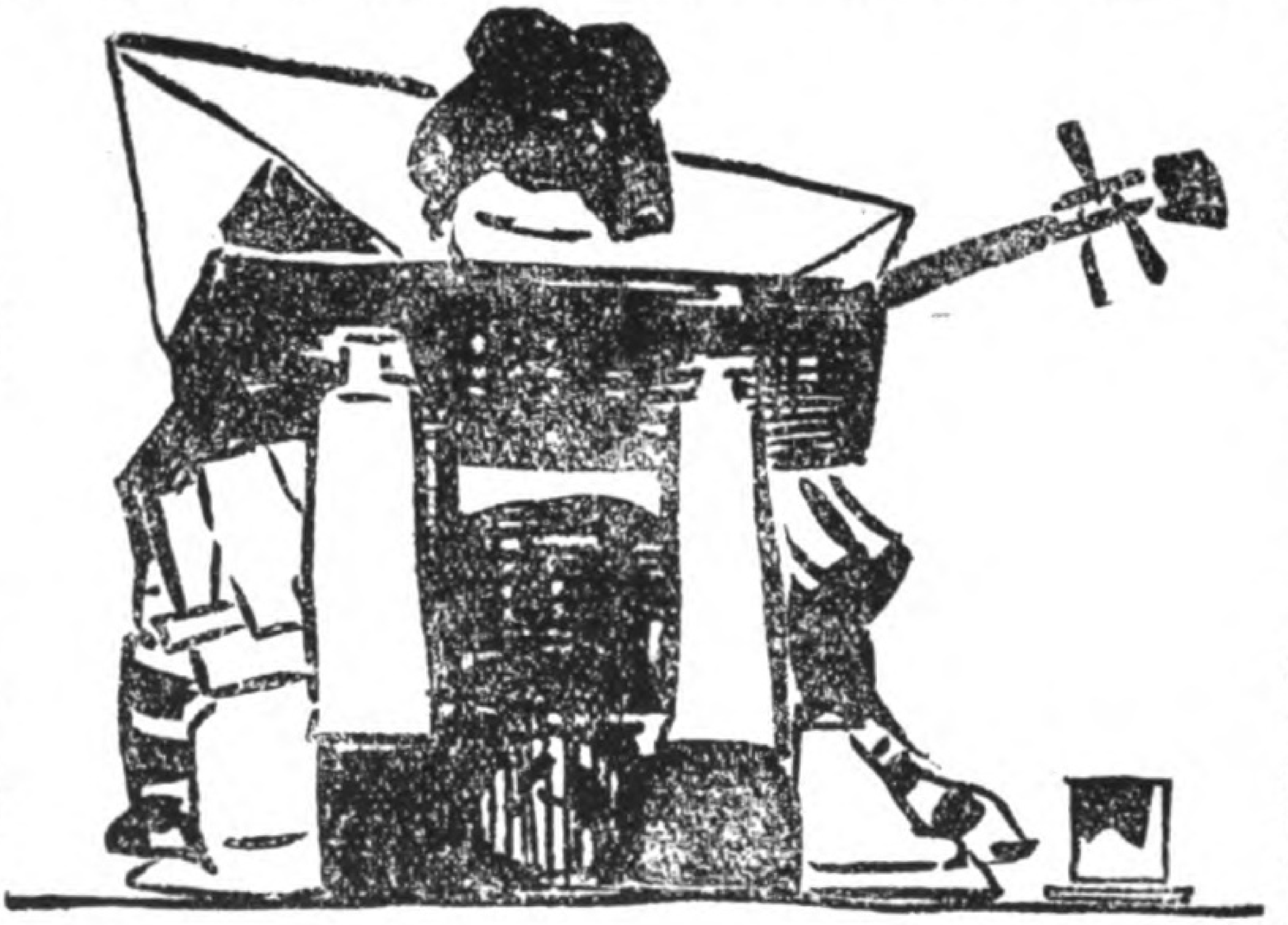


るから、さう云ふ場合に捧げた、愛情はつまり前述の濫費になるのである、總じて良人が、一番我が妻の愛情を、身にしみ〴〵と、難有く感ずるのは、何か非常の心配事に惱まされて居る場合で、斯る場合に捧げられた妻の優しき一言と云ふ物は、良人の身に取りて、百萬の援兵を得たよりも、嬉しく心強く感ずるものであるから、妻たる者は、かう云ふ好機會を逃してはならぬ、序でに、妻たる者の注意せねばならぬことは、良人が機嫌の惡しき時、若しくは、病氣にでもなつた場合には、決して良人の氣に障るやうな問題を持ち出さぬことである、斯る場合に處する妻は、良人の機嫌の直るまで、若しくは、良人の病氣の全快するまで、待つだけの辛棒がなければならぬ。今一つは、妻に對する、良人の愛情を涵養する方法である、丁度人間の食慾は、巧妙なる料理人の庖丁加減で、旺盛となるやうなもので、妻に對する良人の愛情は、全く妻の匙加減に依るのである、如何なる上等の料理も始終同じものでは誰れも厭きが來るので、絶えず献立を立替へる必要があるやうに、良人に對する妻の献立も良人の心理狀態の變化と共に、常に目先きを代へる必要がある若し此の手加減を誤るならば、汝の良人は好きの物を喰ふべく直ちに料理屋飲食店へ出で行くものと覺悟せなければならぬ。

▲戀と結婚の反對したる意義

西洋の諺に戀愛は神の發明したるものにして、結婚は惡魔の發明したるものなりと云ふとがある、是れはつまり化學作用に於ける熱の如く、發作した、戀愛の甘き蜜に醉ひ合つて靑春の男女が愈よ多年の望みを達して一緒に世帶を持つて見ると、事々物々悉く自分の理想と喰ひ違つて、厭なことばかり多く、終には自分の家庭を自分で呪ふやうになると云ふことを諷刺したものである、少しく矯激の嫌ひはあるが、兎に角結婚と云ふ者が、戀に狂ひ易き靑春の少女が夢想するやうなものでなく、又戀愛と云ふ喜劇の連續でないことだけは掩ふべからざる事實である、是れは何故かと云ふに

單に生活難の爲めとか若しくは秋の空とか云ふ男心の變り易いのに原因するのではなくて、別に理由がなくてはならぬ、それは婦人にあつては愛はその生命であり、又た全體であるから婦人は愛を一生の我が仕事とするのであるが、之に反して男子の側に於ては愛は其人の半分である、隨つて生命とするほどのものではないからである。言葉を換へて言へば、婦人の本能は、我が愛情さへ滿足すれば本望であるが男子の本能は愛情の滿足だけでは、決して滿足しない男子の本能には愛情以外、功名心と云ふ物がある、二十歳にして美人を思ひ、三十歳にして功名を思ふとは、男子の本能を描き出した言葉である、勿論男子と雖も廿歳前後(青春の血の燃ゆる時)には、其の全精神



を戀愛の爲めに捧げて敢て悔ゐないが、偖て愈よ結婚して我が戀愛的本能の滿足を得れば直ちに功名を欲するの念が沛然として胸中に湧き來るのである。既に全精神が、功名心の爲めに奪はれて居るから、從つて心ならずも妻に對する情熱と云ふ物は薄らいで來るのである、其處で何處の妻君も『良人ては最初程私を愛して下さらぬ』と溢すのが普通であるが是は大した了簡違ひである故に既に結婚した女性は、好く此の男女兩性の、本能の相違に注意して、下らぬ苦勞をせぬが好いのである、考へても見給へ一生女の側にばかり、へたばりついて居るやうな、男子は男子らしからぬ男子といつてよいのである、世間滔々たる婦人、何ぞ我夫をして男子らしからざる男子とならしむるを望むや。

▲既婚女子は如何に觀念す可きか

男子は婦人と違つて事業慾(即ち功名心)があるから愛を我が一生の事業とせない爲めに、自分の妻に對して時に冷淡に見える時代のあることは上述の通りであるが、此の功名心の爲めに男子が或る仕事に熱中して萬事を忘れて居る時期には、其の妻たる者は固より良人が不愛想であるからと云つて決して恨みがましいことを云つてはならぬ、啻に恨みがましいことを言はざるのみならず、騷々しい言動をして良人の考へ事や仕事の邪魔をするやうな心得違ひがあつてはならぬ、殊に其の良人が詩人、美術家など云ふ、精神の集注や、靜思默想を要する職業の人なら尚は更ら、此の心得が必要である、文人美術家、其他企業に熱心する人々は自分の職業に向つて、全力を注いで居て、謂はゞ自分の無二の愛人情婦のやうに心得る場合がある。

或る有名の人情學者の說に「世界の如何なる婦人と雖も良人が汝に對して一生其の愛情を變せざることを望む能はず、併しながら汝は良人を最も信頼するに足る生涯の友人、若しくは子供等の最も親切なる父とし得ることを望み得べし」と是れ誠に眞理である。

▲悲哀の人と快活の人

常に悲哀の面色をして居る人は、單に自分ばかりでなく周圍の人までも、悲哀に陷らしむるものである、之に反して常に快活に振舞ふて居る人は周圍の空氣までも快活ならしむるものであるから、人は社會に對する公德上常に快活に振舞ふ義務があると云つても可い、殊に一家の主婦たる者は、其の快活に振舞ふて、幽鬱に振舞ふとで、其の家庭の空氣を春光和風の樂園たらしめたり、或は秋風霜氣に滿てる殺風景のものたらしむることが出來るのであるから、常に快活さうに振舞ふと云ふことは主婦たる者の第一の義務である、西洋の格言に「常に悲哀の顏色を爲せる妻は其の良人の精力を毎日一寸〱と殺ぎ盡すものなり」之に反し快活なる婦人は、其良人をして人生の生存競爭場

裡に最も勇敢なる戰爭を戰はしむるものにして斯る婦人を我が味方とする男子は、何の事業に從事しても成功せざる氣支へなし、女を噴水に譬へて言へば、彼の良人は、彼女が噴き出す健康と勇氣とを、毎日吸入しつゝあるにも似たり』と、是れは我が國の婦人のよろしく翫味すべきことであらうと思ふ、敢て問ふ、諸君は常に悲哀幽鬱の面色をして自分の身を損じ、家庭を損じ併せて良人の生命までも奪はんとするか、若しくは常に快活に振舞ふて良人に健康と成功とを與へ、家庭には春風和氣を漲らしめんとするか、夫れは只だ諸君の心掛け一つである。



結婚の困難なる個條

須磨の里人

結婚は人生の大問題、殊に婦人に取つては將來の運命に關する大事の問題でありますから、念にも念を入れて、生涯を托せる丈の價値ある人を選擇し、十分詮索に詮索を加へて、先方を確め、愈々此人ならば大丈夫、似合の良縁と極つた所で、結納の取換となり、三三九度の盃となる段取ですが、是が却々筆で書くやうに容易に運ばれるものでありません。

妙齡の娘持つ親御樣は、此問題の爲めに始終心を痛め、善い婿を目付けて安心がしたし、成る可くは是々の條件を備へて、娘に苦勞させぬ樣な家へやりたし、と嫁入の口を自身でも搜し、人にも周旋を頼んで、可愛ゆき娘の行末幸あれと、唯だ其のみを案じて下さる親心の有難さ、只々感謝の外はありません。

△難癖のなきは一人もなし

だが、帶にや短し、襷にや長しで、此方の希望する條件を悉く具備する樣な相手は無いもの、性質が優し相に見ゆれば働きが無さゝうだし、才氣が有つて好いと思へば道樂者だし、學問あり藝能ありと思へば貧乏であるし、資產があるかと思へば厄介係累が澤山ある

し、何かしら一つ缺點のあるもので、是ならばと安心の出來る樣な處の無いには困ります。また、婿殿は望んでもなき三國一の美男子で、地位もあり、名望もあり、學識もあり、財產も可なりあつて、申分のない處であつても、意地の惡さうな姑殿が御座る故、浮世の風に揉まれたこともなく、人の機嫌を取る術も知らぬ娘が若しか姑に虐待されて、離緣となるやうな事でもあらば、家の娘は一生の疵物、其を思へば假令貧乏でも姑のない家へやりたし、さればとて怠惰者にもやりたくなし、酒呑にもやりたくなし、癇癪持にもやりたくなし、大言を吐く男にもやりたくなし、外面を飾る男にもやりたくなし、借金を何とも思はぬ樣なのにもやりたくなし、悲觀して許り居る意氣地無しにもやりたくなし、また餘りに才氣があつても險吞だと、相手の選擇に就いては彼此と心を煩はすのでございます。

そんな理由で、是非にと先方から所望されても、此方は共に應ずる譯に參りませんし、また此人ならばと此方で望めば、先樣では否だと仰有る。誠に意地が惡く出來た世の中でございます。

そして男子方の注文を伺つて見ると、女らしくて、縹致が好くて、品もよくて、怜悧で、正直で、すなはで、親切の心があつて、事理が分つて居つて、學問が出來て、琴、三味線、バイオリン、生花、茶湯などの素養も一通りあつて、裁縫も出來て、家政に拔目なくて、料理が出來て、交際も上手で、働くことが好きで、そして體格も立派でなど〻、慾の深いことを仰有るのですもの、迚も相談に乘れるものではございません。註文を言へば何方にもあることと、そこを兩方で讓步し合つてこそ、話も纏るのでございます。だが、餘りに話が早く運んで、わけなく纏つた緣には、兎角後から故障の起るもので、嫁つて日も經たぬに、早くも破鏡の悲嘆を見るやうな事がありますから、緣談ばかりは早いが宜いとは申されません。

さて、媒介者の往來が頻繁となつて、緣談が進むと、見合といふ氣まりの差い思ひを致さねばなりません。見合の時は此方で見るよりは、先方に餘計見られる樣

に思はれて、針の蓆にでも坐つた樣な心持、どんな容貌の男か、色が黒いか、白いか、身丈は高いか、低いか、男らしいか、怜悧相か、働きがありさうか、同情がありさうか、缺點は何々かと、そこへ行くまでは一見して見拔くつもりでも、さて其席へ坐るとなると、目の前に靄がかゝつた樣で、判然とは見えず、大抵の婦人が、見合が濟んだ後で、どんな御方かと却て介添の者に訊くやうな次第で、肝腎の御當人は一向不得要領、夢中に逢つた人の樣に、朦朧氣の印象しか目には留まらぬのでございます。男子方でも見合の席では眼が眩惑むと申します、況して心の弱い女性の身では、顏は火點り、耳は熱し、氣まりが羞くて俯向くばかりですもの、何で判然したことが分りませう、分る道理がございません、



懸賞繪さがし (1)

△一夕の見合で極めるは亂暴なり

ですから、一夕の見合で將來の運命を決するなんて、隨分亂暴な話だと思ひます、私の知人の中には、輕卒の見合の爲めに飛んだ見誤りをして、悲しい運命を買つた御氣の毒な方が少くはございません。まるで知らぬ同士が、他人の媒酌に依つて結婚する場合には、見合も據所ありませんが、其にしても短時間の會見で、重大な結婚問題を決することは、此上もない危險なことだと思ひます。

こんな風に、日本では一寸見合した許りで宜しいと輕々しく極めて了ひますから、嫁入してから次第に募る夫の無法に膽を潰したり、又は結婚してから段々出て來る嫁殿の地金に驚いたりして、互ひに不滿を抱きますので、樂しかるべき婚後の家庭が何うも面白くない、隨つて家内揉めがする、また之が爲めに離縁騒ぎが持上るやうな事にもなるのです、けれども儘ならぬは浮世の習ひ、兎に角一旦夫婦と成つた上からは、たとへ面白くはなくとも、意外の癖が發見されても、また如何樣の不滿があるにしても、もう是迄の運命と諦め、前世の約束と念ひ、出るの引くのと外聞惡いことを言ひ出さずに、大抵は往生觀念佛して了ふのでございます。かくて不滿は不和となり、紛紜絶えずして不愉快な月日を涙の中に送る奥樣もあるので御座いますだが併し其と申すも結婚前に選擇を等閑にした罪で、若し夫れ其間に子供でも出來ては、後悔しても最う駄目です。

△西洋の例に習ひたいもの

そこへ行くと、西洋の夫婦の成立は念の入つたものです、皆樣も御承知の通り、彼地では男女の者が學校や教會の道連から始まつて、音樂會や茶話會の同席に二言三言の談話が縁となつて自然と懇意に成り、互に時々逢ひもし、一緒に散歩もする、かうして互に交際を續けてゐるうちに、兩人の胸中末頼母敷い人だ、かういふ方を良人にしたら嘸ぞや樂しい生涯が送れようと、見込んだ所で夫婦の契約が成立ち、心を捧げるやうになります、さあ、斯うなるとお互に結婚の準備に取掛るのですが、日本と違ひ生活程度の高い彼地では、並大抵なことでは迚も世帶は持ち切れません、其故新家庭を作る前には、互に一心不亂に稼ぎ溜めて、最う是なれば人並の生活が出來るといふまでは三年も五年も氣長に待つて居るのです、而して其間は手紙の遣取して、また時々は訪問もして、直接に間接に、對者の品行、思想、働きの如何をも試驗し合つて、若しも互ひの間に突留めた非行があれば破談、言分がなければ目出度く結婚、と斯ういふことに成つて居りますから

日本のよりは餘程手間が取れるのでございます。

所で、之を日本へ持つて來て此通りを眞似るとなると、即ち他人の媒灼に依らず、自分達で選擇し、自分達で約束するとなると、世間では自由結婚の何のと惡く言ふて、親達始め不服を申しますから、此種の結婚は日本では餘程困難であります。私の知人は、自分の氣に入つた婦人を捜し當てゝ、西洋風に之と交際し、遂に夫婦約束をした所、双方の親達が何うしても承知せず、其が爲め八年間も一緒になることが出來ずに苦勞を爲合ひ、散々結婚難を嘆じた揚句、勘當同樣の形で漸つと夫婦になつたと申します。

其程ですから。事情の違つた日本では自由結婚は先づ出來ないものと思はねばなりません、よし、出來たところが、必しも家庭治り、夫婦相唱和して琴瑟會ならずといふやうな譯に行くものではありません、既に本家本元の西洋ですら、夫婦間には隨分衝突も起ろ、喧嘩もする、其結果離緣沙汰も少く無いといふことですから、何方にしても結婚に伴ふ夫婦間の面倒は免れないものと見えます、夫の關々と雌雄相應じて樂しむ鳥の如きは寧ろ羨ましい譯でございます。



懸賞繪さがし　(2)

△親は金錢、娘は愛情

話頭一轉、再び父母の側から見た結婚難を申しますと、娘一人を緣付る爲めに要する支度、費用、是が却却容易のものでありません扨て愈々黄道吉日を選んで嫁入らせるとなると、此方の家格と先方の身分とによつて、相應な支度は持たしてやらねばなりません、たとへ先方では此方の不手廻を知つて、支度の無いを

承知でも、豈乎安火に火鉢でもやれませんから、苦しい算段をしても夏冬の物一通りは調製へてやらねばなりませんし、また親の人情として娘が爲には一生に一度の大禮であるから、先の親類へ對しても恥しくないやうに、長唄の文句ではないが、瑠璃の手箱に珊瑚の櫛笥、玉を述べたる長持に、數も調度の澤く、出來る丈は立派にしてやりたしと氣を揉むのは、是は無理もないことで御座いますが、然し親の身には却々骨の折れる話でございます。況して西洋風に自分で結婚入費を稼ぎ溜める塲合には、三年は愚か五年刻苦しても十分の支度は六ヶ敷からうと思ひます、地位や財產を見當に、又は名望を慕つて結婚する方もありますが、由來富貴榮達の門戸には多く惡魔が潛むとも申して、玉の輿を希ふた爲に却つて難儀をなさる奥樣は古來決して少くはありません。夫婦間の愛情は金錢で買はれるものではありません、地位や名譽で保障されるものでもありません。農學士でも無い人を學士と信じて結婚した爲に、生木を裂かるゝやうな想ひで生家へ呼戻された話や、赫々たる武勳を慕つて嫁入つた爲めに、苛い目に遭つた不幸なる細君の話なぞは、つひ近頃の新聞に見る所でございます、また是は新聞には出ませんでしたが、或る實業家の妻君で、家庭の紊亂に心を痛め、良人が洋行から歸ると間も無く自殺なされたといふ話も聞いて居ります。そんな譯故、よしんば地位は低くとも、財產は無くとも、名前は聞えなくとも、夫に同情のあるのが何よりの頼み、夫婦互に相信じ相愛する心だにあらば、たとへ野の末、山の奥、賤が伏屋に手鍋提げても、軒洩る月影さへ平和の友で、言ふに言はれぬ樂みが其中にあるでは御座いませんか、婚姻生活の幸福は華やかな都會や身分の高い家にのみあると思ふと大間違でございます。虚榮心を滿足させる爲めに目前の出世を願ふて、將來の利害を考へぬ如きは生涯を誤るの本と思召せ。

汚れ婦人を排斥せよ

西洋では縱令妾といふ様なものがあるにしても、極秘密にして置き、若し知れたら世間に顔出しがならぬ位ですが、日本では妾といふ立派な名をつけて、公けに置くといふのですから、表面は隨分違ひます、何れに致しても妾を置かれた奥さんこそ實にお氣の毒で、耐りません、サンザ子供を育て家事に苦勞して、容貌が衰へると、良人が他に心を移し、中には家族の仲間入りをさせ、一家に住はせて御客の前へ出す人もありますが、私はそういふ場合に其妾へは挨拶も致しません、私は其の奥さんにこそ御交際致すが、汚れた婦人には何の關係もないから挨拶する必要がないと思ふのです、本當に私は日本人の爲めに此の弊風を歎きます、公けに妾を置くといふのは、文明國に不相應な事で、まして戰爭に於て立派な國になられた日本、何卒此點に於ても立派な國とならるゝ様にお互に御勵みあらん事を希望致します。

西洋婦人も隨分種々な欠點があるのですから一も二もなく西洋婦人を手本にされるのは心配で堪りません、私の知己の或家へ來られた若い御嫁さんは、近處の友人の家に招かれて遊びに行くことが度々でしたので、良人の親御が小言を云はれた處、是れは西洋風ですと平氣で居られたそうで、終に離緣沙汰になつたのです、元來西洋では自由のやうで其實却々嚴重なもので、夜分若い婦人が一人で外出する事など決してありません、斯様な間違つた考を持たれる方もあり其他唯表面ばかり見て西洋の婦人は外の事に多く働くから家の細い事は餘り取扱はぬなどゝ、誤解されては大層間違ひますので、私は心配でならないです。（某外國貴婦人談片）



我娘の躾け方

矢島楫子刀自

家庭に於て女子を教育する事は、却々困難でムいまして、就中女の子を育てるのは並大底の苦心ではムいません。私なども如何にすれば娘を完全に躾ける事が出來るかと云ふ事に就て隨分工夫を致した方で、外國の婦人や、教育に從事せらるゝ、知合の方などに聞いて、其都度善いと思ふた事を色々と實行致しました。で、多少世の父兄方の御參考にもならうと存じますから、玆に私が娘を躾けた實驗を少しくお話し致します。

▲家事の訓練

朝は五時に娘を起しまして、身仕度が調ふたら女中と共に臺處の働きを致させます。無論御飯も炊かせ、お汁も調へさせ、膳やお椀を添へることから、食器を洗ふことまでも總て女中と同じやうに致させます。今の教育を受けた者は、兎角氣位ばかり高くて臺處の仕事と來ては些しも出來ないと云ふ世の非難もムいますし、又實際漬物の漬け方も知らぬやうな學生上りの若奥樣もあるやうですが、私は女として臺處の立ち働きも出來ない、漬物の漬けやうも知らぬと有つては、娘が一生の恥辱であるのみならず、箇樣に仕立てた母に於ても誠に濟まぬ事と思ふから、漬物の漬けやうは勿論、苟も臺處の仕事とあれば何でも致させる事にして居ます。晝飯時は日曜でも無ければ居ないから仕方が無いけれ共朝飯と夕飯との兩度は必ず之を遣らせます。

▲經濟思想の養成

臺處の買物は總て娘に致させます。一週間分として豫め二圓なり三圓なりのお金を渡して置いて、其日

其日の費用は買物帳に明細に記入させ、毎週土曜日に私に報告をさせるので厶います、其他家庭に必要なものや、私の入用な物を買ふ事なども特別の場合の外は、皆娘に申し付けて厶います。又娘自身の物は、一應私に其の價額と品質との大體を相談させましてそれ〴〵自分で買ひ調へさするやうに致して居ります。之れは私は平素學校の方が多忙の爲に一々指示し居る事が出來ないからでもありますが、斯う致して置けば自然品物の善惡も判へ、買入方も巧妙になり、金錢を亂費することが無くなつて、餘程經濟思想を高めるかと思ひます。一ヶ月の初めに、二圓丈けを與へまして、娘一身の費用と致させます。其費途に就ても、明細に小遣帳に記入させて、月末になつて私に報告を致させます。若し其小遣の中に無益なものを發見した時は、嚴重に申し聞かせます。

▲家庭に於ける日課

家庭に居る時の娘の日課は學科の復習、裁縫、洗濯、自分の部屋の整理、買物帳、小遣帳の記入等で厶いますが、私は特に裁縫を嚴しく致して、衣類、袴、足袋等の娘の身に付けるものは、總て自分の手で裁縫させて、決して他人の手を煩はさせません。當今の學生は自分の着物は他人に賴んで、其時間で本を讀むとか或はピアノやヴアイオリンを彈くと云ふ風で、優美な心を養ふには、夫れもよろしう厶いませうが、併し物には程度のあるもので、之れが爲に大切な婦人の仕事をお留守にするやうでは誠に申譯が無いし、又自分の着物を他人に賴んで迄もピアノを彈することも要るまいと思ふから此點は餘程注意を致します。

▲日曜日の娛樂

日曜日は、朝は平素のやうに女中と共に立ち働かせ、朝餉が濟むと教會へ參り、歸るのが正午になりますが、午後からは娛樂を得させる事に致して置きます。娛樂と申しましても、ピアノとかヴアイオリンとか、其他本人が欲する高尚なる樂みに限るので寄席や演藝場などには、斷じてやりません。

▲夜の復習

夜分は裁縫か又は學科の復習を遣らせますが、學科の中では、今後社會に立つ婦人は、英語の素養が最も必要かと思ひますから、是に重きを置かせます。又學校の受持教師に毎月一度宛お目に掛り、總ての學科に就て成績を伺つて若し英語が劣つて居るとか或は歷史が劣つて居るとかと聞いた時には、家庭で復習の際に、其の方へ十分力を注がせます。

▲朋友の交際

古い格言に「朱に交れば赤くなる」と云ふ事がムいますから、私は娘の朋友に就ては、特に注意を致します。一見した丈では惡い娘も善い娘も、一寸判別は付き兼ねますが、宅に遊びに來られた時に能く氣を付けて見てゐますと、餘り操行が善しくないとか、人格が低いとか云ふ娘は、化粧や服裝などが、何となく艶ぽくて、起居動作から其の言語に至る迄如何にも輕薄で高尚な所がありません。幾ら本人が隱して居ても、然う云ふ點に就て、細かく觀察致せば直ぐ其の欠點を見出します。で然う云ふ時には私は其の娘が通學して居る學校の受持教師に其の人物の如何を問ひ合せますると斯う云ふ性質で斯う云ふ欠點があつて、操行は怎うと一々明白に答へて參りますから、私は折を見て其娘をコッソリ自分の室へ招いて十分訓戒を加へ、若し夫れでも改める所が無い時には、止むを得ず交際をお斷りして、一方自分の娘にも其旨を嚴重に申付けて、以後訪問は勿論、決して深く親まぬやうに致させます。併し此場合にも其の人の事を他人に云々する事は斷じて無いやうに申し付けます。

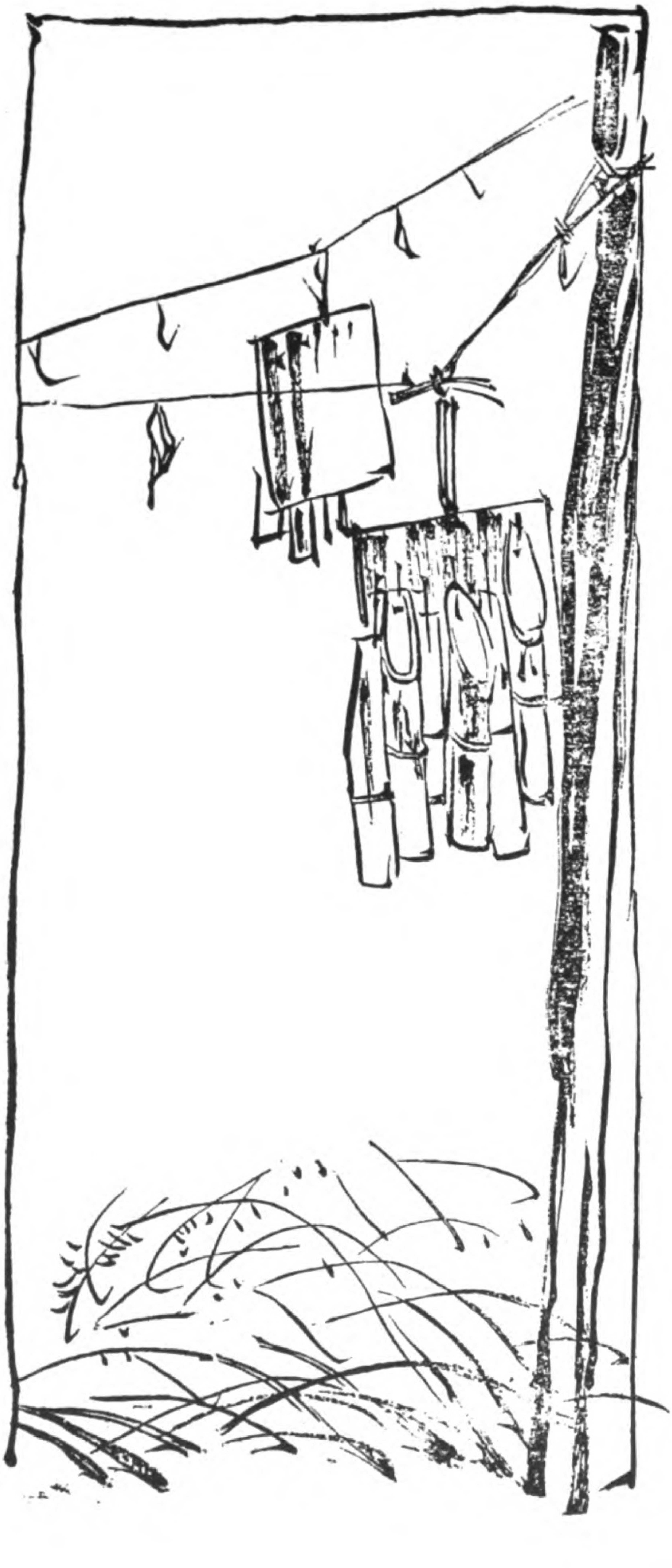
▲室内の整理

娘の室は自身で毎日朝夕二度宛拭掃除やら物品の整理やらを致させます、又箪笥の中や机の抽手や本箱の中なども、例へば箪笥なら上の抽手二つには平素着を入れ、晴着や稀れに着るものは次の二つに入れ、足袋とか半襟とか云ふ小物は、ずつと下の方へ入れさせると云ふやうに一々キチンと整理をさせます。そして一週に一度位不意に行李や箪笥や机の抽出や或は本箱、押入に至る迄もすつかり開けさせて檢査を爲し、若し

女子が讀んでいかゞはしい無用な書籍がある時は、自分の所有品か、如何かを聞き糺して之を取上げるとに致して居ます。

▲外出時の監督

是れは却々困難でムいます。夜分であれば無論女中を付けますが、普通はたゞ娘に行先を糺して何時頃に歸宅すると云ふ事を豫め極めさせて置きます。そして三度に一度位は娘が訪問したと云ふお家へ、娘に知らさずに、『何日には娘が御伺ひ致して、大そうお世話でムいました、直ぐ歸宅したさうで、何時に戻りまし



たから御安心下さい」と云ふ意味の手紙を差出すと、若し訪問して無いとか、或は往復の時間に大差があれば、「宅では無い、何かお間違ひでは無いか」とか「お嬢様は大層遅くお歸りだが、私の宅は、何時頃にお歸りになつた」とか云ふ返事が參りますから、其時には嚴重に詰問して其時の行先を明かにさせます。そして虚言の不心得な事を、懇ろに諭すので厶います。

▲賞罰の方法

賞罰法に就ては別段斯うと極めては居ませんが、若し家庭の手傳ひを故なく怠るとか、或は自分の室の整理をして無いとか云ふ時には、懇々と其不心得を云ひ聞かせます、又た善く働いた時とか、學校の成績が良好であるとかと云ふ特別に美事のある時には、たゞ言葉で褒めて置きますので、人様のやうに物を與へるやうな事は斷じて致しません。

▲装飾と動作

服装の如何は、一には人の性質を現はし、又自己の精神に、大なる影響を及ぼすから、女褌に紅色を用ゐて歩く度に裾から蹴出すやうな淫靡な風や着物に派手な縞柄を用ゐる事は固く禁じて居ります。化粧も矢張同じ事で、白粉を厚く付けるとか、頰を紅で彩るやうな事は、一見人に不快の念を與へますから、斯う云ふ事は決して許しません。そして常にお朋友や私を訪問た外のお娘の善い處を見習はせるやうにして、若しみだらな動作や言葉遣などをした時には、女がそう云ふ事ではいけません能くお愼みなさいと靜に云ひ聞かせて置きます。

▲愛情の養成

女子に最も肝要な事は愛情で厶いますから、女中に對する時でも、お朋友に接する時でも、總てやさしくして、其人を愛すると云ふ念慮を抱くやうに云ひ聞かせて居ります。元來日本の人は兎角弱者を蔑視する傾向があつて、やゝもすると人を虐使したり酷待したりするのを見受けます。これは舊幕時代に、武士が人民を稱して素町人と云つて。自分は間違つて居ても弱者たる素町人に服從させるやうに致し、若し人民に忽

があれば忽ち頸を斬ると云ふやうに、何でも強者は弱者をして己れの意に從はせ、弱者は強者の命に服して居らねばならぬものと云ふやうに壓迫を加へて居た慣習の惰力でムいませうが、實に間違つた考へでムいます。女子に於ては、尙更の事でありますから、此の愛情を養ふ爲に、先づ手近く女中に對して親切に爲さしめ、物を命ずるにも、つゝけんどんに荒い言語を使ふやうな事は深く愼ませるやうにして居ます。

▲男子との交際

それから西洋では、男女の交際は、別段害も無いものとしてあつて、中學校の生徒と、女學校の生徒とが、手を組み合つて、公園などに散歩して居るのを見掛けますが、彼方は人情風俗も異り、女子の思慮も日本のやうに薄弱では無いから、間違ひも無いのでせうが、日本では未だ〳〵害が無いとは申されません。よし害が無いとしても、或は幾らか男子の氣質に感化せられて女子の特質たる優しい點を十分維持して行く事が出來まいと思ひます。又さうで無いとした處が、日本は未だ靑春血氣の男女が交際をするのを大目に見て居る程に進んでは居りません。其間何等疚しい處は無くとも、世間が之を許しません。これでは將來双方の一身にも大關係がムいますから、私は決して男女の交際はさせません。そして常に「靑春時代の女子は、兎角男子の誘惑を受ける事が多いもの」と云ふ事を念頭に置かせて、男子には餘り近寄らせないやうに致して居ります。（曉汀筆記）

無邪氣

去年の秋親戚へ嫁いてから丁度九ヶ月目で里へ歸へたのが初めてと歸いつて見てもさしたる變もないが一入目に付き耳に付くのは餘松子の大きくなつりたのと能く口が廻る樣になつたのと、大人になつたのとで一体人に好かれるのが一層可愛くなつて、日さへ暮れば、れいちやん〳〵と付き歩いて五月蠅い程、三日四日五日と早や一週間も宿つたから明日は歸らればなるまい、サア、母さん何品は持つて行きます父さん此の品も彼の道具もと云ふのを松ちやんが聞き付けてイー、いけないよ〳〵持つ行つちやいけないと泣く、歸れば松ちやんは御機嫌でれいちやん早く歸いておいでよ、東京のお土產を澤山頂戴と母上と一緒にさもうれしさうにして見送り、ま－何んと無邪氣だろ－汽笛一聲三百里も行くのに。（山下きよ子）



若き女の缺點

山根正治君

△下女の嘲笑

此の頃の女學生は、兎角學問ばかりやりたがつて、家庭の實務に就ては、一向に意を注いで居らないが、彼等の將來に取つては此程悲むべき事はありません、覺束ない英語交りの言葉を使ひ、前髮を思ひ切つて前に突き出し、肩で風を切つて歩るいて居るが、扨て彼等が一旦人の妻となつた曉に、果して家庭の實務を完全に爲し遂げる事が出來るか如何かと言ふと、私は恐らく不可能であらうと思ひます。先づ一例を引いてお話すれば、家庭の實務の中では第一に重を置かねばならぬのは、臺所の立ち廻りであるが、今の人達は、臺所の事などは一向に見向きもしません、飯を炊く事も、料理の事も悉な之を母親や下女任せにして自ら手を下すと云ふ事は滅多に爲ない、されば臺所の事など些も分らないのでいざ人の妻となつた塲合に、自分で手を下す事も出來なければ、下女に指示をする事も出來ないで、徒に下女や女中の笑ひを招きつゝあるのが今日の實際です。

△新妻君の滑稽

私の知人で矢張り醫者を業として居る者が、曾てお茶の水を卒業した、女學生上りの妻君を迎へました、或日妻に命じて今日は父の誕生日だからおすしを漬けよと云ひ付けると、妻君は、早速夫の命を受けて臺所に引き下つた、軈て其處へ友人が業務上の事で來合したので、今日は父の誕生日で、妻に手製のおすしを漬けさせたから、恰度好い所だ御粗末乍ら晝飯を遣つて行き給へと、主人は如何にも妻君の御手際を見て呉れと言はぬばかりに引止めた。で客もそれならばと主人の意に從つた、兎角する中に十二時の午砲も鳴つた、

妻君のおすしが出る事と、主客共に頸を長くして待つて居たが、どうした譯か、最う彼是一時近くにもなるのに、おすしの出るやうな樣子が見えぬ。のみならず第一妻君が姿を見せない。そこで主人公は氣を揉で、臺所に行つて見ると、妻君は居ないで、下女が切りに竈に火を燃付けて居る。で妻は怎うしたかと聞くと、下女は、奥樣はおすしを漬けるに入用なものがあると有仰つて、三時間程以前にお奥へ在入いましたが、未だお見えなさりませんと云ふ。それから主人公は奥に行つて見ると、おすしを漬けて居るべき妻君が、本箱やら簞笥やら、手箱やら、針箱やら、嫁入りした時に持つて來た、總べてのものを取り出し、衣類やら、本やら、包みやら、座敷一パイに取り散らして、蚤取り眼で何か探して居る樣子、主人は驚いて、何うしたのかと聞いて見ると、妻君は顏を火のやうにして、實は學校で敎はつた料理法の筆記に、お壽司の漬けやうを書いてあるから、それを探して居るのでムいますが、怎うしてもそれが見つかりませんで、誠に申譯がムいませんと、オロ〳〵聲で云つたので、主人は來客の手前も有り、今更致方なくてすし屋から取寄せて、お馳走をしたと云ふ、是等は眞に現今の女學生の通弊と見て差支へがありません。

△珍奇の離緣

又昔氣質の或大家で、矢張り學校出の嫁を貰ひました、處で、或日姑の命令で便所を掃除する事になりました、處が此の新嫁は、實家に居る間、雜巾一度も持つた事が無いので、何うしてそんな所の拭き掃除が出來ませう、仕方無しに下女に命じて掃除をさせました、すると後で姑が是れを聞いて、大に立腹し、雜巾持つ事も知らない嫁は、到底將來の見込みが無いと云つて、離緣して了つた、槪して今時の若い人達は、氣位ばかり高くて、學問を無闇に尊いものだとおもつて、自分の部屋も掃除せずに、下女任せ、下駄や靴も女中任せと云ふやうな有樣ですから、いざ嫁に行つた時、箒の持ちやうも知らず、夫の靴を磨くにも刷毛の使いやうを知らないと云ふやうな有樣で、自然怎う云ふとにな

るのですから、何はさて置きまづ是非とも家庭に在る間に、拭き掃除は勿論、庭園の手入れから、洗濯の仕様、細かしい仕事を實習して置かねばなりません。

△漬物の切り様

成程學校では、西洋料理から日本料理、支那料理から菓子の製法迄色々講義をして教へますが、講義と實際とは非常な相違で、是れを家庭に於て實習して、初めて料理の仕方を覺えるのです。然るに講義を聽けば聽き放しで、一向に實習をしないからいざと云ふ場合に、味噌の擂りやうも知らず、香の物の漬けやうも切りやうも知らぬと云ふ事になつて來る、今日新家庭に於て數々見るやうに醬油汁を以て味噌汁に替へ、香の物は毎日漬物屋から買ふと云ふやうな有樣では、第一不經濟であるばかりでなく、衞生上から見ても甚だ感服出來ないのです。私は實際香の物の切りやうをも知らない妻君を知つて居る、或時私が某家を訪ねたら其家の妻君が奈良から漬物を貰ひましたからと云つて器物に入れて茶受けに持つて來た。見ると奈良漬の厚さが五六分もあるやうに切つてある。女中は今しがた使に出たのであるから無論女中が切つたのではない。是れを見ても略々其の平生が分るでせう。

△教育の價値

又斯う云ふ美談もあります、是れも矢張り私の知つて居る昔氣質の或る大家でムいますが、此の家では何故か現今の女子教育と云ふものを非常に嫌つて、長男丈けは大學を卒業さして、工學士に仕上げたが、六人の娘は小學校を卒業さしたばかりで、高等女學校などには入學させはしなかつた。或る時私の知人が、長男の工學士に某女學校卒業生を嫁に世話したので、兩親は不承々々にそれを貰ひました、然るに此の嫁御は、實家の家庭に在つて、氣隨氣儘に育つた者で、裁縫も能く出來ず、臺所の事も知らず、兩親の氣の取り樣も知らないので、今迄圓滿であつた家庭が其の爲に忽ち不和を起すやうになつた、是れではと、兩親がほとほと持て餘して、長男に勸めて早速之を離緣した、其れからと云ふものは、益々女子教育を嫌つて、幾ら嫁

を世話する人があつても、女學生上りは眞平御免を蒙ると言つて却々に聞入れない、所で或る退引ならぬ人が、そう一概に女子教育を嫌つては仕方がない、先づ

私に御任せなさいと言つて又女學校出の婦人を世話したが、此の嫁樣は至極物堅い家庭で嚴重に養育せられ、夫の勤め、兩親の氣の取りやう、裁縫から臺所の立働き、妹に對する愛情等何處と言つて非點が無いので、先きの嫁の時とは打つて變り、朝から笑ひ聲が絶えないやうになつて來た。そこで兩親は成程教育は爲せ可きものだ、學問したものは又格別だと感心して今度は非常な女子教育黨になつて、六人の娘を、悉く某女學校に入學させました、是等は實に感んずべき美談であらうと思ひます。是れを以て見ても、學問よりは家庭の實務を學んで置かねば到底他日立派な嫁樣になる事が出來ないとが分るでせう。

△理　想　の　夫

女學生の理想の夫を調べて見ると、法學士、工學士、醫學士など云ふ肩書付きの人を望むで居るやうであるが、其等の人々の月給は幾らかと云ふに、先づ大學を卒業して、運の良い人で三十圓の月給に有り付くのが關の山であらう。かゝる夫に配して一家を處理して行くのであるから、下女などは迚も雇ふ事は出來ない。從つて臺所の事から、拭掃除迄一切自分で爲なければならぬ。故に若し家庭の實際を練習して置かないならば、何うして家庭を整理する事が出來ませう、而かも今日の若い人々は親達が將來の爲めを思つて嚴しく家庭の事を習はせやうとしても、本人は只親に云ひ付けられたから、臺所の事をやる、仕方が無いから掃除をすると云ふやうな有樣である。恁んな風では決して修養にはなりません、是れは是非共其の本人が、心から自己の將來の爲めと思つて、親に云ひ付けられなくとも、自身で家庭の仕事を見出して、爲るやうに心掛けねばなりません。(曉汀筆記)



模範

雲上の光

聖上陛下の御平生
女官奉仕の事ども

一記者

△聖上陛下の御精勵

申すもいと畏き事ながら、我が天皇陛下に於かせられては、玉體益々御盛健に渡らせられ、日々内外の萬機を臠はし給ふ事は、臣民の均しく感佩し奉る所なり。畏くも玆に陛下が御起居の樣を漏れ承はるに、炎暑熾くが如き三伏の砌りにも政務にいそしみ給ふの餘り避暑なんどは更に思召し給はざりし程なれば況して此頃の御精勵の程只恐懼し奉る外は無し。午前六時と申すに御起床あらせらるゝや、白羽二重の夜の御衣を同じきお衣に召し更へて御口嗽所に出でまし、七時に御朝餐、暫時御休憩の後九時に當番侍醫の玉體拜診あり。右終つて典侍幷に權典侍を召して大元帥の御制服に御召更へあらせ給ふ。此は肋骨付の通常服にて、大勳位菊花章の副章を御左肋に、其の上部には勳八等白色桐葉章、同じく瑞寶章、憲法發布紀念章其他を御併佩、之れに寶劔を式の如く帶ばせ給ふなり。午前十時に表御座所即ち御學問所に出御あり。此殿にて百般の政務を臠はし、正午一旦入御、御晝餐を召させられ御休憩の後午後一時より三時に至る迄再び政務を臠はし給ふ。恁くて御湯を引かせ給ひ、六時に御夕餉を召させられ、其れより然るべき女官――典侍又は權典侍を御給仕にて和歌の御當座などあり。午後九時に侍醫局勤務の者に仰せて玉體に按摩をさせ給ひ、十時三十分乃至十一時に夜の御殿に入らせ給ふ。

△皇室の御運動具

以上は聖上陛下の御日課なるが、陛下に於かせられ

ては尙ほ御暇のある毎に不斷の繁劇なる國務に疲れさせられし玉體を更に芝草柔き御園に降り立たせ給ひ、御健康を助け參らするに最も力ある運動の器具を執つて御近臣を御相手として御肌衣に玉の汗しとゝに濡るる程熱心に御遊戲遊ばさるゝ由にて、近頃最も御思召に叶ひしものはバスケツトボールなりと承はりぬ。陛下斯の如くなれば東宮殿下にも御體育御熱心にあらせられ、先頃も青山御所及び鹽原御用邸に各兵營に備付あると同じき式に依る並行棒を御備付ありしのみならず、護謨紐の伸縮に依つて全身の運動をなし得るエキサーサイザーを御愛好あり、朝早く御起床の時必ず御朝餐前是に向つて先づ御運動を取らせらるゝ事例の如くにて、爲めに御健勝なる殿下の御元氣近頃更に御加へ遊ばされたるやの趣あり。皇室の此の難有き御思召はやがて國民一般の體育御奬勵の途ともなるべく、其御精勵の程只恐懼の外はなし。

△女官の職務

さて陛下に近く奉仕する職員は、男子にては内大臣、侍從長、侍從職幹事、以上各一名、侍從七名、次侍從二名、侍從勤務六名、侍從武官長一名、侍從武官三名、侍醫局長一名、侍醫廿八名、侍醫局勤務員六名、內豎四名等あり。女子即ち女官にては典侍二名、權典侍四名、掌侍二名、掌侍取扱一名、權掌侍七名、權掌侍取扱一名、權掌侍心得一名、命婦二名、權命婦六名、(以上高等官)女孺、權女孺、針女、下女各數名、(以上判任官)あり。右の中女官は何れも皇后宮に屬し各當番を定めて兩陛下の御用を承はるなるが、三度の御食を侑め御衣を更へ御湯引かせ給ふ砌りの御用を承はるなど總て陛下の御身近う仕へ奉るは典侍幷に權典侍なり。掌侍以下の女官も時には直接の御給仕承はる事もあれど其は稀にて多くの場合は典侍權典侍の旨を受けてお次の間に奉仕するなり。女孺以下は何れも命婦以上の女官の局に召使はるゝ人達なれば陛下直接の御用を承はる事は絕えて無しと云ふ。女官の服裝は勤務時間は制服の洋裝を用ゐ、其他は袿に緋の袴を着る事古

に異ならず。

△現在の女官

目下宮中に在る權命婦以上の女官は左の如し。是等の人々は權典侍以上は「典」をつけて新樹の典、早蕨の典等の如く、掌侍以下は「内侍」をつけて柳の内侍、玉椿の内侍等の如く召さるゝなり。又其稱號の中に早蕨、緋櫻などの如く二文字名のものと、柳、樗などの如く一文字名のものとあるは、一は華族出身を示し一は士族出身を示すなりとぞ。

典侍	新樹	從三位	高倉壽子
同	早蕨	從三位	柳原愛子
權典侍	花松	正四位	千種任子
同	緋櫻	正四位	小倉文子
同	小菊	正四位	園祥子
同	藤袴	正四位	姉小路良子
掌侍	柳	正五位	小池道子
同	玉椿	正五位	壬生廣子
掌侍取扱	樗	從五位	中山榮子
權掌侍	紅葉	從五位	藪嘉根子
同		從五位	北島以登子
同	若菜	從五位	津守好子
同		從五位	吉田鈺子
同	菖蒲	從五位	六角章子
同		從五位	山川操子
同		從五位	粟田口綾子
權掌侍取扱		正六位	香川志保子
權掌侍心得		正六位	日野西薫子
命婦	菊	從五位	堀川武子
同	菅	正六位	西四子
權命婦	椿	從六位	生源寺伊佐雄
同	葛	從六位	平田三枝
同	蕨	從六位	吉田愛
同		從六位	樹下定江
同		從六位	大東登代子
同		正七位	藤島竹子

△宮中の御言葉

宮中にて用ゐさせ給ふ言の葉は優しう美しとは普く傳ふる所なるが、寔に其は今も尙ほ往昔と異ならず、申すも畏き事にはあれど、陛下には京都にてあれまししにも因るか、宣らせ給ふ玉音は今も尙ほ彼地の公卿諸公と同じく優にやさしき律呂朗々たる玉音なり、今

漏れ承はりし大内言葉の二三を記さんに、飯の事を「おばん」、緣側の事を「お馬道」、其他米を「打撒」、酒を「お獻」、鯛を「おひら」、鰕を「えもじ」、葱を「ねもじ」、又賢所に供へし神饌の下りを「おすべり」、陛下のお食の下りを「おした」とぞ云ふなる。聖上陛下が御自らを仰するには常に「朕」と宣らせ給ふならんとは多くの人が詔勅などを拜して竊に推し奉る所なるが、「朕」とは譬に引くも畏れ多けれど庶人が「小生」「野生」などゝ記すと同じく文字の上に現し給へるのみにて、まことは「自分」と仰せ給ふとなり。又皇后陛下各皇族殿下を始め奉り玉座近う奉仕する諸官等は、至尊を「上」と申奉り、次に至尊が皇后陛下の事を仰するには「皇后」と仰せ給ひ、皇太子殿下を「明宮」「東宮」、又は「嘉仁」と御名を呼ばせ給ひ、東宮殿下を始め各內親王殿下には兩陛下を阿父樣阿母樣と仰せ給ふと漏れ承はりぬ。

△御清潔の一例

至尊こそ神の御裔に座しまし、些の穢れをも厭はせ給へば、萬づの物皆淨きが上にも淨きに意を注けて調じ奉るなり。申すも畏き事ながら玉體に召し給ふ衾の御衣夜のお衣幷に肌の御帶なんど何れも不淨の氣なき白羽二重にて調じ、而も一たび召さするのみにて次の日は更に新なるを奉るなり。扨て此の一たび玉體に觸れし御衣御帶の類は如何にと承はるに、這も亦陛下が聖德の一斑を窺ふ料たるべし。即ち是等は女孺をして悉く解きて洗ひ衣となさしめ給ひ、御傍近う奉仕する諸官並に東西兩京に住める無被官の公卿華族へ普く下賜せらるゝなり。素より些の御垢も止めざる淸淨の絹とて、賜はりし人々は聖恩の忝けなきを拜しつつ、己れが好める儘に染なして衣類に造るあり、夜具布團に裁縫するあり、比較的に富まざる無被官の公卿華族にして而も羽二重の衣多く有てるは御下賜の絹もて調せしに外ならずと云ふ。尙ほ大元帥の御制服の下に召さるゝシャツ、ヅボン下、靴下なんども日每に新しきを用ゐさせ給ふは勿論にして、是等は侍從及び侍

従武官其他宮中出仕の人々に賜ふとか。次に御食調ずる宮中大膳職に於ては大清、中清、小清とて三淨の定あり、大清とは其司人等潔齋して最も清淨に調ずる謂にて、這は兩陛下に參らすべき御食とぞ承はる。次に中清、小清は其稱の如く差別ありて、宮中奉仕の人々の食事を調ふるなり、然れば奉仕の人々亦己れの身を淨うするを怠らず、假令ば厠より出づる砌の如き、二個所にて手水を使ふに定め、就中女官に在りては一しは厳にして、其月々の穢れの間は休息とて己が局に引籠りしまゝ一切奉仕の事に與はらず、又當番にて勤務する間は自ら己れの肌に觸れたりとも其都度淨めの手水を使ふ定めなれば、頻に何やら觸れたりと思ふも手もてせず懐紙にて窃と撫づるに止め、其他何にまれ大抵懐紙又は己れ裾もて其れに觸るゝを常とするとか。

△陛下御入浴の事

兩陛下の御湯引かせ給ふ御湯殿は宮中御内儀の邊に在り。御湯殿は兩陛下別々に修らへあるは申す迄もなし。聖上は御風氣其他の恙坐さぬ限り日々夕刻に於て召させ給ふが例なりとかや。冬は湯槽に玉體を浸し給ふも暑中は唯だ浴み給ふのみにて玉體を浸し給ふ事なしとぞ。其御湯引かせ給ふ狀を承はるに、濶き御湯殿の中央に凡四尺四方の檜厚板もて修へし御座浴の槽ありて、陛下此裡に坐し給へば掌侍權掌侍の各女官は小褄甲斐々々しく褰げて蠟塗の御湯桶に湛へし温湯を交る〲御湯殿に運び御頭の邊りより注ぎ奉る。然くて御汗を流し奉りイザと揚らせ給ふや掌侍は清淨なるタオルもて玉體を御拭申上げ、陛下には少時タオル製の御浴衣を召し、軈て白羽二重の御衣に更へ給ふなり。御湯殿には和樣と西洋風との御湯槽を備へあれど、兩陛下とも多く和樣の御湯槽を召させ給ふとかや。

△女官の勤勉

女官の勤務に就て承はるに、當番の女官は午前五時より陛下御就眠の時即ち午後十一時過或は時として翌

日の午前一時二時頃迄畏みて奉仕するなれば、其疲勞も推して知るべく、然れば御前を退りて己が局に入るや、朝迄は前後も知らず熟睡し、尚は五六時間宛の晝寢に漸く其疲勞を休むるが常なりとか。此の勞苦を知ろし召す兩陛下には、其を憐ませ給ふの餘り、大膳職の調じ奉れる三度のお食の中半以上の御料理を御箸を觸れ給はで當番の女官に下し賜はるが例なるにぞ、女官は感泣の涙堰き敢へず唯一人にて頂かんは勿體なしと人して親族着族の許へ普く頒ち與へ一同にて聖恩の忝きを拜すと云ふ。いかに畏き事ならずや。謹んで漏れ承はれる儘を記し奉る。

△宮中女官の取締

（京都出身の女官）

九重の宮居に仕ふる女官方にて典侍以下高等官は昔よりの慣例に依り何れも京都の公卿華族の姫達なることは今も尚は昔と變る事なけれど掌侍以下の表役なる高等女官中に初めて京都の公卿以外より召されしは先年物故されたる鹿兒島の税所篤子にて同女は故前左大臣近衛忠房公夫人として故島津齊彬公の女貞子入輿の時島津公の鑑識にて生涯近衛家に盡さんと近衛邸にありしに明治の初め貞子逝去ありしも毅然同邸にありしよしを宮中に聞へ篤子こそは天晴れ婦女の龜鑑なればとて其儘召されて楓の内侍と命せられぬ此の楓の内侍の他は概して京都出身の女官のみなりしが近き頃より判任官たる女孺以下には欠員毎に京都以外よりも補欠せらるゝ事となりしが此の判任以下の女官の中には昨今ハイカラ流の輩ありて生涯身を君に獻げて獨身を守り勤仕せんとする念なく何時にても程能き口もあれば嫁入せんと欲し又は宮中女官たりしを身の履歷として他へ嫁付く所の飾りとせんなど思ふものありて昔し風に辛抱するものなく何んとなく腰の据らぬ者もあれど京都出身の判任女官等は皆舊官家士族の女等にて豫て代々其母姉が女官勤めに慣れゐる事とて腰の据らぬなどのことはなく只忠義一圖に一生を宮中に勤めんと願へば宮城女官監督は是等のハイカラ女官を取締り今後は成るべく京都の官家士族の女の外を用ひざるに定められたりと洩承はりぬ。

處世安樂法

[illegible]刀自は處世の安樂法として左の如く語られたり、曰く『安樂といへば只安心して居るやうに思はれるが、決してさういふ譯ではない、身體を十分に働かして、閑思雜慮を除き虚心平氣で、物に應じて工夫をこらし、既往の過を悔ひず、將來の功を求めず、一心不亂に今日を渡つて行くのが自から安樂法であります、學問の事にしても、今日世間の事情に後れぬやう益々進んで行かなければならぬが、其中に又安心といふことを知らなければならぬと思ふのである、凡ての人が世の中を安樂に行かうと思ふのは誰しも望む處ろである、若い時はいろ〳〵と骨を折つて置くのは、老人になつて安樂に暮そうといふよりする事である、金を貯めて置くのも、子供を育つるのも、皆年を取つてから働けぬ樣になるゆえ、若い時は能く働いて財産を作り、充分に將來の經畫をするか、又は陰德を積み、慈善を爲し、其後になつて自然天の助を受くるやうにして置かなければなりませぬ、心を安樂に爲せるといふ事は即ち自分の義務を盡すことで自分の爲すべき事は正確に務めることである、それに唯人を倒して置いて自分ばかり餘計な儲けをしやうといふのは、或は一時思ふ圖に當らない事もあるまいが、人を損害して置いて自分で善いものにならうとしても、さう行くものでない、人を呪はゞ穴二つでつまり自分の身にかゝつて來ます、世には隨分相當な位地の有る人でも、人を排擠して其人の位置を奪つてそしらぬ顏して居る人がありますそりや固より直接に取つたのではありますまいが、何程遠廻りにしても自身の眞心で咎めるからして人が一向知らぬことでも、それに就ては言譯のやうなことを言ふのである、他の人の方では何とも言はないけれども、當人の方では問ふに落ちず、語るに落るやうなものでこれを局外の者から見ると可笑しいやうな事であります、實に不德義な事であらうと思ふ、口では德義のことや隨分立派な事を言つて居りますけれども、其德義は全く欠けて居るのであります、そういふ風な事は決して安樂の法ではありません、私のいふ安樂の法とは仰いで天に愧ぢず俯して地に耻ぢずといふ樣でなければならぬ、丁度狹い道路を通ります時に、他人の通る一歩だけを讓つてやるといふ樣にし又た甘いものを食するにも七分位にして殘りの三分は人に與へてやるといふ樣にするのが至極安樂の法であると古人も言はれました。

これを食事に喩へて見ても其通りで餘り澤山食すと宜けない、美味であるからといつて充分に食べると後で氣持が惡い、少し控へ目にして置けば實に氣持はよいのである、其控へる事が即ち安樂法である、されば成すべき事を爲さず、遊んで居つて、それで安樂を求めやうといふのはよろしくない者である云々。

晩婚婦人の福音

獨身生活も若い内は氣樂でよろしうムいますが、年を取つて參ると子供が欲しくなるのは自然の情でありませう、私は最初から獨身で終る決心で、三十八歳まで老女生で居りましたが、お友達の御心配で圖らず、嫁ぎましたので自分ながら不思議のやうに存じます、一つは親の遺言にも困りますけれども、又若いうちとは考へも變つて參つたからで御座いませう、私は方々の學校へ出ましても、始終傍ら自分の稽古中分の心持でしたから少しも倦むことは御座いませんでした、又晩年學校を辭して方々の御邸へ上るやうになつて以來は多勢へ一般的の教授致すよりは一個の方々へミツシリと自分の考を申上げることが出來て、身體は以前より忙がしく精神は愉快になりまして少しも獨棲の侘しさを感じませんでした、其間に私のやうなものでも貰ふと仰しやる方もありましたし、兩親も無論身の落付を望んで居りましたが、才知も容貌も立派な方でさへ、夫の愛を失つて煩悶なさる方が隨分あるのに私のやうな不細工なものが迚も樂しい家庭を作り得る筈はない、且つ子供を持つて面倒な世話をするよりは、最早親の御蔭で自分を過すだけの道も得られ、誰に遠慮も要らず自分の了簡通りに氣儘に暮す方が何の位宜いか知れないとまづ斯樣に思ふて居りました、偶にお友達と結婚に就ての談話が出る時は、毎時私が絶對の獨身主唱者であつたのは唯今から考へると可笑しいわけで御座います、一體獨身になつても未婚の内は男子の本當の心情がよく解らないもので兎角惡い點ばかりが眼に觸れるものですが實際妻となると誠想外な事もあるやうです。嫁して六人の子供に母と呼ばれるやうになつて見ますと俄かに責任が重くなつた心地がして、獨身時代に自分の一身を捧げて遣つて見やうと云ふやうな捨身的な意氣組はなくなり、子供の爲めに自分の身を大切にせねばならぬといふ自重心が起つて參つたのは確かにそれだけ生活が愉快になつたのに違ひありません、又獨身時代には餘所の子供達の我儘を見る毎に、母親が嚴重にさへすれば直るものをと存じましたが、扨て實際子を持つて見ますと仲々考へ通りには參りません。子供は左樣容易く親の命にばかり服從はしませんし、此方も獨りで考へる樣に嚴重には出來ぬもので厶います。

さて老女生が俄かに一家の整理に着手致しました時は總てが錯雜してどうしてよいかと惑ひました、殊に多勢の子供の着物の始末、別して小切の始末に困りましてチヨツト共切を捜すのに、彼方此方と引くりかへすのですから、どの位暇を費したか知れません、それで私は小切分類の必要を感じ、一日かゝつて小切類を悉皆座敷へ取りひろげ絹綿、紅絹、木綿等の小切を纖細に小分して疊紙や吳服函に包み一々上書して箪笥の抽斗へ藏つて置きましたので其後は容易く小切を探し得るやうになり、又誰にも分るやうになつて無益に時間を費す憂が無くなりました、そして鋏や糸類まで抽斗を一定して置き、何處で何を用いても終りには必らず一定の抽斗へ入るやうに致し子供の手道具や玩弄品も矢張り銘々一定の入場所を與へてありますから、幼い者もこの規則を守つて亂雜にする事がなくなりました。（菊池博士夫人の談片）

二宮尊德　貧富處世訓

麻　軒

富國安民を理想として、荒村の復興に天賦の辣腕を揮はれたる、相模の聖人、二宮尊德翁は、如何に吾等を敎訓せしか、また至誠、勤勞、分度、推讓の四大綱より成る報德主義を唱へて、道德と經濟を一致せしめ、世の爲め人の爲めに盡したる千古の偉人、二宮尊德先生は如何に吾等を敎訓せしかと、いふに、翁は實に幾多緊要の敎訓を垂れて、吾等の爲めに處世の要道、經濟の方則を示されたり。而も其敎訓の語は、恰も天の啓示の如く、神の聲の如く、吾等の肺肝に徹するものあり、乞ふ左に少しく之を紹介せん。

●小事を忽にするな

小さなる事に注意するは、處世の要道成功の秘訣なり。翁の敎訓に曰く、

「それ大事を成さんと思はゞ、宜しく先づ小さなる事を怠らず勤むべし、小積りて大となればなり。凡そ小人の常として、大なる事を欲して、小なる事を怠り、徒らに思を遠きに走せて、出來難き事を希ひ、却て手近の出來易き事を勤めず、かくては到底大事を成す能はず、是といふも畢竟大は小の積んで成れるものなることを知らぬ故なり。

見よ、かの百萬石の米麥も、小さなる一粒の米麥の積み重なれるなり。また萬町の田畑も、一氣に耕作したるにあらず、一鍬づゝの勞を重ねたる結果なり、また、千里萬里の道も一歩づゝ歩みてこそ到り着くものなれ、また彼の大山高岳も、もと一簣の土の積み重れるものなり、世の中の萬事皆な此の如し。

故によく此道理を辨へて、小さなる事に勵精まば、大なる事は必ず成るべし。小さなる事を忽にしては迚も大事は成就せぬものと知る可し。」と。

これ吾等に初から大を思ふべからず、宜しく先づ小さい處に注目せよと、目の着け處を敎へたるもの、洵に金玉の敎訓といふべし。

●勤勉と怠惰

翁は力を極めて勤勞を奬め、怠惰を戒めたる人なりされば人の勤惰を察することも頗る敏かりしといふ。

翁曰く、

「人の勤惰は、一寸したる言葉の端を聞きても直ぐに分るものなり。都會に生活するものは、兎角泣言を言ひたがるものにて、あゝ都ほど暮し悪き處はなし、田舍にては錢を出さんなど思ひも寄らぬ水の如きものにても、一荷何錢と錢を出して買はねばならぬ故、やり切れずと言ふ。是丈聞けば多くを聞かずとも、此男の怠惰漢なることを知らるゝなり。

然るに、多き人の中には、あゝ江戸程生活し易き處はなし、七轉八起きの世渡りをしても、一時生活に困難する時は、水一荷汲みても錢になること故、何と言ふても都は都丈に生計は容易なりと言ふものあり。この一言を聞けば直ちに此人の勤勉家たるを知るべし」と。

翁の烱眼、敬服の外なし。想ふに翁が斯く言はれたる眞意は、同じ水にても見方によつて苦樂を異にす。人は須らく世を樂觀して一心に勉强すべし、濫りに悲觀して怠ける樣な意氣地無したる勿れと、戒められたるものなるべし。

また翁は勤勉と怠惰を比較して言へり、

「世に貧富の別ありて、雲泥萬里の懸隔あれど、その本は僅かの差のみ、抑々勤勉なる者は明日の爲に今日勤め、明年の爲に今年働くなり、故に其身は益々富貴となるなり。

然るに怠惰者は全く右に反して、昨日の爲に今日務め、昨年の爲に今年稼ぐなり。かゝる譯ゆゑ、幾ら稼いでも追付かず、一生貧乏に暮らすなり。」と。

富は勤勞の賜物なり、貧は怠惰の罰當なり。翁の教訓、よく〳〵味ひ見る可し。

●富は内に在り

世人は富を以て外より來るものゝ如く思惟すれども、翁は富は内にあり、外より來るにあらずと說破せられ

たり。その語に曰く、

『人の富なるものは、人々の思へる如く外より來るにあらずして、內より生ずるものなり。譬へば猶は人の身體に於ける元氣の如し、嚴寒に衣を襲ねて暖を取、是れ其衣服の暖かなるにはあらで、身體の元氣に由りて、然く暖氣を生ずるなり。若しも暖氣が衣服より生ずるものとせば、かの路傍の石佛に衣服を着せしむるも、猶且つ暖かなるべき筈なるに、實際は然らず、路傍の石佛に幾枚衣服を着せても、その冷かなる事依然として變る事なし。



これと同なじ理屈にて、かの怠惰放逸にて、勤勉の心なき者に對しては、假令多くの恩澤を與ふると雖も、かれ決して富まず。そは彼に富むべき元氣なければなり、之に依て見ても、富は勤勉なる者の內心より生ずるものにして、外より來るものにあらざるや、明らけし。』と。

人は元氣が必要なり、已れに富を得べき元氣だにあらば富は求めずして來り、決して窮することなし。

●富來り財集る

世人皆な富を求むると雖も、その來るの理を知らず

しては、富を得ることとなし。翁即ち富來り財集るの理を說いて曰く、

『貧富は偶然に來るにあらず、富を得るも其得る譯あり、貧となるも其なる譯あり、人皆な貨財は富者の處に集ると思へど、左にあらず、節儉なる處と勉强する處とに集るなり今若し、百圓の身代の者、百圓にて手一杯に暮す時は、富の來ることなく、貧の來ることなし、然るに百圓の身代を八十圓にて暮し、七十圓にて暮す時は、富此に歸し、財此に集るなり、されど若し百圓の身代を百二十圓にて暮し、百三十圓にて暮す時は、貧此に來り、財此を去るなり、これ只だ天分以外に進むと、天分以内に退くとの違ひのみ。』と。家事經濟の任にあるもの、宜しく心得べきなり。

●多く稼いで少く遣へ

翁又曰く『多く稼いで、少く遣ひ、多く薪を採つて焚くことは少くする、之を富國の大本とは云ふなり。さるを世の人之を見て吝嗇といひ、又强慾といふは、大きな心得違也。

米は多く藏に貯へて、少しづゝ炊き、薪炭は多く小舍に積んで、焚くことは成丈少くし、衣服は着らるゝやうに調製へて、成る丈着ずして仕舞ひ置くこそ家を富ますの術なれ、これ經濟の根本にして、天下を富ますの道も此外にあるべからず』と、

これ又、家政を掌る者の心得べき好敎訓なり。

●豫備の心

人の世には未來あり、非常の事あり、故に豫め之に備ふるの心掛なかる可からず。此心を豫備の心と云ふ翁此事に關し極めて痛切の敎訓あり。曰く、

『世の貧しき者、饑饉に遭ひて飢餓に迫るは何ぞや。これ其心を常に豫備に用ひず、心掛の惡き故なり。若し夫れ豫備といふことに深く心を用ゐなば、敢て飢餓に迫ることなかるべし。試みに思ひ見よ、一歲は十二ケ月なれど、毎月米の實るものにあらず、米は只だ秋の一ケ月のみ實るものなり。然るに一年中敢て飢えざ

るものは他なし、人々豫め米の實るは斯樣のものと心得て、そが豫備をなし置けばなり。されば若し米をして三年に一度熟し、或は五年に一回實るとするも、人々斯樣のものと心得、豫め之が備をなさば敢て飢に苦しむことはなかるべし。

凡そ物の其時に至りて不足するは、畢竟みな豫め覺悟せざるが爲なり、故に人は常に未來の爲めに豫備をなすこと、極めて緊要なり。」と。

總じて人は心掛が肝要なり、常々未來を心掛けて準備する所あらば、非常の事あるも、まごつく事なく、心配する事なし。かの目前の事のみしか考へぬ今日主義は身を破るの本危しとも危し。

●身代の漏を防げ

人の身代を保つは、勤儉にありとの道理を、翁は面白き比喩を以て說き諭されたり。曰く、

「凡そ世の中の物には、皆夫れ〲、漏る箇處のあるものなりかの桶や小鉢の如き器の水は、下に漏るなり。されども人の財產は桶や小鉢と違ひ、上に漏るものなり。何となれば、美衣美食の贅澤して、上等の眞似を望み、上へ上へと漏り出せばなり。

さて彼の据風呂などは、釜の脇より漏り始むるものにして、人の身代は臺所の鍋釜の邊より漏り出すものなり。されば日々注意を怠らず、その漏る處を發見せば、大事に至らぬうちに、その漏りを防ぎ止むべし。」と。

飮食衣服に對する人間の欲望は際限なし、而して此欲望を協へんと欲せば、勢ひ生計の膨脹を免るべからず、されど斯くては到底身代は保てぬものなり。翁の此敎訓は、世の贅澤者流にとりて、頂門の一針といふべし。

●心を貧に處せよ

翁又曰く「心を貧に處する者は、常に富み、心を富に處する者は、必ず貧となるを免れず。例へば茲に白石の田產あるものにして、我が田產は五十石しか無き

ものと心得、常に五十石丈の生計を爲さば、常に必ず富まん。

然るに五十石の田產しか無きものにして、我が田產は百石もあるものと信じ、常に百石の生計を爲す時は終に無產の貧者となるべし。

要するに何時も貧に居る心持ならば、家門は榮え、富に居る心持あらば、家門は衰ふるものなり。故に心は常に貧に處して、敢て富に處すること勿れ、これ處世の秘訣なり。」と。

これ實に處世の秘訣にして、また家政の秘訣なり。家計を處理する者は宜しく此覺悟あるを要す。

●家人の謙讓

家庭の幸福、圓滿を希はゞ、家人に於て互に謙讓の德を守らざる可からず、此事に關し翁は敎へて曰へり。「今茲に八人暮しの貧家ありて、偶々一枚の着物を得たりとせんに、一人のもの之を取らんか、乃ち七枚の着物足らざるを如何にせん。依て先づ之を祖父に獻ずれば、祖父之を辭して曰く「老いて飾るも益なき身、何とて此新衣を要せん」と、之を其長子に與へたり。然るに長子は又之を其弟に讓れるに、弟は又之を受けずして其甥に讓れり、かくして、終に八人の家族を循りて、みな之を辭したりとせよ。

あゝ、これ實に掬すべきの有樣なり、其故は一人まづ之を取れば、則ち七枚の着物足らざるなり。然るに銘々之を讓れば、則ち一枚の着物にても、尙ほ餘りあり。均しく一枚の着物にても一は足らず、一は餘りあるは何ぞや、是れ家人が謙讓の德を守ると否とにて、かくは天地の差を生ずるなり。此一事に見ても、如何に謙讓の德の大なるかを知るべし。」と。

翁の家庭訓、誠に其理を盡したるものと謂ふべし。

●讓りて奪ふな

翁の唱道せる報德の敎義は讓道を本旨とし、百事人に讓るを以て人道となせり。而して既に讓ある以上はその半面に奪あるを免れず、翁は此讓奪の說明に就い

て、面白き譬喩を用ひられたり。

『夫れ人道は、人に讓りたりとて、敢て損する所なくまた人より奪ひたりとて敢て益する所なし、結局は水準に歸するものなり。かの讓る者は、敢て利を求めずといへども利自ら來り、奪ふ者は、强ひて利を求むるも、而も利また自然と元に還る、畢竟水平に歸するの外なし。



今、解り易き譬喩を以て、之を示さんに、こゝに半ば水を湛へたる盤器あり、手もて彼方の水を頻に此方に搔き寄すれば、一時その水我か方へ來る如しと雖も其實暫らくにして復皆向ふへ流れ還るなり。然るに之に反し、我が方の水を彼方へ推し讓れば、一時その水彼方へ行くが如しと雖も、其實復た皆な我が方へ流れ戻るなり。此の如くして少しく推せ

ば、少しく返り、多く推せば多く返る、これ物理の自然、天の常道なり。

此理は單り水のみならず、彼の下等動物といはるゝ禽獸蟲魚も亦た然り、我れ彼に食餌を與ふれば、喜んで來り、彼より之を奪へば忽ち去るにあらずや。また彼の無心の稻粱野菜も亦た然り、我れ之に肥料を與ふれば、則ち繁茂して、我の收穫を多くすれども、若し肥料を與へざれば、倏ちにして枯れ衰ふべし。讓奪は天地の自然、亦た爭ふ可からざるなり。』と。

讓奪の辨說き得て妙、人道處世の奧秘を天に代つて啓示するものと謂ふべし。

●交際は碁將棋の如し

翁は又人と人との交際法に關して敎へて曰く、『交際の道は、碁將棋の道に則るを可しとす。それ將棋の道は、强き者駒を落して、對手の力と相應ずる程にして指すなり。甚しき懸隔に至りては、京桂を外し、飛車角を外し、又歩三兵といふまでに駒を外して指すなりこれ將棋の道にして又交際の法なり。己れ富み且つ才藝あり、學問あり、而して先の人貧乏ならば、此方の富を外すべし、また先の人不才ならば、此方の才を外すべし、無藝ならば藝を外すべし。無學ならば學を外すべし。これ人と交際するの法なり、すべてに此の如くせざれば交際は出來ぬものなり。

若しまた己れ貧にして不才且つ無藝、無學ならば、碁を打つが如く心得べし、即ち對手の人富あり才あり且つ學あり藝あらば、幾目も置いて交際すべし。これ碁の道にして又交際の法なり、人と人と相對する時は宜しく此理に隨ふべし。』と。

洵に此理を知らば、上とも下とも、賢とも愚とも、金持とも貧乏人とも、如何なる類の人とも交合て行かるゝなり。敢て交際を難しとして、世を遠ざかるの愚を學ぶ可からず。

●呼ぶ兒に答へよ

翁また世間の母親に對して敎へたることあり。曰く

「頑是なき小兒が、戸外の遊戯を捨てゝ、急に我家に走せ歸り、門口より阿母さんと呼ぶことあり。さるに心なき母親は此聲を聞くも空耳走らして應答もせず、甚しきは五月蠅し、やかましと頭から叱り飛ばすものあれど、不量見も甚しといふべし。

小兒が阿母さんと呼ぶ一言の内には、可愛らしき意味が含まれ居るものなり、今其心根を寫し出せば、母さんは今何をして居給ふぞ、若しか其影が見えずなりはせぬか、さるにても心許なしとて、急に母親の事を思出して、我家に走せ歸り、母を呼ぶものなり。頑是なき小兒は口には左うとは得言はねど、腹の底には正して此心持ありて、母を尋ぬるものなれば、かゝる場合母親は疾く應といらへしてやるべし。

さすれば、小兒は母の影は見ぬまでも、その聲を聞き安心して、復た走り行きて遊ぶべし。世の母親たるものよ、我子に呼ばれて應答するに何の面倒があらうぞ、疾く返事して小兒を安心さするは、母の義務なり」と。

父母の丹精によりて子供は育つものなり、さるを僅かばかりの面倒、手數を厭ひて、大事の子供を忽にするもの多し。翁之を憂ひて乃ち此の敎訓あり、世の母親たるもの、此に注意せざる可からず。

翁の處世訓、經濟訓は尙ほ頗る多し、餘は本誌の都合を見て、更に紹介することあるべし。

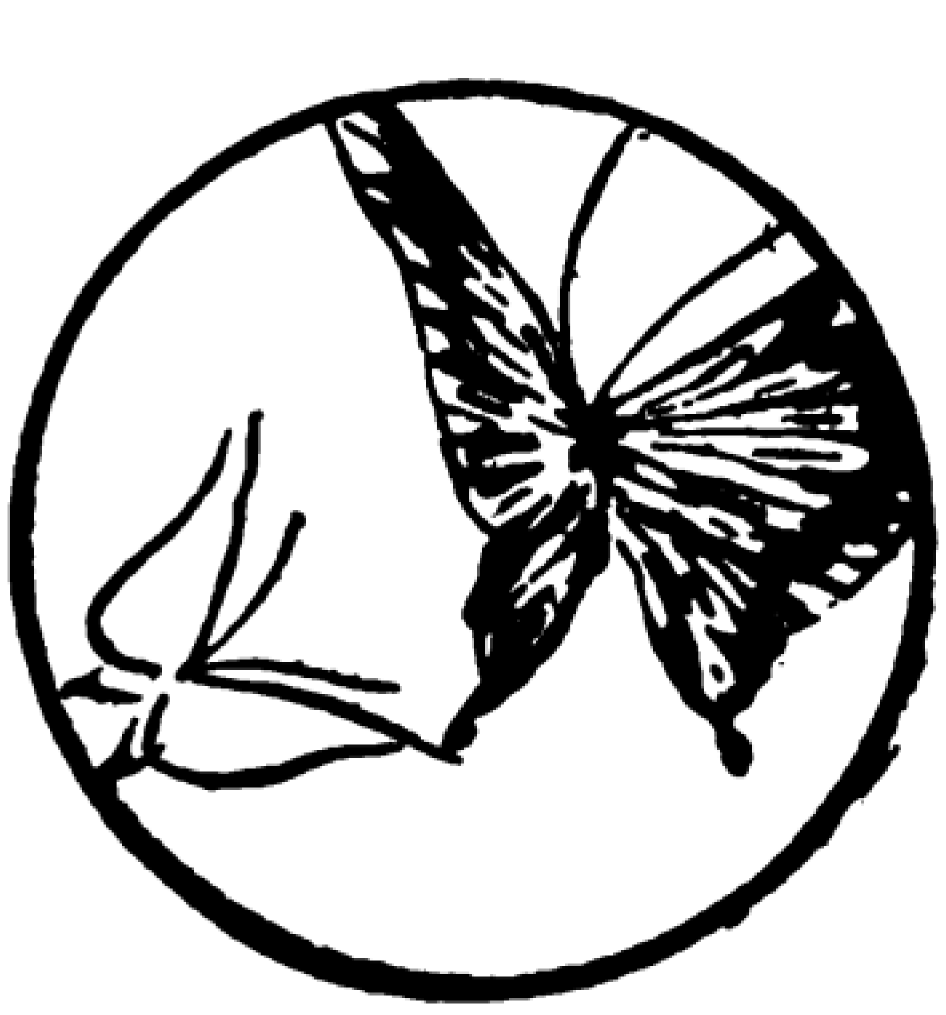
節儉

節儉といふ詞は家政を整理するの義にして殊に出納を整理するをいふ、節儉は三種の法によりて之を行ふことを得べし、第一冗用の數を減ずること、第二浪費を省くこと、第三少許のものを利用して多量を代表せしむること是なり、支那人はこの三法の何れより言ふも非常に節儉なるがごとし、凡そ外人の支那に入りてまづ感ずるものは食物の非常に質素なるにあり、多數の人民は只米　稷、種々に調理したる豌豆、野菜、魚類等の如き僅に數種の食品によりて生命をつなぎ、四億に餘れる人民の常食、此外に出です、只祭日、又は特別なる時に於て一片の肉を添ふるのみ。支那國民の節儉は即ち支那の富の源なり。

贅澤は外面だけ

米國では若い娘は監督がついて若い男と交際致すのですが、彼の男子と彼の婦人とは屹度約束をするだらうといふ事は、大抵交際振りで判ります、よく皆で噂を致します、併し婦人がしつかりして居りますから結婚前の過失は滅多にありません、總て男女の間柄に就ては我國のごとく酷く疑はない樣です、其代り結婚の約束を破られたとなれば、女子の迷惑一と通りでなく、他の結婚の口も遠くなつて氣の毒なものです、結婚を申込まれるのは、夜會へ屢々出る女子に多いので、昔は善い身分でも今は零落して居るといふ樣な家の令孃などは自然口が遠いのです、米國の緣談は財產との關係が隨分あるやうです。

　交際社會に出て居る時には、何樣な贅澤な生活向の婦人かと想はるゝ者でも、家では質素な生活をして居るので、針など持つたことは無いだらうとおもはるゝ婦人でも、家では始終裁縫をして居ります、儉約と申しても食物には充分滋養分を擇びますし、交際には綺羅を飾りますし、何樣いふ點が日本の婦人より儉約なのかと申すと、萬事規律正しくして臺所に無益な炭火を費さず、時間をも無駄に費しませんから下女の頭數も省け、食料も少くて濟むわけなんでせう、公使にもなれる資格のある或家では、只ボーイと婢僕二人だけ使つて居りましたが、始終交際に忙がしい妻君にどうして家事が出來るかと疑はるゝほどでした、併しこれは不思議でない、家の掃除は一週間に一度づゝ廻つて來るものに賴み、洗濯は赤子の襁褓まで洗ひに來る支那人に賴んで居りました、支那人は賃銀が廉いので何處でもよく支那人を賴みます。（樺谷夫人の談片）



老婦人の處世覺悟

秋風

凡そ處世の法を說くは、要するに年齡少くして世故に經驗乏しく、未熟なる人に向つてこそ其の必要もあるなれ、旣に家婦となり、子女の敎育に從事しつゝある壯婦に於ては日常の經驗旣に熟して百方の架說大半は無用の長物のごとき觀あるべし、況んや老婦人に於ては數十年來の實驗、世帶の萬事を呑込みて千萬言の新說も徒らに黃口乳臭の辭と見做すに過ぎず、今此の老婦人に向つて處世の覺悟を說く、卽ち釋迦に說法、孔子に仁義をいふと一般の無駄言ならん、然らば世の老婦人に對しては、一切處世法を講ずるの必要なきかといふに、必らずしも然らず、否單に必要あるのみならず、解釋の仕方によつては、妙齡の婦人よりも寧ろ却つて此の老婦人に忠言すべき事多きの事實を發見すべし、其故如何、蓋し境遇の變化と年齡の傾倒によるものなり、卽ち婦人年老ゆれば萬事懶くなるものなり、隨つて責任の地位に居難き事情あり、地位と境遇に變化を生ずれば隨つて亦心身に變化を及ぼして、昨日の圓滿は今日の偏僻となり、去年の滿足は今年の不足となり、爲めに透明玲瓏なりし心鏡も又多少の曇りを生じて自然事物に對するの觀察僻み、これが爲めに一家に風波を及ぼす事なきにあらず、是れ世の老婦人に向つて多くの苦言を呈するの必要ある所以なり。

△娑婆氣を離れよ

されば婦人にして旣に年も六十を過ぎ、子供もおいおい成長して獨立の見込も立ち、惣領に嫁をも迎へたらば、家事一切を後繼者に讓り渡し、自分等は別居して再び浮世の俗事に念頭を勞することなく、其欲する處ろに隨ふて樂しく餘命を送るこそ尤も賢こき方法に

して、又人として當然の事なるべし、されど世間一般の例を見渡すに、兎角はこの事實と相違して、姑嫁の間に風波起り、惹いて實子の仲まで相反目するに至るもの多し、其の緣因を糺さば種々の理由あるべしといへども、世間公平の眼より見來る時は、矢張姑の娑婆氣多きが爲めなるべし。

抑も嫁となるものは大方妙齡の處女にして假令天稟は何程怜悧なるも又たとへ學校の成績は如何に優等なるも、家政は讀本にて讀みたらんも、實際の經驗はなきものなり、これを姑が四十年の經驗、百練千磨の家政眼より見て、如何で完全なるべきや、欠點だらけ、不足だらけ、不始末だらけは其の筈なり、されど翻つて其のむかしを顧みたらば、思ひ當ることあらん、又其の頃と現今とは時世の變遷殆んど別天地のごとく、日常の生活法に就ても今の昔に優れる事萬々、今の女性は昔のそれに比して多くの事柄を知り多くの學術を知り、多くの趣味を持つのみならずその理想は高く、其の交際は廣く、其眼界自然に卓絶して、物理を知り、科學を知り、算數に詳しく、到底五十年のむかしに敎育されたる老婦人の解する處ろにあらず、唯に是れ赤面、羞恥の料たるのみにあらず、偶々物を言へば徒らに己れの無學を廣告するに過ぎず、唯頼むところは實地の經驗として、僅かに世帶の事に大なる過ちなきを致したる位に過ぎず、それとて無學の我れだに成し來りし事なれば、我より學識ある嫁のいかで克せざることあらん。一兩年のうちには天晴の所帶持となりて立派に家事を按排整頓し行くこと何の造作もなき事なるべし。

△安心の前驅

されば姑たらんものは、機會を見て速かに嫁に世帶を讓り渡し別居して老後を安樂にするか、さもなければ同居しても室を異にし、なるべくは朝夕の食事は一所にするも衣服、其他の些事を別々の經濟に移して、若夫婦の事は若夫婦に任せ、老人は老人自身の手にて取りまかなふをよしとす、是れ一見甚だ他人がましき

様なれども、人各々好む處ろあり、趣味を異にして性質を異にし、飲食、衣服共に好惡の同じからざるものなれば、銘々の勝手に任ずること屈强の謀といふべし、勿論これは其家の生計の度に依つて悉くこの主義を實行するは困難ならんも、家計に甚だしき支障なき限りは斯くするこそ互ひの爲めにして後日の紛議を避くるの良法なり。

右は既に我家に嫁を迎へて若夫婦の身上、一段落を



告げての後に實行すべき姑の心得なるが、さて母親たるの義務として我が子の爲め、即ち我が家の爲めに尤も愼重の考量をなすべきは嫁の撰擇なり、如何に我身は老後の安樂を欲すればとて、嫁にして我が家に不似合ならば行末甚だ心元なくして、心配の種、老樂の障りたるべし故に、嫁を娶るは母親に取つても又一生の大事たるべく、其の始めを愼重にして、苟しくも匆卒輕跳に定むべからず、さればまづ尤とも信ずべき筋を求

めて聽き合せ、念を入るべきは勿論、男子は物事大やうにして屆かぬ勝のものなれば、母たる者十二分の注意を加へ、媒介者の上手な口に乗せらるゝ事なく、善き事は聽くに及ばず、寧ろ注意を惡き方面に向け、欠點を委細に糺してよく〳〵吟味し、その位の事は苦しからずと思はゞ表向に申込むべし、我方にも欠點は必らず有るものなれば、それを隱さず露出して双方得心づくにて結婚談を進むべきなり、それにはいろいろの方法もあらん、或は西洋流にまづ懇親を結び、本人同士は勿論、親も双方往來してよく觀察し、交際したる上にて取極むるもよし。

斯くして娶りたる上は、たとへ存外の欠點ありとても家名に拘はるほどの大事ならずば、所謂因縁づくとおもひ諦らめ、陰に陽によく敎へ、其欠點を決して人に語るべからず、我れ眞實慈愛を以て之れに臨まば、嫁も又化せられて次第によくなるものなり、これを敎ふる事始めにあり、如何なる我儘者にても嫁入したる當座は柔順に姑の言を聽くものなれば其機會を逸せず萬事を都合よき樣に敎へ習はすべきなり、然るを其當座は珍らしき儘に嫁をば客の如く待遇し、何事も十分に爲すれば人間自然の我儘それより生じて嫁は次第に附上り、漸々氣儘の本性を顯はして始めの愛は憎みと變り、忽ち風波穩かならず、終に仇敵の如く、成り行くは畢竟それ若き者には罪なし、老婦人が敎訓の機會を逸したるぬかりといふべし、されば兎に角善良なる嫁を撰むは姑たるものゝ安心の前驅なりと知るべし。

△所有權を定め置くへし

さて又善良なる嫁ありていよ〳〵緣談定り、日ならず入嫁と決定したらば嫁の來らぬ前に家に附屬の道具衣服より世帯に就ての必用品の外は取除きて、新夫婦に讓り渡し、その除け置きたる品の中より折に觸れて褒賞のやうにして一二品づゝ取り出して嫁に與へなば嫁も有難くおもふべし、若し然らずして始めより一切を新夫婦に讓り渡さんか、假令親の苦勞によつて調へたる品物なればとて一旦讓り渡したる上は、所有權は

既に子に移りたるものを取戻すは大いに感情を傷ふものなればなり。

而已ならず、姑は家事を讓りたればとて我が生みの子供も數多あるべし、老人同士の交際も猶存すべし、それ等の者へ時々の進物、贈與等豫め其準備なかるべからず。我が手許に多少の貯蓄は是非必要あり、始めは我が子可愛しとて田も畦も丸任せにして置きながら、後にこれは我が物なり、猥りに使ふべからずなどいふは、親子の間柄として如何にも水臭き樣なれども、既に誰彼の者として名のつく上は、致し方なし、是等の事は骨肉の子女と雖も間々あることなり、況んや肉親ならぬ嫁に於てをや。



△息子に對して孝行を強ゆる勿れ

前述の通り、父母は父母の財產を擁して別居するが最上なれども、これは中產以下にては經濟の許さゞる爲めに據なく同居するとも、其の居室は必らず別にし、三度の食は一卓を圍みて爲すをよしとす、而して各自一身上の被服其他の買物乃至は外出の費用の如きは若夫婦の厄介にならざるを

よしとす、一から十まで息子に金錢を出させては、親は當然とおもへども、子の身に取つては甚だ有難からず、假りに老親と妻子と孰れが可愛きかといへば、古今無類の孝行者ならばいざ知らず、まづ十人は十人まで親よりも妻子の方に心の傾くが人情なり、其の孝子といふも未だ妻子の愛を知らざる內の事にて、妻子の愛を知りたらば孝子も存外不孝の子となるやも知れず必竟親を愛するの度は妻子を愛するの度より淺きは人間の本性にして此の本性は道德の力を以てするも、聖人の敎を以てするも亦如何ともする事能はざるものなり。されば妻子に物を强請らるゝは當然の事として毫も怪まざるのみならず、却て可愛き心地もすれど、親は養ふべき義務ありとはおもへど其の餘の事は案外の心地してよき親をせざるが常なり、斯くて度重れば親は腹を立てゝ不孝者と罵る事あり、子は親を厄介視して老の心ますます僻み、親子の爭論絶間なきに至らん、斯くては誠に歎ずべし。

されば斯の紛紜なからむが爲めに、老人も世帶を渡す前に多少の私有財產を貯へ置くの必用あるは勿論の事にして、凡そ人世三四十歲にもなり、子供の二三人も出來たらば、其時より旣に老後の計を慮り、歲月と共に貯蓄すべきなり、其額の多少は其の平素の生活と各自の手腕にあり、よしや少しづゝにても積めば必らず其效あり、光陰は流るゝ水のごとし、十年二十年の過ぐるは夢の間なり、紅顏の美人忽ち白髮の老嫗となる、旣に老來りて後は又如何ともすべからず、されば一日も早く思ひ立ちて貯蓄なし得べき境遇の人は節儉を以て貯へ、其境遇にあらざる人は何なりと手藝を覺へて、分相應の貯蓄法を講ずべし、遠き慮なきものは必ず近き憂ありの語を念誦して忘るべからず。

△退隱の覺悟

世俗に老婦の理想として兎角に無智氣儘なる事を妄想するものあり、息子に嫁を迎へて世帶を讓り、隱居して左團扇の樂をして孝養を受くべしなど其の隨一なり、誠に身勝手千萬の贅澤といふべし、斯る事を當に

するは恰も千萬人中に一人の當り籤を我れに落つるものと夢想する富籤買と同樣の馬鹿考へといふの外なし、これ等は恰も娘を喰物にする花柳社會の者共が、玉の輿に乘ることを唯一の目的とすると更に撰ぶところなし、元來世の中は苦樂相隨のものにして世事に絕體の苦もなき代り、又絕體無限の樂といふべきものもなし、何事も責任を負ふて心身を苦め、辛勞すればこそ一方には自由の利く事もあり、又愉快な事もあるものなり、隱居して閑散になれば身は安樂にして配慮する事なき替りには、金錢貨物には自然緣遠くなるは當り前の事なり、それが否なら始めより勞苦を忍びて退隱せざるに如かじ、されど悲哉新陳代謝は世の定理、心ばかりは猛くとも、身體既に衰へて勤めに堪へ難くなり行きて止むなく後嗣に世を讓つて老朽を養はざるべからざるに至る、或は病の犯す處となりて、死期忽に至り、一日の安をも得ずして生涯を齷齪の間に畢るもあまり稱すべき話にあらず、世を讓るは老者の賢こき業なり、既に讓らば金錢貨物に煩惱を殘すなき樣、心を潔よくすべきなり。

△諦めを潔くせよ

老年に及びて第一に心懸くべきは人に疎外せられぬ工風なり、老ゆれば兎角若人に忌み厭はれ易し、我が若かりし頃、老人の處作を片腹いたしと思ひし事、又姑に叱られし事、などを追懷して成べく心を廣く持ち氣を寛潤にして瑣細な事に頓着せず、若き者共の邪魔にならぬ樣常に心かくべきなり、さればとて當然の事を遠慮するには及ばじ、嫁などに對してあまり謙遜なるは却つてよろしからず。

又老ては兎角に心の焦燥つものなり、壯少の頃悠長なりし人も老ゆれば自然氣短くなるものなり、況んや氣儘に暮らし　人は怺へ性なくなつて暫時の猶豫も出來ぬものなり、その情を察して老人に焦燥させぬ樣にするは嫁の勤めなれども、これ卓ぐれたる才女にあらざれば出來ぬ事なり、普通は多忙の爲めに忘れ、或は事に紛れて手遲れとなるが常なり、斯る折には成べく

寛して待ちてやるべし。

老若は自然其意の反するものにて若者の面白く笑ひ興ずる事は老人に焦燥の種となり、老父の喜ぶ事は嫁には嬉しからぬが多し、されば老人はなるべく若者の爲す事を見ざる聞かざる、言はざるをよしとす、この三猿を守るには別居を上策とし、同居するにしても常に外出勝にして友を訪ひ、神佛に詣で、又は壯健ならば旅にも出でゝ山海の佳景に世事を忘れて命を延ぶるなど在宿の日をなるべく少くすれば自己は心も紛れて面白く、若夫婦は氣を易くして特に歸宅すれば珍らしさに大切がられて歡び待たるゝものなり、さて又若夫婦の遊びに出づる時には、留主居となりて互に娯樂を分ち、隔意なくさら／＼として餘命を送る又樂しからずや、これぞ眞の樂隱居とこそいふべかりけり。

以上の言、平凡にして他奇なしと雖も一辭を酌んで味ひ給はゞ、安樂の法は自から其間に存在すべし。



△肉體的美人の標本

身の丈高く、色白くして顔圓く眼も丸くして太く、愛嬌あり鼻高からず、低からず、肉肥へ、頬渦紅色にして、艷々しく、唇紅にして厚く頭、髮濃くして多く、眉毛薄からずして新月を描き、頸長からず短からず、齒小くして並び揃ひ、色は眞珠のごとく、指細くして長く、脈太からず、脚長く直立し、脊すらりとして肩の怒らざる人

△精神的美人の標本

頭腦透徹にして是非の分別明かに、機敏にして才智働らき、常識あり、同情あり、普通の學問あり、算數に暗からず、嗜好高尚にして美術を解し、言語明晰、應對優美、音聲美妙にしてよく相手を樂しまする人

無益な物を買はぬ秘訣

新世帯の當時は何所の家にもあまり道具のないものなるが、少しく年數が經つと、彼れの是れのと段々殖へて來るものである、而も十分整理して見ると餘り日常に入用の少い道具や、さうでなければ役にも立たぬがらくた道具などで本當に始終重寶じて用ゐて居るものは幾らもない、それで道具數が澤山あつても、矢張り不自由を感ずる場合が多いといふことになるのであるが、どうしたら此の無駄なものを買はずに濟むかといふと、實驗上まづ普通の新世帯で家族が夫婦きりなら二人の生活して行くために必要欠ぐべからざる道具と、客があつたら番茶でも入れて出すだけのものだけ調へて置く、するとの追々時日の經つ中に不自由なものが出來る、不自由をする度にあれも欲しい。これも必要だと思ふけれど、その度に買うならば前に言つたやうに追々無駄なガラクタ物計り殖へるから、一度位不自由な目をしたものは、まづ耐へて買はずに置く、同じものがないために、また一度不自由をする、今度も堪へる、そして更にもう一度其物の無い爲めに不自由を感じたなら、今度は早速調へてよいと思ふ、餘り長くない時日の間に三度までもその物のない爲めに不自由を感ずるほどのものであつたなら、必ずその先きも度々入用なものに違ひないのである、また有る方が都合はよいがなくても大して差閊へはないといふ樣なものは買はぬ方がよろしい、節儉といふ事は斯ういふ處ろにあるものです。私の處ろには夏の座布團は五枚しか用意してありません、それは一と夏一二度位、この部屋に同時に五人以上のお客のある事もありますが、一年に一度や二度入用の爲めに、更に數枚の座布團を拵らへる程のこともないと思ふからです、無駄な道具を買ふまいと思ふなら努々も物の必要な場合に出逢して見ぬ中に、これも必らず入用だらうなどゝ、見越して買うことは禁物です、そして譬へ必要な場合に出會つても前に言つた通り、たつた一度會つた計りで直ぐ買つてはいけません、二度三度同樣な場合に出あつて初めて買ふに限ります。(佐治氏家政談片)



世帯女のくり言

あきしく

浮世の辛いも酸いも御存知なく、星にあこがれ菫を慕ひ、何事にも只だ希望の影を逐ふて、目に映ずるもの耳に聴くもの唯だ面白く樂しき外に、何の苦勞も心配も無い處女達も、一たび結婚して家庭の人となると、全然境遇が一變して了ひますので、漸く世の世智辛い事や、世帯の難義な事を覺え初むるのでございます。謂はゞ理想の境遇を脫して現實の苦境に踏み入た譯で、而も一家の奥樣と云ふ重大な責任を脊負つて、浮世の風と鬪はねばならぬのですから、其辛酸苦楚は幾そばく、春風徐ろに吹いて和氣靜かに薫する和樂の家庭の細君も、一面世帯の苦勞には花の容も窶れて、急に年齢を加るので御座います。

△嫁入當時の不手廻り

さて、嫁入當初は總てが樂觀的で、何も彼も只だ樂しく面白く思はれ、夫の優しく言ふて呉れる言葉も嬉しく聞かれまして、他からは初々しくも戯事の樣にも見えませうが、自身は一パシ世話女房になつた氣で、襷掛の甲斐々々しく働くにも張合あり、兼て習ひ覺えた家政の智識を實地に試みて、日頃の理想を實現するは今此時と元氣好く、何事をも愉快に致すのでございますから、嫁入の當座程樂しいものは御座いません。

然し段々居馴染んで、良人も心を許すやうになり、姑も信用して呉れて何も角も任されるやうになると、一切萬事自分一人に降り懸つて來て、勝手元の指圖をせねばならず、經濟の心配もせねばならず、針仕事もせねばならず、夫の世話もし面倒も見なければならず、姑の機嫌も取らねばならず、世間への義理も立てねばならず、客が來れば御馳走もせねばならず、時には女中に小言も言はねばならず、さりとて餘りにテキパキやり過ぎて家族の感情を害しても不可ず、また好人物

なぞと人に見縊られる樣でも不可ず、そんなこんなで忙しい思ひをした上に、氣骨が折るものでございます。

　習ふよりは馴れろで、何事を致すにも經驗を積まねば巧くゆくものでありません。いくら理想は立派でもさて其を實際に行ふとなると、勝手の分らぬこと許りで、迚も理想通りに行くものではございません。例へば私こそ料理は人よりも餘計に勉強したから、主婦となつても餘り差閊はなからうと心竊かに自負しておいでの方でも、さて之を實際に試みる段になると、道具も不完全であり、材料も不揃ひであり、稽古の折とは總てに調子が違ひますから、兎角失敗り勝のものですそして夫から不意に是々を拵へて呉れなぞと命令されると、一寸當惑するやうなこともあります。高が煑炊の事でさへ然うですもの、況して會計事務や家内の整理や、育兒の事など、何うしても實際の經驗を積まねばなりませんが、經驗を積んで總ての呼吸を覺え、手に從つて處斷されるやうになるまでは、却々困難なものであります。



懸賞繪探し (3)

　次に若き細君の心を痛する問題は何かと申すと當今の樣に十人が八人まで生活難を唱へる時勢に在つては、何の道、經濟上の心配は免れません。たとへ收入の少い貧世帶でも、夫婦心を揃へて節儉する氣なら、何うにか暮らしても行かれますが、ひよつと夫が大酒家で、友達を

連込んで晝夜の別なく獻酬すのを好むやうな人であつて御覽じろ、その妻君は客膳の栞拵へに忙殺されて、世帶馴れぬ身の臺所でまごく\する樣なこともあります、夫の爲に忙しい思ひは厭はぬにしても、月末の拂ひの肝を潰すほど多いに當惑し、遣繰算段の末は用意して來た衣類も追々融通に與げるといふ始末になり、それでも偶々來訪する生家の母なぞには此有樣を見せまいと、勉めて御馳走して餘裕ある如く見せかけ、一寸外出するにも一枚看板の晴羽織を引掛けて體裁を繕はねばならぬといふやうな譯で、かゝる場合に於ける心配苦勞は一と通りでありません。

たとへ夫は酒呑でなくとも、贅澤好でなくとも、何しろ米が四升臺に上り、澤庵一本が十錢もする樣な今日ですもの、迚も樂は出來ません。其に準じて總ての諸式が高價ゆゑ折角豫算を立てゝあつても可成く控目にしないと、遣ひ過ぎて了ひますし、さりとて餘り約めても夫に不自由させますから、時には苦しい遣繰もせねばならず。又人には不慮の場合のあること、いつ何時災難にかゝらぬとも知れぬ、病煩ひの無いとも限らぬ、その時の用心の爲めに貯蓄もせねばならず。また子供の心配もあり、老姑の世話もあり、家族一切の衣服の調製やら臺所の立働きで、却々閑隙がありせん。

△世帶の苦勞

若し夫れ苦しい仲に子供の二人も出來る、收入は相變らず少いとすると、こゝに生計上の大變動が起つて一層の困難を感ずるのであります。その爲め隨分狼狽したり、氣を揉んだりなさる方もありますが、さりとて俄かに好い分別も出ず、夫に相談せんか、けれども世帶の苦しいとを夫に知らせて心を控かせなば、出世の妨げになるからと思ひ、內職のやうな事をして幾分家計の補をしやうかとも思へど、そんな事をしては家庭の爲め子供の爲めにもよくないから、まあ儉められる丈は生計を約めて行かうと、薪の數にも注意する奧さんの腐心、容易な譯ではありません、竈の前に屈んで竊と淚を前掛の端に拭きたまふ場合もあるのでございます。

それから着物だとても苦勞の種でございます。新奇新奇と流行を追ふて夏冬の物を揃へたまふ方は別として、收入の少い世帯では家賃を拂つて喰べて通るのがぎり／＼一杯ですもの、何で着物を着る餘裕なぞがありませう、夏の物を冬着に直したり、冬着の綿を拔いたり、姑息の手段で其時其時を彌縫して間に合せてゐる方が多いのでございます。けれど其にしても良人丈は人中に出ること故、體裁惡い裝はさせたくないと羽織の縫ひ方にも氣を付け、洋服も可成く新しいのを調へるやうにと、其の代り子供や自分は別に交際も要らぬ身なれば、古い物を拵らへ直すとも滅多には買はぬやうにと、また自分が着て派手過る着物は娘に直し、段々下の子に讓るやうにと、小切の樣なものも疎末にせずして貯つて置けば何ぞの役にと、細い處にまで心を配らねばならぬので御座います。



懸賞繪探し (4)

また召使を抱へれば抱へた丈にいろ／＼と苦勞が殖えるもので厶います下女を雇入れても、此方の待遇が惡くて、度々變るやうでは世間に對しても外聞が惡し、さりとて目を懸け過ぎても增長り叱れば膨れるし、正直に働いて貰はうと思へば、極つた給金の外に餘分の心付もやらねばならず、掃除は丁寧に、勝手は淸潔に、そして火の元の用愼をと注意もせねばならぬ夜は早く寢かして、其代り朝は夙く起きてと世話も燒かねばならぬ、又時々は暇をや

つて保養もさせねばならぬと何や角や面倒なものでございます。あゝ、思へば主婦の職務程困難なものは無からうかと思ひます、

△中流生活はどんなもの

以上は中流以下の骨の折れる世帯に就いて申したのですが、豊かな身分とても矢張苦勞は免れません。貧しい生活をなさる細君方の言草に、勤儉貯蓄も聞飽きた、中流以上の豊かな生活なら規則も立つし、儉約の方法も何も講じられるし、別に苦勞もしないで自然の境遇が良妻にして了ふけれど、自家のやうに收入が少くて子供が多いのでは、迚も遣り切れたものではない、好い月日の下に生れて來ないのが此方の不幸さと、愚痴を滾されますけれど、收入が多くなつて、家政が裕かであれば、其丈に家の構も大きく、客の出入も頻繁でありますから、下女下男の二人や三人は抱へねばならず、體裁も張らねばならず、其に準じて萬事にかゝりか致しますから、小さな經濟を繰廻して居る者よりは遙かに手腕を要し、決して氣樂な譯には參りません。

私の懇意の家の奥樣は、月々二百圓も這入る身分のことですから、定めて樂にお暮しになり、貯蓄も相應にあることゝ信じ、いろ〳〵活計向の話の出た序に、此事を伺ひましたら「どう致しまして、私共の活計で貯蓄などの出來るものですか、いつも月々一杯で暮して居るのですよ、何うかすると足らない月も御座います。御覽の通り、そんなに贅澤は致さぬ積りですが、其でも毎月の出費が多いものですから、何うしても殘すところへは參りません。まづ有の儘を申上ますと、第一主人の小遣、車屋に拂ふ金、下女二人に書生も一人居ります、それに子供が三人、内二人は學費がかゝります、老人にも相當の手當を致さねばなりません、彼是この方に四五十圓はかゝります。それから勝手向の費用、日々の雜用、これが何うしても七十圓は缺かしません、また四季折々の衣裳、是とても唯だ世間並にする丈で別段奢の沙汰は致しません、それに家族の保險金、京都へ參つて居る弟の許へも月々十圓は送りますし、家賃が月々三十圓、さあ斯う計算して見ますと、

残る處は些度も無いのでございます、それで私共は別に氣保養をする譯ではなし、年が年中忙しい思ひばかり致して居るので御座います」と仰有いましたが、成る程收入が多ければ多い丈に、生計も膨脹致しますから、米櫃を覗いて見る樣な苦勞は致さぬまでも、身分相應に矢張骨が折れるのでございます。況して大地主とか大富限とかになると、其丈の格式を持ちますからその家政を切盛りする主婦の辛勞は又た格別なものがあるのでございます。

簡易なる生活主義

待月女

人にも尊められ、我が心にも滿足し、現在に思ふ事を爲して、未來に望みも低くからず、其の上物質上の榮華をも爲し得べく、宏壯な家に住ひ、美麗なる衣服を纏ひ、毎日の食膳に美味佳肴を陳ね、安樂にして此の世を送らん事は誰しも望む處ろなるべし、されど世間一般の人に對してこの望を滿足させん事は到底不可能の事とすべし、されば人はまづ、其の日其時の境遇だけに滿足し、其身其分限に安んずるの覺悟が大切ならん。

今若し銀座の街頭に立つて欲しい物を買ふとおもへば、贅澤品、必要品、虚榮品、嗜好品、衣服にあれ、小間物にあれ、髪の具にあれ、世帶道具にあれ、一品づゝ求めんと欲しても數十圓の金は立所に空うなるべし。所持の金は何程あつても、希望の品を悉く求めやうとおもへば山を崩し、海を傾けても足りる事ではなし。

されば諸事は簡便を主とし、物品の爲めに無用の手數を掛けざるやう心掛くるが家事經濟の極意なり、諺にも戰場で物を食ふ樣にせねば世帶は持てぬものだとあり世の中が進んで萬事が複雜になり、贅澤になるは自然の勢ひなるが、されども、お化粧に半日潰し料理に數時間を費やすなどは今日普通の家計で遣り切れる事にはあらじ。

成程粧飾を凝らして、人前をよくし、美味をとゝのへて、生活の希望を滿たす、人間本能の事ではあるが、主人公は未だ職業上に成功したりとも見へず、自他の要事に一日逐はれて營々とし、主婦は一家の經濟未だ十二分の餘裕あらずして一日家事に逐はれつゝ暮らし行くはまづ今日社會一般の傾向なるべし、よしや下女下男を使ふ家々とても、それには又それ〳〵の用向多く、されば今日食物調理の爲めに一日の大部分を費やすといふ事はまづ公債株劵の利子のみで一家の經濟を裕かに立てゝ行くといふは先祖の光りで世を送る一流の屍位素餐者にあらざれば進歩もなき發展もせぬ氣樂人の外は國家の有害物たる怠惰者に過ぎず、女學校出の新婦が新たに一家を組織せる場合にても學校にて學び得たる料理法を實際に應用するは僅かに新婚後數ケ月の間にして時日の經つに隨つて子供も出來れば自然の係累も殖へ、家務の繁雜に赴くに及べば最早料理道樂を以て庖厨を專らにする事能はず、いつとはなしに簡便の主義を取らざるを得ざるに至るなり。

人生生活に最も肝要なる食事に於て既にこの如しとせば其他の家務に簡便主義を取るべきは勿論の事なり衣服や髮飾りの品に新流行を逐ひ、身の廻りを飾り立てゝ、萬人の眼に羨まるゝ樣にするは何人も欲する處なれども、世の流行を逐へば一衣の料に主人一ヶ月の俸給を失はざるべからず、今日流行の型に殘らず揃らんと欲せば數萬の持參金ある嫁が親の光に輝く榮耀の娘ならずば叶ひ難し。

されば是れも又簡便主義を取り萬事を質素にし、實用を旨とし、無益の流行を逐はざるやうにすべし、流行の衣裳も一二年にして時代遲れとなれば可惜綺羅を廢物に歸せしめ、流行〳〵と碌々身につけずして簞笥の底に埋葬するは誠に不經濟の極度ならずや。

衣食既に簡便を主とすれば、其他もこれに準じて無用の物品はなるべく購求めざるに越した事なし、豈只無用の物のみと言はん、一と通り有用の品と考ふる物にても十分思案したる上、一二度は其の欠乏にも堪へ、いよ〳〵なくてはならぬ必要とおもひし曉には始め

て手を下すべし、二三度我慢して見て爾後それほど必要とおもはぬものは必要品にはあらずして矢張無用の品なる事知るべし、斯る物を一々買ひたらば平日置場にも困り徒らに座敷塞げとなるに過ぎず、それも新世帯の人に對して言ふものなれ、舊き家には大凡の物は持ち傳へて其家に備はり居る事なれば大抵は其品にて我慢すべし庖厨は道具にせよ、座敷の修飾品にせよ、何にてもよく〳〵注意して家に在來の物品を見極めそれにて我慢のなる物は間に合すべし。

總じて何品にでも、少々は不足と思ふほどにして置べし、家の經濟の極意は不自由を忍ぶ處にあり又一物に忍ぶ心あれば萬事に行渡りて大なる儉約となる、一體家に物品を多くするは甚だしく手數のかゝるものにて一々これを整理する事多忙中の暇つぶしなり又散亂すれば自然に破損を生ず、其の爲めに容物と置き所を定めざるべからず、爲めに又押入を多く塞ぐが座敷の内を狹ばむるかせざるべからずされば家財を求むるは吟味の上にも吟味を加へ、よく〳〵注意して座敷の塞りとならざる樣心掛くべし。



懸賞繪さがし (5)

生活の程度は控目なるを要す斯くすればたとへ不幸に遭遇するも依然平素の生活を維持し得べし、彼の貴顯紳士と稱せらるゝ人々が一朝死するや、塋域の土未だ乾かざるに、其の遺族は忽ち住馴れたる壯麗の邸宅を引拂ひ、見る影も無き矮屋に轉居する者の多きは、是れ實に平素生活程度を誤り居たる結果にあらずや。

美貌術

美人となる法

蝸象子

一概に美人と言つても、西洋の美人と日本の美人と異り、昔の美人と今の美人と等しからず、即ち美人に就ての理想は決して一致してゐるものでは無いが、併し何人が見ても等しく美人とするのは、其四肢五體が總て自然の目的に適ふてゐるもので無ければならぬ。例へば、歯ならば列が整つて些の缺損なく能く食物の咀嚼に耐ゆるもの、又額ならば平かにして健全なる脳を宿すに適するものにして初めて美しく見えるのである。去れば美人となる法は只だ衛生的の方法に依て斯かる健全なる四肢五體を作るに在るので、彼の徒に白粉を塗抹して一時人目をくらますが如きは決して美人法と言はれない。

△兩親の注意

然らば其の衛生的の方法とは果して如何なるものかと云ふに、第一兩親の注意が必要である。娘が子供の時に不恰好な歩み方をしたら速に矯正せしめ、手を醜く動かすならば之を美的に動かす法を敎へる等、手足の運動に就て十分敎育を施すべきと共に、子供を泣かせて顔の皮膚を荒させては不可ぬし、又濫りに乳を與へて胃病を起させても不可ぬ。特にベッカッコー或はイ、ーと下唇を反らすが如き顔容を造る事は嚴に戒しむべきである。世には自ら可笑しき顔付を爲て子供の笑を買はんとする父母は少くないが、模倣に鋭敏なる子供は忽ち之れを眞似其の醜面を以て人の笑を誘ふて樂しむやうになるものであるから、深く愼しむべきである。

△顔容を好くする法

是より各局部の美的養成法に就て述べん、先づ述ぶべきは顔付である。顔の形には長いのもあり丸ポチャのもあつて多くは先天的に屬し如何ともする事は能ぬが、併し又人爲的に之を直す法が無いでも無い。其れ

に就て最も大切な事は筋肉の働きに注意する事である即ち子供の時分より顔の働きを平等にすれば顔容は平等の發達を爲して自然温和を保つやうになるものである。故に顔の筋の中の一つを強く張り他の筋を弛めるなどは大の禁物である。例へば笑ふ時には大きな口を開けては不可ぬ、ホヽヽ位ゐに止められよ。上唇を前へ突出すのも不可ぬし、上下の唇を共に突出すに至つては顔容の美を害する事は一方で無い。此等は幼時よりの監督と自己の注意とに依て如何やうにもなるものである。


懸賞繪さがし(6)

△眼の美の養成

眼は顔面美の中心で美貌とは非常な關係を有つものである。何時ぞや糸左近氏は眼は大ならず小ならず引込んでも居らず出目でも無く黒白判然として赤みを帶びず俗に所謂「凉しい」のは實に美人と見ゆるのみならず何から論じても宜いのだと言はれたが、實に其通りであらう。所で恁う云ふ眼は如何して出來るかと云ふと、主として眼球の存する眼窩、及び其の四圍

の筋肉の作用である。故に眼の美は子供の間より其の附近にある筋肉の運動を美的に養成する事が最も肝腎である。之を養成するには幼少の折より鏡に對して眼の表情につとむれば相當の年齢に到れば、其眼は自然一切の美感美態を發現し得るやうになるものである。

△顔色と睡眠

顔色の常に麗しからん事を望むならば、睡眠を充分にしなければならぬ。如何に娘盛りの美はしい時でも睡眠が足らぬと、自然氣不精になり、疲勞を覺え、顔の色澤が無くなつて急に二つ三つも年寄つたらしく見えるものである。睡眠時間はまづ八時間が最も適度であらう。且つ寢室には空氣の流通を好くし、就床前に飲食を禁じなければならぬ。夜具は輕い方が宜しい。寢衣は軟きものを擇ばれよ。枕は低い方が宜しい。屈曲して臥すは害がある、而して寢床に入つたら成るべく速に眠つて朝迄熟睡する習慣を養はれよ。幼なき子供の眠れる樣子を見ると、一切の神經は働き無きが如く、筋肉はゆるみ、顔は平和に、呼吸は甚だ靜である。若し睡眠を斯の如くにするならば顔色は必ず其美を増すに違ひ無い。

△口と唇の美法

口は眼に次での美の中心で、此の養成も必要である。或る外人は口の大さは兩眼角距離の半分なのが自然であると言つてゐるが、口は成るべく小さいのが宜しく且つ其の唇は厚からず薄からずしてキチンと締つたのが理想であらう。口の美の養成は又其の附近の筋肉の運動に意を用ゐるに在る。即ち餘り大きな口を開けず常に堅く口を閉ぢてゐる習慣を養へば醜い口元も餘程矯正する事が能きて、唇邊常に愛らしき微笑を湛へるやうになつて來る、唇の厚薄は其人の天性に依れども幼時より如上の唇美養成に心掛ければ幾分か其の醜を償ふ事が能る。唇の色は身體の營養如何と大關係があるが、尚は其の外に唇の筋肉運動に依つて之を美にする事が能る。其の簡易なる方法は時を定めて齒にて唇の裏を摩擦するのである。此の際には上下の唇を内方へ吸込むやうにする事を忘れてはならぬ。

△齒の美の養成

唇美養成に成効せば次て齒の美の養成に努められよ如何に容色は美はしくても、齒の注意を怠つて、汚なくて齲齒で眞黒だとすると、其の容色は滅茶々々であるのみならず、衞生の爲にもならぬから、十分注意を加ふべきである、或る外人は斯う言つて居る、人の理想の齒は清水の中にある白き小石の如く清くて美はしくなければならぬと。で恁う云ふ齒を造るには如何したら可いかと云ふに、毎日怠らず磨くのが肝腎である。歐米の注意深き婦人は非常に齒を氣にして、朝起きると磨く、食事の度毎に磨く、寢る時に磨く、即ち一日に五六遍は必ず磨くと云ふ。諸孃よ、齒を美はしくせん爲に斯くせられよ、人がニッコリ笑つた時、眞白い美しい齒の見ゆるのは、顏面の美に一段の光輝を加へるでは無いでせうか。但し齒磨粉は成るべく上等の品を用ゐられよ。

△鼻の美

顏面の美を云々しながら鼻を見逃す譯には行かぬ。此は容貌の美に大關係を有する事は恐らく眼や口にも劣るまい。此れは鼻筋通つて高く幅は餘り廣からず曲らず拗らぬのが好いとしてある。で此の美を增す爲め隆鼻器を用ゐよと云ふ人あり、鼻筋に白粉を濃く附けよと云ふ人あり、孰れも多少の効はあらう。然れ共鼻は甚だ重寶なもので、高くても美なり、低くても美なり、上を向けば是亦一種の愛嬌たり、只だ横を向くのが非なるのみだ、故に之を自然に放任するが寧ろ顏面美の本旨であらう。

△頭髮を美しくする法

頭髮も婦人美の一である。此の頭髮の美は如何にして養成すべきかと云ふに、幼時より油を用ゐず、常に洗ひ、且つ毛根の清潔を保ち、梳るにも成るべく齒の粗き木製のものを使用すべしである。指頭にて日々數分間頭を揉む事、及び折々毛の尖を少しづゝ斬る事は又毛髮の美を增す一助である。毛に色を着け、或は强ひて縮れ毛を作る事は甚だしく自然の美を損ふものと言はねばならぬ。眞理より極論すれば、髮の本統の美

はちらし髪にあつて、彼の束髪や丸髷の如きは自然美に反するの甚だしきものなれ共、今日の事情は遺憾乍ら未だ斯かる美論は容れられぬ。

△頸と耳との美

頸の美の養成は是亦忽にしてはならぬ。此は日々微温湯にて洗ひたる後、再び冷水にて洗ひ、然る後數回廻轉し、之れに依りて其筋肉の運動を爲すのである。セルビヤ女王ナタリー陛下は其頸の美ならざる事を痛く嘆いて居られたが多日頸の運動を努めて遂に其の美を得られたと云ふ事である。次に耳の美の養成法は甚だ簡單である。唯常に清潔を保つに在る、然れ共耳垢を除くには決して耳搔を用ゐてはならぬ。若し耳垢が多かつたら、就床前に生温きオリーブ油を注入し、翌朝離床後直ちに消毒綿にて之を拭ひ取るやうにすれば好い。

△胸を美にする法

胸の美に就ては歐洲諸國に於てはコルセット問題がやかましいけれども、我日本婦人には斯かる悪習が無いから茲に言ふの必要が無い。只胸を壓迫する衣服は嚴に避けなければならぬ。日本婦人は乳房を隠す爲に殊更に襟を緊めて胸を壓す者があるが、之れは美の爲に非常に害がある。又日本婦人は帯を堅く締めて居るが、是亦甚だ有害である。一體人間の身體は等量の脂肪分を各局部に有つて居てこそ美しいので、其れが一部分へ密集すると甚だ醜くなるのであるが、コルセットや帯を以て一局部を堅く締めると云ふ事は、何うしても脂肪の密集を免れない。此等の諸點に注意して、尚ほ痩せたる人ならば胃腸を強くして美味いものを食べられよ、太つた人ならば運動せられよ。胸の美は立地に完かるべし。

△足の美と履物

凡そ世界に於て日本婦人の足程美に適ふたのは無いであらう。是れ蓋し歐米婦人の如く、革製の靴も穿かねば、又支那婦人の如くに纏足の弊風も無いからである。故に足の美に就ては只だ左右兩足が平等の大さを有して發達するやうに注意して居れば十分であらう。

然れ共、近來は我婦人も靴を穿く者が段々多くなつて來て、足の自然の美を害するものが少くは無い。で此等に對する注意として靴は餘りに踵の高いものを用ゆる勿れ、小さ過ぎるものを用ゆる勿れ、又護謨入の靴足袋留にて脛を締むるも筋肉を害して足の美を損ふ、と云ふ事を一言して置く。

△手の美と勞働

手の美を成さんには又筋肉の訓育が必要である。成るべく過度の勞働或は體操等を避けなければならぬ。日本婦人の手先の美なる事は世界に冠たれ共、女子の職業が漸次に增加して、此特有の美を損じつゝ



懸賞繪探し (7)

あるのは誠に傷ましい次第である。手の美を養成するには、例へば手を使ふ時臺所事などを爲す際には手袋を穿めよ。夏時も之を用ゐて日光の直射を避けよと或人は言へり。蓋し眞理に近し。要するに箸より重き物を持たぬが最良の方法である。眠る時には手を自己の體下に敷くは血液の循環を妨げて美を損ずる恐れあれば注意せられよ。爪垢は常に之を除かれよ。

△清潔の勵行

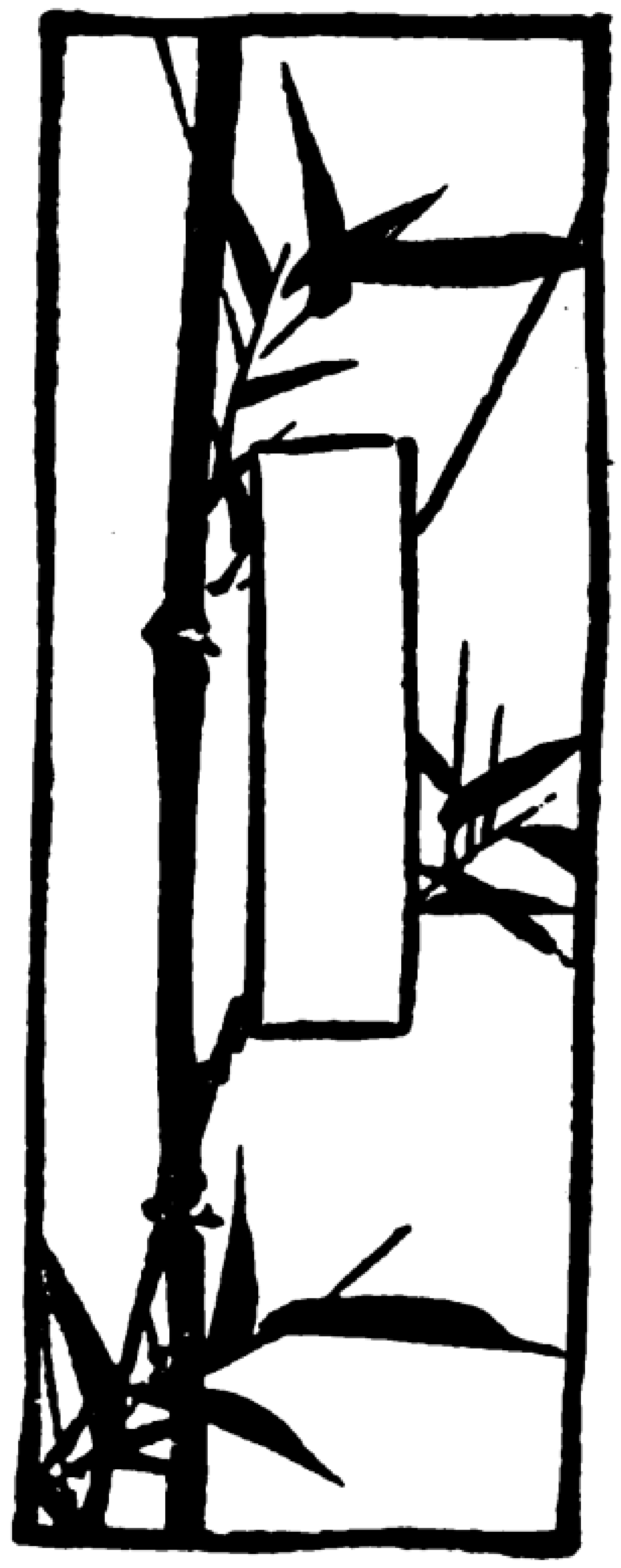
身體全體に就ての注意としては十分清潔にすると云ふ事が最も大切である。爪垢ある女學生は賢母良妻とはなられない。皮膚

に垢ある婦人は家にも塵を積むであらう。が去りとて垢摩を毎日用ゐる婦人は年若にして美を失ふ恐がある例ば顔を洗ふに手拭を以て恰で器物を磨くやうに力を極めてゴシ／＼と擦る人があるが、之れは大なる間違で、言はゞ手拭と云ふ鑢を以て美と云ふ貴重な物を削り去ると同じ譯である。自然は我々に指と云ふ重寶なものを與へて居るではないか。此の指は顔を洗ふに就て海綿よりも手拭よりもフランネルよりも優れてゐるものである。故に顔を洗ふには、先づ兩手を湯に浸し其の指を確乎と而かも穩かに顔に中てゝ幾度も顔の全部を擦られよ。而して目、鼻、口、の周圍は得て埃塵の溜り易い所であるから、特に注意して擦られよ。其他の部分を洗ふに就ても垢摩は一週一回以上用ゆべからす、總て手にて洗はれよ。去すれば人體二百萬の氣孔は絶ず外氣に通じて心神は常に愉快となるであらう。以上說き來れる美の養成に全力を注ぐ時は或は高貴の姫君の如くにならん。又此の美人法を讀んで終日美の養成に憂身を窶す人も出來ん。然れ共思ひ誤る勿れ、化粧の外何事をも爲さゞる者は藝人である。料理、裁縫、洗濯等は婦人の天職である。良人を喜ばしむる食物は妻の料理である。良人の喜ぶ物は妻の洗へるシャツである。妻の縫へる衣服である。一家を清潔にするのは妻の義務である。去れば徒に美人法にのみ心醉せずして。他方に於ては右等の事にも十分御注意あらん事を希望する。

○負けるが勝ちなりとは古今の金言にして達人の敎なり、一小事を確執するよりは寧ろ優しく服從せよ。

○禁せられたる果物は其味二倍旨しとは歐洲の諺なり、夫を餘りに檢束する時は却て不道德に陷らしむべし。

○夫は妻を愛す然れ共亦其の清楚に飾られたるを愛す我國昔時の女訓に「夫に寢顔を見する勿れ」とありたるが、是れ眞理なり。



床しき御面影

中山一位局の御事

局は御名を慶子と申され故正一位大勳位中山忠能公の息女にて母は愛子、天保六年十一月二十八日京都石薬師の舊邸に生れ十八歳の妙齢を以て内裏に召され先帝に奉仕し嘉永四年四月典侍に補せられ先帝の御覺え淺からず翌五年九月廿二日今上陛下御誕生あらせらるゝや特に御養育掛として御年六歳にならせたまふ迄自邸に御預り御養育申上げたるが其後も禁裏に在りて皇儲を保育し奉り只管誠心を以て奉仕したるは世の知る所なり、斯くて今上御即位の後明治五年局も東上したるが其後又々皇太子殿下御養育の任にあたり心を竭して奉養したれば殿下は深く局に懷きたまひしとぞ是より先き明治三年從二位に叙せられ二十二年正二位に進み三十三年一月中フト大患に罹らせられ同月十五日特旨を以て從一位勳一等に進ませられしが幸ひに快癒せられしも終に七十三歳の高齢を以て今回薨去ありし次第なり。

△局の御性質

故一位局の御性質を承はるに、極めて嚴格な御方で、一度思召されし事は何事に依らず行はなければ止まぬと云ふ御氣風であつたさうで、其の御一例として面白い話がある。今は昔し、先帝の御宇に、一たび大内を退られた局には、年立ち歸る新玉の節會に召されて、御酒を強たかに參られ、軈て初夜更くる頃、御暇申して邸に歸られたので、嘸や御疲勞と人々式臺に出迎へたが、局は一向輿から降りられない、扨て如何したのかと訝しんで輿の戸を開けて見ると、這は如何に、局は輿に揺られて歸る途次醉ひ心地の睡氣さして夢まどろかに然も氣持好げに眠つて居られる。で人々は驚いてお風召すなと揺り起すと、さア大變、是からお氣に障つたと見えて、起きはせられたが如何しても輿から出られない。何程詫びてもなだめても不可ぬ、それから遂に父君迄が臨まれて左右にすかされても矢張り駄目だ。それで止むを得ず輿を一室へ舁き入れ、火桶に暖く火をおこして、其れで夜風を防ぎながら女房共一同が通夜をしたと云ふ事である。

然れ共一面に於ては又非常に情深い御方であつた。嘗て局の御弟に當る勝任氏の長女よし子が或る醫家と結婚される節に、局は其非を認めて痛くお意見を加へられたが、勝任氏の懇願の爲め遂に御同意あるや、結婚費用として金三千圓を御贈與ありしのみならず、結婚は人生の大禮だからと云ふので本家のお馬車で先方へお送りになる等色々御盡力

を成されたと云ふが、能く其の御氣質を示して居るではないか。

△御慈愛に感激す

局は又日頃御謙譲の御方であつたから、今日の榮位に昇られても其昔京都に於て御辛苦をなされた事を忘れられず、自分の事には些も贅澤な御行が無く、而かも決して御不足を言はれた事が無かつたさうである。然れ共召使共には非常に御氣を附けられて常に下され物が多かつたと云ふ。一昨年薨去せられた後室愛子の方が御在世中は、每月少くも二度は青山から有樂町の邸へ御機嫌伺ひに參られ、母上大事と思ふ心から其都度必らず御附女中を始め下婢權助の下々の者に至る迄必らずお心添をせられたとか。其れ故一度召使はれた者に御暇が出た後後迄も局を慕ひ申さぬ者は無いさうである。

尙ほ局が下々を御憐しみなされた例を申せば彼の極樂長屋である。局が三十八年の九月迄在られた有樂町の控邸には昔の儘の長屋が三十二戸ある。塀内十餘戸は中山家の家扶其他緣故の人々が住んで居るが、他は皆な人に貸しあるので。其家は何れも床附二階建の五間六間位を有する立派なものであるが、其れで家賃は何程かと云ふと僅か三四圓から五圓位である、そして些でも損所が出來ると直ぐに手入を爲てお遣り成される。去れば一度此處に居を占めた人々は何年經つても立退かない。時に家事の都合上他へ移轉しやうとすれば、雜作が五十圓より百圓位に賣れると云ふ。故に誰れ言ふと無く極樂長屋の稱が出來た。是れ畢竟局が仁慈に富ませられるからであらう。

△局の御信仰

局は平生神佛へ御歸依深くあらせられ、特に每月三十日は先帝の御命日なれば、局は此日は朝早く身を清められ、一日精進して日頃信仰の佛前に冥福を祈られるが例で此日は大分一室に閉ぢ籠られたと云ふ事である。局か第一の御信仰は柳島の妙見と駒込の白山とで時々僧侶尼達の寄附願を受けさせられた。爰に最と尊き御事は、局は皇太子殿下並に妃殿下に對し奉りての御慈愛は殊にいや深く、折々信仰の御物語を聞かせ進らせられたので、妃殿下は御老人の心を汲ませられて、柳島の妙見へ金千疋の御供物の御沙汰があつたと漏れ承はるとである。尙ほ局の御信仰は獨り右に止らず、麻布大社、赤阪の日枝神社日比谷の大神宮へは御自身にて參拜せられ、其他青山善光寺、本郷妻戀神社、牛込穴八幡、深川不動、雜司ヶ谷鬼子母神等へは每月必ず御代參を立てられたさうであるから、其の御信仰は決して御偏りがなかつたのである。

△御生活の有樣

扨て局の御生活の有樣を承はるに、以前は局のお手許小使は每月三百圓なりしが、先帝に後れ參らせし無聊の餘り、御嗜好は人形に移り從つて其衣服などのお買物が多くなり、三百圓のお小使は月中ばにし

て早くも不足を告げる爲め、折々二百三百づゝ本家へ課金を御申越になつたとか。然るに其の御嗜好は尚ほ後までも續き、御費用も却々多い爲め、宮中の賜金一年一萬五千圓なりしも近年は増して年々二萬圓づつ御下賜あつたと云ふ事である。又御平生を承はるに局は夜中三度位必ず通に行かれるので、お附の女中は相應に忙がしく、其都度手洗水を新しく汲んで參らするなど自然人手を要する。去ればお附の女中は、女中頭一名、女中三名、白歯二名、其外臺所三名、雜司五名、小使三名、都合十七名あつて、此等の人々が各々分擔して遲滯なくお役を勤める事になつて居た。

△人形の御趣味

局の人形をお好みになる事は非常なもので、お若い時から大きなのや小さいのや種々なのを澤山御集めなされて之を座敷一杯に並べられ、其時々の流行の衣裳を着飾らせる事を何よりの樂みとせられて居た。靑山の御邸へ御移りになつてからも十疊の座敷を人形の間と定められ、並に硝子戸棚の人形箱を造へ、數限り無き人形を並べ、特に人形係の女中を定められて人形に關する萬事を扱はせ四季には矢張り吾々同様に衣更をさせられたとか。されば衣裳藏の中には人形用の衣類や反物が長持に幾棹と無くあると云ふ。で局は唯だ之を眺めて樂みとせられた計でなく、家臣の娘等が御機嫌伺ひに罷り出る毎に、美しく着飾らせた件の人形を與へられて、其の喜ぶ顔を見る事が又一つのお樂みであつたさうな。

△お好みの謠歌留多

又局は大層謠曲が御好きであつたから。雨の日の徒然などには令孫尙親氏を初め邸内の人々を集めて、謠曲に因んだ謠歌留多と云ふものをお遣りなされたさうである。此の歌留多は枚數二百四十枚あつて、三人宛二組に分れ、一人に四十枚持つので、三人の中で一人が親となり、他の二人を子といふ。そして歌留多の表には「松風」とか「猩々」とか「邯鄲」とか其れ〲題名を記してあつて、座の中央にある剝り札を双方の親が交り番こに剝り、「松風」なら松風と讀み上げると、歌がたると同じく其札を伏せる。之を遣るに就ての憲法は、子が親の札を奪るのは可けないが、親は子の札を奪つても可い、子は子同士で奪合ふので、首尾能く敵のを奪れば一枚宛に送る、親が子のを奪つても一枚送る、双方の親と親とが奪合へば五枚送りである。所が局はお好き丈あつて却々お上手なので、血氣の若い人達も迚も局には敵しなかつたと云ふ。

△局の愛狆

局は平生二匹の狆を御愛養遊ばれて、之に着せる衣類は友禪縮緬其他美しいものを選んで簞笥に二棹もある。そして夏の夜は狆の爲に特に蚊帳を吊られ、寒さ身に泌む冬の夜は暖爐を以て溫めて遣るなど一方ならず可愛がつて居られた。所が餘り可愛がり過ぎて能く死ぬので、皇

太子殿下より其都度代りの狆を下されたが、局は餘りに恐れ多き事に思はれて、之を辭退して狆を飼ふ事を止められ、目下は「卯月」と稱する唯一匹の番犬が居る丈であるとか。扨て此の度々死んだ狆は丸林家執なして谷中の瑞林寺へ手厚く埋葬させられ、其の命日には必ず精進なして冥福を祈られたと承はるが、如何に御慈悲が深かつたかゞ想ひやられるではないか。

△犬の洋風嫌ひ

局は、昔氣の、犬の洋風嫌で、平素西洋風のものは何にも近づけられず、衣類器物等皆純粹の國產に限られ、毛織物は決して用ひさせられなかつたと云ふ事である。食事の如きも如何なる場合でも洋食を口にせられた事無く、去る卅三年の大患の折には、至尊陛下から特の御思召で御料牛乳の御下賜あつて以來引續き之を給はるから、其れのみは有がたく頂戴されたが、其他は斷じて斥けられた。去れば今回御病氣となるや宮臣であつた加藤ます子を初め四人の看護婦が附添ふ事となつたけれど、西洋臭い例の看護服を纏ふを禁じて悉く和服で看護させられたと聞てある。

△兩內親王と局

局には御避暑御避寒などの御旅行の砌には、其出發前と御歸京後には高輪御殿なる兩內親王殿下へ御參候あらせられるが例であつたが、何分老齡の事とて時には御見合せになつた事もある。去れど年三四回は必ず御參候あらせられたと云ふ事である。今其時の御模樣を承はるに、外ならぬ方におはせば例も奥座敷へ通らせられ、西の御座所にて兩內親王殿下に御對話あらせられたとか。此の西の御座所と申すのは兩內親王殿下の日中の御居間である。御對話の節は局は臣下の禮儀正しく御物言ひも至つて靜かで、生來の御謙遜最も床かしく見えさせられる。兩殿下には何時も局の御參候を御滿足に思召され、種々の事を御尋れあつて、御物語は二時間も續き、時には三四時間に亙らせられたと云ふが、如何にも其の御親情の程が察せられる。

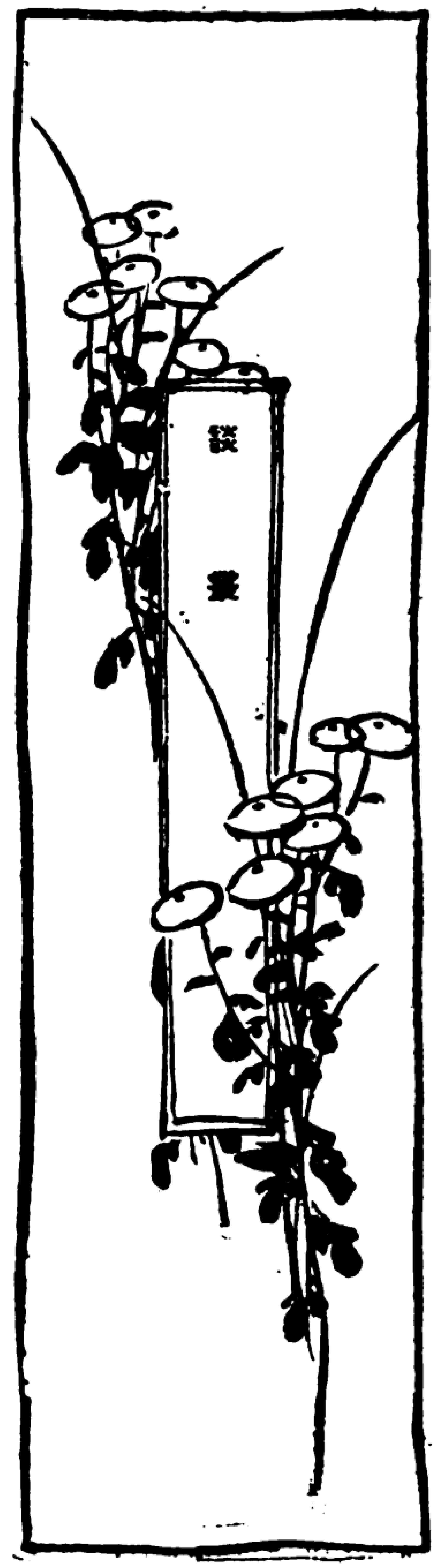
△東宮殿下の御上

又局には手づから御哺育申上げた東宮殿下の御上を何彼に就けてお案じ申上ぐる事は一通りで無い。先年殿下が年餘に亙りし御不例の時などは、局は身命を神佛に捧げて御全快を祈り參らせ、御快癒後御慶事の御決定あらせられた際には、皇孫の生れまさん事を同じく祈願せられ橋本博士が常に局より殿下は皇孫を御持ち遊ばさるゝか如何かと幾百千遍となく尋ねられたので、殆んど御答に困じ果てたと云ふ程である。去れば今度殿下が韓國へ成らせられると聞いて局は一方ならず驚かれ、殿下の御上に何の樣な事があらうも知れぬと始終言つて居られたが、薨去の前日殿下が親しく御病床に成らせられた砌りにも、注射で辛くも身を起された局には枕側に鶴駕を進めさせ給へば呉々も御心したまへと搔口說き〳〵申上げられたそうである。

交際家としての西太后

處世法の達人
外國的智識の奬勵者

閑鷗



△賢き處世法

西太后陛下七十餘歳の老齢を以て汪盛なる精神、強健なる肉體共に少しも衰ふる處なく、國家多事の日萬機を主裁して違算なく清朝滿廷の大官、宗族を臣妾の如くに駕御し給ふと聞けば其人や實に古今に卓絶せる一大人傑として見るべきものである。而かも太后は近年國家的生存の必要よりして益々外國的智識の必要を感じ給ひ外國使臣に親しみ給ふの機會多く屢々優渥なる謁見を賜はるのみならず、又其等の夫人令孃等にも親睦を重ねてうち寛ろぎたる御交際遊ばし給ふは一の注目すべき事である。

清廷の例として新年の祝宴、萬壽節、及び皇上の誕生日と一年三度は必ず外臣に賜宴あるのであるが同時に其夫人等にも必ず賜宴がある、そして其折の御交際振りといつては實に勿體なきほど御如才なく否恐れ多いほど御謙遜で、平素は宮廷内に在はして四百州の至尊と仰かれ給ひ、尊厳、稜威の極度を以てその宗族

大臣等より仰かれ給ふ御身にありながら、一たび外國使臣並に其夫人等に謁を給ふ時には全く平常の親しき朋友、知己に接し給ふと同樣の御態度で萬事御隔意なく、睦まじき浮世ばなしなど遊ばし、痒い處ろへ手の届く待遇ぶりには、流石に場數を踏み慣れた、世界的の外交官もこれはと驚き恐れ入つて敬服し感涙に咽ぶばかりである。即ち太后の交際上手の致す處ろであるが、一國の主權者としては、否動もすれば諸强國野心の目的物とならんとしつゝある清國の現狀よりいへば、太后の此の交際上手は實に賢こき處世法と言はねばならぬ。



△如才なき待遇ぶりの一例

さてその謁見の御模樣の一班を窺ふと、まづ各國公使夫人令孃並に書記官附屬の武官並に其れ等の夫人達であるが、其時は駐在公使の年長者、首席公使が一同を導いて、各夫人には一名づゝの通譯官を附添はせて參內するのであ

る、斯くて一と通りの儀式を終り、それから別席に於ていよ〳〵賜宴に侍るのであるが、太后陛下には謁見の時の御衣裳を改められて、こゝには艶々しい華やかな金鷄の御裲衣をまとひたまひ、蘭麝の香りあたりを薫じ、雪を欺く御顔容の兩頬は當年七十五歳の老婦人が如何にして斯くも若々しく美々しきやと疑ふばかり芙蓉の眸、丹花の唇、氣高くも又麗はしく其美、其艶其婉、眞に滿場を壓するばかりである。

然かも太后は單に其容姿の研麗におはしますばかりでなく、其の御態度の優美におはすは申すまでもなく最も人々をして眞に敬服、感歎せしむるものは、其の御口元に言ふべからざる嬌艶を含み給ふの一事にある其音聲は朗々として玉を轉ばす如く、明晰にして而かも情趣に富み、餘韻嫋々として糸音の盡きざるがごとく、聞くものをして恰も心耳に暖かき接吻を給はるがごとく、宛ながら薫風に醉へる心地がするのである。

外國使臣の中でも前の米國公使コンガー氏の夫人は別して太后の御信任深く、外國夫人中第一の御氣に入りで平素種々なる御睦みもあつたが、或る年の夏、賜宴の時、コンガー夫人を始め墺、伊兩國公使夫人幷に日本公使夫人等を寢殿に召され、こゝにて淸國風の御遊戲など遊ばされ、長夜の御樂しみがあつた、寢殿はいづれも金銀珠玉の裝ひで、煌々たる電燈の下、花をあざむく十二人の侍女にかしづかれ給ひ、姿見鏡の前安樂椅子を列ねて、隔意なく共々に打臥し給ふ其しほらしき御態度は誠に二八の少女かとおもふばかりであつた、と、當時隨伴した一夫人の話であつた。

△下馬評の誤謬

西太后は外人の想像するが如く雄々しい御性質ではなく寧ろ優しい、そして何處となく人を魅する懐かし味のある御婦人で在らせらるゝのである、素より尊嚴に在はさるのは至尊のまさに然るべきところであるから其宗族大臣等に對し給ふ時、一大國の主權者としてまさに然るべきところであるが、單にそれ丈を以て太后を古への則天武后の如くに解するのは大なる誤り

である、太后は古今稀れなる御容色を備へ給ふと同時に、又古來罕なる聰明英邁なる令質を有したまひ、なか／＼凡人の企及し難き天の靈氣を感得せられて居るのである、尤もどれほどの賢明英智の方でも、矢張人間は人間たるを免かれ給はぬもので、一方に男子も及ばぬ雄々しい御氣象でありながら猶且つ女性に有勝ちの御執着心、當世流の術語でいふと、ヒステリー的な多情多恨の節もないとは言はれない、時としてはこの執着心が、意外なところに働らきを及ぼして宮廷の累をなす場合がないでもない、そこで一知半解の批評家や、半面丈の觀察者は太后の所爲を以て往々病的の致すところとして居るのである。又甚だしきに至つては太后は賤家の出であつて、其生涯の數奇、多難なりし結果人情の委曲を知り悉したのであつて、其偶々聰明叡智に見ゆるのは彼の傾城的の讀心術が功を奏したものであるなど、亂暴なる評論を加へる者もあるけれどそれは全く、野人の放言に過ぎないのである。

△身邊の御用意

西太后が天稟絕世の美人で在す事は何人も異論のないところであるが、更らに其平生を窺ひまいらすれば高年に及びて容姿の衰へ給はぬのも不思議ではない、太后は居常尤も御化粧に凝らるゝ方で、彼の紅粉を施し給ふにも支那流の厚化粧で、御髮も艶々しく、殊に、御身のまわりは最も注意して華やかな色彩の衣裳を用ゐさせられるのである、御氣象は凜として英明に渡らせらるゝが故に、その艶なる婦人美は更に氣象の英邁を加へて一段の壯美を呈するのである。且つ御身體は非常に健全に渡らせられ、平素の御攝生がよく行屆いて、脂肪質に富んで居らるゝから一見して多情多血の燃ゆるがごとき氣高い相貌を窺ひ見るのである。

太后陛下は當年七十五歲に渡らせらるゝも御容貌は五十を超ゆること多からざる有樣、昨今政治上の變革や大官卿相等の異動、さては外國との交涉事件など國家の大事件日にして起らざるなく、其都度萬機を親裁し給ひ、雲のごとき滿廷の俊豪を駕御し給ふ其の威嚴其の智略、少しも衰へ給はぬは誠に絕世の偉人と稱し

奉らねばならぬ、而して清國の今日ある兎も角太后の德の大なるに歸さねばならぬ。

△十萬圓の御繪姿

先年米國の博覽會へ太后の肖像を下賜あるべしとの御沙汰あるや、コンガー公使夫人は豫ねて知る一人の米國女畫伯カールス孃を推擧して太后に薦めた、カールス孃は御許を得て以來殆んど二週間毎日一時間づつ太后の御居間に參つて御姿の輪廓を寫生したのである、東洋大帝國の女皇陛下がよくも、渺たる一女畫家の指圖に隨つて十數日間寫生の辛抱をされたものだと公使夫人を始め皆々感服したのである、其畫は長八尺、幅五尺の等身大の油繪で太后が皇極殿の玉座に端然として坐せらる圖である、その描寫料として三萬兩を下されたが、その肖像は黄金縁の外枠を仕立てザット十萬兩もかゝつたとの事である、のみならず其御肖像を運ぶに就て五萬兩といふ驚くべき費用がかゝつた、それは外務部から停車場まで持ち運ぶに不注意のない爲め約半里の間假軌道を設けたからである。



兎に角御肖像はカールス孃が、幾度も御命によつて塗

抹した結果最も御氣に召した樣子で、拜觀するところどうしても三十そこ／＼にしか仰がれぬ御麗はしさであつたといふ、それから太后は御肖像を描かせるといふ事に就て非常に御興味を覺へられたものと見へ、其後又或る漫遊の米國畵伯を召して第二回の寫生を命せられた、其節も又却々嚴重な御注文を遊ばされたとの事である。

△寵愛は交際の必要

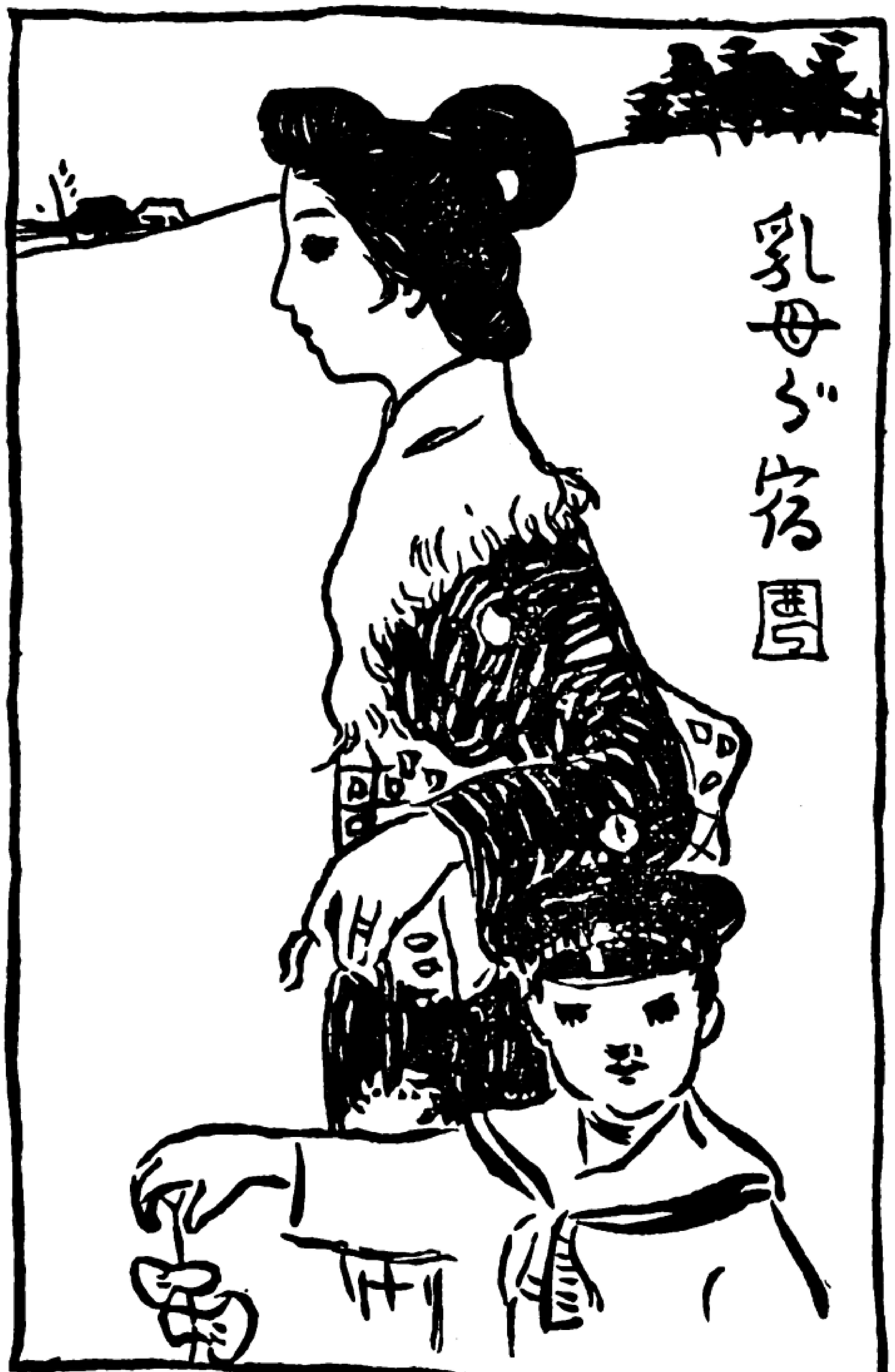
太后の御家庭に於ては平素其御孫達ほどの年輩に在はす、恭親王、醇親王、慶親王其他宗族の內親王、少女、公達を常に御側に召して鍾愛せられるのである、大官の中では前佛國公使裕氏の娘などは殊に寵愛を受けて自由に內廷に遊びに參られた、この裕氏の娘といふのは、母が佛人であるから雜種兒で殊の外美人で交際社會の評判であつたが、太后がその雜種なるにもかかわらず、寵愛し給ふやうになつたのは專ら交際上の必要からである、前述の如く太后は國家の生存上、且つ勢運上からして外國的智識を普及するの必要を感じ給ひ、外國夫人等と親近さるゝのも一つはその方便で早くから英佛兩國の女敎師を聘用されて宮廷の內親王宮女等にも語學を學習せられた次第である、裕氏の娘も矢張語學に通曉せると、又公使夫人等の接待に陪席せしめられるとの事情から自然太后の御眼鏡にあづかり寵愛を蒙るやうになつたのである。

△外國智識の輸入

右樣の次第柄で淸國の宮廷は太后の英斷によつて外國的社交の趣味がなか／＼普及して居る、隨つて、物質的の普及も段々進んで來て、昨今では舶來の室內裝飾品を珍重さるゝは勿論、電話、電燈も、頤和園に裝置されてある、夏は恰も室の中に居るが如き北京の宮廷內にも早く既に電氣扇の裝置を見、冬は溫床に依つて煖を取つた北淸の地にストーブの設備も出來るやうになつた。一年三度の宮廷の宴會にも西洋料理の獻立となり、其他建築にも、衣服にもおい／＼と西洋風を模倣するやうになつたのは多少太后の平素の御嗜好の影響である。その御年齡からいへば當然守舊主義で、頑

固なる國粹保存にあるべくして然かも事實は却つて世界的、公開主義に出でられたのは清國の今日に取つて何よりも幸福といはねばならぬ、この點より言つても太后は古今に傑出の人といはねばならぬ。

其外男女の教育に就ても太后は大なる奬勵者、大なる開化主義大なる新智識普及者である、それに就ては既に日本より新式の女教師を數多聘用して上下一般女子教育の普及を謀られる、北京のみにて新式の男女學堂が八九ヶ所も創立された、又各處に訓令して海外留學生を盛に派遣せしむる様になつたのも矢張り太后の盛意に基づいたものである。兎に角太后は女性として最も力ある傑出の才人といはねばならぬ。



因にいふ本誌口繪に掲載したる「西太后の今昔」中東太后もありしは即ち先帝の正后にましませし方なり、元來清帝の閨閥には東西の西后在しまして東后を正とし、西后は其準妃なり、然るに西后入内後不幸にして東后は崩御ありしかば西后代つて東后の位置に備はり給ひ、遂に其位と權勢とを保有し給ふに及びしとなり。

女子交際難

あきしく

摘草に連れ立ち、遠足に誘ひ合ひ、扨は手毬や羽子の突き競に、いろは歌留多の取り競に、無邪氣な交際をした身も、髮の毛と共に脊丈も延びて、段々年頃に成つて來ると、同じ年頃の男子と交際する場合が起つて參ります。尤も昔は男女七歳にして席を同じうせずとか申して、異性間の交際を嚴禁したものですけれど、當節は女子も世間見ずでは不可ぬ、男子を研究する必要があるといふ理由から、男子との交際を寧ろ奬勵するやうな傾向が見えますが、妙齡の身を以て血氣尙ほ定らぬ男子と交際することは如何なものでせうか。

然し時代の風潮には反抗が出來ませんから、男子と交際するも可いでせう、けれど其場合には餘程心を締めて確固りしてかゝらぬと、墮落の淵に誘惑される恐があるのみか純潔の交際でも、浮名を立てらるゝやうなこともあります、其交際法は餘程六ヶ敷いのでございます。また多くの男子と交際する中には、自然懇意を重ぬるのが出來、西洋風に約婚を望んで來るやうなのも無いとは限りませんから、之に對する覺悟がなくてはなりません。向ふも此方の性質を知つて、心から愛情を濺いで呉れ、そして此方も先方を末頼母しい有爲の人物と見込んだならば、約婚も敢て支障ないやうなものゝ、其でも世故に長けぬ處女の身では、往々鑑識を誤つて男子を眞價以上に買被るものですから、約婚などゝ云ふことは輕卒に出來る譯のものではありません其も理性が確かで公平の眼を以て觀察するうちは好いけれど、一朝そこに戀の心が湧くと、戀は盲目也とか申す通り、善い處は見えても惡い處は見えず、否、痘痕も靨と惡い處も好く見える樣になるのですから、何の道男子との交際は危險なものと御承知あつてマアマア近寄らぬ方が安全かと思ひます。

男女の交際法を誤つた罪とは言ひながら、僅ならぬ戀の苦痛に泣いて、煩悶懊惱の内に日を送る婦人程、氣の毒なものはありません。加之も戀の爲めに浮ぶ瀨

もなき淵に沈み、一生を不幸に泣き暮らすやうな事あつて、婦人に取つて此上の難儀はありますまい。小說等を見ると、よく此間の悲しい消息を描いたものがあります。そんな譯ですから男女の交際もよけれど、一たび其道を過つては、由々しき大事でございます。

扨又、處女の境遇を脫して一家の主婦と成つた場合は何うかといふに、親戚に對し知人に對する交際上、自分が主要の位置に立たねばなりませんから、是が若い細君の身には一ト苦勞でございます。夫の不在中に來訪者があれば、その應接も致さねばならず、澁茶一杯で追返す譯にもゆきませんから、三度に一度は御馳走も致さねばならず、不意の客來でも周章狼狽してはならず、見榮も張らねばならず、品位も保たねばならず、愛嬌も作らねばならず。また親類に對しても、時時は世話もしてやらねばならず、時候見舞にも行つてやらねばならず、田舍の親類が上京すれば、泊めて御馳走して、見物の案內もしてやらねばならず、又近所に對しても義理の付合は缺かす譯にゆきませんし、物を貰へば返禮も致さねばならず、向ふから訪問されゝば此方からも顏を出さねばならず。人から勸誘されゝば寄附もせねばならず、何の角のと煩いほど交際上の用事は多いのでございます。

又人と交際するに就ては、いろ〳〵の心得がなければなりません、例へば先方の口氣や容態を見て、其心を讀むことも知て居ねばならず、客の素振を見て氣轉を利かさねばならず、御世辭を言ふことも知つて居ねばならず、戲語を言ふて一座を笑はせる工夫も知つて居ねばならず。客に長談をさせぬやうに話頭を轉らすことも知つて居ねばならず、老人には老人、若い者には若い者の樣に調子も合せねばならず先方から揶揄つて來れば、此方も負けずに翫弄す位の口前もなければならす、いろ〳〵と交際上の呼吸を呑込んで、臨機應變の措置に出でねばなりませんから、世話女房となるも亦難い哉で並大抵の修業では到底主婦の職を完全に勤め遂せるものではありません。

化粧の秘事

△丸顔は如何に粧るべきか

まづ耳の後より頸筋を中白粉にて髱の下を薄くし、額を厚く額の生え下りと耳の前の生へ下りと長くするがよし、生へ下りの短かき人は耳たぶ迄生さがりのある如くに地をよけて白粉を塗るがよし又髪の格好は鬢小く髱は長く、髷は高く結びたるが格好宜し、

△長顔は如何に粧るべきか

顔の長き女は愛なくして化粧の仕方甚だ難儀なり、故に先づ頸筋より耳までを中白粉にして喉際までは厚化粧にし顔は薄化粧がよし、額の生下りは低く作り耳の生下りは短くそり上げて耳の白粉は顔の通りに薄化粧がよし、又顔と耳とに濃き薄きが出来ては、見苦しく見ゆるもの故つり合をよくすべし、又髪は鬢髪を多く出して髷を低く結ぶがよし、

△鼻低き人の化粧

眉の間より鼻筋ばかりに鬢附をよく練りて摺りこみ、又鼻の両方へ薄紅を引き暫時して白粉を塗れば鼻低の婦人も低くは見へぬものなり、

△鼻高顔の化粧

額と口先との端に油を塗り白粉は厚く(鼻ばかりは薄く)すべし鏡に向ふ時は鼻の先きが剝げたやうに見ゆるものなれど、人の眼には鼻が通例のやうに見へて格好よし、されば白粉の濃淡にて顔の釣合がよし、

△丸眼の人は如何に粧るべきか

眼の大なる人の化粧は上瞼と下瞼とにとつくり白粉をつけ、眉を少しそりあげ、そこへ紅を程よく引き且つ針程の大さに眼尻へ紅をさす時は陽氣にして釣合よし、

△唇の厚き人は如何に粧るべきか

下唇ばかりにたつぷりと紅をさし、鬢附油をよく〳〵練りて上下共に口の廻りにすりこみ、それより白粉をさしその上にて上唇へ紅を程よくさすべし、

△高頰の化粧

眼の両方へ紅粉をたつぷり付て頰と鼻筋二の端ばかりに油を塗り、其上に白粉を塗れば両の頰が櫻色に見へて中白になる故顔の釣合がよく頰の高き處が隱れて外見よろしくなる、

△ソバカスの化粧

花いかだを用ひ其上厚化粧が尤も宜し、是には最初紅を薄く溶き、化粧をなしたる上に其紅を桃色位に引き、其上を眉刷毛にてサツト刷き、頰と額は薄くすれば雀斑は殆ど見へず、自然失せたる如くに成つて美しくなるものなり、

處世金言

○人生を支配するは運命なり智慧にあらず

○危難は德を行ふべき好機會なり

○艱難は吾人の忍耐に乏しきより其の刺針を鋭利にす

○眞の幸福は一所に止まらず、然れども猶滿足せる精神中にこれを散見するを得るなり

○幸福中の最大なるを心の快樂とす

○艱難は蟾蜍の如く、其の容貌醜惡にして且つ毒氣を包含するも其頭上に寶玉を戴けり而してこれを利用すれば愉快なり

○心愉快なれば終日步み、憂悶すれば僅かに一里にして倦む

○心の樂しきものは絕へず饗應にあづかる

○浮世の幸福の最高度は安靜にあ

修養門

婦人の身嗜み

◎身を修むるは萬事の始め

齊家内治の道は一に女子の修身に俟たざるべからず、これ男子は多く外に齷齪し、常に家事を見る暇なきに反し、女子は概ね家にありて内助の務を取るが故に齊家は即ち其の本職なり、且つ其嫁するに及びてはよく其の家の家風に馴致し、姑舅に仕へ弟妹を導き、やがて育兒の大任を完ふす、且つその歐米諸國は個人を主とし、個人として完全なる者を養成するを以て目的とすれども、我國にありては一家を以て主とするが故に一家は即ち一國を成すの基なり、女子の任務亦大なりといふべし、されば女子は常に其用意を以て身を修め、所謂良妻賢母となりて天職の美德を發揚し、其本分を盡す樣心掛くべきなり。

△貞操は唯一無價の寶にしてこれを得んと欲せば皇后も市人の妻と競爭せざるべからず。

◎柔順なるべき事

柔順は女子の天性にして、殊に日本婦人の美德と稱すべきものなり、試

り

○己れを除くの外己れに損害を與ふるものなし

○滿足せる心は黄金を製すべき適藥なり

○滿足は最良の所有物なり

○僅少を以て滿足するは眞誠の幸福なり

○一の物體を失ふや吾人の苦痛は其の眞の價値に比例せずして想像の價値に比例す

○總て快樂は苦痛といへる代價を以て買はざるべからず

○自から爲す事能はずとて他人に依賴する事なかれ

○及ばぬ望みは狼が月を喰はんとするに似たり

○大魚を捉へんが爲めに敢て小魚を捕へよ

○一事を肯んせざるものは一物を有せず

にこれを他の動物に徵するに、犬馬牛羊などの家畜より始めて、虎豹の如き猛獸に至るまで、牝は常に牡よりも柔和從順なり、是れ實に天與の稟性にして、人もよろしくこれに則るべき理由あり。されど如何に柔順なればとて事の是非に論なく悉く男子の意に從へといふにはあらず即ち女子は男子に對して絕對に柔順なるべき理はあらざるなり、されど柔よく剛を制すとはこれ千古不磨の名言にあらずや、剛を制するに剛を以てせば必らず亂を生ずべし、天に二日なく、國に二君なく、兩雄は決して並立するものにあらずとせば一家又二剛を容るゝを許さゞるは理の當然なり。

△貞婦若し良人を指揮せんと思はゞ其秘訣は只一あり即ち柔順是れなり。

◎友愛の情を厚うすべし

兄弟姊妹は常に相睦み、相愛すべし、古語にも兄弟垣に鬩げども外其侮を禦ぐといへり、されば一人の兄弟は百千の味方を有するに勝る、殊に父母なき後は杖柱とも賴み賴まるゝものなれば、幼時より友愛を重せざるべからず。

△父母の愛は諸德の基なり。

◎禮義に怠るなかれ

○まづ測りて後育んせよ
○自信は大人となるの第一要件なり
○己れに不用なる人は人にも不用なり
⊙急遽に登る人は不意に墜ることあり
○懶惰人の行路には荊棘充滿せり
○遂げ得るよりも多くを企つる勿れ
○同時に數多の事項を企つる者は之を善くする事稀なり
○熟慮が勝利を得るは恰も輕卒が勝利を失ふに均し
○勞力は熱を生じ懶惰は害を生ず
○勉強屋外に去れば貧乏窓より來る
○羽の生へぬ間は飛ばんと試むるなかれ
○熊を殺さゝる前に其皮を賣るなかれ

日常の禮義にはそれ〴〵作法あるものにしてたとへ形式によらずともすべてしとやかに、みやびやかに、粗忽なき様心掛ざるべからず、其重なるものを列擧せば坐作進退、物品取扱及び贈品、應對、吉凶等とす。

△野婦と淑女との異るは只禮義を知ると知らざるとにあり。

◎藝術を學べよ

必要なるものは勿論、さまで用なくとも餘暇と餘裕ありて其品性に適したる藝術は一應心得置くべきなり、文學は其内尤も必要なるものなり、主人の留守中、主婦はこれが、代りを務むべき場合あるべし、殊に子供の家庭教育は偏に母親の力に依るものなれば、其等に要する一と通りの文字は必らず素養を積み置かざるべからず。

△運命の爲めに玩弄せらるゝことなく、よく獨立せんと欲せば有用なる技藝を學ぶべし。

◎裁縫は女の品性なり

裁縫は女子に大切なる業にして、其品性に適合せる、實に天賦の藝といふべし、然るに近時文學にのみ熱中して裁縫を疎かにする傾向あるは甚だ歎ずべし、口には衞生學を唱へながら垢染たる衣服をつけ、家事經濟學を說きつゝ裁縫を仕立屋に托する如きは、矛盾も又甚しからずやされば自から出來得る限りは人に托する事なく、又たとへ人に托すとも一と通り心得

○恐怖は危難よりも大なる事多し

○爲さんと勉むる人は力を有する人よりも一層多くの事を處す

○杞憂の間に架せる橋は長からず

○他人の危險を見て自から戒しむるものは幸運なり

○最も大なる危險の下に最も大なる快樂あり

○肉體の快樂は一時間以上繼續する事能はじ

○成功は愚物をして智者の觀相を呈せしむ

○成功の秘訣は己れに克ち他人に克つの法を知るにあり

○愛情滿つれば粗食も甘く、愛情欠くれば膏粱も旨からず

○愛情はよき生活の最大なる基礎なり

○愛に溺るゝものは深謀遠慮に別を告ぐ

○良馬は決して躓づかず、良妻は居らずば何かにつけて不都合の事のみ多かるべし、蓋し裁縫は藝術にあらずして女の品性なり、これを身に備へざれば女の德は完しといふべからず。

◎割烹は日々の勤めと思へ

これも亦一と通り心得居らずば日常の事に不都合多かるべし、不時の來客等に當りて不經濟なる事夥しかるべし、又同じ材料にても料理の方法によりて種々の風味を調製し得べく、あまりに同じ物をつゞけて食するは衛生上よろしからざるは勿論折角美味なる食物も口に飽きては美からず、是等は主として主婦たるものゝ手加減による事にて又一ツの身だしなみに數ふべし。

△最上の料理人は前日に晩餐を整備し、晝食前に夜食を整備す。

◎言語を控へ目にせよ

言語は心に思ふ處ろを對手の人に通ずる唯一の機關なるが故に苟に物言ふ時は他人に變な感じを起さしむる事あるものなれば、輕卒にすべからず、さればとてあまりに愼み深くして何事も控へ目〱にして當然に言ふべき事を言はざるは却つて人の心を損ずるのみならず、考へ過ぎて語と詞との間が長くなる時は對手に無愛想になるの嫌あるものなれば、これも程よき樣にすべし、要するに談話は多く語つて何事も言はざるの秘訣を學ぶ

決して不平を鳴さず
○人動もすれば奢侈の爲めに妻を批難す
○夫に智あり、婦に忍耐あるは家内安全の基なり
○將來を恐るゝものは現在を樂しむこと能はず
○此世にありて勉力せざる人は此世に出ざるに勝れり
○下にあれば萬人の爲めに踏み越さる
○最も大なる出來事は多く偶然より生ず
○自から成し得る事を他人の手に望むべからず
○少許の怠慢大害を生ずる事あり
○夏日勉强せざるものは冬日飢へざるを得ず
○懶惰なる人は己れの頭腦を食ふ
○約束を爲すは遲くこれを成すは速かなれ

べし、即ち當り障のなき事は數多く言ふも、差障のある事は少しも言はぬ樣にすべきなり、例をいへば他人の害にならぬ事、他人の名譽を傷けぬ事は何程いふもよけれど、其反對に他人の名譽となる事、利益となる事は多く、談ずるも差支なし、但しこれも度に過ぎては却て相手の氣を損ずる場合なきにならねば相手を撰んで口を開くの氣轉なかるべからず、西洋諸國にては、人の面前にて其人の事を譽むる良習慣あれど、日本にてはそれを諂らひと稱して却て嫌ふ習ひなり、さりながら人は何人にても擧られて不快を感ずる人はなきものなれば、要なきに、譏るべからず、談話はすべて、温藉にして露骨ならず、包容にして深刻ならず、人の急所を突き弱點をゑぐるがごときことは避けて言はざるをよしとす。

△千里の行を爲すは易く一言を愼むは難し。

◎手工も一應は習ふべし

刺繡、編物、造花、紐打、等は時々、娛樂ともなりて又實用となるべきものにて一應は心得置くべきなり。

△小き手工も數年耐忍の結果なり。

◎遊藝は生活の餘裕を示すものなり

家人の耳目を娛ばせ、亦自分の心を慰むるものにして茶の湯、挿花、琴、バイオリンなど其分に應じて習ひ置くべし、但し是等はあまりに深入する

○邪惡の生活を爲す人は常に恐怖の生活をなす

○二十歳に美麗ならず、三十歳に於て強壯ならず、四十歳に於て富裕ならず、五十歳に於て經驗を有せざる人は生涯決して、美麗、強壯、富裕、細心ならず

○節制は德の尤も大なるものなり

○智惠なき熱誠は暗中に遠征するがごとし

○忍耐は運命に克つ

○勝利はよく忍ぶものに歸す

○之を改めんと欲するも力及ばずんは之を忍べ、然らば徐々に之れに堪ゆるを得べし

○忍耐の基礎は天にあり

○失望は痴人の斷案なり

○大事は力によりて成るにあらず不撓不屈によりて成れり

○己れの制する人は尤も强し

○庖厨を小くすれば家を一層大きに及ばず只一と通りにてもありぬべし。

△遊藝は餘裕ある生活の賜なり。

◎手蹟と文章は其人を美はしくす

書は人格を示すものなれば女子の學問として手蹟文章を習ひ置くべし、文章優美にして手蹟の見事なるは何となく其人の身嗜みおもひやられて床しきものなり。

△書を讀み且つ默思するを得る人は夕時の永きを知らず、生涯退屈なるを覺へじ。

◎化粧は身嗜みの一つなり

顔貌及び、衣裳を飾ることにてこれ又女子の身嗜みの一つなり、世には女子の化粧を擯斥するものなきにあらねど、日々厚化粧を施すを仕事とし、寢ても覺めてもこれのみに心を奪はるゝ如き事だになくば、女子の化粧は或程度までは寧ろ奬勵すべきことなり、抑も人の身體は天然の美をも有するものにして、これに人工を加へて益々其美を發揮するは植木の枝を撓め、花卉の手入すると同じく美を愛する人情に適合するものなればなり、又これを衞生の上より見るも早朝盥嗽を取り、結髪して衣服を着替ふるときは身體清潔にして精神も又自から肅然たり、爽然たるべく、これにつれ坐作進退も又正しく、而して自然家風の整頓を來して家の品位を高くすべきな

くす

○學問は或人の笏となり、又或人の玩弄物となる

○約束に制限を置かざれば信用を滅す

○我家は人生の虹霓なり

○親戚とは飲食を共にすべきも事業を共にすべからず

○大なる事業は大なる準備を要す

○職業に努力せよ然らば汝は安全なるべし

○少年始めて世に出づるに當つては豫めまづ己れは嚴格なる現實世界に生息すること此の世界に於ては只外形のみにては、永くこれを實物なりと主張し能はざる事を心に銘せざるべからず

○懶惰は生物の墳墓なり

○快樂終れば懶惰始まる

○一たび奢侈に耽れば永久に人を汚す

り、彼の所謂裏店生活の婦人を見るに、頭髪は亂れ、衣服はしどけなくひだより、手足垢染みたる、若きも年老いて見へ、ほと〳〵愛想盡かすべき心地す、女子の嗜みとしてあるまじき擧動なり。

△美貌はよき推薦狀なり。

◎衛生は道德なり

衛生上の結果は著るしく女子の品位に關するものあり、これ等は常に然るべき心づかひあるを要す、彼の口中の臭きが如きは甚だ厭ふべきものにして、他人と應對するに相手方に不快を與へ、終に嫌忌の念を生ぜしむるものなれば速かにこれが治法を講ぜざるべからず、口臭は呼吸器若しくは消化器の異狀より來ること多ければ醫師に請ふて診察を受け、又口中の不潔、虫齒より來るものあれば、これ等は齒の治療をなし、日に數回口中を洗滌し、含嗽水を以て嗽を行ふべし、其他腋臭、頭髪の臭み、爪の垢など皆是れ不衛生より來るものにして人に忌み嫌はるゝものなれば、平日注意して身體の各部を清潔にすべきなり。

△理髪師は若からざるべからず醫師は老ひざるべからず。

◎もろ〳〵の惡癖を矯正せよ

人にはいろ〳〵の癖あるものなれど殊に著るしく目立ちて女の品性、人格を損ふものあり、是等はよろしく嗜み心得べき事なり、就中、買喰ひ、

○常に休息すれば倦む

○休息は勞働の美き酬なり

○行爲は言語よりも尊し

○小兒の運命は常に母の作る處となる

○天の與ふる方便は用ふべし怠るべからず

○事務に於ける手段は富を致すべき重要なる機會なり

○思慮深き人は自から淺しと考ふ

○自然の恩賜は貪慾なる人を滿足せず

○正直一途の人は殘酷なり

○不確實なる利潤を豫期する勿れ

○能く耳を傾くる者には數語にて足れり

○屢々小に小を加ふれば遂に大となる

○美は一本の毛を以て吾人を惹く

○危險は勝利に先つ

○小事も小人の爲めには大なり

大聲叱咤、怒り早き、擧手反抗の如きは直ちに女の淑德に關するものなるが、さなくとも、寢言居眠り、大笑ひ、齒軋り、欠伸、なども甚だよろしからぬ、癖なればつとめて矯す樣注意すべきなり。

寢言は睡眠中精神の或一部の不眠の有樣になるより、夢み且つ寢言を發するものにて、精神過勞の結果、又は寢前飽食し、或は湯茶など多飮するものに多し、心にもあらぬ事を喋り、家人の疑心など買ひたる例あれば殊に注意すべし、寢言の癖あるものは、運動を勵行し精神を安泰にし飽食を避くべし。

居眠りも又見苦しき癖なり、病症のものを除き、多くは睡眠時間の不規則より來る者なればまづ生活法を改むべし、さて睡眠催ふして堪へ難き時は冷水にて全身を摩擦し、或は氣を勵まして戶外を逍遙し、若しくは茶咖啡の濃厚なるを飮用すべし斯くして漸次其惡習を打破する樣になすべし。

笑癖　一般に妙齡の女子は木の端の倒れるを見ても笑ふなどいへる如く兎角物事可笑がり些細の事にまで失笑を禁せざることあり、こは敢て惡癖といふにあらねど、嚴格なる場所にありては、殊に大に愼まざるべからず、況んや人前に於て大口開きカラ〳〵とあたり憚なく大笑するに於てをやこれ啻に輕噪浮薄に見ゆるのみならず、時としては意外に人の疑を招く

○田園を購ふは之れを急にすべくこれ賣るは緩にすべし
○謹愼なる夫は節儉なる妻を撰ぶ
○惡しき父も惡しき子を望まず
○結婚には苦痛あり、然れども獨身者には快樂なし
○手に我が子を抱くものは心に我母を抱く
○其母によりて其娘を察せよ
○我が息子は其妻を娶るまで其息子なり然れども我か息女は生涯我が息女なり
○我家の乾麵包は他人の家の鮮肉よりも美なり
○我家は黄金の價値あり
○我家に休息せざるものは世上の地獄にあり
○二十歳に於て一も理解するなく三十歳に於て一も了知するなく、四十歳に於て一も所有するなき人は憐れむべき老年を迎ふるならん

事あり、されは平素よりよく心掛け、殊に斯る際には力めて心を他に轉じ其おかしき事柄を忘るゝ樣にすべし。

欠伸　これは衞生上甚だ有益の事にしてこれをこらゆるはよろしからず、故に獨居の際は差支なきも、人と應對中は嚴に謹愼すべし、人に對して倦怠輕侮の趣きありて甚だしく先方の感情を害するものなればなり、若し欠伸を催ふして堪へ難き時は人知れず深呼吸をなすべし、一時は止まるものとす、但しあまり欠伸の頻繁なるは神經衰弱の兆候なれば速に其原因に向つて治療の法を講ずべし、殊に欠伸はヒステリーの性に多しとの事なれば注意して治療を怠る勿れ。

開口　口は常に閉ぢてあるべし、開きたるはいと見苦しきものなり、殊に衞生上よりいふも外界の冷氣の直接に肺に達するが故に肺病に罹ることあり、呼吸は必らず鼻孔にてすべき樣矯正すべし、若し鼻にて呼吸困難の感ある時は、そは鼻腔内の疾病、咽喉又は氣道に疾患あるの因なれば速かに醫療すべし。

贈答の禮儀

禮儀の上より人に物を贈り、又はその贈物に對して返禮するは贈答の意

△慶事の贈答　これは價の貴からざるものにても慶事の紀念として互いに

○己れの感情を支配する事能はざる人は生活の法を知らざるものなり

○己れを決して許すべからず、他人は大に之れを許せ

○我が境遇に滿足せざるものは大なる痴人なり

○既にパンを持たば麵包を望むなかれ

○艱難を避くるの最良法は天命に從ふにあり

○愉快と、厚意とは勞力を輕からしむ

○賢からんよりは寧ろ幸福なれ

○幸福は去るに望みて其光を放つものなり

○快樂は永く期待するものに來る

○希望と勉强とは繁榮に達するの通路なり

○善き希望は惡しき所有に勝る

○成功の原因は不屈不撓にあり

保存し得べきものを以てするを第一とすべし、例へば婚禮又は新宅開きの贈物には座飾の修飾品となるべき花瓶、置物、置時計、置棚、姿見鏡、額、掛軸などのごとき物、或は筆畫帖、寫眞挾み等趣味多き物品、乃至は庭園に据へ付き石燈籠、若しくは庭石なども動きなき千代の壽を含みておもしろかるべし、但し植木、鉢物などは、土質、氣候、手入のよろしからざるより枯れなどせば互に快からざれば適當の品とは言ひ難し、衣類又は附屬品なども消耗品にあらざればよろし、世帶道具の類、茶器、菓子器、又は膳椀なども實用を望む家にありてはよろしかるべし。

右の返禮としては

普通は宴會を開きて客を招くものなれどもその地遠隔なるか、又は他の事情等ありて招き得ざる人には、袱紗などを贈り、又は鳥の子餅、赤飯など配るもあり、或は會食等に招きたる上、別に配り物するもあるべし、すべて返禮は贈られたる品と等しきか、稍劣れるかをよしとす、過ぎたるは却て失禮に當るべし、若し贈りたる人身分勝れて貴き者ならば挨拶に行くのみにて別に返禮せざるを却て禮とし、己れの方若し上輩ならば、贈り物より過ぎたる返禮する方よろし、出産賀壽ならば、長壽、壯健などを祝する意の贈物を撰ぶべし、出産には通常、産衣にすべき反物、又は産衣として仕立てたる衣服、及び頭巾、涎掛の類を贈る反物にはフランチル、メ

○熱心は事業の精神なり
○人道を行けば運命必らずこれに伴ふ
○貧に堪るは貧を療するの法なり
○一瞬間の忍耐は十年の安樂の源なり
○一たび艱難せんより、常に準備を整ふるを勝れりとす
○希望を缺ぐ人は人間中の尤も憫れむべき人なり
○自信は忍耐となるの第一要件なり
○怠惰の頭腦は惡魔の工場なり
○不平は智惠と力とのなき人の負ふべき重荷なり
○些少の事に滿足せざるものは何事にも滿足する事なし
○幸運なるものは一の假神にして敏捷大膽、機巧、忍耐を兼ねざるものは決してこれを惠まず
○艱難に際して行を善くするは易

レンスなど夏冬ともに小兒に便利なるべし、賀壽には幅物、置物など其人の好みに應ずべし返禮には宴會を開きて之を饗するもあるべし、且つ老人の揮毫せる扇面袱紗、或は盃など贈るもあるべし。

△凶事の贈答　慶事のは全く反對にて後に愁を遺す事尠からしめんが、爲め直ちに消耗すべき物を贈るのをよしとす、されば最も便利にして、後に悲みの種とならざる金員を贈るは極めて至當なるがごとし、されど爰に、物品を贈るべき必要ある時は造り花、生花、(いづれも人夫附)花輪、線香、蠟燭等を至當とし、又菓子其他の食品類を用ふるもあり。

△旅行の餞け　としては容積尠くして實用多かるべき旅中必要の具をよしとす、旅より返りたる際、これが返禮としてはなるべく旅行せる土地の產物、寫眞など此地に珍らしき物などを贈るべきなり。

△病氣見舞の贈物　は病苦を慰むるべき樣、美くしき花、おもしろき繪畫などを撰むべき事、返禮には床あげの祝と稱し、祝宴を開き、又は餅、赤飯などを配るを普通とす。

△火災水害等の贈答　其他家庭など損害せられたる人に、見舞として贈るべきものは衣類の材料、食器類など、調法なるを數多く贈る方、貴重品を少し贈るよりも勝るべし、返禮には諸事復舊せられたる後來宴會などを開くものあれど大方は挨拶のみにて足れり。

く繁榮に際して行を善くするは難し

○運命は人に先立つ事もなし、又人に後るゝ事もなし

○危難は人間の眞誠なる試金石なり

○心配輕ければ辨じ、重ければ默す

○此の世界に於ては一も確實なるものあらず、運命の車輪は永久に循環せり

○境遇は人生を敎導す、即ち人生は舟にして境遇は一種の梶なり

○如何なる高所なりとも人間の登り得ざるはなし然れどもこれに登らんと欲せば注意と確信とを以てせざるべからず

○情け深き人は禍をかふむる、聲の木魅にこたふるが如し

△季節の贈物　年玉、新年の年首廻禮に持參する贈物なり、商人の得意先に贈るもの多く、品物は海苔、端書、翫具、繪本、双六、暦、手拭、書物、紙筆などを普通とす、次で上巳には、女兒の初節句に贈るは重に內裏雛、雛道具、さゝえ等なり、又五月五日男子の節句に贈るは兜人形等、中元には素麵、白玉粉、葛粉、砂糖、乾物類など、クリスマスは十二月廿五日にして贈物には、翫具、花、飾り物、菓子等、歳暮には砂糖、羽子板、繪双紙、繪葉書、下駄、鮭昆布、酒類等なり。

見舞存問の事

見舞は見廻るといふ意味にて、先方の憂苦、人の心配、疾病、難義を存問するをいふ、病氣見舞は病氣の容體經過等を尋ねんが爲め見舞ふものなれば、まづ取次のものに譯を告げ、其病狀のあらましを聞て後、重病者ならば更に看護人に就て詳しく容體を聞取をよしとす、强て病人に面會を求むるは却つてよろしからず、又たとへ病人に話しせずとも病室にある間は病人も多少心づかひするものなり、殊に藥用、食事、及び便通等を遠慮するより其時間を不規則ならしめ、思はざる迷惑を掛くるものなれば止むを得ず病室に通る事ありとも務めて靜肅にし、決して永く止まるべからず、輕症者の病室內にても永く止まる時は病人床上に起き直るなどし

美文作例

秋の田面（増田春野）

あめつちのめぐみわたくしなく、生ふる稲のうちたれたる田面はるかに、遠き所までながめやるにさながら波立つ海のさまなり、ここ、かしこに引板などの見ゆる鈞するあまにかよひたれど、稲のみのりたることゆたかにして心ちよからぬ人はあらじ。

秋の花（篠部清風）

秋の花をうへまぜたる、いろ〳〵咲きみだれて常の年よりも見ところ多くつくりわたせる野邊の色を見るには夏の暑さも忘られて、涼しうおもしろくあくがるゝ様なり多くの花どもの中にも、おしなべたるをかしさはすゝきこそあれ、朝露にぬれてうちなびきたるはさばかりのものやはある、桔梗の花はむらさきのゆかりとおもへばあはれなり、いともなま

て、温保を欠き、窮屈を忍ぶなど、種々不養生の事をなし、寒冒其他呼吸器病者にありては談話によりて病勢を重くし、随つて快復の期を遅からしむるものあり、よく注意すべし、殊に神經質の患者には特別の注意を要す、すべて病人は神經過敏になり居るものなれば談話の事柄にも随分注意し其の心意を一層激せしめ、或は惱ましむるが如き事を避くべし、

されば病氣見舞の贈物には、花、繪畫等の見て愉快を感じ、病苦を慰むるが如き種類を撰むべし、繪畫も卑猥なるものを忌み、おもしろき物、滑稽趣味なるをよしとす、若し食物ならば滋養品をよしとす、菓子類などは如何なる品にても病人などには餘り望ましきものにあらず、老人、小兒等には殊に忌むべし壯者とても病患によりては時としては小兒らしくもなり、老耄者の如くにもなりて判斷力、忍耐力など尠く、萬事聞分なくなりたるが多ければ猥りに食事など贈りては却て病勢を助くる媒なることなしとせず。

火事見舞は成るべく倔強なる男子、即ち抱へ車夫又は書生などを遣すをよしとす、罹災者の家人の見知れる者ならば猶都合よろしかるべし、然らざる時には我が名刺を齎らし、若しくは、定紋附の提灯など携へしむべし、時としては罹災者の家族を自宅に迎へ、又働らき人などの爲め、炊出して辨當を贈る等の手筈も入用ならん、火事場にはなるべく、握飯、梅干など

めく女郎花を、夜なく〱露やむすばんと、これのみうしろめたうなん。

山　里（千　葉）

されば世を避くるとしもあられど、聞じこる市の巷に近き賑はしさを厭ひて、此山里には移ろひ住めるになん、秋こそ殊にといへる宜なるかな、まがきの下にたゝずめる小徑、松の木隙ふましらの聲も、趣ある人をなぐさむるに似てあはれなるに、西さす日も入らばと、杣人の斧のひゞきたへて端山のかひより月さしのぼれば、そかひの峰より落つる瀧つ瀬は黄金の色の絲ひきはへたらんごとく、岩に碎くる水は、白玉をこきちらすかとぞ疑はるゝ。

茸（■野貞■）

松茸いとおふし、松の下蔭にのみ生ふと思ひしに、さゝ竹のひたおひにおひしげれる中、つゞしの根にこもりたるよ、夕日かげに笠た

を便利とす、大都會にありては警察の注意行屆き火事場盜賊を防がん爲め、外より他人の入り込むを禁ずるものなれば此又よく注意すべし。

暴風、洪水等の見舞も地震、雷電等の訪問も其當時には大概出來ぬるものなれば、收まりたる後にて其難厄に同情をあらはし災害によりて蒙りたる憂苦を慰むる樣すべし、又即時にても出來得べくば手傳ひ救助をなすべきは勿論なり、すべて天變地災によりて家屋を損じ、家具衣類等を失ひたる人には見舞としては衣服、器具、等を贈物とする事最も適當なるべし。

庖　厨　門

食膳は配合にあり

世俗に献立といふ詞あり、食品の配合を考へ、膳部の秩序を整ふの意なり、即ち食膳に供ふる料理品の選擇配合を定めたるものにして其の良否は食膳に對する人々の滿足と不滿足とに關係すること大なるものなれば主婦自から手を下して衛生經濟及び家族の嗜好に適する樣深く心を用ひ其時と場合とをよく考へ取合せ方をよくするにあり、これ又女の身嗜みの一つといふべし、即ち寒き時には温く夏季には冷かに暑中は淡薄にして冬季は濃厚の

てゝ道もせに出でたる、いとをかし。しめじ、霜ふり千本といへる、いとめでたし、初茸はめでたけれど、蟲ばみたるが多きぞにくき、金たけ、黒たけ、ものげなし、霧たけ、神無月ばかり、これたてまつれ給へなど、山里人のもとより消息して得させたる、いとありがたく又めでたし、岩たけ、革たけ、椎たけ、精進のたけなどいはんかたなし。

稲　刈（清少納言）

八月晦日太秦にまうづと見れば穂に出でたる田の人多くてさわぐ、稲刈るなりけり、早苗とりしかいつの間にとはまこと、げにさいつごろ賀茂に詣づとて見しが、哀にもなりにけるかな、これは女もまじらず、男の片手にいと赤き稲のもとは青きを刈りもちて刀か何にかあらん、本を切るさまの安らけにめでたき事にいとせまほしく見ゆるや、いかでさすらん、穂をうへにて並み居る、い

味を薦むるは献立上普通の心得にして食物の取合に就ては要するに食品と料理との變化を旨とし、味の濃厚なるもの、次に淡薄なるもの、汁氣なき物の次には汁氣あるもの、甘き物の次には鹽辛き物、酸味の物などを案配し、又色の如きも清く麗はしくして單調に陥らぬ樣注意し、且又客を饗する時は其人々の平素の嗜好を考へ酒を嗜む人には甘きを避けて酢味を供し、婦人小兒には殊に甘味の品を出すなど何れも献立上常に注意し居るべき事なりとす、又家族日常の献立に就ては保健食料などを鑑み、滋養分に心を用ひ日々の献立をばなるべく變化するを必要とす、左に記するは其一斑なり。

日常の献立（春の部）

（茶碗盛）　鯛の切身、みつば、罐詰松茸薄切、清し汁、木の芽或は白魚、小松菜、若め、清し汁

（刺身）　まぐろの作り身、鯛の作り身、五分切獨活、卸し大根、おろしわさび、生海苔、合せ醤油

（酢の物）　わけぎ若くは葱、らん切うど、わかめ、鯛の薄作身、白味噌からしあへ

（口取）　あさひ蒲鉾、栗きんとん、燒鳥

（燒肴）　鯛のてり燒、筍のあちやら煮、（筍を細かにきざみて酢、酒、醤油などにて煮たるもの）

とおかしう見ゆ。

雪

雪の降りたるつとめとて、一品の宮の女房、南殿などに出でゝ見れば、雪はまことに花とまがひ、池の氷はかゞみと見ゆ、簾にも花咲く、いみじうをかし、御堂の方を見れば甍のこゝちして見わたさる、庭の雪は消へかたになりにけり。

納涼（藤井高尚）

水無月のいとあつき日は書見るものうく、あそびなどもすさまじく、肩うちかたひてはや日も暮れなんと思ひつゝなるに、やうやう夕ぐれになれば、ゆあみし汗にぬれぬ衣きかへなどして宿を立ちいで、川の堤をゆく、みぎわには生ひたる眞菰の青きいろのすゞしげなるに、白き露さへおきたるいはんかたなし。

五月雨（藤井高尚）

（煮ざかな）　鮃あら煮、或は鰹、せんぎり生姜、白酢蓮根

同　夏の部

（茶碗）　玉子豆腐、花鰕、もやし三つ葉、清し汁、そぎ柚
（酢の物）　あわびの酢貝若くは水貝、胡瓜もみ、花生姜
（洗ひ）　鯛若くは鯉、卸しわさび、穂紫蘇、合せ醤油
（甘煮）　夜蒔ゐんぎん、新牛蒡、里芋、あなご
（焼肴）　あなごの照焼

同　秋の部

（汁）　松露、むしり鯛、三州味噌
（刺身）　鮪田舎づくり、卸し大根
（膾）　白髪大根、さゝがき茗荷、鯔作り身、ことぶき海苔
（壷）　さき松茸、夜蒔ゐんげん、鶉のたゝき

同　冬の部

（汁）　鏡大根、あられ鯛、三州味噌
（猪口）　烏賊、人參、うど、白胡麻あへ
（焼物）　あま鯛の味噌づけ、裏白蒲鉾、梅肉羹
（酢の物）　海鼠、微塵生姜、三杯酢かけ
（甘煮）　筍、やつかしら、うど、きやべつ巻、粒椎茸、あなご、

春の雨はいやしくふれども、こぞめにしあれば、庭たづみなどのながれゆくこともなきを、五月のは卯の花くたすといひけんやうに、晴間なく日數ふるうちに、いたく降りにふる日は、作り山より見なれぬ瀧落ち、木積の庭により來るなど、山里の景色、海づらのさましてめづらしく、此頃のつれ〴〵もうちまぎれぬかし。

春の月（大貳三位）

霞かけて出づる月影ほのかに霞み渡りて四方の山邊心ぼそげに見渡されたるに近き寺々の鐘のこゑ〴〵に聞えつゝいつくに讀むにや經の聲もほのかにきこゆなり。

雲（清少納言）

しろき、むらさき、黒き雲あらはれたり、風吹くをりの天氣、明けはなるゝほどの黒き雲のやうやう白うなりゆくもいとをかし、朝に去る色とかや、文にもつくり

蒸物季節十種

△小魚の酒蒸　鰯、あゆ、小あじなどを三枚におろし、腹骨と小ぼねを拔き去り、鹽を表裏にふりかけ、十分間も經て水にてあらひ、布巾にて水を拭ひ、皿に酒をいれてこの中に浸し、暫時して引あげ、輕く布巾にて拭ひ、手早くせいろうの中に竹の皮をしき、其の上にならべ、十分に釜の湯のわくをまちて蒸籠をのせ、蒸すなり、おろしぎわに更に少量の酒をふりかけ皿にとり柚子酢をかけて食す。

△鯛のケンチン蒸　鯛を水洗ひし水氣を拭ひ、よく鱗を去り、之れを除き脊より庖丁を入れ、腸と中骨とを去りて水洗ひし、再び水氣を拭ひ、腹骨と小骨を拔き直ちに醤油の中に浸し、三十分ほど經て引あげ、醤油氣を拭ひ、その中に炒豆腐を詰めこみ、切口を元の如くして手早くせいろうの中に竹の皮を敷き、大根を魚の枕にして其上に魚をならべ湯のよく沸き立ちたる處ろへせいろうをのせて蓋をして三十分間ほどむすなり。

（注意）炒豆腐のこしらへ方は鍋に豆腐を入れ、一と沸りせしめて後笊に布巾をあてゝ其中にあけ、十分に水氣をしぼりて鍋にうつし、かつぶし汁と砂糖と醤油とを加へ、飯匕にてかき廻し、汁氣の衰滅まで炒りあげ、蓮根、椎茸、木耳、にんじんなど細かに切り、ゆでゝ味つけたるをませ

けり、月のいとあかきおもてに薄き雲いとあはれなり。

音頭の瀬戸（廣島縣）

安藝の國音戸の瀬戸といふ海あり、此所は國の南の山遙かに突出で六七里海上に出でたり、其山の陸地に連る所甚だ細けれど海へ出たる所猶ほ山をほり穿て切通ふし、舟のかよふ海路を新に造りしなり、其所人力を以て切明たりし事なれば南方の岸せまり居て其間の潮行甚だ急にして舟人の恐るゝ所なり、何人の切通せし事なりやと尋ぬるにむかし平清盛安藝の守にて代國に居給ひし時舟にて毎度往來に此所に巡り出崎の山にさへられて遙かの南の方へ廻りて十里餘も海路遠くなれば此所を廻り給ふ度毎に怒りて、此出崎の山を切通し船を直ぐにやるべしと下知し給ふ人皆此事を人力の及ぶ處にあらざるべしと恐れしかども、清盛の下知已み難くて數萬人の力を以て遂に

るなり。

△蝦の更紗むし。海老は何種にてもよし。頭を去り、皮をむき、水洗ひし、俎板にのせ庖丁の刄の方にてよく叩き、更に脊の方にてそろ〳〵とたゝきあげ、別に其量の二倍ほどのかつぶし汁と少しの鹽を混じて味を試み、それより椎茸なと細かに剉み、右煮出汁と少量の醤油とにて淡味に煮つけ、ほどよく右の海老肉とまぜ、直ちに茶碗蒸の茶碗に八分目ほど入れ蒸籠の中へならべ、湯の沸騰するをまつて其上にのせ、蓋を少し細目にあけて二十五分間ほど蒸し蒸しあからば、かけ汁を添へて出す、かけ汁は煮出しに醤油を少し加へ、味を試て、火にかけ、沸騰したる時水にて薄く溶きたる葛粉に火の透りたる時鍋をおろし、蒸したる海老の上に注けおろし山葵を添へて出す。

△松茸の酒むし　松茸をきれいによくこしらへて酒に浸し置きそれより、ほうろくの中に鹽をふり、其上に松葉を列べ、松茸を其上にのせ、別のほうろくにて蓋をなし、よく煽りたる火を其の上下にのせて、蒸焼にするなり、食する時には柚子酢をかけるなり。

△魚の蕎麥むし　魚をよくこしらへて柏子木に切り、醤油に浸し前の如く蒸して一個の盛そばを三分して魚肉の上にのせ、更に二三分間むし、皿にもり、かけ汁に海苔をつけて出す。

陸路に遠なる處ろを斷切ちて船の通ふ海を作りなせり、其後は數百年の後も其里を繫りて上り下りの船路近く、行事を得るなりとぞ、予兵庫に遊びし時築島を見て清盛の志の大にして奇遇なる事を感じ驚きしが、又此事を聞いて一世に威を輝ひ給ひしも其故なきにあらざりしと其世の事までも思ひやりし、又讃州の陸地を通りし時、大道の作り樣を見るに、他の國とは違ひて多くは正直に作りたり、元來山國なれば直ぐにはつき難き道を山に登り谷に下りて無理に近道に作りなせり、予疑れて聞き居りしは日本の道路は其始め大方行基菩薩の指圖なりといふ事なりしが何れの國の道も山あれば其麓を廻り廻りて谷を傳ひ行き成丈は山坂を登らず、平坦の處を選ぶ樣につけたるものなり、唯讃州になりては廻り道なく大方直ぐに行くやうに山谷も厭はず登り下りて道をつけたり、他の國の道を開ける處ろと

△小魚の味淋蒸　これも前のごとく小魚をこしらへ、よく水洗ひして水氣を拭ひ、味淋の中に浸し、しばらくして引上げ、布巾にて味淋をぬぐひ、前の如き手順にて蒸しあぐるなり。

△小魚の鹽むし　これも前と同樣小魚をよく拵らへ、小骨をぬき、直ちに摺鉢に入れ、鹽少し加へてよく摺り、裏ごしにかけ、板の上に濡布巾を敷きて其上に二分ほどの厚さにして方形にのばしそのまゝ蒸籠に入れ釜の湯のよく沸くをまちて前の如くむしあげ、取り出して適宜に切り椀に入れ、おろし生姜の汁をかけて食す。

△魚の黄味むし　白肉の魚を三枚におろし、腹骨と脊骨とを拔去り、前の手順にて蒸し、卵の黄味に砂糖少しと鹽少々を加へて味の加減をなし、火にかけてかきまわし、ほどよく炒りて皿に毛篩をかぶせ飯杓子にて裏ごしにかけ、右の魚肉の上にのせ蒸籠にてむし、注汁を添へて出す。

△魚の若菜むし　これも白肉に限る前の手つゞきにて蒸し、それより小松菜の根を切り、よく水にてあらひ、莖を去り、葉のみを堅くしぼり爼の上にのせ、なるべく細かに剉み叩き、小鍋に移し火にかけ、かき廻しながら鹽を少し加へ、味の加減を見て鍋をおろし右の魚肉の上にちらして二三分間ほど蒸すなり。

は格別の様に見ゆれば是れ必らず平相國清盛の吹め給ひしものにやあらん。

長歌作例

若菜（雷鋒玉）

朝風に衣手かへし
　夕露に裳の裾ぬらし
おもちしの節わかなと
　春淺き野べにつむらし
いはひつゝ母にまつるや
　ほぎつゝ父にまつるや
まぐしはし處女
　うらぐはし子等

柳（鋒玉）

裏こそ編みては懸くれ
　伴こそ取りては掃へ
編まなくに軒ばにかゝり
　取らなくに庭の面はらひ
裏なし日かけをへだて
　伴なし塵うらはらふ
我宿のしだり柳は
　みやび男の衣の訪ひこん

季節煮物二十種

△鳥の田毎煮　鳥の肉を小切になし、玉葱と共に酒、みりん、醤油にて煮、これに三つ葉を入れ、かきまはして直ぐに鍋をおろし、丼又は深皿に盛り、其上に鷄卵をわりて黄身のまんなかになるやうに落して、せいろに入れ、廻りの白味の白くなるまで蒸し胡椒をふりかくべし。

△蓮根に皮牛蒡のあんかけ　蓮根を卸し、饂飩粉を入れてゆるめて茹で、牛蒡を二寸位に切り、切り口より皮をむき、縦に二つ切にし、薄味をつけて椀に盛り、餡をかけ、生姜を卸して上置きにす、又薄葛にするもよし。

△初茸の鹽煮　莖を去り、蓋に鹽をふりかけ、空鍋にて煮つけ、青海苔をかけて出す。

△八方菜　栗、にんじん、長芋、くわゐ、牛蒡、椎たけ、麩の八種を細かに切りて味をつけ置き、別に豆腐の水をしぼり、うどん粉少し入れ、これを衣にして前に用意せる八品を油にてあげ、昆布の出し醤油にて加減し、薄葛をかけて卸しわさびにて出す。

△蛤の時雨煮　はまぐりのむき身に生姜を刻みてまぜ生醤油にて煮るべし。

△巻烏賊　いかをよく洗ひて縦に切目を入れて、よき藁にてむすび、酒と

まげなかもする

歸雁（久米幹文）

いさなどりむさしの海のおきさけてこぎゆく舟
湊つきてこぎくる舟のからろとる夜音のとほき
あやしやと見さくる空のおぼろ夜の月にあくがれて
常世にとおもひやたてる國邊にとかへるやいそぐ
なきつれてとわたるかりのゆくへしらずも

反歌

浦遠くなにのいそぎにかへる雁朧月夜におもひ立つらむ

山花（[illegible]王）

梓弓春さりくれば咲き出づる時を待ちつけ
むれ來ぬる人にまじりて綾の袖赤裳かされて
手弱女も臨たちならす袖こそはかされのにほへ
花こそはかされのはゆれ

醤油とを等分にし、色のつくほどに煮て、葉を取り、小口切にして出すべし。

△牛蒡の胡麻煮　牛蒡を輪切にして大鍋にて茹であげ、擂りたる胡麻を入れませ、文火にて煮あぐるなり。

△蒟にやくの雁もどき　こんにやくを縦に二つ切りにして小口より薄く切り、しほにてもみ、水にて洗ひ、布巾にて水氣をとり、胡麻の油にてあげ水に浸して油氣をあらひ落し、醤油をよくしかけ、右のこんにやくに蓮芋けづり牛蒡など入れて生姜汁又はわり山椒にて出す。

△豚の角煮　豚を大切のまゝ水の中より鍋に入れ、ざつと煮立て、取出して大いさ二寸厚さ三分位に切り、鍋に敷笊をしきて其中に入れ豚一斤に水二合、酒二合、砂糖二十匁、水飴少々醤油三勺の割合にて煮汁の煮つまりたる頃卸すべし。

△大根の胡麻煮　大根の皮を剝き、銀杏に切り、大鍋にてゆで、これに胡麻味噌をませ、文火にて煮るなり。

△鳥の緑煮　稚鳥の肉を細かに切り、酒、みりん、醤油にて煮汁のつまりたる處ろへ青豆を入れ又更に水にてときたる葛を入れ、どろ／＼になるまで煮て、丼物に用ふ。

△蛸の櫻煮　蛸の足を生のまゝ小口切にして水にて洗ひ、味淋を入れて煮

いつみても花はひとへの
山ざくら

春　興（[illegible]）

春の野は道ぞゆかれぬ
　おひだりすみれ花咲き
初わらび生ひまじりけり
　すみれ草つまんとすれば
行先にひばり鳴立ち
　初わらび折らんとすれば
来しあとに雉なきて
　おもしろみ間捨がたみ
道ぞゆかれぬ

山　吹（静　玉）

春ふかくかすむ小川の
　をちこちに小船うけすゑ
さばしりてくだる若鮎の
　おちくるをまちて釣れる
よりくるをもりてやくめる
　川中をとめてさでさせ
川岸をよぎて棹させ
　今を盛と咲きてかゝれる
山吹の枝やをれなむ
　花やちりなむ

上りたる時醬油をさすべし。

△湯松茸　松茸を適宜に切りざつと湯煮して葛かけにし、卸し柚子をのせて出す。

△百合の丸煮　ゆりを生のまゝ逆さまに鍋にのせ食鹽と味淋とにて二十分間ほど煮るべし。

△親子煮　鳥の肉と卵とを煮たるものなり、まづ肉を薄く切り、酒、みりん、煮出し、醬油にて煮、次に、卵をわり、五分切の三つ葉とまぜて、前の鳥の中へ入れザット煮る、丼物に用ふ。

△太牛蒡の山椒味噌煮　太き牛蒡を筒切にして湯煮して更に酒にて煮、柔らかに煮へたる時味噌を擂り入れ、煮山椒の粉をふりまぜて出すべし。

△牛肉の胡麻煮　胡麻五六勺を煎り、擂鉢にて擂り、これに牛肉を大切のまゝつけ置くこと二三時間にしてとり出し、薄く切りて砂糖醬油にて胡麻と共に煮るべし。

△きんこの寄せ煮　大なる柔かき干海鼠を切りてよくたゝき、銀杏、木耳くわゐなど細かく切りてたゝきまぜ、鷄卵の白身をまぜ合せ、これを器に入れて蒸し、思ふまゝに切り薄葛をかけ、胡椒の粉をふりて出すべし。

夏の歌（栗田土満）

山ちかく家居しをれば
　あしたには見渡す山
ゆふべには見さくる山
　あした見て夕に見れば
あしたよりいや立榮え
　夕べみてあしたに見れば
夕よりしゞになりゆく
　夏山のしげき木のまに
ほとゝぎす來鳴きとよもす
　その森山に

卯花

朝まだき峠の小峠の
　露ふみてわがとめゆけば
小鍬もち利鎌手にぎり
　賤の男がともつれだちて
時ならずみ雪はだれに
　菅笠にみだりてちらし
わらぐつにはらゝにかけて
　來るかたをふりさけ見かば
垣つゞき卯の花さけり
　畑中の里

蜂（久米幹文）

汁の仕立方二十種

汁に三種あり、味噌汁、すまし、吸物、すましとは鹽にて味をつけたるもの、吸物は醤油を用ひてつくりたるもの、これ大略の區別なり、猶この外濃醤あり、けんちんあり、さつま汁、納豆汁、三平汁、とろゝ汁、胡麻汁など特殊のものありて、それ〲味と風味を異にす。さて通常の

△本汁　は上等の白味噌と常の味噌とを四分六分の割合にてよく摺り交ぜ、濃き加減に煮るなり。

△赤味噌汁　赤味噌八分に白味噌二分を摺りませるなり、赤味噌のみにては味美ならず。

△濃醤汁　これは赤味噌を濃くしたてたるものなり。

△白味噌汁　上等の白味噌のみをよく摺りませ、酒を加へてのべ、更に程よく水を加へて煮る、いづれも煮かへして水嚢にて漉すべし。

△やみしる　これは暗みの夜に網を入れて捕る魚類を煮て暗ながら食するものにて最も亂暴なる種類なり。

△けんちんは　油にて煎りたるものを汁の實とするもの、即ち豆腐、人參、大根、芋、牛蒡等を薄切にし、油にいため、汁につくりたるものなり。

△さつま汁　これは野菜鳥獸の肉を入れて煮たるものにて薩摩の（元と琉

蜂といふ名はひとしきな
　さまざまに品こそかはれ
虎ふに身をかざらひ
　もろつばさ劍羽きらし
しが腰をふゝと振り立て
　錐刀しや尻にこめて
たむかへる人さすもあり
　春秋に咲きと咲きつぐ
百花の露をあつめ
　味酒をかみつゝのみて
うからやから歌ひ舞ひつゝ
　かたみに醉ひなくもあり
腰細のすがたながらに
　心さへ身さへくろめて
さゝがにの蜘蛛らとりつゝ
　子ならぬは憎し恐ろし
なべて世は我子になれと
　のろひつゝ子つくるもあり
はふ蟲のはかなきだにも
　かくさまにありけるものを

早苗（海野遊翁）

ほとゝぎす來なくさ月の
　さみだれの雲ま見えそめ
朝日かげ田づらにさせば

球）の料理法なりとぞ。

△とろゝ汁　これは薯蕷の摺りたるに汁を混和し、飯にかけて食するものにて古來麥飯にかけるを佳とするが故に麥飯とろゝと稱せり。

△胡麻汁　みそ汁の中へ胡麻を摺込たる物にて多く茄子の實を入る物なり

△とろゝ玉子汁　いもは自然薯を最上とす、まづ皮を剝きて摺りおろし、これに鷄卵の白身を、適度にまぜ、摺鉢にてよく摺り、其まゝ煮出し汁にて適宜に薄くすり交せ、小丼に入れ、青海苔をかけて出す。

△鰯のつみ入汁　いわしの皮を剝き、骨を去り、よく洗ひ、布巾にて水をしぼりこれを摺鉢にて鹽を入れて摺り、砂糖、酒、玉子を入れてよく摺りまぜ、次に鍋に味噌汁を作り煮立ゝ其中にこの摺身を庖丁にて切込み入れて煮るべし。

△初茸汁　初茸を細かにして水に浸し置きよく洗ひて摺鉢にて摺り、鰹節のだしにてとろゝ位にすりのべ、水嚢に漉し汁にまぜるなり、あしらへには摘み菜、柚子等。

△琉球汁　生ぶし一切を細かに切り、野菜は人參を花形に薄く切り、さや隱元を細かく刻み、鍋に八合位の水を煮立たせ、その中にて前に用意せる野菜を柔くなるまで煮、醬油と砂糖とにて通常の清汁より甘辛く煮つけて、鍋をおろし、次に白胡麻を一合ほど炒り摺鉢にてよく〳〵摺り鍋の汁と

めづらしくうれしとや見よ
をちこちに苗をはこばせ
ゆひやとひ已れもになひ
畦ごとに束ねおければ
しづ男等は乙女かともと
乙女等は畦男のともと
歌うたひ菅の小笠着
うちむれてきほひぞ植うる
このもかのもに

螢（遊　書）

空はまだくれもあへぬに
をちこちの川瀬の眞菰
おひしげる葦の葉がくれ
一つみえ二つあらはれ
時のまにくれゆくまゝに
河瀬みなほたるになれば
里の子のおくれ先だち
うちきほひく出できて
とびちがふ螢をかると
笹葉もち團扇片手に
いりみだれみたれぞ遊ぶ
かはべつたひに

海上夕立（楓　守　郎）

を少しづゝ入れて胡麻を溶かし、大鉢に入れ、鍋に殘りたる身をも鉢の胡麻汁の中に入れ、大匙を添へ薬味には、紫蘇の葉、茗荷など細かに刻み、皿に盛りて共に卓上に出し、温き麥飯に右の身と汁とを程よくかけ香味を添へて食す。

△くぢら汁　鯨の黒皮を去り、白皮を薄く小口より切り、豆腐滓にて揉み、よく交せ、これを擂鉢に入れて上より沸湯をかけ、箸にてかき廻し、笊にあげ水にて洗ひ置き別に鍋に味噌汁と、鰹節とを入れて煮立て、椀に鯨を盛て汁をかけるなり、つま物は茄子、牛蒡、油揚の中一品を用ひてよし。

△鯉濃　鯉は上等ならば三枚におろし、骨切をなして煮込み、並ならば筒切になして鍋に敷笊を敷て其中に味噌汁を入れ、此れに鯉を入れて十五分ほど煮るをよしとす、煮あがらば笊とともに引あげ右の鍋は其まゝ火にかけ十分間位煮つめて卸し、何時にても用ふる時に笊と共に煖むべし。

△鷄の濃汁　味噌をよく擂りて水にてのべ酒を加へ、これに鷄を細かにたゝき込み、よくまぜ合せて鷄と味噌と等分になし、これを鍋に入れて煮るべし、山椒を入るゝもよく其外何にても入れ、煮へ立つ間は箸にてかき廻はすべし。

△卵とぢ　鷄卵は二人前に一つの割合にてよし、あしらへには小椎茸、茗荷を縦にきざみ、清汁に入れて煮たる時鉢に入れてよくかき廻し、卵を一

稲田の原ふりさけみれば
　白雲のむかぶす極み
ほなわのとゞまるかぎり
　風もよく晴れたる海の
時のまに空かきくれて
　あげほをおろしもあへず
干す網をたぐりもあへず
　沖見れば鯨のほか
浪見れば鷗のいぶきか
　みそらには龍かもいまく
なるかみかくづれをちぬと
　その音のきゝのかしこへ
その間の見のおそろしき
　青海原かぜのなごりの
白波を沖にのこして
　見し雲はいづちいにけん
夕立の空さりげなく
　夕日影たゝさしわたる
海のおもてを

田家虫（莊　　蕃）

あせづたひつたふ細道
　くろづたひ過ぐる通ひ路
むら〳〵に稲ほにいで
　さびしきは門田の秋ぞ

面に流し込むなり、あしらへには茄子、蓮根、芋等よし。

△納豆汁　味噌の代りに納豆を摺りて用ふ、寺方にて用ふる料理法にして其實は芹、豆腐、油揚などの精進物なり。

△三平汁　これは北海道の漁場より流行せるものにて主に北海道にて鰊時に鰊を鹽汁にせるより起りたるものなり。

△うしほ煮　鯛其他の魚類を實とし、鹽汁にせるものなり。

△洗ひ味噌汁　かつを節のだしの汁の中に三州味噌を摺らずに其まゝ篩にて漉したるなり、味噌は多からぬをよしとす、嫁菜、たんぽゝ、土筆など取まぜて加へなば時に取りての吸物によろし。

△おろし汁　大根をおろし、牡蠣、はまぐりなど入れ中味噌に煮汁を加へてつくるなり。

醬油と味噌

味噌は古名を高麗醬といふ、往古韓國より傳へしものなりといふ、味噌の製造法に付其種類いろ〳〵ありて一定すべからず、今田舎味噌の製法について言はんに、大豆を蒸すこと十時間づゝ三度に及び六時間づゝを隔てゝ別に食鹽一と水三の割合の液を大麥麹に注ぎ大豆の冷却するを待ちて、之を合して攪みまぜるなり、此の混合物を大桶に移し、木蓋を覆ひ、大石を其上に置くなり而して其の原料の割合は

大豆一斗五升に大麥八升八合、鹽六升、水六升の割合なり

味噌の品質は其の製造の方法、穀物の種類、及び食鹽の分量等に因りて異なり、其製造の際の温度、食鹽、及び麹の分量によりて其の熟期に長短あるものなり。

しづけさは日中の庵ぞ
　たえ／＼に薄霧なびき
やう／＼にくれわたる頃
　かきねにもくろにも蟲の
遠近にやゝなきたてゝ
　しら露のおくての稲の
ほの／＼と霧ににほへる
　月かげさやかに聲の
なりゆくかな

反　歌

暮果てゝ月になりゆく小山田は
　蟲の聲さへすみ渡りけり

聞　鹿（飯田武郷）

かすがやま雲井はるかに
　わがまちし峰のさをしか
音々にまぢかくなりて
　わが庵のうしろの山の
谷一重へだつるばかり
　いつしかとなれるを聞ば
この頃の清き月夜に
　吹くかぜもやゝ肌寒むみ
眞萩さくふもとの野べに
　さきにほふ花づまとひに

菓子製法十六種

◎栗饅頭　白砂糖百二十目鷄卵五個、水飴十匁、炭酸曹達一匁、メリケン粉二百目、清水六勺をこね、切りて栗餡をつめ、テンパン鍋にならべ、上に刷毛にて味噌汁を塗り、竈内にて燒く。

◎開化饅頭　製造栗饅頭に同じ、只栗餡を並の赤豆餡にかへ、味噌汁の代りに黄卵を塗るを異りとす。

◎桃山　ザラメ糖三百五十目、白赤豆の漉粉五百目、鷄卵四個を以て餡を造り、（これを黄昏餡といふ）これにミヂン粉を適宜に加へ、木型にて打拔きて竈内にて燒きたるものなり。

◎茶つう　白砂糖メリケン粉各百目に清水五勺を加へてこね、とり粉を加へて小く切り、薄くのばして餡をつゝみ、胡麻をまぶし、上面に葉茶をのせて燒鍋にて燒く。

◎唐饅頭　銅平底の燒鍋に銅製の輪型をのせ、種をつぎ込み、餡の眞を入れ又種をつぎて燒く、種汁は白砂糖百十匁、鷄卵七個、饂飩粉百匁、清水少々をすり鉢にてませたるものなり。

◎建皮卷　砂糖九十目に水一合ほどませ、メリケン粉百匁を篩ひ入れつゝ手にてよくねり、水二合を加へて薄くし、胡麻の油をひきたる平燒鍋に角

うちむれて來鳴とよむる
　聲にぞあるらん

秋日郊行

くる人の踏めでざらん
　眞葛はふ野邊のけしきよ
もゝぐさの花さく野べよ
　わけくれどくれど百くさ
ゆきゆけどゆけど八千艸
　たをるともたをりも盡じ
かざすともかざすもあへじ
　秋の野はいまにこそさかり
千ぐさ、もゝぐさ

反歌

花みつゝのべにくれなばいろ〳〵の
　蟲のこえをも聞きて歸らん

山紅葉（石井義郷）

山見れば松こそしげれ
　見放せば松こそたてれ
その松の範圍おしなべ
　その松の隙はこと〴〵く
くれなゐのちしほのいろに
　明暮になれる眼へば
松杉のみどりの外は

枠を据へ、匙にて前の汁を掬ひたらし、焦げざる樣拭巾の上に取のせ、餡を置きて海苔巻ずしの如く巻き庖丁にて小口より切る。

◎金鍔　うどん粉を温湯にて捏ね濡手にて少しばかりを摘み取り、薄くのべて、つぶし餡又は並餡をつけ包みまるめて油を引きたる平底の焼鍋にのせ三本指にて押へて平たくし、裏がへして兩面を焼き横にころばせて、側面を焼くなり。

◎大福餅　上米を二度搗にし、つぶし餡を包み丸形にしたるもの、多くは黄白とす、平焼鍋にて餅面を薄く焼きたるは正式なり。

◎米饅頭　これも大福餅に同じ、只黄色にして並餡をつゝみ、腰高の小判形とせり。

◎幾世餅　短冊形の切餅を金網の上にて焼き、廻りに並餡をまぶしたるもの。

◎阿部川餅　切餅を焼きて熱湯中に投じ取出して黄粉及び白砂糖をまぶしたるものなり、駿州阿部川の名産なり。

◎鹿子餅　餅、牛皮羊羹の小切を眞にし、並餡の衣を厚く着せて丸め、周圍に蜜漬の金時赤豆を附着せしめたるもの。（京鹿子これは衣を紅餡とし蜜漬の隱元豆を附着せしめたるものなり）

◎焼金とん　白玉粉百六十匁に水七勺ばかりを加へ、次に白砂糖八十匁と

一葉だにそめぬはなしや
露にしぐれに

山寺暮秋

片山や世をふる寺の
苔むしろおりゐて見れば
とゞめえぬ秋はかぎりと
もみぢ葉も風にきほひて
おく霜にあらそひかれて
白菊もいろぞうつろふ
うつせみの世はかくこそと
瀧川のはやく見し世を
くりかへし忍び出でつゝ
かへるべき家路も問はず
ゆうしぐれ袂ぬらせば
塵の身の夢さませとや
岡の邊の松にこたふる
入相のかね

冬の歌（六人部是香）

秋すぎて冬し來ぬれば
かけともは落葉にうづみ
露しもは籬にさむし
淋しさのやるせなければ
立いでゝふりさけ見れば

並しん粉二合五勺とを混じ蒸籠にて蒸して後、つき浮粉を手につけて小く切りのばして並餡をつゝみ腰高の丸高にし、別に平燒鍋に胡麻の油を引き餅の上面を押しつけて薄く燒色を出す。

◎磯松風　白砂糖二百目水三合半、鹽少々を程よくときませ、ヌリケン粉百八十匁を篩つて靜かに篩い入れ、泡立器にて手早く泡立たせさて、蒸籠に角枠をすへ、濡布巾を敷きて其内に前の種をうつし入れ、三十分間ほどふかし、裏返して再びふかしたる後、簀の上に取出してさまし、濡らしたる庖丁にて切る。

◎時雨　蒸しぐれ、棹しぐれ、押しぐれ、黃味しぐれ、黑豆しぐれ等種々多けれども尤も普通なるは蒸しぐれなり、これは並の餡を鉢に盛り、上を押ならし、十字形に溝を入れ、其溝の中に新引種と食鹽少許とをつめ、再びかきませて、荒目の裏ごしにうけ、手の先にて漉し出す、これをそぼろといふ、さて別に白餡にて中味を作り、型の中にそぼろを吸ひ込み、眞を入れ、其上に又そぼろをつめて輕く押しかため、拔とりたる蒸籠にならべざつと湯氣をとうしたるものなり。

◎切山椒　白砂糖二百目並しん粉二百目を水にてこね合せ、山椒汁少々を加へ、（煮山椒を煎り、溫湯に浸けてしみ出したるものなり）蒸籠にて蒸す、さて臼にて搗またるを板上にうつし、麵棒にて三分厚さ位にのばし、冷ま

愛宕山しきみが原は
浮雲のいゆききまよひ
紫野内野の原は
かきくもり時雨もるなり
さびしさは廣き野山も
かはらざりけり

河上落葉（登　壽）

舟人のわたる柴橋
しば〱に木枯わたり
しば〱に木の葉ちるれば
ゆく水の音ばかりして
こがらしのわたるたび〱
谷川のうづもれ果てぬ
このはみだれて

中時雨（靜　玉）

晴れくもる冬のならひと
さしてゆく箱根の山も
かつ曇れかつ顯はれて
伊豆の島は夕日かぎろひ
雨降嶺はくれのこれるを
中空に雲かきくらし
驛路は草松さわぎ
峯づらはよる濱とよみ

したる後庖丁にて長さ二寸五分、巾三分位に切り、紅白を交へたるは頗る佳なり。

△梅酒の製法　青梅の實一升を焼酎一升に浸し、白砂糖一斤に混合し、容器を密閉し置くか、または梅の實を酒に浸し、これを蒸餾して後砂糖を加味したるものなり。

大豆と小豆の比較

大豆は日本普通の作物中稲に次いで盛んに栽培す、一年の産額約三百五十萬石に上る、味噌醤油の日用食品を始めとして豆腐、納豆、湯波、豆粉、煮豆、炒豆、並びに菓子の原料等多くは皆此の大豆を用ふ、其の成分は百分中蛋白質三十三、脂油十七、澱粉三十といふの割合にて人體の榮養に價あること穀類中第一にして肉類に讓らずといふべく、本邦人の食品として最も要用なる地位を占むるものなり。

小豆は原と印度より出でたるものなりといふ、多く餡菓子の原料となし飯に混じて炊き、洗粉となす、近年北海道にては晒餡、干餡等を製するに至りしが、よく貯藏に耐へ運搬に便なるのみならず。是を用ふるに輕便なるを以て、需用多し、其成分は蛋白質二十、澱粉六十にして、脂肪分は極めて少量なり、故に大豆とは甚だ其成分を異にするものなり。

みるがうちに吹風はやみ
　こよろぎの磯山しぐれ
神に出でにけり

冬　鳥（久米幹文）

筑波嶺に雪雲かゝり
　しぐれふる冬にしなれば
尾花ちる霜の田井に
　うちなく雁がねとほし
紅葉散るゝ山田づたひ
　圍めぐるあとはかまけり
その山を麓になして
　天の原雲ゐにそとる
二並の高根かしこき
　男の神に雄鳥は居り
女の神に女鳥はすみて
　かなし子を中になきつ
うち羽ぶき空もとゞろに
　かゝと鳴くその大鷲の
こゑのさむけさ



模範的精進料理

これは一切生臭き原料を用ゐずして調理せる料理なり、專ら佛事の際に行ひ、專ら佛敎を修する人の肉食せざるより起りたるものなり。この献立は、季節によりていろ〱あれど普通精進料理として其重なるものゝ調理法を擧ぐれば、

◎慈姑のきん團　まづ甘藷の皮を剝き一分厚の輪切にし、直ちに水中に投じ、二三回水をかへて灰を拔き、それより大なる慈姑十個の皮を剝き、適宜の大さに切り、鍋にぬるま湯と共に投じ、程よく煠でたる後ち湯を去り、水洗ひし、再び鍋に湯を沸かし、よく沸騰したる時右の甘藷を投じ鍋蓋をせず、軟かにゆでゝ笊にとり、直ちに裏ごしにかけて其量八十匁に同量の砂糖と一合の煮切味淋とを鍋に入れ、文火にかけ、程よく沸騰するを待ち、右の慈姑を投じ、十分に煮汁の染込みたる時漉したる甘藷を加へ、飯杓子にて鍋底に焦つかぬ様に煮つめたるもの、後鍋を下しよく冷して用ゆ。

◎芋莖の三杯酢　ずゐきの葉の部分を切去り、一尺ほどの長さに切り、兩端より皮を剝き一寸ほどに切り更に縦に細くきり、水中に投じ灰汁をぬき、鍋に湯をわかし、其中にてざつとゆで、目笊にあげ、手早く冷却し堅く水

反省録

△演劇は人の世の縮寫なり、或者は王侯に擬し、或者は乞食に扮す。されど何れも舞臺上の假裝にすぎずして、役割の如何には毫も其人の幸と不幸とに與からず。

△山海の珍味も飽いては一碗の素湯に如かず、無上の驕奢も慣れては一瓢の清遊に劣る　されば「空腹は最良の料理人なり」と。

△狂人東に走れは、之を追ふ者も東に走らざる可からず、走には一なれど前者は逃れんがため、後者は捕へんが爲也。生活に追はれ稼がんと、稼ぎながら何物か捉へんとする人と、勞は一なれど目的は爾らず。

△貧者は十金を得て喜悦し、富豪は萬金を以て猶ほその不如意を嘆つ、富は鹽水の如く、飲めば益々渇を覺ゆ。

△幸福の勁敵は名譽と野心なり、されば虛榮心強き人は世評の奴隷となる。

△旅人が或高地に達したる時、始めて過程の迂餘曲折せるさまを望見なし得るが如く、人生の行路も亦た、一定せる期間の終點に於て、漸く我經營事業の功績を見得る也。

△賢者は快樂を逐はずして、苦痛を避く。

氣をしぼり酢の中に浸し、暫時して絞り　砂糖、酢、醤油おの〳〵一杯づつ混合したる酢中にあへるなり。

◎同胡麻あへ　ずゐきを前の如くこしらへゆでゝ、堅く絞り酢の中に浸し、暫くして堅くしぼり、再度酢の中に投じ、直ちに絞りあげ、胡麻を焙烙にてよく炒り、擂鉢にてどろ〳〵になるまで擂り砂糖と醤油を程よく擂りませて右の芋茎をあへる。

◎ひらめ羹　これは豆腐二丁をゆで、布につゝみ、輕く水氣を搾り、直ちに裏漉にかけ、寒天一本を水に浸し、堅く絞りて一合五勺の水と共に鍋の中にちぎり込み、火にかけ、煮解けたる後、白砂糖二十匁を加へ食鹽少しを混じて味加減を試み、それより裏漉にかけ、右の豆腐を混和し、再度鍋を火上に架け二分間ほども飯杓子にて煉りませ流し箱若しくは重箱中に流しよく冷したる後抜き出し適宜の大さに切り山葵醤油を添て食す。

◎ぎせい豆腐　まづ炒豆腐をつくり、玉子燒鍋に胡麻油を引きその上に竹の皮を敷き込み、右の炒り豆腐に生玉子をかきませ、鍋にほどよくならし入れ、文火にかけ、鍋の上部に金網をのせ、炭火を置きて燒きあぐるものなり。

△學者は材木なり、應用は建築師なり、如何に良材を蒐むるも、これが組立法を知らざれば、畢竟寶の持腐れならん而已。

△女子が社交上の會話は巧妙なる一種の藝術なり、否な血を見ざる戰爭也、而も鋒鋩を露はす者に呪はる。

△愚なる蚊は血を滿身に吸收して、遂には自ら立つ能はざるに至る。貪慾飽くを知らざるの徒は此蚊を嗤ふの資格だに無し。

△豪猪は、撫でれば撫でるほど其針を逆立す。人の子も亦た愛撫其度に過ぐれば、父母をして悔あらしむ。

△鷄群、馬を評して曰く「彼は晨鳴を作る事も卵を產むことも知らぬ無能者なり」と。濫りに他を罵つて自ら高しとする人は、往々這の論法を使用す。

△他人の無能を批難するは、間接に自己の有能を廣告する底意と知るべし。

△盲人は外見甚た不幸なるに似たれど、本人は左程に不自由を喫たず、這は慾望の範圍縮少して、空想に惱まさること少なければ也。

△魚の水に棲み、鳥の空に翔くるは自然の法則なり、若し兩者相換んで其地位を換ふれば則ち死を免れず、されば人の煩悶は概れ分

洋食一品料理

△稚鷄スープ

一羽分の鷄肉を適宜に切り、多量の水を加へて鍋に入れ、とろ火にてよく沸騰せしめ、其浮きあがりたる泡滓をよく掬ひ去り、三時間ほど煮て、肉を骨より分離せしめ、さてメリケン粉を撒布し更にバタを加へて褐色に湯煎になし、冷めざる樣にし、一匙のカレー粉及び二匙のバタと、少量の蕃椒及び鹽とを加へてこれを濃厚ならしめ、右の湯煎にしたる肉を加ふべし。

△ポテト、スープ

六個の馬鈴薯を薄切にし一升二合の水を加へ、更に茶碗一杯の白米と、鷄卵大のバタとを混じ、又大匙一杯のメリケン粉を加へよくかき廻して一時間ほど煮たる後茶碗一杯の牛乳を注ぎ、ほどよく鹽を加へて煮あげるなり。

△比目魚のフライ

新しきひらめを程よき切身となし、よく洗ひ、布巾もてよく其水分を拭ひ去り、之れに食鹽及び胡椒の少量を撒りかけ、全面へメリケン粉を塗り、鷄卵の黄身を塗り、更に麵包粉を以て全體を包みて天麩羅の衣のごとくし、

外の奮發心に胚胎す。

△婦人の社交は恰も暖爐に對すると等しく適度の距離にありて身を温むるは可なれど、過度に接近すれば、偶ま火傷の難を免れず。

△柔克く剛を制すとは、猶ほ眞綿を以て彈丸を拒ぐるが如し、若し防ぐに玻璃板を以てすれば仍ち破壞す、妻の良人に對する、亦た這の比喩に洩れず。

△疾病に罹つて始めて健康を羨望するが如く、人は逆境に陷つて漸く幸福の眞意義を領會するに臻る。

△鐘は撞者の力量によつて音響を異にし、人の交際もまた對手の如何に由つて、其面目同じからず。

△子女の敎育は、恰も盆栽を培養するに齊しく、全く肥料なくしし生育せざれど、而も過度に施せば却て枯死せん而已。

△大聲を發する牛は遊群より逐はれ、誇長する人は友より逐はる。

△炎天に雨を思ひ、霖雨に日光を慕ふは人情の恒也。されば人は單調の永續を厭ふ。

△「笑」を麗かなる晴天に喩ふれば「涙」はそぼ降る雨の日に似たり、人生に喜悲あり、天に晴雨あるは即ち自然の調和法なり。

△他人の不幸を聞いて私に喜ぶ人を、更に悅

平たき鍋に豚の脂、又は牛のヘットを入れ沸騰するを待て中に投じて揚げ柚子を添へて出す。

△蠣フライ

大きなる蠣を一つ一つに水洗ひし靜かにこれを拭き去りてメリケン粉に包み、之に鷄卵の黄身を塗り、更に麵包粉の中に轉ばし衣を被せて油揚となすべし、又小さき蠣ならば一旦煠でゝ搔き揚げにするもよし附合には芹などよし。

△海老フライ

伊勢蝦又は車海老の頭を去り、皮を剝きて脊より二つに劃りよく布巾にて水氣を拭ひ、鷄卵を溶かしたる中に入れ、更にメリケン粉を糝し、鹽と胡椒とにて味をつけ、直ちにヘット、又はバタにて揚ぐ、焦色を帶ぶるを度とす。

△ポテト、コロツケ

馬鈴薯の皮をむき、鹽ゆでにして水氣を去り、裏漉にかけ、別に牛肉を細かに碎き、バタにていためて、前の馬鈴薯を包みて一寸ほどの俵形となし、メリケン粉を糝し、次に鷄卵液を塗り、又パン粉を糝し、更に鷄卵液を塗り、斯くすること三回の後直ちにヘットにて揚ぐべし。

△チキン、カツレツ

ばせんと思はゞ、自己の失敗及び其不運を追加して語るべし。

△人に忠告せんとする場合には、決して自己を引合に出すべからず。

△朝は一日の小誕生にして、夜眠はこれが小死なり、故に早起晩寢は一種の長壽法に外ならず。

△物體を持てばその重量を覺ゆれど、自己の體量の重さを感ずる人はあらむ、他の欠點の見易き所以も亦茲にあり。

△雲を見て雨を豫想し、而して進まざるは怯者のこと也、されど防雨具の用意なかる可からず。

割烹術語集

◎隱し山葵　これは蒲鉾を四分ほどに切り脊の中央に庖丁目を入れ、其中に卸山葵を挿みたるものなり。

◎かけ醤油　これは刺身に用ふる醤油の類にして山葵、生姜、芥子、山椒、胡麻等を混和したるものなり。

◎かけ酒　これは酒二升に鰹節の削りたる一升、煎出したる大粒の梅干二十個を加へ、一升ほどに煮つめたるもの、或は味淋に食鹽

鶏の頭部及び兩翼と兩脚とを去り、内臓と骨とを除き、上肢と下肢との四つの肉に分ち、庖丁の脊にてよく叩き其の延びたるをよく縮めて鹽と胡椒とを少しづゝ兩面に撒布し、ウスターソースを注ぎて皿中に浸し置き、三十分ほど經てこれにメリケン粉をまぶし鶏卵の黄身を塗り、パン粉に包みてヘットにて揚ぐるなり、附合には三つ葉、芹などよし。

△牛肉カツレツ

牛肉の大塊を厚さ三分ほどに切り、前の如く庖丁の脊にてよく叩き食鹽と胡椒とを兩面に撒布し、メリケン粉をまぶし、直に鶏卵の黄身の溶かしたる中に入れ更にパン粉をまぶし、十分に煮解かしたるペットの中に入れて揚ぐるなり、洋紙を布きて其上に取出し、油をきりて皿に盛るなり。

△オムレツ、スプレー

鶏卵の黄身六個中に十四匁の砂糖を混和し、十五分間攪き廻したる後、六個分の白身を泡にして右の中へ混じ、バタを引きて熱したる鍋の中に入れ、其まゝストーブに入れて焼きたる後皿にうつし、其上にジャムを置くべし。

△キャベツ、スチウ

甘藍を細かに切り、バタとサウダ油とにてよくいため、別に豚肉、牛肉若しくは鶏肉をバタにていためて兩者を相混じ、スープにて煮て其中へ胡

を加へ、溜り醤油を加へたるもの。

◎煉り酒　酒一升に雞卵の蛋白二個を混和し、一片の白砂糖を加へ、土鍋にて煉りたるもの。

◎霜降　これは魚類の生肉を熱湯中に投じ直ちに引きあげたるものにて其上面の白色に變りたるより名づく。

◎紅葉おろし　大根おろしの中に胡椒粉を混じたるものにて作り方ば大根の切口の中央に箸をさし、其穴の中に唐がらしを丸のまゝ押しこみ、卸し金にておろす、又龍田おろしともいふ。

◎花かつを　かつを節の心を至つて薄く削りたるものなり。

◎照り煮　味醂と醤油或は砂糖とにて汁氣の去るほど十分に煮上ぐるをいふ。

◎いごみ煮　筍のごとき物の中に種々の物を詰めこみて煮るをいふ。

◎白煮　鹽とかつをぶしと味淋とを加へて煮るをいふ。

◎櫻煮　酒醤油を等分に加へ、其汁の濃くなるまで章魚を煮るをいふ。

◎小倉煮　鮑を鹽揉にして賽の目に切り再び淡醤油にて煮、小倉餡をまぶしだるもの。

椒と食鹽とを混和し一時間ほど煮たるものなり、其分量は十二人分に大なる甘藍一個とす。

△ビーフ、スチウ

牛肉のヒレ、或はロースの肉部を厚さ三分縦一寸ほどに切り、バタを十分鍋に入れ、其の溶くるを待ちて右の牛肉を投じ、少量の鹽を加へ、メリケン粉を篩ひ込み、少許のスープを和し、これをスチウ鍋、若しくは空氣の洩れざる大なる土鍋に入れて二時間ほど遠火にて煮込み、食鹽及び白葡萄酒を加へ玉葱の皮を剝きて四つほどに切り、同じく馬鈴薯を四つ切にしたるものとを共に投じて一時間ほど煮込みて更に胡蘿蔔の皮を剝ぎ厚さ四分ほどに切りたるを入れ又一時間ほど煮込み、煮上りたる時胡椒を十分にふりかけて皿に盛るべし。

△鷄のアスピク

鍋に酢、スープ、丁子粉、胡椒粉、レモンの果實、及び玉葱の切りたるもの少量と刻みたるパセリ少量とを加へよく煮たる後、清潔にしたる鷄肉を入れ、十分に煮込みたる後取出して足の先及び頭部を切り去り、これを平皿に盛り、別に牛のスネ肉を煠でおき、一杯の白葡萄酒を加へて煮たる液に鹽を加味したるものを右の鷄肉に注けて食す。

△甘藍サラダ

◎ふくら煮　鮑其他貝類を味淋のみにて煮、或は酒に砂糖を加へて煮るをいふ。

◎丹波煮　胡麻の油を煮立て、葱を煎りつけ、胡椒粉を撒布し、鰹節煮出汁に砂糖を加へ、蝦の肉を煮て後醤油を加へるをいふ

◎せんば煮　かつをぶし煮汁に鹽、醤油を加へ、其中にて鯖を煮るをいふ。

◎鐵砲和へ　魚類を唐がらし味噌にて和へたるをいふ。

◎草和へ　葱味噌、芹味噌にて主に介類を和へるをいふ。

◎黄味和へ　ゆで卵の黄身をよく摺り白味噌、鹽、胡椒粉と共にすりまぜ、これにて介類をあへるをいふ。

◎蠟燒　雞卵と饂飩粉とに醤油を混和したるを肉に塗りて燒くをいふ。

◎かすてら燒　魚の摺身に雞卵を摺りまぜ卵燒鍋にて燒きたるをいふ。

◎土藏燒　肉片に山椒味噌を塗りて燒くをいふ。

◎素燒　干物、鱧魚を其儘燒くをいふ。

◎水介　鮑を大賽の目に切り、暫く鹽をふりかけ置き、冷水に浸したるもの。

◎富士あへ　炒りたる白胡麻を摺りて味淋と酢とを混和し、煠でたる葱の白味を和

半茎ほどの細長く刻みたる甘藍を取り、大匙二杯の鹽、及び同量の砂糖と、大匙一杯の胡椒末と同量の芥子粉と四つの鷄卵の黄身とを混和し、更に半杯のバタを溶き込み、其中にて右の甘藍を加へまぜ、再び茶匙一杯の酢を注ぎ、煠鷄卵の薄く輪切にしたるを二三片添へ、又牛乳及び酢を別々の鍋にて温め、酢の沸騰したる時バタ及び食鹽、胡椒粉とを加味し、刻みたる甘藍を投じ、能くかきまわして二三分間蓋をして熱し、少量の牛乳を加へて暫時冷却するを待ち、鷄卵の黄身を攪拌し、これを漉して其中に混和し、再び沸騰せしめ右の甘藍を注ぐなり。

△チキンザラタ。

一羽の鷄肉をよく煮て軟かになりたる時笊に引あげて適宜に細かく切り、直ちに細切したる一個分の甘藍と胡椒粉及び芥子粉とを加へ、共によくかき廻したる後温めたる三合の酢を混和し、冷却したる後食す。

△ビーフ、ロース

牛のロース肉を鹽水にてよく洗ひ、水氣を拭ひてバタを塗りつけ、兩面を裏返しにして一時間ほど燒き、更に内部より流出する脂肪を其肉につけて燒き、鹽、胡椒粉及び牛乳を加へて一回沸騰せしめ、能く攪拌して其汁の乾くを俟ち、直ちに皿に盛りたるものなり。

△チキン、ロース

へるたいふ。

◎おらんだあへ　肉類を三杯酢に浸し、燒味噌に油揚の細切と、刻みたる葱削り大根、細作りの木耳に胡椒粉を加へて和へたるもの。

茶具の名稱

茶の湯に用ふる茶具一式の名稱を擧ぐれば

(一)風爐　奈良風爐は土を以て作り金風呂は銅鐵の類にて作る。

(二)風爐小板　奈良風爐には方形のものを金風呂には圓形のものを用ふ。

(三)釜　形によつて種數多けれど、雲龍圖師、鶴首、萬字、夕顏等あり。

(四)釜敷　藤にて編みたるもの或は組板を用ひ本式には紙製を用ふ。

(五)炭斗　藤、或は竹を編みて作り、冬は瓢の切りたるを使ふ。

(六)香盒　陶器、漆器に蒔繪を施したるもの、古代は銅製を用ひたり。

(七)灰器　和唐二種あれど多くは土器を用ふ。

(八)灰匙　風爐によりて同じからされど

若き鷄の羽毛を拔き、水洗ひして羽がひの節より切取り、頭部を切落して更に足の二の節より切放ち、指を肛門にさし入れて腸を拔去り、肛門の處ろに兩脚を緊め寄せて、絲にてくゝり、食鹽と胡椒粉とを加へてバタを塗つけ、四十分間ほどテンパンにて燒くなり、又ケンチ油をのせて燒くもよし。

△牡蠣ロース

大なる牡蠣を殼の大なる方を下にして强き火上にかけ上の口を開くを待て其液汁の濡れぬ樣に皿に盛り直ちに胡椒粉を撒布して供するものなり。

△ブイル、ロース

牛肉に鹽と胡椒粉とをふりかけ、別にパンを粉にして中へ食鹽と胡椒粉及び、パセリを細末にし、ハム及び適宜のローレルの葉を加へ、鷄卵の黄身二個を混じ、能くかきまわして右の牛肉に塗抹し、丸形につくりて繩にてからげ、酢及びサラダ油をそゝぎ、牛の脂肪を十分にかけ、テンピにて二時間ほどよく炙き、其つけ合には葱を鹽うでにして水氣を去りたると、馬鈴薯の鹽煤を裏ごしにかけ牛乳及び、食鹽とバタとにて味をつけたるを丸形につくりて盛合すべし。

△コーン、ビーフ

牛肉の胸部三片ほどをゑらび、鹽一合と茶ざし一杯の硝石粉とを混和し

多くは桑の柄或は竹の皮を卷く。
(九)水指壺　和、唐二樣あり、銅土にて製し、種壺、舟曳、釣瓶、鍾櫻等あり。
(十)帛紗　紗、羽二重にて製し色は濃紫茶色等を主とす。
(十一)茶杓　竹若しくは漆器を用ひ或は象牙製のものを用ふ。
(十二)茶筌　煤竹、白竹にて製し、眞行草の別あり五十七を數穗、四十二を中荒穗三十二を荒穗といふ。
(十三)茶碗　和漢二樣ありて高麗、給高新渡、古渡、眞籠川等多くの種類あり。
(十四)棗　漆器にして其形大小種類多く蒔繪を施せしものあり。茶を入るゝ、具にして濃茶には大棗、中棗、尻張等あり薄茶には吹雪、茶桶、頭切等あり。
(十五)蓋置　竹の節の中央を切りしもの三人形、一閑人、蟹等の種類あり。
(十六)建水　和、唐の二種あり陶銅もて製し、大脇卷、指替、平曲等種類多し。
(十七)茶巾　大なるものは長さ一尺五寸幅五寸小なるものは長さ一尺幅五寸あり。
(十八)羽箒　鳥の羽を組みて柄には多く竹の皮藤を卷く。
(十九)柄杓　竹製のものを用ふ。

てこれをよく右の肉中にすりこみ、四日ほどにして更に壓石を置き、冷所に置くなり。

△ボイルド、チキン

鷄をよくこしらへ、腸を拔きて腹内をよく洗ひ、これを一時間ほど鹽煠にして取出し、兩臂と兩脚との四つに分ち、皿に盛りて出すなり。

△ボイルド、フイシユ

魚の骨及び腸、腮等を去り、能く水洗ひして脊より庖丁を入れ、鹽を撒かけ、直ちにこれを蒸して適宜に切るなり。

△鷄肉の佛蘭西料理

まづ三百匁の鷄肉を大片に切り、水二升入れて一升ほどに煮つめ、更に同量の鷄肉を大切にして加へ、刻みたる玉葱、セルリー、及び胡蘿蔔を、スープにて一回煮立て、其煮汁を右の肉中に漉し入れ、暫くにして其肉を肉挽器にて挽き更に擂鉢にてよく擂り、これに大匙一杯のソースを加へて能く混和し、厚き西洋紙にて引筒をつくりて其中に入れこれをテンパンの内に指頭の大さほどに押出してテンピの中に入れ燒きあがりたるを前のスープの中に加へたるものなり。

△ロール、キャベツ

甘藍に刻みたる牛肉を卷きて蒸燒にしたるものにて俗にきやべつ卷とも

料理の秘傳

△巻魚の法　何魚にても片身を卸しよく骨を抜き上身を去りて、其皮を鹽水に浸け暫し置きて引あげよく水を去り、蓼蓼の擂梅の擂身をつけて布にて巻き蒸籠にて蒸すなり。

△魚類の炙り方　表身より火にかけ、片面焼けたる時指もて金串を廻し置き更に片面を焼きて板に取り、暫時して抜くなり。

△堅き鮭を切る法　庖丁に少し胡麻の油を塗り、溫めて切るべし。

△白魚を燒く法　金網にては燒きつきて離れず離さんとすれば崩るゝ故、常の如く燒きたるを打返して又燒き、よきほどの盆に受けて網の線を物の角にて二三度打たば離れ落つべし、細き鮎も同樣にして燒くべし。

△鯛比目魚の刺身に光澤を出す法　刺身にすべき肉を美濃紙を敷きて其上にならべ、魚の上に美濃紙を載せ其紙の上より燒鹽をふり置き出す時これを除きて刺身に作らば光澤を出し風味も一段よきものなり。

△蠶豆の皮を剝く法　豆を蕎麥殼の煮汁に煮よく煮入ざる前に底深き桶などに入れ、手頃の棒を二本そろへ中程をゆるく括りて左右に開かせ、捧の端を操りて芋など

いふ、牛肉をよき刻みて少量の胡椒粉と鹽とを混じ、更に庖丁の脊にてよくたゝき、煮たる甘藍の葉にてこれを巻き、ロースの如く蒸焼にして直に皿に盛り、適宜のグルビーを其上より注ぐ。

△コールドフッシユ

鯛又は鮭の如き魚類を三枚におろし、能く洗ひ、鍋に刻みたるセルリーと玉葱とを敷きて其上に右の魚肉をのせ、よく煠で食鹽と胡椒とにて味をつけ、煮あがりたるを食卓に供する一時間前ほどに皿に盛り、周圍にゆでたる蝦、及び赤大根とパセリとを添へ魚の上にはマヨ子ス、ソースを鱗形に灌ぐなり。

△ライス、プッチング

牛乳五六合に九匁のバタを加へ、更に四十匁の米を柔かに煮て、丼中に入れ冷却せしめたる後、砂糖四十匁を加へ、卸したるモレン皮と鶏卵の黄身七個とを入れよくかき廻して鶏卵の白身を混じ、直ちにバタを塗りたる型につめ、テンピの中に入れ、燒きたるものなり。

△フーカデン

肉類にパンの切りたるを加へ、搗肉の如く製したるものなり牛肉四斤と豚肉四斤半とに一個の鶏卵を破りこみ、少許の胡椒粉を加へ、これを細かに刻み、更に水に浸したるパンを小片に切り右の肉中に混和し恰も搗肉の

洗ふ様にせば暫時にして皮は悉く剝け去るべし。

△初茸の砂を取る法　初茸しめぢ等の裏の刻みの砂を取るには茸をふせて軸の處を箸にて挿み、別に一本の箸にて笠の上より靜かに、打たば挾りたる砂皆落つべし。

△砂糖の灰抜法　砂糖によきほど水を入れて煮かへし壷又は桶の中へ打あけ、其中に卵の白身を入るゝ時は灰は浮上ると共に白身も又浮きあがるべければ其時灰を掬ひ取るべし、但し極精進ならば卵の代りに馨強を卸し入るべし。

△魚鳥の鹽出し方　何なりとも水に浸けて鹽を一と握り入れておくべし、又藁一束入れおくもよし。此法は松茸筍などにもよし

△蕨の灰を抜く法　根本を切去り桶に入れて灰をかけ、沸湯を注ぎかけ暫時して引あげ水に晒すべし。

四季魚菜の眞味

△一月中

（魚）鯛、生鯣、きす、針魚、白魚、わかさぎ、烏賊、たこ、ぶり、鹽引鮭、

（貝）牡蠣、はまぐり、赤貝、たいらぎ、

如く庖丁にて細かに叩き、これにメリケン粉をふりかけ、楕圓形につくり、マロッケを製する手順の如く鷄卵を注ぎ再びパン粉をまぶして、フライ鍋にてあげ、後皿に盛りてグルビを被けたるものなり。

△ドー、ナック

牛脂十匁を鍋に入れ火にかけて解き、五合の小麥粉を播りませ、食鹽とパンの粉とを一匙づゝ加へ、其中へ蜜柑チンキ二匙を加へ、硬くこね合せ、板の上にて三分ほどの厚さに棒にて延ばし、長さ三寸幅三分位にきり、結びて輪の形ちに作り、別に深き鍋に牛脂一斤を煮溶きて十分沸騰せるをまち、其中へ投じて揚げたるものなり。

諸國名産 山海料理

◎鮎魚(あいなめ)

大なるものは尺餘に至る、小魚中の美味なるものにて北方にては「ほのけ」と稱し又南方にてはこれを「あぶらめ」と稱し春夏の候を以て眞味とす。

料理法は醬油につけ串にさして焙り又味噌づけにて燒くもよし、羹汁には拔きて骨を拔き尾と骨とを寄せて丸くし薄き味噌吸物にす、土筆靑さゝげ初茸、三月大根等時々のものを取合すべし。

馬刀貝、田螺、

（鳥）雁、鴨、寒すゞめ

（菜）生わかめ、ちさ、小松菜、あさつき、小蕪、芽うど、千大根、蜜柑、串柿

△二月中

（魚）子持ふな、あまだひ、石がれい、よりぼうぼう、大目鮪

（貝）あわび、みるがひ、蜆、あさり、たにし、

（鳥）うづら、千鳥、雁

（菜）松菜、木の芽、うど、生姜、もやし生姜根芋

△三月中

（魚）小たい、ひらめ、さわら、鯛の子、小あゆ、石もち、篠うを、かれい、まるがれい、ひしこ、いか、蛸、くらげ、新くしこ、海膽

（貝）あわび、とこぶし、さゞゑ、

（鳥）雲雀、雉子、小鳥のしほから

（菜）芽紫蘇、春胡瓜、わらび、薹菜、蕗、大うど、わさび、芽だて、根芋

△四月中

（魚）初がつを、なよし、いせゑび、はたじか、あじ、小うなぎ、赤ゑ、子がれい

（貝）あわび、蛤ぐり

〔薄葛煮〕大なるは頭をつけ三枚におろし、骨を拔き薄醤油汁を仕立て葛粉を水に解き和したるに入れて煮るなり、取合には生椎茸などよし。

〔花あいなめ〕ひらきて骨を拔き、頭と尾とを寄せてゆがき出すなり、春は茗荷、秋は初茸などよし。

◎針魚（さより）

頭尖りて身の丸き小魚、味淡泊にして美なり、料理には細作り、平づくり、又は片身づくり、いづれも煎り酒又は生酢を用ふ。

〔合せ針魚〕頭を落して拔き骨を拔き玉子の白身を塗り身のかたを二枚合せて押つけ鹽燒にするなり。

〔疊みさより〕身を三枚におろし、酢にひたし、板に四五枚かさね、つよく重をおし後角に切るなり。

〔結びさめ〕片身をおろし結びてゆがくなり。

〔花さより〕骨を拔て拔き、尾と頭とをよせ、串にさしてゆがきて後串をぬくなり。

◎鰈（かれい）

種類多し季節は多く冬春なり、料理には大抵鹽やき、鹽蒸し、煮附等なり、蒸し鰈は新鮮なるものを取り鹽水にて蒸し取り出してよく乾燥せしめたるものなり。

(鳥) 鶏類

(菜) 竹の子、つる菜、わらび、初茄子、夏かぶら、新にんじん、野芹、糸みつば、たんぽゝ、杉菜、さやゑんどう、じゆん菜、わかゑんげん、新ぎく、蓮芋、牛蒡、摘み菜、

△五月中

(魚) 木の葉かれい、おぼた、大あじ、さより、いわし、もろあじ、かつを、かさご、せいご、手長ゑび、うなぎ、太刀魚、石だひ、舌びらめ、若なご、あなご、かんぱち、目ばちまぐろ、あゆ、いぼだい、

(貝) 大たいらぎ、大蜆、串あわび、

(鳥) 青鷺(夏季中が眞味なり)

(菜) 新そら豆、枝豆、ずいき芋、葉生薑、ぜんまい、夏わらび、鷹ぢさ、早松茸、あらめ

△六月中

(魚) すゞき、小石かれい、かんぱち、はぜ、いな、赤魚、芝ゑび、鮎、なまりぶし、河鯵、太刀魚、いぼだい、あなご、黒鯛、どぢやう、木わだまぐろ

◎鯖

大鯖、小鯖の二種あり形かつをに似て小く色の一層青き物なり、共に六七月頃水面に産卵す殊夏秋の頃漁するを美味とす。指身、味噌煮、鹽焼、酢びたしいろ〳〵あり、産地は能登、越中、佐渡を最上とす。

◎鰆(さはら)

大なるものは二三尺に至る五六月の頃内海に來りて産卵するが故に多く群集す鱲は鰆の鱲を製したるものなり。料理はさし身、照焼、あんかけ、等あり。

◎鱸(すゞき)

鱗細かくして口大きく味美にして淡泊なり其の幼稚なるを「せいご」といひ、六七寸なり、鱸は二尺三尺なるを稱す鹹淡兩水に産す。其上品なるを山城宇治、淀の兩川とす又雲州松江のもの名高く味尤も美なりと稱す春夏の頃を以て眞味とす、用法は刺身、味噌吸物、味噌漬、燒物、鱠等なり。

〔蒸燒〕西洋料理の一種にして、腸を去り一日程鹽水に浸けおき首尾を除き皮を剝ぎ、葱、洋芹、麵包粉など腹につめバタを塗り、麵包粉をふりて蒸鍋にて燒くなり。

〔鱈もどき〕大なる鱈を筒切にして鹽をけり、輕く押を掛け、刻み昆布の薄醤油汁に入れ夏季の食饌に供すべし、胡椒粉をふりてよし。

(貝) みる貝、
(菜) 胡瓜、芽茗荷の子、矢さゝげ、新づけ菜、夕顔、冬瓜、藤まめ、新芋、貝割菜、紫蘇の實、もやし三つ葉、夏ねぎ、自然薯、十六さゝげ、もやしうど、干瓢、

△七月中

(魚) いなだ、刺さば、いせゑび、車ゑび、いぼだい、いわし、黒だい、石もち、
(貝) あわび、
(菜) 新さつま芋、むかご、なたまめ、山の芋、くろぐわゐ、眞桑瓜、西瓜、

△八月中

(魚) 初さけ、子持あゆ、小かつを、小がれい、しらす、小ゑび、いぼだい、なまこ、いわし、
(貝) あわび、
(鳥) あひる、青さぎ、
(菜) ずゐき、小かぶ、新くわゐ、ぶどう、蓮根、小にんじん、秋茄子、冬瓜、芽うど、八重なりもやし、つくりせり、葱、しぞの穗

△九月中

(魚) 小かれい、甘だい、ほう〴〵、子持あゆ、鹽うるか、さば、ぼら、か

◎鱧(はも)

鰻に似たる海魚にして肉甘味なれども皮肉の間に細支骨多し京阪地方にては多く鱧の骨切と稱して賞翫す、產地にては多く蒲鉾に製す、薄燒、鱠、吸物によし。

〔骨切燒〕腸を出し尾の方より細かに皮の切れぬほどに深く庖丁目を入れ竹串にさし兩面より燒き煮切醬油を附て焙るなり。

〔摺り身〕肉を搔き取り俎板の上にて叩き薄く延ばして小骨を摘み取り又ひとつにまとめて小口より切り小骨の殘りて庖丁にさわるを除き摺盆にて摺り卸したる薯蕷を加へてよきほどに丸めて煠るなり。

〔干鱧〕干はもは水に浸け度々水を換へて大約一週間を經て引あげ、日光に晒らし煮物又は山椒醬油の附燒にして皮牛蒡芋殼の甘煮など附てよし。

◎鮎(あゆ)

河流に生息して秋期淺瀨の礫中に產卵す其大なるものは七八寸又鮭鱒と同じく其最終の產卵を終れば斃るゝが故に年魚の名あり、美濃長良川、武藏多摩川のもの味尤も美なり、田樂、蛋燒等なり。

〔粕漬〕生鮎をうす鹽にしよく洗ひ、之を日光に乾かし水分の去るを待ちて酒の粕へつけ器物の蓋を密閉し凡一二ヶ月を經て食用に供す。

〔鱠〕中鮎を三枚におろし酢醬油を和せて鱠となし花かつを多くふりかく

（貝）さゞゐ、たいらぎ、中いまぐり
（鳥）鶴、山鳥、鶉卵、
（菜）唐のいも、新根大根、きぬかつぎ、入つがしら、獨活、柚子、椎茸、初茸、しめじ茸、松露、木耳、くるみ、大根、ざくろ

△十月中

（魚）たい、あま鯛、糸より鯛、ほう〴〵、かながしら、ひらめ、ぶり
（貝）まで貝
（鳥）雁、鴨、
（菜）ほうれん草、くわゐ、生のり、生椎茸、干大根、根せり、小蕪

△十一月中

（魚）あんこう、生だら、はたじろ、目はる、むしがれい、かつをの鹽辛、ごまめ、
（貝）にし、
（鳥）山鳥、雜種ひばり
（菜）生いも、もやしわらび、花菜、つけ菜、天王寺蕪、青海苔、かぢめ、青海松、干瓢、赤豆、

るなり。

〔魚でん〕大鮎を白燒にしてさんしよう味噌を塗り再び文火にて燒べし。

◎鯉（こひ）

全國至る處ろに產するも淀川或は琵琶湖の產を以て第一とす、鱗柔らかく、味最も美にして殊に乳量を益すの効ありと稱して產婦の滋養藥に供す、季節は周年なれど、夏季を佳味とす、用法は生づくり、洗ひ、鯉こく等あり。

〔活作り〕腸を傷つけざる樣活ながら魚の肉を剝き取り、皮を剝き、鱠に切りてこれを肉を剝きたる魚の上に乘せまへの皮を覆ふて盛るなり、煎酒油おろし山葵、生姜を添ふ。

〔濃汁〕鯉の頭を切り落し鱗の間より庖刀を入れ筒切にして膽嚢を潰れぬ樣に取出し赤味噌に入れて一日ほど十分に煮るなり、香味粉山椒を入るべし。

〔洗ひ〕子のなき鯉を如何にも薄くつくり汲立ての水に鹽少し入れ二三遍も洗ひ身のはせるほどに洗ひ、水氣をしぼり身の縮まるやうにし防風又は蓴菜など添へ、煎り酒又は芥子酢味噌にて出す。

◎鰕（えび）

淡鹹雨水に產し其種類極めて多し在來其外觀と香味とを賞し、式饌に

△十二月中

（魚）たい、小ふな、くらげ、新干鱈、かづのこ、いか、たこ、むつ、目だい、おこぜ、さより、虎きす、

（貝）一月と同じ

（菜）もやし土筆、よめな、水菜、もやし根芋、芽ぢさ、春菊、生海苔、生乾苔、もやし紫蘇、かち栗、同じ茗荷の子

肉類の檢査法

(1)肉の色淡紋たるは病肉の兆なり

(2)紫色あるは病死の肉なり尤も恐るべし。

(3)肉片を見るに筋と脂肪と相交はりて恰かも大理石狀の斑紋をあらはすは良肉なり。

(4)指もて之を壓すに彈力あるものは良肉なり。

(5)柔軟にして濕氣あるものは惡肉なり。

(6)脂肪の多きもよろしからず。

供し佳辰の裝飾とす、其製法は串にさして燒き又は煮て殼を去り、或は其まゝ乾したるあり又佃煮となし醬となす等諸國より產出種々あり、其味すべて甘美にして又滋養分に富り、但し其質剛くして稍や消化し難し。

淸國にてもこれを上饌に供し貴重の食品となす、擂り蝦は河海に產する小なる蝦を取り稀鹽散にて煮、水洗ひして能くこれを乾かし、十分乾燥したる後臼に入れて輕く搗けば殼悉く脫するなり、又罐詰、酢漬、佃煮、おぼろ等用法極めて多し。

〔蝦しんじよ〕伊勢蝦、車蝦にてもよし煠でゝ肉を細かにたゝき擂鉢にて擂り鷄卵の白味を加へ味噌を少し入れ平たく取りて蒸し上ぐるなり、葛汁にも、餡かけにも、煮物にもするなり。

〔卷蒸えび〕伊勢海老を煠で、肉を細かに挫き木耳のせん、銀杏など入れ味淋醬油にて味をつけ置くなり、鷄卵を薄く燒き、右の肉を卷き、メリケン粉を練りて右の合せ目を放れぬやうにつけ、胡麻油にてザット揚げ小口切にするなり。

〔酢漬〕酢漬にして貯ふるは尤も新鮮なる魚を用ひざれば腐敗の恐あり、まづ海老を陶器の鍋に入れ、酢を注ぎ煮立て少時して火を止め、壜若しくは瓶に移し、煮汁を入れて封じ凉しき所に貯へ置べし。

〔フライ〕殼を去り脊より二分して腦漿を去りメリケン粉に鷄卵を解き合

(7)肉片を熱湯に浸す時に不快なる臭氣を放つものは不良なり。

(8)良肉は一二日を過ぐれば上面乾燥するものなり。

(9)不良の肉は濕氣を帶ぶるものなり。

(10)煮沸して著るしく肉片縮少するものは不良なり。

秋の粧ひ

此の秋季より冬へかけての流行の衣裳類に就て三越の調べによれば

▲色氣　先づ第一に今年は甚麼色氣が流行だらうと云へば從來持合せた方は兎に角將來拵らへ樣と云ふ方は甚麼しても藍氣がかつたもので同じ藍氣でも若向は紫を含んだもの若夫人は準お納戶それ以上は鐵か鼠を加味した物に一般の嗜好が傾いて居る。

▲模樣　は先頃紹介した樣に又も裾模樣に後戻りの姿で江戶褄でも一兩年來流

せ胡椒の粉と鹽を加減して味をつけ、フライパンにて揚げるなり。

〔具足煮〕伊勢海老の首を去り、皮のまゝ小口切にして醬油にて煎りつけ胡椒の粉をふりかくるなり。

〔鬼殼燒〕脊より尾へかけ二つに割殼の方を火にかけ醬油を注て燒くなり

〔味噌拌え〕伊勢鰕を煠で、肉を裂きその腦漿を取り味淋に鹽少し加へ、酢にて溶き肉をあへるなり。

〔芥子拌え〕皮を剝き五六分位に切り芽獨活、小椎茸、など入れ芥子味噌を製しぬたあへにするなり。

◎鯡(にしん)

北海道に多く產す、專ら肥料用にして食するは僅かに其十分の一にも足らず、料理は甘露煮をよしとす、まづ干鯡を泔水に浸し四五日を經て皮を去りよく洗ひ湯煮をして水飴を加へ、徐かに煮て醬油を入るべし昆布、白豆など混せて煮てよし又鯡の澁味を去るには湯煮をする時燒火箸を鍋に入れて掻き廻すこと五六回すべし又炭酸曹達を加へて煮るもよし。

◎比目魚(ひらめ)

鰈の一種なり、常に海中の砂底に棲息し五六月の頃淺瀨に來りて產卵す春を季節とす、刺身、煮物に用ふ。

〔天麩羅〕ひらめの肉をすきたるに薏苡をひとつにしてよく擂り溫飩の粉

行した一二種の花卉類を洒落と染上げたものよりも彩色も濃く模様も大きくなつて居るが之は一時全盛を極めた元禄や桃山の影響であるがさりとて彩色が多く且つ濃くなつたと云つても濃厚物は流行らぬ濃染にならぬ迄の何方かと云へば淡薄したものに限る、所で差當つて實際の需要はと云へば新模様五六分通りが江戸褄と云ふ所であらう。

▲紋　は一時一寸位のも用ゐられたが今は八分乃至八分五厘九分と云へば少し大き過ぎる位に思はれて居る。

▲絞りと刺繍　模様の所で云ひ残したが刺繍が染模様の花の蕊杯にあしらはれるのは相變らずの流行で殊に今年は春から此頃へかけて絞りの持囃されたのは鳥渡往來を歩いても晝夜帯に絞りの片側を用ゐた人の多いのでも判るが染模様にも之を應用する事は却々流行して地質の模様で絞れぬものは染模様で絞りの様に見せ掛ける事さへ流行する位だ。

▲地質　は何時も變らぬ縮緬であるが普通の縮緬も面白くないと云ふ向には縞縮緬文縮緬杯と云ふ山繭の糸をあしらつたもの或羽二重杯と云ふ好みもある。

に鹽を少しと味淋を加へいづれも摺合せて銀杏又は木耳、三葉、芹など細かに刻みませて丸め胡麻油にて揚げるなり。

◎鮑(あわび)

海底か岩礁中に產し海草を食す、其殼厚くして蓋なく其裏面には美しき七色の光を有す、雄の肉は青く雌の肉は赤く共に美味なり用法は、

〔柔か煮〕鮑を大根にてよく叩き麹を少し加へ一日ほど焚火にてよく煮るなり、又大根の絞汁を入れて煮るも柔かくなるものなり。

〔腸あへ〕腸を摺り、燒味噌へ生姜をおろして入れ味淋にて攪き交せ鮑を煠きて細かに切り酢につけたるを拌へるなり。

〔粕漬〕鮑の大なるを鹽を加へ煠でゝ水氣を去り酒粕を酒にてゆるめ、鹽を少し入れて漬け込むなり、これを着せわたといふ。

〔麹漬〕あわびの耳を去りうすく切り、腸を合せて麹につけるなり其割合はあわび百目に鹽十五匁麹二十目とす壺瓶の類に入れ密封すべし久しきを經て味尤も美なり。

〔卸しあわび〕あわびを摺りおろし、味噌汁に和しすゝき、ますなど切肉にして入れ小蕪など取合せてよし。

〔たゝき鮑〕鮑を俎板にのせ、摺木にてたゝき柔かになりたるを煠でゝ雲丹あへ、芥子あへにするなり。

▲縞物　は矢張お召で縞柄は規則正しい格子抔はすたれ氣味で格子でも大小取交ぜたるもの若ば竪縞に絣を加味つたもの竪縞でも大名や千筋より絣からみを加へたもの丶様に井絣としたものより何方かと云へば朧氣のものが流行する何にせよ流行の柄合と云へば糸織でも銘仙でも其外總てがお召に從つて支配される程の大勢力がある丈に柄も却々凝つたものが多い。

▲お召　お召の内でも紋お召は令嬢向獨占の壼で其他は縞も使へぬ紋附でもないと云ふ塲合に多少用ゐられる位であるがお召にも横に紡績を入た紡績入お召は舶來實物と見誤ばかりで値段も眞物より五六圓安く十二三圓乃至十五圓位で手に入るので中流には最も多く之が賣行くさうだが絞お召井筒お召壁糸織抔之に次で流行する。

▲絣類　令嬢向に紋お召と互角の流行は何品に限らず絣類で色氣は藍氣でもお納戸とか紫氣の多い濃厚したものが多く賣れる其他糸織節糸銘仙類となると大した變化もないが只色氣と柄行は流行に支配される。

銘酒は如何にして作るか

當今の銘酒は重に「アルコール」を以て製したる混成酒なれば其製法極めて容易なり。

△保命酒　これは備後鞆津の銘産なり、自家にて製するには上白米一斗、糯粟六升、麴六升、燒酎（十五度のもの）三升、蒸糯米、清水各五升と共に桶に入れ、よくかき廻し、密封し、五六日後に於て桂皮、丁子、及び白檀、各一匁づゝを絹嚢につゝみて浸し、燒酎一升を加へ爾後五六日を經て更に肉桂、棗、龍腦各一匁を浸し時々攪拌し、二三月を經て搾るなり。

又一法は白砂糖一貫五百匁と燒酎と古酒を、各々一斗づゝを混和し、別に香味料として桂皮、甘草、茴香、丁子、忍冬の花等を適宜に加ふるなり

△霙酒　糯米一升を蒸し莚に擴げて日に晒し更に水洗ひして日に乾すこと數度の後味淋一升を混じ容器に入れ密閉して置くなり。

△霰酒　糯米三升を餅につき、骰子形に切り、日に晒して乾かし、更に燒酎一升に浸して乾かしあぐる事數回の後、味淋一斗を混じ容物を密閉し置くべし。

△養老酒　これは美濃の名産なり、製法は燒酎、麴及び糯米を混和し、これを密封すること凡そ七十日間にして、五日目毎に櫂にてかきまわし、

▲下着　二枚袷の對下着と云のが流行の骨頂であるが柄行染模様に依つては配合上地質は同じで變つたものも用ゐられる尤も今頃向の絆の下着は友禪か華美な更紗に限られる。

▲帶　は袷時分には最目につくので厚板類で次に繻珍絹糸織幽谷織抔で色氣は藍色との配合上茶がゝつたものが最も貴く需要も之が一番多い。

▲男物　は糸織類のぎごちないものより清綾織好貢織銘綾織山科お召の様な重くとも柔かな品で柄行は井然した縞より纖からみが細い木目の様、漠然したものが流行で大島とか結城抔は相變らず一部の人に限られて流行界を風靡する迄に行かないのは何時も同じ事と云はればなるまい。



又密封すること七八十日の後、搾りて粕を去り、飲料に供す。

又一法は甘草、サフラン、各五匁、當歸、ういきやう、丁子各三匁、せしきう、大黄、人參各二匁、を調合し水五合に浸し、半分に煎じ詰め、味淋一升を混合するなり。

△桑酒　これは丹波の名産なり、よく熟したる桑の實を嚢に入れて押しつぶし、其の絞り汁を鍋に入れて青臭き香の脱するまで煮立て、この煎汁の一升に燒酎一升と、水八合とを混じ、汚れものを去りたる砂糖（蛋白と共に煮て灰を拔きたるもの）一斤を溶かしたるものなり。

△櫻酒　乾燥せる櫻花三百匁に水三升を混じたる液に白砂糖二貫目と燒酎一斗とを加へたるものなり。

△蜜柑酒　其製法は種々あり、まづ外皮を除きたる蜜柑三四十粒ばかりを蒸溜して得たる液を燒酎三升に混和し、アク引砂糖凡そ三斤を溶かし、別に白檀末、沈香各一匁を袋に入れ、蒸溜水一升に浸したるを調合し、藥味の浸み出すを待ちて絞るなり。

△蜜柑酒の別法　蜜柑一貫目ほどの皮と核とを去りて絞りたる搾り汁に氷砂糖百匁を混じ、十數日間密閉して直き味淋二升五合を加へたるもの或は砂糖二百目と水一升との煎じ汁に酒石酸五匁と蜜柑皮蒸餾液少許を加へたるものなり。

衛生門

我家の衛生

抑も人間は病氣の器ともいふべきものにして、往々不時に急激なる疾病を發することあり、此時に當つて醫藥直ちに備はらず、爲めに貴重なる瞬間を徒らに狼狽の間に經過し、遂に如何ともすべからざるの危篤に陷ゐらば人生の遺憾この上なし、依て左に一般素人の普通に心得べき疾病の素因、徵候並にその豫防法より手當のあらまし、又は醫藥の應用等に就て、大略記する處あるべし。

◎豫防法の二條件

疾病の豫防に二通りあり、一は消極的の方法にして疾病の原因を嚴密に避くること、一は積極的の方法にして疾病に抵抗して飽くまでも其の増進を防ぐこと是れなり。

△第一の方法――これは實際甚だ困難にして、例令ば、感冒を避けんとして常に寒冷を防ぎ、年中同温に身體を保たんとするは、到底この氣候人事の千變萬化する活動の世界に於て出來得べきことにあらず、よし假りにそれが出來得るとするも、斯の如くすれば、感冒の害よりも一層甚だしき害を身體に受くることゝなるべし。故に消極的の方針はあまり好ましからずと知るべし。

△第二の方法――これは不攝生なる疾病の原因は務めて之を避くること勿論なるべしと雖も、常に身體を鍛錬して、寒暑に馴れしめ、以て疾病に抵抗するの豫防法なり、是れ實際に行はれ易くして、而かも疾病を積極的に豫防する屈強の方法なりと知るべし。

○避け得べき疾病

さて人の常に避け得べき疾病の原因は、暴飲暴食、不潔の交接、房事の過度、過度と感ずる寒熱、並びに急激に習慣を變更すること、及び、感情を激昂せしむる事、過度に神經を使用する事、睡眠の不足、便秘、

下剤、及び有毒物等なり。

さて疾病の豫防に就て少しく心得置くべき事は遺傳習慣、及び體質に於て各種疾病の素因を有することなり。左にその概略を記すべし。

△父母の遺傳――病の素因は重に兩親の遺傳より生ずるものなることを知らざるべからず、例へば關節病、癌腫、結石病、精神病、肺病等の如し、されど又養生次第にては生涯其の發生を防ぐことを得べきものなり。

△幼時の習慣――幼時の養育法は一般に注意せざれば往々素因を爲すことあり、例へば養育の習慣として暖温に過ぐる時は、成長の後發汗病、皮膚病、關節病の素因となるものなり、又少壯の時過度の勉學、及び不自然の遂情を爲せしものは老成して神經衰弱に陷り、隨つて諸種の神經病を發し易きなり。

△自己の體格――これ又能く疾病の素因を代表したものといふべし。例令ば細長き體格にして、長き首、扁平なる胸、翼狀な肩胛を有し、飛揚、輕身なるものは一般に肺病の素因を有し、重に三十歳以下にて其病を發するものなり、之に反して身體短大にして首筋短く、右肩に傾きたる大頭を有するものは、卒中の素因を代表し、血液の循環不整なるものは概して心臟病を惹き起し易し。

△各自の體質――次には各自の體質を考究して若し多血熱血の者ならば一般に熱病の素因を有し、貧血、粘液なるものならば、諸種の精神病の素因を有するものと知るべし。

△住所氣候――次には氣候、住居も又往々疾病の原因となることあり、例へば冷かにして濕氣ある住居は、必らず神經病、關節病、間歇熱等の素因を來すがごとし。

△身體中の弱點――次には又身體の諸機關中何れが最も薄弱なるやを考究すること必要なり、何となれば、諸種の疾病はこの薄弱なる部分より侵入すること極めて多ければなり、而してこの薄弱な

る部分を知らんと欲するには種々の方法あれども一般に知れ易きは身體を激動し、精神を感激せしむる時に當つて尤も疲勞する部分あれば、その部分は即ち我が身體の一番に薄弱なる處なる事を證明するものなり、例へば山に登り、遠足し若しくは重荷を擔ぎて息切のすのものは呼吸器の薄弱を示すものにして肺の不十分なるを知るべし、又人と激烈に爭ひ若しくは、苦痛の場合に長坐などして爲めに食慾の不進を來すものは消化器の薄弱を示すものにして胃腸の他よりも弱きを知るべきなり。

即ち激感激動によりて咳嗽を發し胸部の痛みを感ずるものは肺の弱き證據なり、又之れに依つて腹部の壓迫、嘔吐、不快を感ずるものは胃の弱き證據なり、其他身體の勞働に依つて、最も發熱、潮紅、及び發汗の甚だしき部分は其薄弱を知るに足るべし、依てまづ其の豫防法を記さん。

◎卒中は如何なる徴候を示すか

卒中は多く晩年に發生するものにして、重に短大肥滿の人に多く、通常顔面に紅色を帶び、時々耳鳴り、眩暈し、又は極めて空腹なる時の如き不快なる感覺を生ず此の素因ある人は食事、殊に夜食に當つて多量に飲食すべからず、寢床にありて頭部を高くし、激甚なる寒温を取らざる様就中足部に注意すべし。

◎レヨマチスは何が素因なるか

レウマチスは皮膚の軟弱に基因するものにして、天候の變化、感冒、カタル等些細の空氣の變動に因て發生するものなり、故に皮膚を强壯ならしむる爲めに、冷浴を行ひ、寒暑に抵抗し、濕氣ある住所を避けフランネルの衣服を着用する等大に必要なり。

◎痔疾の素因と其豫防

痔は遺傳に發するもの多く、初めは脊部に疼みを感

じ、段々骨盤の刺痛、肛門の痛痒を感ずるに至る、此の素因を有する人は常に刺激する飲食物を避けざるべからず、即ち茶、珈琲、チヨコレートを避け、野菜果物を少量の肉類に混じて食用すべし、其他臀部の刺激を戒め、跪坐を戒め、便秘を戒め、毎日十五分間下腹部を柔らかき裂にて摩擦するを宜しとす。

◎神經病の素因と其豫防

ヒステリー、ヒポコンデル等の此種の神經病は主として兩親の遺傳に出づるものなれども、少年の折り過度の勉學を爲し又常に一室に籠居し、高温度の飲食を取り、發情すべき書畫を弄び、反性的遂情を行ひたるものは成長して此の疾病に陷るもの多き實例なり、故に此の素因あるものは常に安坐を戒め、一日二時間の運動、新鮮なる空氣を呼吸すべし、殊に必要なるは日日下腹部を摩擦し、菓子、脂肪、莢豆類、及び強度の酒類を避くる等、一切の攝生法は自己の信用したる醫師の指圖を守るべし。

◎肺病患者は如何なる徵候を有するか

肺病の素因を有するもの﹅體質は前記せる如くなるが、右體質の外に此の素因を代表するものは、談話中突然音聲嗄れ、言語の後尾不明に消了し、疾走、又は階段の昇降に當りて、容易く呼吸の塞迫を覺へ、又深呼吸を爲す事困難にして、何等の苦痛もなく咳嗽盛んに生じ、兩頰に赤色を呈するかとおもへば突然其色を片方に止め、食事後は頰及び手腕に發熱を感ずることあり。

又毎朝粟粒より成りたる如き粘痰を吐き、之を壓潰せば一種不快の惡臭を放つ、其他憤怒、驚愕等精神の激昂するときは胸部に鈍痛を覺へ、咳嗽盛頻りに生じ、常に感冒に犯され易く、一度カタルに罹りたる時は容易に平癒することなし、若し未れ咯血をなすに至れば病氣既に增進したるの兆候にして、又如何ともすべからざるなり。

されば斯の如き兆候を感じたる時は、常に高温の飲物諸種の酒、火酒、香料等を避け、過激なる運動、房事、發汗的動作、放歌高聲、激動等を戒めざるべからず、而して其攝生法は日々一時間ほど午前と午後の二回に新鮮なる空氣を呼吸して峻險ならざる岡陵を逍遙すること極めて必要なり、此法を少時より永續する時は、



能く肺臓を強壯にして其素因を消滅する事を得べし。

◎看護上の注意

疾病に對する看護上の注意並に薬劑の適用等も一と通りは心得置かざるべからず、依て左に之を記す。

△長壽法の禁條に薬劑はなるべく服用せしめざるを良しとすとあり、さしたる疾病にもあらざ

るに服藥をなすは却つて攝生の道に反するものなり、下劑の如きは往々人の用ふる處なれども願はくば便通に一定の時を定め藥品に依らずして自然に通過する習慣を養ふべし。

△疾病に罹りたる如き感覺ある時は、直ちに種々の攝生注意をなし、輕少の疾患といへども之を等閑に附することなく、殊に熱病の如き、最も其始めを注意せざるべからず、故に非常に身體の疲勞を覺へ、食欲減退し、安眠を得難く、便通不整、頭痛惡寒を感ずる時は熱病の初歩として速かに治療なすべし。

△既に疾病の兆候を生じたる時は食物を減じて疾病の猛威を逞ふせざるやう注意すべし、蓋し病氣の時は消化の機能著るしく遲鈍となるを以て通常の如く飲食を貪る時は爲めに發熱を熾んならしめ大に病勢を助くるものなり、西洋の長壽者の實驗に依れば身體に異狀を感ずる時は直ちに一切の食物を廢し、唯牛乳を以て健康を回復したるあり、又些しの藥品をも用ひず、斷食をなして之を醫したりと。

△普通一般の藥品は成可く家毎に貯蓄するをよしとす、これ急病に際して必要なり、就中旅行者は適當の藥品を携帶せざれば不慮の疾病に遭遇し藥品の間に合はざる爲め空しく生命を損ずることあるべし。左に極めて得易き普通の藥品と其用法數種を記すべし。

(1)　砂糖は如何なる効用あるべきか

これは一種の淸涼劑にして熱病、加答兒、憤怒驚愕、嘔吐等の場合にありて必要なり、此の場合には八匁の砂糖を水呑コップ一杯の水に溶解して用ふべし。

砂糖は體內の粘液を溶解するの効を有す、其始めは砂糖の爲めに粘液を生ずるものなれども遂には胃液と混和して反對の作用を生ずるものなり、故にカタル、咳嗽、咯痰を治し、又胃腸を淸淨になし、消化を助くるを以て菜肉の調理には有用の品

なり。

(2) 酢は何に用立つべきか

中毒の場合に必要なるものなり、即ち阿片、烟草、ヒヨス等の毒に中りたるときは咖啡と共に多量の酢を含み、又外部より頭及び胃の部分を酢にて浸すべし。

又氣絶したる場合に氣附として顔面手足を洗ふべし。

其他室内の有毒瓦斯を清めんには酢を撒布し發熱の場合には清水に混じて服用する時は大に効あり

(3) 石鹼、滷汁、木灰は如何なる効用あるべきか

この三種は皆其含有する滷汁鹽に依つて中毒症を治することを得べし、故に石鹼水は砒石の中毒、蒸發毒及び硫酸の中毒に際して飲用すれば奏効あり。

(4) 牛乳、乳皮、油等は何に役立つべきか幷に其使用法

これも又中毒の場合に多量を用ふれば消毒の効あり、其他一般の疾病に際し食物の代用となす時は大に治療を助くるものとす又新鮮なる乳皮、牛乳の上澄及び牛酪は種々の効用を有す、即ち皮膚の固着を和らげ、刺激疼痛を治し、藥用軟膏の代用をなして火傷の場合に効あり次に油は中毒の場合に嘔吐劑として用ひられ、又蜂虻のごとき毒蟲に螫されたる時に十四五分間油を塗りて局部を靜かに摩すべし、最も有益なるは蝮に咬まれたる時直ちに其局部のみならず、全身の關節を、温めたる油にて摩擦する時は恐るべき蛇毒を防ぐことを得るなり。

其他蟇の油、兎の油等は寒中の凍傷を治するに効あるものとす。

(5) 灌腸は如何に行ふべきか

これは身體を害せざる最良法なり、其藥劑には種々あれども、大麥の煮汁に二三食匙の亞麻仁油と二茶匙の食鹽を混じたるものをよしとす、小兒の

灌腸には食鹽の代りに砂糖を用ふ。

(6) 冷水及び微温湯は如何に使用すべきか

冷水は火傷、創傷、焮衝等の場合には、大に効能を現はすものにして又疼痛、出血を治するには其部分を冷し、或は水中に挿入するをよしとす。微温湯も亦鎮痛劑として腸胃の痙攣、頭痛、嘔吐等を治するに用ひて効あり。

(7) 脚湯は如何にして行ふべきか

これは頭痛、眩暈、耳鳴り、胸痛、胃痛、脊痛、及び感冒、充血等の場合に行ふものにして其時間は長きに失すべからず、即ち微温湯を脚をひたす位盥に汲入れ、これに二つかみの鹽七八匁の芥子とを投じ、十五分間温まりし後、毛布を以て足を摩し、冷へざる内直ちに寢床に就くべし。

(8) 麻仁及び麻餅は如何に用ふべきか

これは皮膚の膠結、疼痛及び、痙攣を治す、其法は麻の實を砕いて粉末となし、或は煮て餅となし、麻布に延べ、局所に貼付す。

(9) 芥子は如何に使用すべきか

これは膏藥として用ふれば頭痛、齒痛、眩暈、耳鳴り、胸及び胃痛の場合に、鎮痛の効を見ること大なり。

其用法は水にねりて麻布に延べ局所に貼付すれども迅速を要する時は練りたるまゝ皮膚に當るもよし、されど貼布時間はあまり長かるべからず、皮膚を刺激して、赤色を呈するに至らば之を剝ぎ去り、其跡を清く拭ふべし、若し之が爲めに非常に刺激せられて皮膚に疼痛を感ずる時は新らしき牛酪を塗擦すべし。

(10) 胡椒は如何なる効用あるか

これは消化力を盛んならしむる健胃劑なり人若し毎朝八九粒の胡椒の實を呑むこと、一ケ月の長きに至らば從來虚弱なりし胃も大に健全となり、食慾を増し消化力を旺んならしむるに至る。

(11) 葡萄酒及びブランデーの効用は如何

葡萄酒は最良の強壯劑興奮劑にして、衰弱、疲勞、

眩暈及び氣絶の場合に服用せば著るしき奏効あるものなり、されど疾病によりてはこれを用ひし爲め却つて危險の事あれば醫師の許諾を得ざる内は妄りに與ふるべからず、唯泥醉、凍死、窒息等の諸患に對しては常に之を投じて九死の間に一生を得ることあり、又一層其の奏効を速かならしむるは之を以て患者の顏面手足を洗摩するにあり、

又壓迫、衝突等によつて負傷したる時は、直ちに葡萄酒を以て局部を洗滌すべし、特に小兒が高所より墜落したる時などは速かに微温の葡萄酒を以て全身を洗滌すべし、其故は墜落の當時は負傷せざるにもせよ、これが爲め將來小兒の發育を妨げ、又餘病を惹き起すの原因となるを以てなり。

斯る急變の場合に際して、若し葡萄酒の貯へなき時はブランデーを四倍の水に混じて使用するも同一の効を奏する事あるべし。

(12) 薄荷、胡椒、葵、薊の類は如何なる効用あるか

此種の灌木は廣く庭園に生ずるものなれば常に注意して乾貯ふれば時に當つて大に便益なり、薄荷は痙攣、氣絶、沈痛の際用ひて効あり葵は咽の焮衝の時煎じて含嗽藥として効あり。

尊重すべき受胎の心得

妊娠は造物主の賢き攝理にして、我等の想像以外に大切なるものなれば、苟くも生殖の天賦を授かりたる人類は須らくこれを尊重して苟且の事あるべからず、殊に受胎の一瞬間、即ち男女の交接機は總て生兒の將來の智徳、并に身體の強弱等に非常の影響を及ぼすものなることを知らざるべからず、蓋し、受胎は此の一瞬間に於て將來の人間たるべき萌芽を植付られ、これに備はるべき生力も、又此の時に於て分與さるゝものなれば其生兒の完全なると、不完全なるとは、一に其の原動力たる兩親が當時の氣力の厚薄、健康の強弱、精神の健否、によりて定まるべきは素より爭ふ可から

ざるの理なり、されば兩親たるものはよくこの點に注意して此の一瞬間の最も大切なることを忘るべからざるなり。

今是等に關する實例を示すは事甚だ困難なりといへども、否定すべからざる一事實として往々我等の見聞するところのものは即ち甚だしく酒に醉ふたる時に於て受胎せしものは其生兒必らず愚鈍の者となり、又精神の不愉快なる時、身體の不完全なる時、或は精神不調和の時に於て受胎せられたる生兒は、精神又は肉體上に於て必らず多少の缺點あるを免かれず、故に夫婦たるものは、双方の戀情熟して、心中に愉快を感じ、些細の憂慮だもなき時に於て力を協せて此の瞬間を娯まざるべからず、要するに受胎は尊敬の念を忘るべからざるものなり。

身體虚弱、神經非常に軟弱にして感動し易き婦人は寧ろ結婚せざるをよしとす、こは其婦人の爲めのみならず、其夫たるべき人の爲め、殊に其間に生るべき子孫の不幸を免かれしめんが爲め、必要なる事なり、されば女を養育するに當りては力めてこの點に注意し、身體の健康を圖ると同時に亦感情の鋭敏なることを避けざるべからず、男子が其妻を撰擇するに當りては、容貌の醜美は兎に角、神經知覺の過度に激烈ならざる女子を採らざるべからず、然らざれば強壯なる小兒を擧げんとする婚姻の本旨を失ふべし。

妻たるものは懐胎の時に當りては一層注意して身體及び精神の攝養を力めざるべからず、生兒の完全と否と、精神及び身體構造の善惡は全く母の勢力に關すべきものなり、されば此間に於て烈しき運動、激しき感動、夜宴、烈しき飲食、長座、窮屈、瘦我慢等は尤も嚴禁すべきものなり。

されば他より姙婦を遇するに當りてはなるべく此點に注意して出來得る限り寛容、親切、注意を與へざるべからず、是れ尤も直接に夫たるべき者の遵守すべき事なり。

産蓐期中の手當

産婦は姙娠と分娩とにて、身體殊に生殖器に變化を受くるものなれば、其平常の狀態に復するまでは引續きて床の中にあることこそ肝要なり、此の産蓐期を俗に七夜といふ、されど生殖器の全く原形に復するまでには大抵六七週間を要す、尤も健康なる産婦はこの全期間床中にあるを要せず、一般の容體良好にして産後の排泄物（惡露）に血を混せざるに至れば、床を離るゝも妨げなし、是れは普通十日目なるを常とす。

△子宮の收縮期

さて生殖器の變化を受くる內に、尤も甚だしきは子宮なり、胎兒の母體に在る間は子宮は高く肋骨弓に達すれど出産すれば忽ち其大さの四分の一に收縮し、産後三日目には子宮の上端、已に臍より下に位し、五日目には臍と恥骨縫際との中間に下り、十日目には小骨盤に入り、最早外部より感觸し得ざるに至る。

斯くて大概六週間を經て、子宮は殆んど原形に復す

此の子宮を原形に復せしむる收縮作用は殊に二度以上分娩せる婦人にありては後陣痛と稱して腹部に激痛を起すを以て直ちに知らるべし、又子宮及び粘膜の原形に復する際には多量の液體を排泄するものにて此の液は即ち惡露なり。

△哺乳と子宮收縮の關係

惡露は産後數日間多量の血液を混ずるを以て其色赤けれども次第に薄らぎ行きて淡紅、黃色となり、終に全く白色となる。

元來子宮の收縮には母の哺乳は大に好果あるものなれば己れの乳もて哺乳する婦人にありては子宮の原形に復すること速かにして惡露の止まることも亦早し、されば自から哺乳するは頗る必要なる事なり。

而して子宮の收縮いよ〳〵速かに且つ良好なる程、産蓐中に於ける病氣、出血、及び病毒傳染などの豫防は又增々容易となる子宮の外、膣、及び會陰も殆んど原形に復し、（破裂せざりし場合）姙娠中に生じたる脚部の靜脈、怒張、（靑筋の張る事）は一部分の萎縮した

るに過ぎず、痔結節も又全く消失せざることあり、又著るしき膨脹を受けたる腹壁は分娩後直ちに緩みて皺を生ず、これを腹帶にて支ふれば原の如くに萎縮すること更に容易なり。

すべて子の生れたる後は腸は今までよりも腹中に於て廣き場所を占有し得るを以て腸管直ちに膨大して所謂出つ腹をなす事あり、されどこれは早く腹帶をしめ、且つ便通に注意せば、豫防する事敢て難からず。

但し腹帶は四ヶ月間締むべきものとす。

△臥床の心得と哺乳法

さて產婦は產後三日目よりは最早絶へず仰臥するに及ばず、體の何れか一側を下にして臥すともよろし、飮むには呑口付きの器を用ひ、便通の際には便器を用ふべし。

又食事の際及び乳を子に與ふる際には四日目よりは脊に支へを置きて僅に身を起す樣にし、肌衣の脫かへ、床の敷かへにも、產蓐に在る間を激動を避けしめざるべからず、肌衣其他の洗濯物は毎日取替ふるのみにては十分ならず、汗あり、多量の惡露ある毎にも、取かへざるべからず。

△利尿、幷に便器使用法

產婦若し、自から尿を排泄し得ざる時には產後第一日或は第二日目に尿口に尿道管を挿入して之れを空虛ならしめざるべからず、但しこれを行ふ際には消毒に注意するを要す、然らざれば膀胱カタルを起す恐あればなり。

元來橫臥の際には腹壓を十分に行ひ難き故、產婦の尿通困難となる事は屢々あり、故に第三日乃至四日夜よりは後ろに支へを置きて稍身を起さしめ、湯を入れたる便器にかゝらしむるをよしとす、斯くすれば通常尿通はよくなるものなり。

△尿道の手當

兎に角少くとも尿通は日に三回位あるをよしとす、これ膀胱充滿し過ぎて、子宮を後方に壓し、他日子宮屈曲の原因となるの恐れあればなり、次に三日目に至るまで、便通なき時は下劑を用ひざるべからず、

下剤としては一二匙のヒマシ油をコーヒーと共に呑むこと尤もよし

灌腸は一回位にては大抵効を奏せず、されど、旃那(センナ)蘆薈(ロカイ)巴豆(ハヅ)如き強き下剤は下腹の充血に隨つて子宮の出血を來す恐れある故禁せざるべからず、三日目前後よりは各々二日目毎に便通ある事を注意すべし、而してそれには大抵適當なる食養生法即ち牛乳、菓物の類たるを與ふる事にて既に十分なるを常とす



△外陰の手當

産蓐養生にて最も大なる注意を要するものは外陰部の手當なり、是れ病毒こゝより膣中に侵入し易ければなり、まづ膣より多量に送出する惡露は忽ち腐敗して惡臭を發す、故に産婦は少くとも日に二回づゝ朝夕消

毒液を以て陰部を洗滌せざるべからず、消毒液として普通に用ふるものは一パーセントのリツール釋液一パーセントの石炭酸水なり、一パーセントは水百分中其物の一分を含むことをいふ、此の洗滌時の中間に出づる惡露は綳帶綿、或はガーゼの卷きたるものを當がひ置きて收縮せしめ、日に幾回も取替ふべし、又產婦は日に二回朝夕、檢温器を以て體温を測からざるべからず。

△安靜法

體温は平常の產褥は高まることなし、只三日目或は四日目にのみ三十八度位までの輕き發熱あるを常とし、この日には產婦の氣分も稍惡しくなるものなり、脈膊は遲く、一分間六十或は其れ以下となり、產婦の精神上に感動を受け、若しくは體に痛みある時のみ速かなり。

すべて產婦の神經は過敏となり、感動し易きものなれば、產後第一週間中には訪問、説教、新聞等を禁ずべきは勿論、親戚朋友近所合壁より、出產の祝ひ、又は產婦の見舞に來るとも、決して產婦に面會せしむべからず、又產婦の床離は、產婦の容體に隨つて異なれども通常は十日位にてよろしかるべし。

△離床時の心得

纎弱き婦人にして多量の血を失ひたる時は永く床中にあるを要す、始めて床を離れたる時は健康なる婦人にても時に氣絶する事あり、概して食後を尤もよろしとす、若し床離れの後惡露中に血液を混じたる時は產婦は又直ちに床に就かざるべからず、產婦の室外に出づるまでには夏は三週間冬は五週間を要す、其外發汗と惡露とは室内の空氣を惡からしむるもの故十分空氣の流通に注意すべし。

△產婦の食事

產婦の食事は產後三日目までは消化し易くして滋養ある流動物をよろしとす、故に稀粥、粥、スープ、卵子、牛乳等は最良なり、四日目より十日目までは一般に滋養に富み、且つ消化よき固形物を食すべし又添物としてはカステラ、ビスケットの類よろしく飲料には

牛乳、薄き茶などもよろしけれど、熱きものと又冷め過ぎたるものは飲むべからず。

産褥熱の心得

△原因のいろ〳〵

分娩の際生殖器に生ずる熱性の病なり、但し肺炎などの如きも産婦の犯さるゝ熱性の病なれど、其原因を異にせるにより、其等は産褥熱とは言はず、産褥熱は外部との病菌傳染のみにて起るものにて其病源は連鎖球菌にて腐敗を起す一種の黴菌なり、就中その球菌は其接觸部より、組織中に侵入し、これを破壞して淋巴管より血管中に入り、かくて全器管中に達し至る處ろに炎症を起し其新陳代謝によりて人體内に有害なる老排物を生ずるを以て尤も危險なり、されどこの病毒は、其侵入する場所、たとへば陰部、膣などに止まる事あり、又子宮或は輸卵管、卵巣、腹膜にも達して重き血液の中毒、(血液を毒質に變ずること)を起すこともあり、分娩の際に子宮口、膣、會陰のほとりに小き裂傷を生ずるを以て病毒はこゝより侵入し子宮の内面に大なる疵を作るにより、更に病毒は容易にこゝより侵入す、故に産褥熱は手術を要する難産の場合に起ること多し、而してその惡性の黴菌の生殖器の傷面に達する原因は種々あれども、手及び器械を入れて産婦の子宮内部を檢査し、或は手術する時に、手及び器械の病毒を傳播するなり、さてこの病毒は至る處ろに存し、タトエば手に膿傷などある人の手に觸れたる戸の取手を知らずに掴むことあらば病毒は直ちに手に附着す、故に内部の檢査を爲すは、止むを得ざる場合にのみ限るは勿論、これを行ふ際には手及び器械を十分に消毒すべきものなり。

又陰毛及び陰部などに既に病毒の附着せることも屢屢あり、近來の研究に依に糞便の中にも大腸桿菌といふバクテリヤを含むことありて死に終るべき激しき産褥熱を起すことありといふ。故に産婦自身も陰部及び其附近の被布を清潔にし、床の敷布、襯衣も又清潔な

るものを用ふべし。

此の外子宮の内部を檢査せず、又他の理由もなくして産褥熱の起る事あり、これを自感染といふ、病毒の知らず〳〵の間に陰部の中に入るものなり、恐らくこれは産婦の手、若しくは肌着などより來るか若しくは前よりの病毒の猶生殖器中に殘りしものなるべし。

△産褥熱の經過

産褥熱の經過は黴菌毒性の強弱、或は其數の多少によりて種々あり、輕きものは熱もあまり高からず、病毒の傳播も躰の一小部分に限れども、重きものは忽ち激しき症狀を呈し、病毒は全身に蔓り、數日にして重き血液の中毒を起し、遂に死に至ることあり、この病に罹らば速かに醫療を請ふべし。

流産の原因

流産といふ事は平常澤山にある話であるが、是れは種々一般の婦人に緊要な心得ですから一寸こゝに概要を申ませう。

一體妊娠に就ては流産、早産、及び定期産の三種に區別してあります、胎兒は通例二百八十日丈け母の胎内に居るもので、産科ではこれを十ヶ月に分けて居る、故に産科の一ヶ月は二十八日即ち四週間づゝです、これで二十八週間即ち月からいふと七ヶ月以内に産れたのが、到底生活の出來ないもので、即ち流産である、二十九週から三十八週までが早産、三十九週から四十週少し後位までに産れたのが定期産即ち通常の分娩であります。

これから七ヶ月までの流産に就て更に二ッに區別されてある、即ち四ヶ月（十六週）までは分娩の時に初めに甚だしく出血をするもので、極めて危險である、其後の流産は大概通常の分娩のやうであるが、併し後産が剝がれ出ることがむづかしく、頗る不良なものである。

さてこの流産の原因は何うしたものであるかといふのにまづ其重なるものを申すと子宮內膜炎、子宮前屈

及び後屈、外傷、熱病、腸かたるこれに梅毒などである。

△内膜炎　子宮内膜炎とは尤も多くある病で、月經中の不攝生、淋疾の傳染等によつて發する、此の病氣は子宮の内面が爛れ、鼻汁のやうなものが始終降りるものです、此の内膜炎は婦人病の中で最も大切なもの丶一つであるから大に攝生に注意せねばなりません。

△子宮前屈　子宮前屈とは子宮が前の方に折れて屈むもの、後屈とは矢張り後の方に折れて屈むものです、又流産をする外傷は轉倒すること劇しく膝を突くこと其外、劇動するやうな車に乘ることです。

△熱病　熱病では三十九度以上の高熱が一週間以上も續くと流産をする、二日や三日位では強い熱でも中々流産はしないそれ故、瘧などの様な直ぐに治るものは滅多に流産はしない。

△梅毒　梅毒で流産をする事は最も著るしいもので五ケ月以後から同一の婦人で何度でも同様に流産をするものである、之れを醫師の方では常習性流産といつてある、それで婦人に就て診察をして見ると少しも梅毒の容體が無いもので矢張梅毒の爲めに常習性流産がある、つまり梅毒が父から母に傳染をせずに小兒だけに遺傳するのである。

不眠症に對する心得

不眠症に病的なると不病的なるとの二種あり、共に安眠し得ざる症狀にして時として全く就眠し能はざることあり、或は偶々寢ることあるも忽ちにして醒め、又は惡夢に襲はる丶等甚だ心地惡しきものなり、されど別に不眠症といへる一種の病氣あるにあらず、或る他の病氣の併發、結果若しくは前兆として起り、又習慣、感情等より生ずることあり病的の不眠症はヒステリー症の神經病より來ることあり、又熱、疼痛によりて眠られぬことあり、又他病の前兆、たとへば間欲熱發作の前夜眠られざるがごとし、是等は速やかに其原病を去らざるべからず、而して最も多く神經衰弱より

起り、或は早晩これに陷るものなれば注意すべし次に非病症の不眠は遲寢して晏起する癖ある者は早眠し難く、起居不規則の生活をなせしもの亦然り、或は茶、咖啡等の如き興奮飮料を多量に飮用したる時、又は甚だしく喜怒哀樂の情に動かされたる時、若しくは寢慣れざる場所に宿する時など不眠の狀態に陷ること多しこれ等元より病氣といふほどにあらねば、其原因を除去すると共に恢復するものなり。

されば不眠症の療法はまづ其の原因を治療するをよしとす、次に生活法を適宜に整へ、安眠し得る樣になすべし、即ち規律正しく臥床に入る習慣をつけ、晩食には過食及び興奮性飮料を廢して、すべて交際、說教、講義又は夜更して音曲などを聞き精神を興奮せしむべからず、又轉地療養も効能あり、又多少の運動、郊外散步などもよし、猶効能多きは種々の水治法にして、胴又は足の腓腸を水に濕したる布にて纏ふこと、全身を濕布にて包むこと、或は脚浴、殊に半時間乃至一時間も溫浴すること等なり、其他場合によりては背部の按摩、電氣療法などもよろし、頑固なる症には、麻醉劑を用ふることもあり、又激痛によりて眠られざる時はモルヒネを用ふ、されど是等は素人の猥りに用ふべきものにあらずと知るべし。

睡眠の掟

○睡眠の場所は閑靜にして闇黑なるをよしとす、閑靜なれば益々精神を休息せしむるを得べし。

○寢室には常に新鮮なる空氣を流通せしむる樣になし廣くして高く、なるべくは晝間人の住まはざる處ろにして夜間又暖爐を設けざる部屋を撰むべし、花卉、食物等蒸發すべき物を室内に置くべからず。

○夜間眠に就く前、（二時間位前）に少量の食物を取るは妨げなし。

○寢るには身體を抑壓することなく、眞直に橫はり、頭を少し高くして眠るべし、關節を屈曲して寢る時は身體に角度を造り腹部の血液循環を妨げ、睡眠

の目的に進ふべし。

○憂慮若くは仕事など一切之を捨て虚心平氣となるべし、例令ば寢床にて讀書するが如きは有害の甚だしきものなり、何となれば精神を靜かに休息せしむべき時期に於て更に精神を働かしむれば其起されたる働きは容易に止まらずして終夜腦裏を去らず、或は身體疲れて就眠するも精神は猶働らきて十分睡ること能はざればなり。

○人或は晝夜を論せず、何時にても定めの時間に眠りさいすれば充分なりと信じ夜を快樂に盡し翌日の午前を恰も深夜の如く眠るものあれど、こは大なる誤解なり、睡眠の時間は或は同じきも其時間は晝夜に依りて全く相反し、特に夜半前二時間の睡眠は其利益他の時間に二倍するものなり。

我家の慰安法

△娛樂と談笑

嬉戲、娛樂は身體の健康を維持するの妙藥なり、されど嬉戲の法はなるべく單純にして且つ過激に渉るべからず、故に一家の團欒、氣長の旅行、山水の美を探ぐる等は最も適當なる方法なり、日常生活の强壯劑とも稱すべきものは談笑にして、精神の快樂は勿論、血液の循環をも盛んならしめ、大に消化機能を助くるものなり。

△正直と度量

人は相互の信用を重んじ、博愛仁慈の美風を養ふべし、徒らに他人を狐疑し、猜忌し、又他の惡行を指摘し、隨つて世を狹めて孤立の生活を成すはよろしからず、人の天性は素と善良なるものなれば惡事兇行の反證を擧ぐるまでは何人も善良なる人と見做さゞるべからず、たとへ中に一二の惡行ありとても此等は或る事情、若しくは或る精神上の錯誤より來りたるものとして及ぶべきだけこれに同情し、其惡を包んで反省の餘地を與へ以て完全美德の人とならしむることに務むべし。

△其日の生活に滿足せよ

人は其日の生活を樂しむべし、即ち現在を樂んで未來の生活の杞憂を抱かざるなり、世の不幸なる人は兎角未來の爲めに杞憂して、現在の生活を忘るゝを以て精神の安逸と快樂とは常に騷擾と不平とに蔽はれて知らず〳〵短命の原因となるものなり、故に現在は未來の母なることを悟り、其日〳〵の生活に安意快樂を取りて徐ろに幸福ある未來の計を回らすべきなり。現在の快樂を犧牲に供して徒らに未來の希望を成就せしめんと種々なる妄想を描き出すは自から求めて短命の種子を蒔くに異ならざるなり。

△萬事に應ずるの用意

何事にも十分の研究をなして正道の觀念を養ふべし凡そ世間に不幸有害と稱するものは槪して事物の研究を等閑にし、狼狽、誤解等より生ずるものなれば、常に事物の研究を怠らず、境遇相當の智識を養はざるべからず、これ人間萬事の變化に應ずるの用意なればなり。

△精神の安逸と快樂

精神の安逸と快樂は種々の幸福を來し、又長命の基礎となるものなり、されば長壽を得んと欲するものは殊に精神の安逸と快樂とを求むるの法を知らざるべからず。

△情慾の節制

精神の安逸を得んと欲せば第一にまづ情慾を抑制することを務むべし、人若し情慾の奴隷となりて常に喜怒哀樂の爲めに動かさるゝ時は、決して精神の安逸と快樂とを得ること能はず、終には氣根を消耗して短命の結果を招くに至るべし。

△天命に安んぜよ

人間の運命には天祐あることを知らざるべからず、人若し辛勞を以て事に當らば何事も成就すべしと確信する時は、一朝不幸にして失敗するに當り、非常に失望して憂愁に陷り、精神の不安を來すものなり、是れ甚だ嘆ずべし、こゝに於てか人の運命は大半天賦に依るものと覺悟するの必要あるなり。

清潔は長命の基礎

貧乏は心の不精より來り、病は身の不潔より來るとは千古の格言なり、生來如何なる壯健者も不潔不精が習慣となりては終に病の問屋となるを免かれざるべしされば身體の清潔即ち皮膚の注意は衛生の極意にして須らく生命を重んずる者の務め行ふべき日常の義務なり、不潔とは身體の內部より發生する排泄物（垢のごときもの）又外部より附着する塵埃物に對する、無頓着の行爲にして皮膚の注意とはこれに對して幼少の時より、皮膚を慣らして强壯ならしめ、以て寒暑に堪へしむる樣にすることとなり、されば其大要を左に記さん

一毎朝早起後清潔なる水にて全身を洗ひ、皮膚を强く摩擦すべし。

一衣服寢具等主として皮膚に直接するものを屢々洗濯し、殊に襯衣などは三日目位に取替ゆべし。但し日本の風習として度々入浴すればシャツを毎日取替ゆるの必要はなし。寢具は晴天の日必らず日光に當てゝ乾曝し、寢る時には白き上敷を用ふるをよしとす。

住家殊に寢室の空氣を新鮮ならしむべし。

一入浴は極めて必要なり、少くも二日に一度は必らず、浴すべし、これ皮膚の附着物を脱去するのみならず、皮膚の氣孔を開き血液の循環を盛んならしめ、衛生上尤も有益なり。

就中海水浴は海水の刺激侵入によりて氣孔を開き身體全部の機關を强壯ならしめ、從つて精神を勇壯活潑ならしむるものなり。

一務めて身體の運動を爲すべし、是れ蒸發を助くる好手段なり。

一不消化の物、例へば、脂肪多きもの、纖維多きもの等の食物を避くべし是れ蒸發を防ぐるものなればなり。

如何にして醫師を選ぶべきか

凡そ醫師を迎ふるにはまづ其人物の如何を聞き訊しその學術の深淺、殊にその醫師が專門に長じ居るや否やを調べざるべからず、而して一旦此人ならばと信任して迎へ、其の生命を托したる以上は他人の勸告など容れ、徒らに醫師を換ゆべからず、而して又一たび信用して其生命を托したる以上は、何事も醫師の指揮を受け、堅く其の言ふ處ろを守るは、病家たるものゝ義務なり、世には少し位養生法を心得たりとて醫師の言に從はず、自分勝手の手當をなし、取返しのつかざる大事を惹き起す事あり、されば疾病の時は己れの信任せし醫師に萬事を相談し其の指揮のまに〱養生するを以て專一とすこれ其病氣を治する唯一の方法なり。

頭髮の衞生

頭髮は婦人美容の眼目にして、其善惡は往々女子の運命を左右する魔力を有することあり、古へより女の髮は大象をも引かるゝといひ一髮千鈞を繫ぐとの諺もあり、綠の黑髮、花の顏などいひて髮は直ちに婦人の美の表影たり、故に其取扱には十分の注意をなすべきものなり。

さて婦人の頭髮は美觀と衞生との二樣の任務を帶ぶるものなるが、こゝには專ら衞生上の毛髮に就ていふべし、すべて毛髮は外來の寒熱刺激等を防禦する務を持つものにて殊に頭髮の如きは人身の主要部たる腦髓を庇護するものなれば性最も强靭にして彈力に富み、且つ腐敗することなく、又甚だしく濕氣を吸收する力あり。

尤も髮の强弱は其色によりて相違あるがごとし或る學者の試驗したる處によれば黑髮は最も强く、一髮よく四オンスの重量を支ふべしと、次に褐色なるは三オンス、金色なるは尤も弱くして僅かに二オンスに過ぎずといふ、これによりて見る時は日本人の頭髮は最も優等なるものといふべし。

△毛髮の生長

髮は常に生長するものにして、人は十八歲より二十

六歳までの間、毎日五匁ほどの毛を新生しつゝありといふ、されど夏季は冬季より多く、而して毛を剃る時は、生じたる儘の時よりも猶早く生毛を促かすものなり、又黒色の毛は老年に及ぶまで多少生長するものなれど、金色の毛は或時期に於て生長停止し、爾後七個年にして脱落を始め終に禿頭となるといふ。

△頭髪の疾病

頭髪には種々の病ありて或は脱落し、或は禿髪し、或は白癬と稱する黴菌の寄生するものなれば



平素注意して其の手當をなすべし、就中白癬は傳染症のものにして頭髪の毛囊周圍に黄色のもの生じ漸次増大して終白痂を作り、髪は光澤を失ひて折れ易く、終には脱落して禿頭となる、この症は頑固にして治し難く、且つ一旦治するも再發の恐れあり、この療治はまづ毛を短く切り再三脂油を塗りて十分毛髪を濕らしピンセットにて毛を拔き加里石鹼にて洗ひ、サリチルサン、石炭酸、イヒチオール等を塗沫すべし

△頭髪の脱落

これは種々の熱病、重病、產、梅毒等により、頭皮の炎症を起すによるものなり、療法は原因を除去すれば毛髮自然に新生すべし、猶ゲンセイ丁幾、レゾルチン、白降汞軟膏等を塗布せば生毛一層迅速なり俗說に產後の拔毛には昆布の根を燒きて其灰を塗沫すれば効ありといふ、又婦人にして或る不明の原因より脫毛すること往々あり、斯る際には加里石鹼、或は食鹽水にて日々頭髮を洗ひナツトール酒精を塗布し、稀薄なる蕃撒丁幾を頭皮に塗抹せば容易に豫防することを得べし

△禿頭病

良症のものは一局部の禿に止まりて蔓延することなく、二三週間乃至一二ケ月の後に複するものなれども惡症のものは、一夜の中に全頭悉く禿げ終るものあり、甚だしきに至れば、延いて髭髯、腋毛、睫毛、陰毛等をも侵す禿頭症中尤も恐るべきものなり。

されば頭髮の淸潔を保つは勿論、床屋の器械、女髮結の櫛等には十分注意して消毒せしむるを要す療法は局部を加里石鹼にて洗ひ、ナフトール、腐蝕アンモニア水など塗布して効あり、又創傷、火傷、腫物等の禿痕には毛生藥を塗布すべし尤も毛母の缺損せるものは植皮術を行はざるべからず。

△若白髮

弱年にして白髮を生ずるは甚だ見苦きもの殊に婦人の如きはこれによりて大に生來の美貌を損ふものなれは速に其手當を施さゞるべからず、若白髮は多く消化器の障害より來り、又過度の精神使用に起因することもあれば、まづ其原因を除去し、食物の攝生、便通の調整に注意し、適宜の運動、冷水摩擦、冷水灌腸等の強壯法を勵行し頭髮は每朝鹽水(一日位)にて洗滌し、グリサラビン、又はイヒチオールの塗布を行ふべし服藥にはいろ〳〵あれど醫師と相談の上にて用ふべし、若白髮は老人の白髮の如く不治のものにあらず、治療次第にて治するものなり又生來の赤毛を多少黑くするには以上若白髮の療法を應用すべし。

△縮毛の治法

毛のあまり硬きは男女共不便なることあるべし甘草

根の煎汁にて洗ふべし、縮れ毛及び髮癖の惡きを直すも又この法にてよし。

△結髮時の注意

結髮の道具は、自分の物を一切揃へて置くべし、決して他人のを用ふべからず、殊に女髮結の携帶せる梳櫛などは危險の甚だしきものにして禿頭病等多くこれより來るものなり、又男子にして床屋にて理髮する時は理髮後必らず自家にて一旦消毒法を行ふべし、これにはアルボース石鹼、加里石鹼など効力あり。

△髮 洗 ひ

髮を洗ふ事は皮脂、頭花、塵垢等を除去しまた毛根を刺激して生毛を促すものなれば毎月二回位は必らずこれを行ふべし、洗劑に純良なる石鹼、鷄卵、洗ひ粉、饂飩粉等をよしとし、曹達は髮の油氣を奪ふものなるを以て不可なり、皮脂多過ぐる人は洗髮後毛根に十倍のナットール酒精を塗布し置くべし。

△髮 の 油

近年は束髮の流行と共に洗ひ髮を稱するものなれども、實際に於て鬢附、水油、香油等は天然の髮の毛の不足を補ひ毛髮を柔かにし、且つ光澤を生ぜしむるものなれば其善良なるもの少量を用ふることは髮の衛生上大に利益あり、而して其の原料は 椿 油を最もよしとす。

哺乳時の注意

母親が、幼兒を育てるには常に心中に十二分の愉快を持ち、いつも樂しげでなければならぬ。一體乳以外に何物からも營養を取つて居らぬ幼兒が、俄かに青い大便をしたり、痙攣を惹起したり、或は下痢を爲たりして苦痛を感じ、或は死に瀕する事がある、其原因が分らぬ爲め、父母は何でも之は不消化の爲とか、寢冷であるとか理屈を付けて了ふが、實は夫れは母親の精神感化から及ぼした乳汁の變化である事を看過して居る、實際母親が痛く悲んだり嘆いたり、或は過度に精神を激動さする事があつたり、最も近い例は夫婦喧嘩でもした曉には其乳汁の量が恐ろしく減ずるか、或は其の質が變ず、然るに未だ食物や水も取らず唯だ母親の乳汁の外何の依る處のない乳兒が、此の母乳を飲んだ爲に胃腸に變化を及ぼし、下痢や青便をするに至つたのは當然の事で、實際寢冷えでも何でもない、其例は非常に夥しいが、唯だ之は家庭の秘密に屬する事なので、兎角多數の醫者は此の重なる一原因を看過して居る、此の事から考へても家庭の母として乳兒を育てる者は茲を注意して精神の激動を斷じて避ければならぬ。

晩婚婦人の福音

私は華族女學校を卒業する一年前に從兄を養子にして小兒一人儲けましたが其は直ぐに病死致し、一年經たぬ内に亦もや其人も亡くなりました、そこで私は斷然生涯獨身で暮そうと決心しましたけれども兩親は老先長いものが、獨りで過すには何か一つ快樂がなければならぬと、いろ〳〵心配致し、幸い幼少の折から繪畫が好でしたから、一心不亂に花鳥畫を習ひまして、出來ないながらも人樣から弟子を取つたらどうかと仰しやられるまでになりましたが、父が堅い人で、決して營業的にするな精神の快樂にせよと申して承知しませんでした、ですから私は長い間寂しい生活を致して唯月花を友として慰むばかりで御ざいました、其間には樣々な感に打たれ、又精神上にも非常の苦痛を覺ゆることもありまして、熟々此の世が厭になつて悟道の人と申ては大層ですが、まづ仙人のやうな心持になつて仕舞ひました、其内母に死別れ、益々氣力を失ひ、遂に心神共に衰弱致し、お醫者も迚も全治は覺束ないとまで言はれた位でした。

すると私の伯父に當る高崎男爵が大層心配を致して、まだ三十にもならぬ身ではあり、殊に親一人といふ寂しい境界でありながら、生涯寡居するといふ事は、只だ寂寞な家庭に葬られる樣なものだし、又父なき後に如何なる誘惑や災難に罹らぬとも言へない、彼是を思へば今の内に再婚するに如くはないと勸めたので厶います、併しなか〳〵決心を變へる氣はなかつたのですが、圖らずも不思議な縁で再婚する事になりました、それは只今の良人(伊集院中將)がまだ大尉位な時分で、外國に參つて居た留守中、其先妻と私とは同じ小學校友達でしたから互に往來して居て善く私の境遇や氣質を知つて居たので厶いますが、其後伊東元帥の園遊會で久し振りに面會しました、すると私の窶れに姿を見て非常に氣の毒がり、何卒良縁を見つけて上げたいと始終話して居たそうです、伊集院は私を一度も見た事はなくても、私の履歴だけは先妻から聞いてよく知りぬいて居たので厶いませう、それで男の子を二人遺して病死した細君の靈の爲めには平生其滿腔の同情を傾けた者がよからう、且又愛子の爲めに永の年月、情を苦めたものは善き母になつて呉れるだらうと云ふところから私をといふ事に話が極つたので厶います。

父は良縁ではあるが養子があつてはと心配を致しました併し私は又養子がある家からの申込ゆゑ堅い決心を備へした次第なのです、何故と申すと、私のやうな不束な者を、強つてと望まるゝのは最愛の子供の爲を思はるゝからで、却て盡すべき義務が存在して居るだけ、希望があるのですから身を粉に碎いても遺子を育て上げ慈母となりたいといふ決心で此家へ參つたのでございます。

(伊集院中將夫人の談片)

雜錄

新男爵夫人

▲石本男爵夫人

中將新六氏(五十四)は元姫路藩主酒井雅樂頭の臣にて夫人越子(四十二)は舊金澤藩士安達松太郎氏の實妹、舊お茶水高等師範學校に學び今の木越第五師團長夫人貞子内田紐育總領事夫人陽子、遠藤海軍少將未亡人等は同時の同窓生なり長男惠吉(二十)を首め令息令孃七人あり(麴町區三番町十三番地)

▲木越男爵夫人

現第五師團長安綱氏(五十四)は舊金澤藩士加藤直忠氏の弟にて亡九八郎氏の二男、夫人貞子(三十七)は前大審院判事柳田直平氏の二女にて女子高等師範出身なるが前記の如く現代女子敎育界に著名なる矢田部順子(理學博士未亡人)は夫人の實の姉なり五名の先夫人の遺兒と同女はる子(十一)を抱えて圓滑なる家庭を作り居らるゝなり(在廣島)

▲目賀田男爵夫人

靜岡縣出身の種太郎男(五十五)夫人はいつ子(四十八)と云ひ故勝海舟翁の令孃にて二令息五令孃なる中現に大倉組倫敦支店長工學士狩遠野長九郎氏夫人となり居る長女りよ子(二十七)が未だ獨身の八年前單身米國に漫遊せしにても知らる可く「私は江戸ッ兒なれど鼻先ばかり強き江戸ッ兒は大嫌ひです」と云はるゝに見ても夫人の平生は知らるべし(小石川區原町二十七番地)

▲濱尾男爵夫人

新氏(五十九)は久保田男爵と同郷の出身なり、夫人作子(五十九)は萬國婦人平和會の委員として大日本婦人衞生會の創立者として能く婦人界一方の牛耳を握り又幾多の婦人會に關係して少壯貴婦人中より「お母さん〳〵」と尊稱せらるゝにても其の平生は知らる可し令孃淑子は渡瀨理學博士夫人たりしも先年中病死し邸内には二女淳子(二十七)あり世嗣は渡瀨博士の第二女と定まり居れり

▲久保田男爵夫人

良人讓氏(六十一)は兵庫縣城崎郡豐岡町木町周輔氏長男、夫人やゑ子(五十二)は神田淡路町安井治兵衞氏長女なり邸内には息敬一氏(二十七)信三氏(二十二)あり(小石川區金富町三十五番地)

▲村上男爵夫人

海軍經理局長敬次郎氏(五十五)は廣島市基町堀尾笑右氏の次男夫人つる子(五十四)また同市剛町故田中牛之助氏の長女にて二男一女を擧げたるもつる子夫人元來蒲柳の質なるものから更に交際場裡に立たち給はざるは甚だ遺憾と謂べし

▲福島男爵夫人

信州出身の安正中將(五十五)夫人貞子(五十二)は德川一橋公に事へ東京醫科大學蠟製モデルの創作者として著名なる故高野琮氏の實姉、息正一氏(三十三)は既に靜子(二十)と云へる夫人を迎へて邸内に在り二男二郎氏は日露戰役に名譽の戰死を遂げ尚ほ邸内には三男一女あり貞子夫人は牛込區内に於ける婦人界の牛耳を執り居

る程の交際家(牛込區矢來町三番地)

▲大藏男爵夫人

横濱柳町出身の中將平三氏(五十六)夫人まつ子(五十)は將校婦人會の大立物として人の知るところ三男二女あり長男等氏(三十一)は國史科出身の文學士にして歩兵中尉なるも靜岡縣庵原郡小島村松井甲太郎なる母堂の里方を嗣ぐ可く其の戸主となり居れり

▲阪谷男爵夫人

芳郎藏相(四十六)の夫人こと子(三十八)は澁澤男爵の令孃として王子なる澁澤別邸に於て阪谷氏を理想の婿君として擇び給ひしとは人の知る處なり夫れかあらぬか明治二十一年二十歳にして結婚し其の翌くる年より丸四年間ノベツ幕なしに令息令孃を儲け給ひし處は洵に目出度し即ち長子希一氏(十九)敏子(十八)和子(十七)俊作(十六)夫れから少し飛んで二十九年、卅一年、卅四年に三女を儲け給へり、孰れも末頼母しき令息孃令達にて、男爵夫妻の滿足は誠に羨むべきものありとぞ。

▲小池男爵夫人

軍醫總監にして新たに男爵となりたるもの佐藤進氏の外に亡小池正敏氏の長子たる正直氏(五十四)あり男は山形縣鶴岡町の出身にて夫人金子(四十七)は長崎縣北松浦郡平戸村龜田佑記氏の息女長男正晃氏(二四)の外に三男三女あり

▲藤井男爵夫人

廣島縣出身包總中將男爵(五十五年)の父君、夫人とし子は(五十一年)東京市谷田町二丁目柴田安定氏の令妹にてふみ子(十九年)の外に一男一女あり

▲原口男爵夫人

大分縣木村才木寬吾氏の男にて早く同町原口等方に養子となりたる中將男爵兼濟氏(六十一年)夫人せき子(四十四年)は東京赤坂表町四の一橫川美高の息女なり六男二女ある中榮子(二十四年)は福井縣鯖江の藩士小畑某の室にまつ子(二十年)は昨年中岡山縣の杉榮三郎氏夫人となれり

▲岩佐男爵夫人

越前福井藩の醫師岩佐玄硅氏の家に生れたる侍醫男爵純氏(七十二年)その夫人德子(六十七年)亦松平越前藩主に仕へたる松原治郎左衞門氏の息女なり大の佛敎信者として都下の婦人會に名高く一日に三回づゝ佛前に參らざれば氣が濟まぬと云ふ方なり東京の吉祥講婦人會、婦人法話會、淑德婦人會等は夫人の最も熱心に干繫せるものなりと

▲上原男爵夫人

陸軍中將男爵勇作氏夫人槙子(三十三年)は陸軍大將野津新侯爵の息女なり今回の新華族婦人中一番年若な丈けに當世式にて華族女學校出身中の才媛として名あり令孃愛子(十二年)は最も書を能くし嘗て上野に開かれし選書展覽會席上に於て御前揮毫の榮譽を蒙りしもの愛子の外一女二男あり

▲田男爵夫人

田氏は兵庫縣出身なり久保田、松尾二氏を合せて是れと同時に同縣下には三男爵を出したる譯にて夫人やす子(三十七年)又た新華族夫人中若き方にて世嗣篤氏(二十六年)の外四男三女あり

▲上村男爵夫人

彥之丞男夫人貞子(五十一年)は東京芝田町井口

彌五郎氏の息女流石世界の英雄も一人の子寶なく西郷從道侯の令息從徳氏（二十七年）を迎へて養子となし更に新伯爵山本權兵衛大將の息女なみ子（二十一年）を娶りて好個の花嫁花婿を作りしは昨年十二月中の事なり

▲大浦男爵夫人

鹿兒島縣藩士（五十八年）夫人はこう子（五十年）とて家庭極めて寂しく世嗣求氏（三十一年）及び同氏夫人はつ子（二十三年）との仲に武一氏（四年）あるのみ

▲佐藤男爵夫人

順天堂病院長進博士男（六十三年）夫人靜子（五十六年）は故佐藤尙中氏の息女にて現に東京本郷弓町なる女子美術學校長として將た貴婦人會の交際家として旣に世に知らる

▲岡　男爵夫人

宮内省侍醫局長新男爵岡玄卿男（五十六年）は夫人美犬子（四十五年）との間に子なき爲神田鍛冶町渡邊萬助と云へる人の庶子靖一氏（二十七年）を入れて世嗣となせしも二十三年に至り後二（九年）と云ふが出來たる爲め靖一氏を家督相續人より廢除せんとして端なく裁判の結果漸く此の九月三日後二氏は分家と定まる

▲宇佐川男爵夫人

一正男爵（五十九年）夫人種子（五十七年）は山口縣吉敷郡小鯖村の出にし同藩士なる今の男爵を迎へて養子となしたる者長女みれ子（四十年）には早く養嗣子邦人氏（四十年）を迎へてふゆ子（十九年）を首め三女五男の令孫あり次女すみ子は齋藤陸軍大尉の夫人となり居れり扨て男爵夫人は極めて平民的なる交際上手の婦人として海陸軍武官の夫人間に著名の人也

▲伊集院男爵夫人

伊集院才之丞氏の世嗣にして海軍中將たる五郎男爵（五十六年）の夫人繁子（三十八年）は去卅年中東京麹町區永田町なる德川藩士大野義方氏息女より中將方へ後添に來りしもの先夫人の遺兒松治氏（十五年）竹二氏（十三年）を良く敎養し海軍武官の夫人中交際家として乃至活動家として名あり

▲有阪男爵夫人

山口縣岩國町出身にして陸軍中將として將た有阪砲の發明家として其名海内に隱れなき成章男爵（五十六年）は夫人みつ子（四十二年）との仲に五男五女を擧げたる程の子寶なりしも何れも獨立するやら嫁づくやらにて東京の邸内には四女捨子（六年）を首め章（四年）季子（二年）あるのみ

懸賞　繪探し答案募集

本號飛駒の中に繪探しが七個所（一個所に一つとは限らぬ）仕組でありますから皆さん當てゝごらんなさい殘らず當つた方には例に依て籤引の上二十名を限り左の賞品を呈上致します。

（締切は十月三十日まで）

一賞品は博文館發行圖書切符金貳圓
一答案は葉書に限る
一一人にて二樣の答案を作りて送るものは二本共採用せず

十一月號記事概要

十一月五日發行

每月五日發行

定價表

一冊(紙數二百八頁)	金二十錢
四冊(三ヶ月分)	前金七十五錢
八冊(半ヶ年分)	前金一圓四十五錢
十六冊(一ヶ年分)	前金二圓八十錢
内(定刊數……十二冊 / 增刊四回……一、四、七、十月價格同一)	
郵税 一冊	二錢

廣告料

	二十四字詰一行	半頁(卅二行)	一頁(六十四行)
特等	……	二十圓	四十圓
一等	五十八錢	十七圓	三十三圓
二等	五十錢	十四圓五十錢	二十八圓
三等	四十二錢	十二圓	二十三圓

▲等級の位置〆切日等御照會次第御報可致候

註文規畧

● 本館發行の圖書は都て前金の外送本せず
● 御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す
● 郵券代用は一割增にて五厘一錢の切手に限る
● 總目錄御入用の方は二錢券相添申込あれ

明治四十年十月日十五發行　第七卷第拾四號

編輯號發行人　松原岩五郎
印刷人　山田英二
印刷所　博文館印刷所　東京市小石川區久堅町百八番地

發行所　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

電話本局
三百三番　千十八番
二千六百二十番
三千二百二十九番

毎卷醫學專門大家講述

家庭衛生講話

毎卷洋裝菊判美本＝＝紙數各約百六十頁

口繪寫眞版數多挿入

(第一編)

一般救急法

醫學博士 三輪德寛君述

正價參拾五錢
郵税金六錢

此書は三輪博士が素人にわかり易く親切丁寧に講述せられたるものであつて書中には家庭にて身體に急な變常の起つた場合に醫師の來るを待つ暇なく臨機に處置すべき方法が一切網羅して載せてある假令へば急に卒倒した場合創を受けた場合痛の起つた場合毒な物を食べた場合水に溺れた場合火傷をした場合毒蟲に螫された場合などにどう云ふ處置をするがよいかと云ふことを述べてあるのであるから一般の家庭並に殊に旅行家工場の事務員學校教師警官航海者消防夫などに甚必要な心得である、毎戸一本を備へて不時の急に應ずる用意とせられんことを希望するのである

(第二編)

衛生學大意

醫學博士 森林太郎君述

正價參拾五錢
郵税六錢

緒論＝衛生學の意義〇衛生學の沿革
(一)土地の事＝地中の空氣〇地中の水〇外三項
(二)下水の事＝眞の下水〇下水の排泄場所
(三)埋葬の事＝風葬〇水葬〇埋葬〇屍骸の木乃伊化〇外九項
(四)上水＝水道〇水の消費量〇水の善惡〇外五項
(五)都會の事＝建築物と人口と〇東京の建築物と人口と〇外六項
(六)家屋の事＝燈火〇窓〇燈火の變遷〇外十八項
(七)空氣の事＝空氣の成分〇窒素〇酸素〇酸化〇外六項
(八)氣象の事＝地球の溫〇地上の溫の差〇外十八項
(九)衣服の事＝溫の調節〇體溫の放散〇衣服の效用〇外九項
(十)營養の事＝所謂滋養品〇食の作用〇食素の區別〇外廿五項

(第三編)

藥物の大要

醫學博士 林春雄君述

定價三十五錢
郵税六錢
既刊

◎總論 ●健康と病氣と●藥物の定義●治療の意義●藥物の作用●藥物の分量●投藥の反覆●製劑の製粗並に藥劑の理學上の性質●藥物を用ふる場所●藥劑の個人に對する關係●身體に用ひたる藥劑の發落●藥劑の類別法◎各論●第一類 神經筋肉毒（「クロロフオルム」、「アルコホル」の類外十六項）●第二類局所の營養を障碍する有機化合體（粘漿劑外十一項）●第三類無機化合體（水外八項）●第四類 消化酵素並に滋養品（脂肪及消化酵素の類、含水炭素類、蛋白質類）

★ 發兌元 東京日本橋區本町三丁目 博文館 ★

女（後付の一）

女（後付の三）

女子高等師範學校教授 槇山榮次君外九名補助
報知新聞家庭記者 中村千代松君編

實驗問答 日本家庭節用

（三版）

▲第壹編 衣服問答 (一)裁縫(二)洗濯
▲第貳編 食物問答 (一)日本料理(二)西洋料理(三)漬物
▲第參編 作法問答
▲第四編 家事問答
▲第五編 衛生問答
▲第六編 病氣問答 (一)藥物看護(二)傳染病(三)强壯肥滿(四)體質(五)滋養食物(六)腦神經(七)小兒科(八)姙娠(九)婦人科(一〇)消化器(一一)呼吸器(一二)外科救急(一三)皮膚科(一四)中毒(一五)驅蟲(一六)花柳病(一七)生殖器病(一八)眼科(一九)雜病(二〇)病院
▲第七編 理科問答 (一)家庭理科(二)工藝理科
▲第八編 戸籍問答
▲第九編 諸税問答
▲第十編 通信問答
▲第十一編 農事問答 (一)野菜肥料(二)牧畜(三)家禽(四)養魚(五)果實
▲第十二編 教育問答

全一冊洋裝總クロース三六版
美本紙數千二百七拾餘頁
正價壹圓參拾錢 郵稅拾貳錢

發兌元
東京日本橋區本町三丁目
博文館

東京美術學校教授 白井雨山君閲
森田洪君 鈴木古拙君 牧野等君著

應用家庭美術

口繪
▲鮮魚之圖（西洋畫）
▲磁器花瓶圖（石版四度刷）
▲石膏塑像（寫眞銅版）

全一冊
洋裝四六判美本 紙數三百四十頁
正價金四拾錢
郵稅八錢

本書は日本畫西洋畫の研究の順序として沿革、種類、彩色、描法、寫生の法、用器、用紙等を說き尙彫刻、象牙彫刻彫金、大理石彫刻、塑像、鑄金、蒔繪、陶磁器、造花等各製法より用具、應用、使用法、製法等を順序により詳述せるを以て各專門家の參考書として座右に缺くべからざる良書なり

東京本町 博文館

女（後付の五）

女學世界衛生顧問 糸左近君編

四季應用 通俗治療法 附養生秘訣

全一册洋裝四六判
紙數四百餘頁
正價貳拾八錢
郵稅六錢

醫者は病人に取つて命の親なり、救ひの神なり。其の病魔を退治して起死回生の効を奏し、垂死の病人を回復して三千世界に一つしかなき玉の緒を取り止むるものあり、世に神醫仁術の稱ある所以なるべし、さりながら、世間に神醫と稱するものは晨夜の星よりも尠くして難病症病に惱む人は恒河の砂よりも多し、この限りなき病人患者をして限りある神醫の方劑を仰がしめんこと無理の註文といふべし、況んや山間僻地に到つては一度の診察を請ひ、一服の藥を飮むすら容易の事にあらず、病人は手を空ふして病魔の横行するに任すのみ、是に於てか世に醫道の智識を必要とする所以なり著者糸左近氏は仁術に造詣深く、諸病の蘊奧を究めて遺らすなし、今其尤も普通なるもの七十餘種を網羅して備さに治療の方針を說く、蓋し草輿を要せずして千里の遠きに趣き謝禮を求めずして萬病の適藥を授く其功徳の大なる耆婆扁鵲にも譲らずといふべし。

大隈伯爵序文 横井博士校閲
農學士 田中花浪君合著

家庭園藝術

全一册中判
正價八拾錢
郵稅拾錢

本書は彼の艷美なる花卉は勿論、莘々たる蔬菜累累たる果樹の培養に至る迄、微を捨てず細を揭げ一々丁寧に洩れなく嶄新なる學說と多年の經驗を平易に說明せる外に其調理法と文學趣味をも附加してある。で婦人小兒の讀本且學生の參考書として適應してゐるし一讀直に實行し得べき實際のものであると斷定して置く。想ふに一家に白米が必要である如く、家庭には是非とも本書を備へ置かればならぬ。

海軍大軍醫 隱岐敬次郎君譯

女子衛生學 附結婚論

全一册洋裝袖珍總クロース
正價參拾錢 郵稅六錢

女子衛生學は其說く所世の年少婦人特に妙齡の女學生の爲に懇切叮嚀を極め、片言隻句皆な衛生の原則人道の眞理ならざるなし、且つ米日素と國俗風習を異にし女尊男卑の淵源たる米人の所說なるにも拘はらず或點までは主張の頗る孔孟主義(寧ろ女大學)に近邇し又た文明の粹弊を誡ふるに拘はらず反つて東洋の敎義に則とれるが如きは最も東西折衷主義を能く發揮して毫も餘蘊なしと謂ふべし尙附錄とする結婚論は文學家として有名なる英國のハーデイー氏が世の青年男女の爲めに書かれたる趣味饒多の珍書にして着眼の奇警なる將た觀察の妥當なる讀者をして不覺通讀の妙を得せしむ。

千葉勝景君 鹿島櫻巷君 共編

家庭衛生訓

全一册小判
正價卅五錢
郵稅六錢

近藤正一君著

新撰 家事問答

全一册小判
正價貳拾錢
郵稅四錢

醫學博士三島通良君著

はゝのつとめ

全一册大判
正價七拾五錢
郵稅拾錢

東京本町 博文館

英語世界

初號以下數版を重ね

▲每月一回五日發行

年刊十二冊菊判紙數六十四頁
每號寫眞版及密畫數頁挿入

第四號要目

▲英國史譚：熊本學習院教授▲焙豚物語：小日向廣島高等師範教授▲英譯桂月囘顧談：武信早稻田大學講師▲お伽噺▲Alphabetの話：岸本早稻田大學講師▲英吉利の風俗：平田東京高師教授▲發音及綴字▲岡倉東京高師教授▲中學生日記：宮森桃灣▲對話：喜安生▲解釋練習：增田早稻田大學講師▲受驗參考英語の公式：佐川正則英語學校講師▲庭球術語：安部早稻田大學講師▲入學試驗解答：深澤姬路中學校教諭▲英文の心得：武信早稻田大學講師▲英和語法叢話：喜安璡太郎▲言葉の遣分け：SK▲紅毛卮言：長井靑郊▲英文書簡▲日常用語▲時文研究▲訪問▲懸賞文披露▲懸賞文課題▲雜錄▲新刊紹介

第五號要目

▲英國史譚：熊本學習院教授▲焙豚物語：小日向廣島高等師範教授▲牧野文相演說▲異聞百種：深澤姬路中學校教諭▲輪講會記者：長井氏最▲Alphabetの話：岸本早稻田大學講師▲發音及綴字：岡倉東京高等師範教授▲英文手紙の書き方：上條外國語學校助教授▲會話（夏期外遊）：高杉早稻田大學講師▲英文中學生日記：宮森早稻田大學講師▲英詩譯註（少年水夫の歌）：南日學習院教授▲受驗參考英語の公式：佐川正則英語學校講師▲庭球術語：安部早稻田大學講師▲入學試驗解答（大阪高等工業學校）佐川正則英語學校講師▲同（東京高等商業學校）：深澤姬路中學校教諭▲英作文の心得：武信早稻田大學講師▲英和語法叢話：喜安璡太郎▲言葉の遣ひ分け：SK▲日常用語（旅行語彙）▲紅毛卮言：長井靑郊▲時文研究▲懸賞文披露▲懸賞文新課題▲雜錄

第六號要目

▲英語史譚：熊本學習院教授▲焙豚物語：小日向廣島高等師範學校教授▲英譯福翁自傳：武信早稻田大學講師▲發音及綴字：岡倉東京高等師範學校教授▲會話（江の島）：野口慶應義塾大學講師▲英吉利の風俗：平田東京高等師範學校教授▲高等學校入學試驗答案：畔柳第一高等學校教授▲英文手紙の書き方：上條外國語學校助教授▲解釋練習：增田早稻田大學講師▲受驗參考英語の公式：佐川正則英語學校講師▲入學試驗（高等學校）深澤姬路中學校教諭▲英作文の心得：武信早稻田大學講師▲英和語法叢話：喜安璡太郎▲言葉の遣ひ分け：S．K．▲新案英語遊戲法▲萬年筆：長井靑郊▲時文研究▲日常用語（新學期語彙）▲懸賞文披露▲懸賞文新課題▲雜錄（高商受驗談外數項）

第七號要目

▲英國史譚：熊本學習院教授▲焙豚物語：小日向廣島高等師範學校教授▲火星の新消息：長井記者▲異聞百種：深澤姬路中學校教諭▲英譯福翁自傳：武信早稻田大學講師▲英吉利の風俗：平田學習院教授▲發音及綴字：岡倉東京高等師範教授▲英文手紙の書き方：上條外國語學校助教授▲英詩譯註：太田太陽英文記者▲解釋練習：增田早稻田大學講師▲受驗參考英語の公式：佐川正則英語學校講師▲外人の英語研究談：▲海軍兵學校入學試驗答解：深澤姬路中學校教諭▲英作文の心得：武信早稻田大學講師▲英和語法叢話：喜安璡太郎▲言葉の遣ひ分け：SK▲英學生參考書案內：長堀生▲時文研究▲懸賞文披露▲懸賞文課題▲雜錄

第七號 十月五日發行

▲正價金拾錢 郵税壹錢 前金（十二冊金壹圓拾錢 六冊金五拾六錢）外要郵税

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 博文館

文（後付の八）


東宮妃殿下御買上ノ榮ヲ得タル化粧水ハ本品ノミ
牛乳ヲ主成分トシテ製セル
レート
乳白化粧水
定價
大金五十戔
小金三十戔
内地郵送料金八戔
台湾清韓郵送料金三十戔
素顔の艶美なることを望まば
乳白化粧水レートを用ひよ!!!
レートは皮膚に卓効ある牛乳の主成分にて製せし最も進歩せる化粧水
發賣元 東京市馬喰町壹 大阪南久寶寺町 平尾賛平
◉販賣店は到る所の和洋小間物店及藥店

女學世界定期增刊 處世百話
(明治四十年十月十五日發行 毎月一回五日發行) 第七卷第十四號 (明治卅三年十二月廿五日 第三種郵便物認可)

(定價金貳拾錢)

監修
小山静子　KOYAMA Shizuko
京都大学大学院教授

女学世界（じょがくせかい） 明治期復刻版㊺
明治40年10月（第7巻第13号、第7巻第14号）

2008年12月10日　第1刷発行　　定価（本体20,000円＋税）

監　修　小山静子
発行者　富澤凡子
発行所　柏書房株式会社
東京都文京区本駒込1-13-14（〒113-0021）
電話　03-3947-8251［営業］03-3947-8254［編集］
協　力　株式会社博文館新社
印　刷　株式会社友美社
製　本　有限会社青木製本

ISBN978-4-7601-3510-3　C3321